スペースデザイン ISSN 0563-0991
第426号2000年3月1日発行（毎月1回1日発行）
[illegible]郵便物認可

SD

Space Design

003

Monthly Journal of Art and Architecture

リカルド・ボフィール 1995-2000

Ricardo Bofill (Taller de Arquitectura 1995-2000)

紹介作品：パリパ・マルシェ・サントノーレ、
カタルニア国立劇場、サルタナ・アトリウム、
カサ・ランカッイン・センター、資生堂新銀座ビル、
リカルド・ボフィール自邸、明治生命青山パラシオ

文：リカルド・ボフィール　写真撮影：[illegible]　[illegible]

KANDENKO

20歳過ぎたら健診を。人間の話ではありません。

働きざかりのビルを診断、中から元気にする。関電工でリニューアル。

コンピューターや通信機器など、加速する技術の進歩に追われて息切れしているのは、私たち人間だけではありません。あなたが働いているそのビルも、電気配線など様々な設備の面で、中から疲れやすくなっています。だから、関電工でリニューアルを。ビルの内部を診断した上で、設計、施工してビル内環境をリフレッシュします。関電工はビルの設備に関するプロフェッショナル。新しいビルの電気設備から、今あるビルのメンテナンスまで、最高の技術力でお応えします。ビルをきちんと長生きさせるために、ビルのドクター関電工にお任せください。

ビルの誕生からリニューアルまで
総合設備の

関電工

本社〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号

大興物産の海外建材シリーズ

No.6　木製品(ツーバイフォー,集成材)

大興蓼科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、
企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ　**大興物産株式会社**

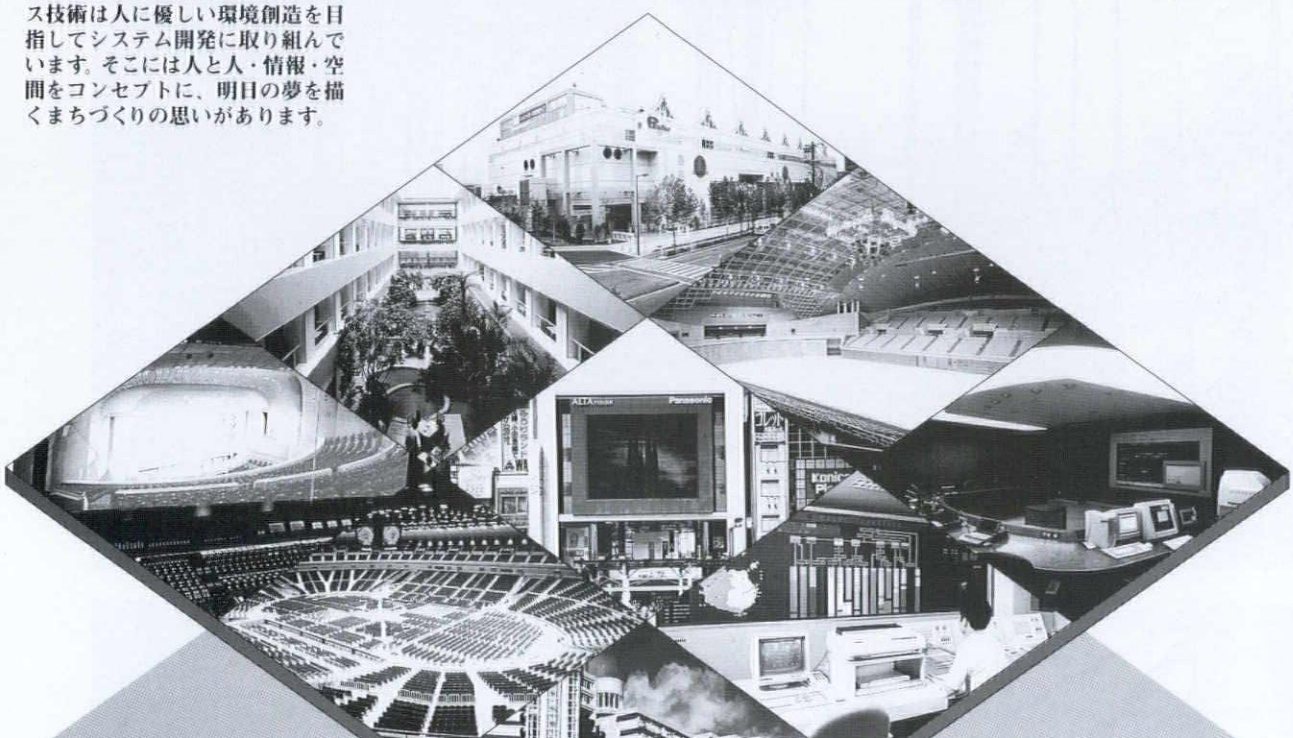
本　社　〒107-8307 東京都港区元赤坂1－6－4 安全ビル

本　社	☎(03)5474-6060	FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841	FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191	FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)5474-6072	FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861	FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624	FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925	FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717	FAX(03)5632-6719	シンガポールオフィス	☎65-3440590	FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171	FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286	FAX(025)243-5248			
大阪支店	☎(06)6762-5661	FAX(06)6762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221	FAX(082)249-9270			

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーターの提案、設計、施工、メンテナンス

空調設備事業 空調、換気、消火設備等の提案、設計、施工、メンテナンス

電気設備事業 中央監視設備、受配電、蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

水回り設備事業 水回り設備等の提案、設計、施工、メンテナンス

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部	☎03-5460-2931
北海道支店	☎011-207-7722
東北支店	☎022-711-3551
新潟支店	☎025-246-1031
関東支店	☎0286-37-2241
神奈川支店	☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店	☎052-951-6010
長野支店	☎0262-26-3990
北陸支店	☎0762-23-1121
静岡支店	☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店	☎06-6949-2111
中国支店	☎082-247-5272
四国支店	☎0878-26-1711
九州支店	☎092-431-1100
沖縄支店	☎098-869-2926

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。

AV&CC FLAPS

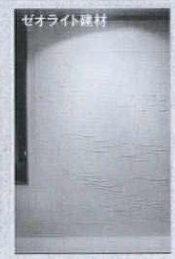
AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

もう一つのカジマを知ってください。

高層のビルを建てる。巨大なダムを造る。長い海底トンネルを掘る。
確かにカジマの仕事ですが、しかしそれは、
ほんの一面にすぎません。私たちが四六時中生活する住まいの、
ここにも、あそこにも、意外なところにカジマの仕事が隠れています。
毎日が健康で、安心で、しかも快適に暮らせるために、
マンションや住宅用につくられた沢山の建材や工法たち。環境に配慮しつつ、
これからの高齢化する社会に向けて、カジマは何ができるのか。
そんな気持ちで、住空間に役立つ商品を開発しています。

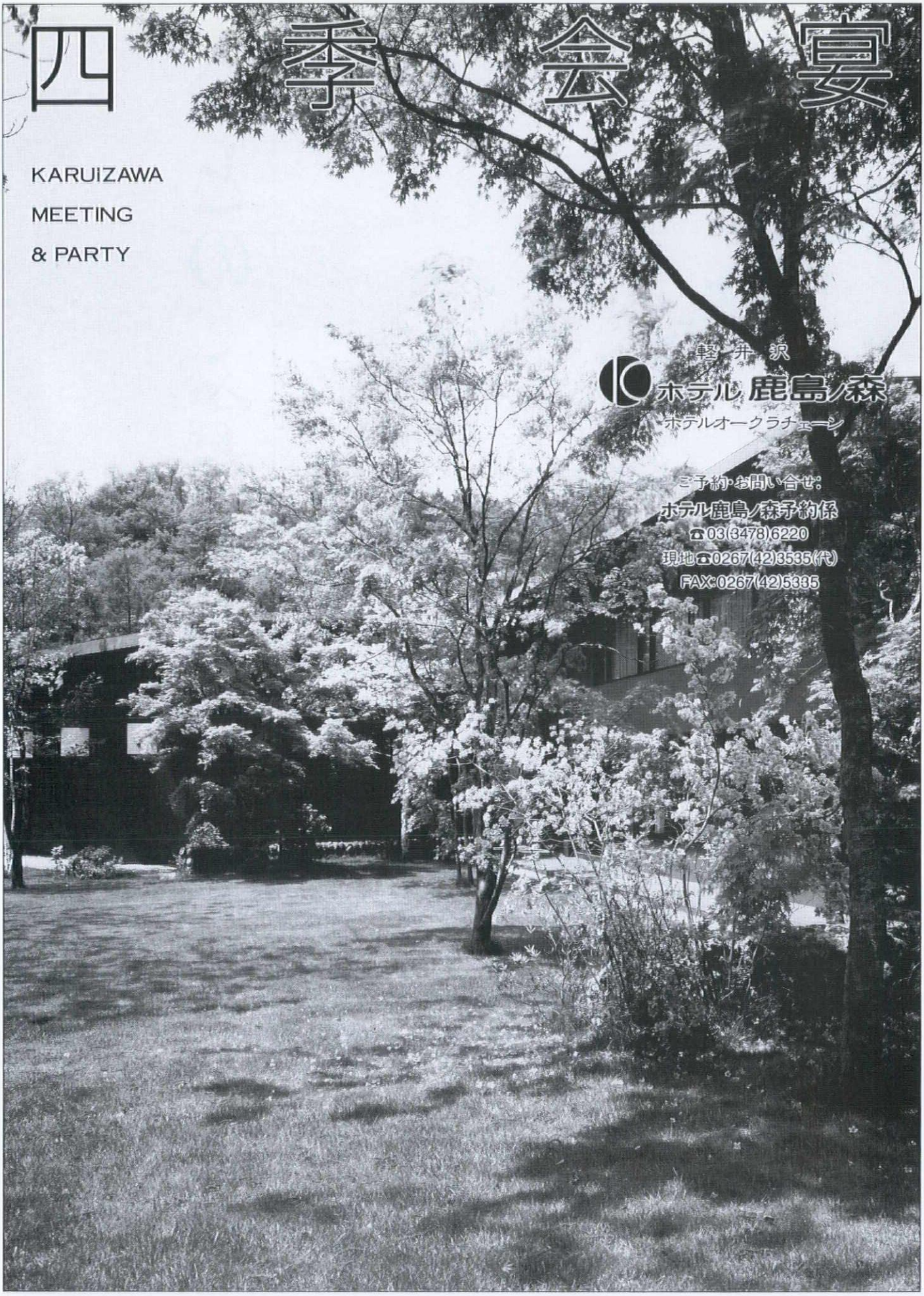
健康に暮らせる住まいづくりへ。

住まいは健康を大きく左右します。湿気や結露、カビなどの発生は住まいを損なうだけでなく、そこに暮らす人々の健康にも影響を与えます。鹿島は、空気中の水分を吸ったり吐いたり、脱臭機能ももつ天然素材「ゼオライト」に注目。耐火性にも優れたこのゼオライト建材は、室内の湿度を一年中快適な状態に保ち、健康住宅を実現する夢の建材です。



自然を身近に感じる快適環境づくりへ。

ガーデニングを楽しむ人がたいへんな勢いで増えています。庭やベランダで自然を楽しむのはとてもすばらしいこと。鹿島の「ケイソイル」「草花名人」は、バルコニーや屋上庭園にぴったりの、軽くて保水性の高い人工土壌です。重さの条件が厳しい屋上やベランダ、バルコニーでも、緑豊かな自然を育てることができ、生活に潤いを与えます。



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一歩脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した2,000㎡の"ガーデンプール"。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル〈3F〉。ガーデンプールの一角に設けられたガーデンチャペル〈5F屋外〉。厳粛な神殿(八幡殿=やひろでん)〈3F〉。●最大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプのヘルスクラブ"ジ・イースト"。●都内初のホテル直結型多目的ホール"イースト21ホール"。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……【ブラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚…【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景…【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】

チャペル

HOTEL East 21 TOKYO

地下鉄東西線『東陽町駅』より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

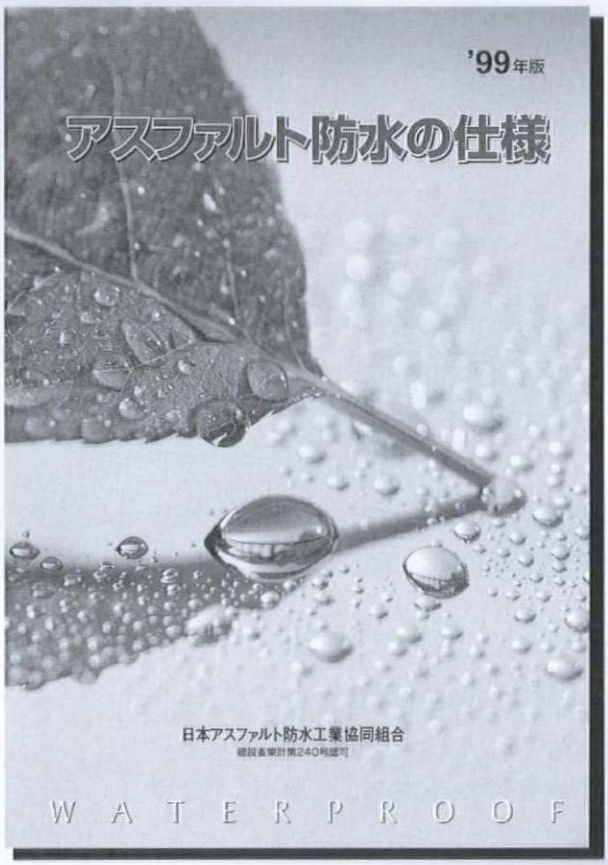
株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683㈹ FAX 03(5683)5775

自然と環境と経済の調和

豊かな経験と新しい技術のアスファルト防水



新仕様書 発刊！

CO_2排出量の削減

工程数の削減と工期の短縮

今日、地球の温暖化やオゾン層の破壊などさまざまな環境破壊が進み、深刻な問題として取り上げられています。そんな中、今私たちにできることは地球資源を有効利用し、環境との共生、また地球環境の保全に力を注いでいかなければなりません。

日本アスファルト防水工業協同組合と日新工業株式会社がつくりあげた環境保全型アスファルト防水は、ライフサイクルアセスメントの概念を取り入れ、(財)日本建築センターにおいて防水性能についても在来工法と同等であると証明されました。

私共はこれからも続く未来へ、安心して歩んでいけるように、自然と環境の調和をはかり、社会のニーズに対応していきたいと考えております。

総合防水材料メーカー　ISO9002 RQ0004 認証取得

日新工業株式会社

営業本部■東京都中央区日本橋久松町9-2 〒103-0005
TEL.03(5644)7211(大代)
●ホームページ　http://www.nisshinkogyo.co.jp/

日本アスファルト防水工業協同組合

営業本部■東京都中央区日本橋久松町9-2(日新中央ビル)〒103-0005
TEL.03(5644)7651
●ホームページ　http://www.nihon-as.or.jp/

札幌・仙台・春日部・東京・千葉・横浜・名古屋・金沢・大阪・高松・広島・福岡

SD Space Design

4月号予告

0004

特集

歴史的都市を読む

21世紀を迎える今、近代都市への反省はまだ様々な形で語られている。歴史をあまりにも軽視し、歴史的な文脈を断ち切って魅力を失った都市が日本にも数多い。その反省からか風景の価値や意味が近年、大いに関心を引いている。こうした状況の中、再び歴史的な都市に注目し、その魅力の源泉を解き明かす。本特集では、古くからの都市文明を誇ってきた地域を対象として、「都市を読む」比較を試みる。スペイン、アンダルシア地方のイスラムの影響を示すアルコス。イタリアの中世・ルネッサンス都市フェラーラ、そしてトルコのキャラバン都市の典型ギョイヌック、中国福建省の交易都市廈門を取り上げ、それぞれの都市の形成、空間構造の魅力についてフィールドワークの成果を生かしながらレポートする。こうした「都市を読む」作業は、今後の日本の町を見直す上でも、大きな刺激となるだろう。

アンダルシアの白く輝く小都市／アルコス、もうひとつのイタリア／フェラーラ、トルコのキャラバン都市／ギョイヌック、中国の重層する近代都市／廈門

対談：長尾重武（武蔵野美術大学学長）＋陣内秀信（法政大学教授）
監修：陣内秀信

連載：
カルチャー・カフェ（最終回）――今月の演劇・音楽　文＝原 研哉、ピーター・バラカン

トルコ、ギョイヌックの町並み

SD Space Design

バックナンバー

0001

特集

槇 文彦 1993–1999

1999年、第11回高松宮殿下記念世界文化賞（建築部門）を受賞した槇 文彦。1993年から最新作までの作品を、進行中のプロジェクトを含め豊富な写真、スケッチ、図面によって詳細に紹介する。

●紹介作品＝鳥取県立美術館、ヴォサーリ・ニュータウン高層住居、デュッセルドルフ港のオフィスビル、海のミュージアム、ザルツブルグ・コングレスセンター、MIT新メディア研究所、ヒルサイドウェスト、風の丘葬斎場、浮かぶ劇場、東京キリストの教会、YBG芸術センター、イザール・ビューロ・パーク、幕張メッセ新展示場・北ホール、富山国際会議場、名取市文化会館、新潟国際コンベンションセンター、横浜ベイサイドタワー、テレビ朝日新本社、他。

●序文＝槇 文彦　建築とコミュニケーション

●対談＝門内輝行×槇 文彦　街並みとしてのヒルサイドテラス／ウェスト

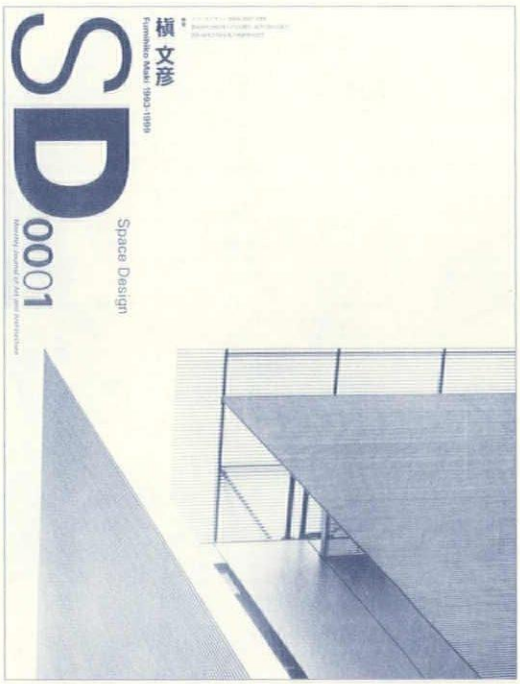
●論文＝デイヴィッド・スチュワート、富永 譲

連載：

カルチャー・カフェ――今月の舞踊・映画

文＝尼ヶ崎 彬、鵜沢 隆

特別定価＝4100円／本体3905円



0002

特集

コミュニケーション・キッチン

建築家によるキッチンスペース、国内外のメーカーのキッチン機器などを紹介しながら、国内で実現できるキッチンスペースの可能性を探る。

●鼎談＝黒田秀雄×葛西 潔×東 利恵　キッチンが喚起する住宅のなかのコミュニケーション

●紹介アトリエ＝室伏次郎／スタジオアルテック、白川直行アトリエ、オムニバス／石上申八郎、葛西 潔建築設計事務所、佐々木正明建築都市研究所、増田政一／アルクデザイン、伊藤寛アトリエ、阿部 勤／アルテック

●収納の極意　下島資子　●世界のキッチン　写真＝木戸 明

●文＝黒田秀雄、下島資子、松永信子、有野真由美

GS Revolusion: ガソリンスタンド再生計画 volume 2

●鼎談＝門松 貴×林 康郎×SS再生計画実行委員会　サービスステーション施設の現状と再生の可能性

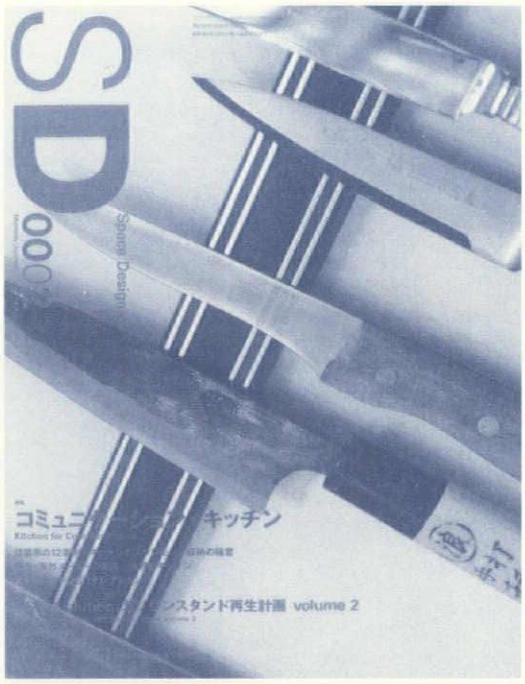
●文＝SS再生計画実行委員会

連載：

カルチャー・カフェ――今月の演劇・音楽

文＝清水裕之、服部のり子

定価＝2000円／本体1905円



鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address：
http://www.kajima-publishing.co.jp/

年間定期購読料
26,000円（特別定価号＋消費税、送料込み）

SD
Space Design

SDバックナンバー常備店
東京
八重洲ブックセンター　03-8231-8203
三省堂本店（神田）03-3233-3314
書泉グランデ　03-3295-0011
紀伊国屋本店　03-3354-0131
大盛堂書店　03-3463-0511
大阪
旭屋書店本店　99-999-9999
柳々堂　06-443-0167
札幌／旭屋書店　011-241-3007
横浜／有隣堂本店　045-261-1231
京都／大龍堂書店　075-231-3036

9804　次世代のマルチ・アーキテクトたち　2000円
30歳代の若手建築家たちの作品と創作活動を紹介し、時代性を浮かび上がらせる。インテンショナリーズ、みかんぐみ、他。［**デスクトップ・コミュニティ**］

9805　空間演出の最前線　2000円
建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションの具体例を紹介。藤江和子、中村綿平、新宮晋、他。［**カーロとリベラの家**］ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン

9806　風景創出の現在：
ランドスケープ・アーキテクトの挑戦　3000円
風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦
「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されている事例を紹介。佐々木葉二、プレイスメディア、三谷 徹、登坂 誠、他。

9807　シーラカンス　2600円
彼等の12年間の建築活動の軌跡を、作品紹介を中心に振り返る。作品＝吉備高原小学校、大阪市水上消防署、（仮称）外ヶ岡交流拠点施設、他。論文＝原広司、土居義岳、インタビュー＝山本理顕

9808　光のデザイン・ヴォキャブラリー：
LPAの仕事1990-1998　2500円
LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。文＝磯崎新、面出薫

9809　ディテールが創る風景：
細部に宿る美と技巧　2000円
建築作品のディテールを写真と図面で紹介する。宮崎浩／Plants Associates、渡辺明設計事務所、竹中工務店、谷口建築研究所、KAJIMA DESIGN、他。

9810　オフィス環境の近未来　2000円
最新のオフィス環境を、事例を中心に紹介する。作品＝電通インタラクティブ・ソリューション・センター、他。文＝仲隆介、他。［**京町屋再生の手法――時を超えて生きる空間を求めて**］

9811　「白」と「透明」の詩：
モダンデザインの秀作135　3000円
白い陶磁器と透明ガラスで出来た日常生活の中の小モノたち135点を紹介する。カシミール・マレービッチ、ゲートルード・ヴェースガルト、柳宗理、他。

9812　SDレビュー1998　2000円
第17回SDレビュー誌上発表
小特集4題：［**シャルロット・ペリアン**］［**"ハプニング"展**］［**アアルトの空間構成**］［**メタルシート・ストラクチュアによる遠藤秀平の近作**］

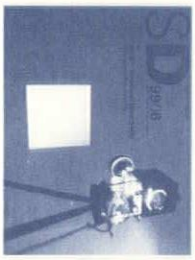
9901　環境共生の現在　2700円
プロジェクトを紹介しながら近年の動向を俯瞰し、次世代のヴィジョンを示唆する。
エムシャーパーク、東京ガス（アースポート）、世田谷区環境共生住宅、2005年国際博覧会構想案、他。

9902　ダッチ・モデル：
建築・都市・ランドスケープ　2000円
オランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって探る。OMA、MVRDV、West8、クーン・ファン・フェルゼン、メカノ、ケース・クリスティアーンス、他。

9903
木の空間
木素材による快適建築
次世代スタンダードを示唆する木の使われ方を紹介する。趙海光、インテンショナリーズ、河西立雄、葛西潔、みかんぐみ、H DESIGN、他。
2000円

9904
ガウディの愛弟子ジュジョールの夢
ジュジョールの遺した作品を、写真とオリジナル・ドローイングで紹介する。撮影＝鈴木久雄、文＝丹下敏明、他。［**ドナルド・ジャッド：空間と認識のコンシステンシー**］
2000円

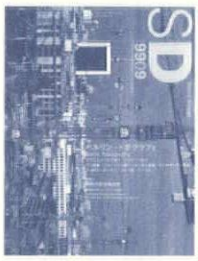
9905
挑発するマテリアリティ：
素材の進化とデザインの可能性
国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、そのデザインに隠された素材の応用の「手法」、「技術」を分析する。
素材史年表、素材地図1999、他。
2500円



9906
小川晋一
Transbody / Super traffic
小川晋一の13年間の仕事を、実作、計画案、展覧会への出品作品を通して紹介する。作品＝キュビストの家、ミニマリストの家、他。文＝鵜沢隆、岡河貢、小川晋一、他。
2000円

9907
学校建築：
個性を育む環境創出へ向けて
学校建築設計の手引きとして、今後の学校建築に求められる事項を解説し、実例を現地リポートを交え紹介する。文＝上野淳、他。座談会＝瑠昭代＋佐藤学＋船越徹＋小嶋一浩＋上野淳。
2500円

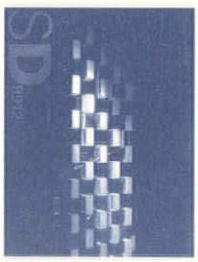
9908
階段
Beyond Function
近年の国内の階段、21作品を、「起伏」、「移ろい」、「軽み」、「天空」といった4つのキーワードで緩やかに分節しながら、階段をめぐる詩集のような形で紹介する。
文＝渡辺武信、下村純一。
2000円



9909
ベルリン・トポグラフィ
今世紀最後の首都移転が展開されている、ハイポテンシャルな状況をドキュメントする。文＝内山佳代子、杉本俊多、山下昌彦、飯島洋一、花田和幸、他。
個性の彩る集住群：長野市今井ニュータウンの試み
2000円

9910
東京リノベーション
スペースの再生転用の事例を紹介するとともに、その手法やスペースの新しい可能性を探る。
企画編集協力＝粕谷姫中
写真＝村角創一
隅田川再生とリバーサイドスペース　写真＝加藤嘉六
2000円

9911
ジャパニーズ・プロダクツ'99
インディーズなシチュエーション
インディペンデントな活動を展開するデザイナーを中心に紹介し、日本におけるプロダクト・デザインの可能性を探る。
企画協力・文＝川上典子、青山玲、写真＝高山幸三
2300円



9912
SDレビュー1999
第18回SDレビュー1999入選展の結果を審査員のコメントと共に誌上発表する。
エリック・ブリュッグマンの建築　文＝ユハニ・パッラスマー、田中雅美、他。
ハプニング展1999/2000
2000円

0001
槇 文彦 1993-1999
1999年から最新作までの作品を進行中のプロジェクトを含め、豊富な写真、スケッチ、図面で紹介する。
文＝槇 文彦、D.スチュワート、富永 譲
対談＝槇 文彦×門内輝行
4100円

0002
コミュニケーション・キッチン
建築家によるキッチンスペース、メーカーのキッチン機器を紹介しながら、国内で実現できるキッチンスペースの可能性を探る。
文＝黒田秀雄、下島資子、他。
鼎談＝黒田秀雄×葛西潔×東利恵
2000円

SD

Space Design

Back Issues

Home Page Address:
Http://www.kajima-publishing.co.jp/

9811 135 Outstanding Works of Modern Design:
Introduces 135 coffee and tea services, glassware, and other utensils made of white ceramic or clear glass.
KasimirMalevich, Gertrud Vasegaad, Trude Ptri, Wilhelm Wagenfeld, Josef Hoffman, Peter Schlumbohm, etc.
Text: Sori Yanagi, Angelo Mangiarotti, Shukuro Habara, etc. ¥3,000

9812 SD Review 1998
The 17th Exibition of Winning Architectural Models and Drawings. **Four Small Features: Charlotte Perriand, Designer's Catalogue of "Happening", Aalto's Space Composition, Shuhei Endo's Recent Works in Metal Sheet Structure**
¥2,000

9901 Sustainable and Ecological Design Today
Specific Projects that have achieved symbiosis with the environment provide a bird-eye view of recent trends and display the vision of the upcoming generation of architects.
Emscher Park, Tokyo Gas "Earth Port", Setagaya-ku Fukazawa Symbiotic Housing, etc. ¥2,700

9902 The Dutch Model:
Architecture, Urban Design and Landscape
Explorations of Dutch cities and social systems in terms of five key words.
OMA, MVRDV, West8, Koen van Velsen, mecanoo, Kees Christaanse, Wiel Arets, Benthem Crouwel, etc.
¥2,000

9903 Spaces of Wood:
The Elements of Comfortable Architecture
Introduces uses of wood construction materials that suggest next-generation standards.
Cho Umihiko, Intentionallies, Tatsuo Kawanishi, Kiyoshi Kasai, MIKAN, H. DESIGN ASSOCIATES, etc.
¥2,000

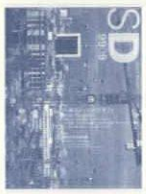
9904 Josep María Jujol i Gibert's Vision:
Introduces the legacy of Jujol's work through photographs and original drawings.
Donald Judd: Consistency of Space abd Cognition
¥2,000

9905 Alluring Materiality:
Evolution of Materials and Their Potential for Design
Takes up some examples of material and technical design from japan and overseas and analyzes the applied methods and techniques hidden in the design. Also includes "A Chronology of Materials" and "The Map of Materials 1999." ¥2,500

9906 Sinichi Ogawa: Transbody / Super traffic:
Introduces 13 years of Sinichi Ogawa's achievements through Cubist House and Mininalist House and other completed works, plans, and works submitted to exhibitions. Text: Takashi Uzawa, Mitsugu Okagawa, Sinichi ogawa, and others.
¥2,000

9907 School Architecture:
Toward Environments That Foster Individuality
Offered as a guide for the architectural design of schools, this issue comments on topics to be addressed in school architecture from now on,combined with on-site reports of specific examples. Text: Jun Ueno et al.
¥2,500

9908 Stairs: Beyond Function
Introduces 21 recent Japanese stair designs in the manner of a poetic anthology, dividing the works loosely in four categories: "undulation", "transition", "lightness", and "open above". Text by Takenobu Watanabe and Junichi Shimomura.
¥2,000



9809 Berlin Topography
The century's last transfer of a capital city is taking place. This issue documents the high potential of this move. Text: Kayoko Uchiyama, Toshimasa Sugimoto, Masahiko Yamashita, Youichi Iijima, Kazuyuki Hanada, and others.
Distinctive Housing Complexes: The Imai New Town Experiment in Nagano ¥2,000

9910 Tokyo Renovation:
Introduces several cases of space renovation and reuse and explores the methods used and the new possibilities of space they offer. Editorial Cooperation: Hijun Kasuya. Photographs: Soichi Murazumi.
Reviving the Sumida and Riverside Space.
Photograph: Karoku Kato ¥2,000

9911 Japanese Products 99:
Their Independent Situation
Introduces mainly designers engaged in independent activities, and explores the potential of product design in Japan. Editorial cooperation and text by Noriko Kawakami and Akira Aoyama. Photographs by Kozo Takayama ¥2,300

9912 SD Review 1999:
Introduces the results of the 18th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings, along with comments from the screening committee.
Erik Byggman's Architecture: Texts by Juhani Pallasmaa and others.
HAPPENNING 1999/2000 ¥2,000

0001 Fumihiko Maki 1993-1999:
Introduces a generous selection of photographs, sketches, and drawings of Maki's most recent works from 1993. Texts by Maki, David B. Stewart and Yuzuru Tominaga. Discussion: Teruyuki Monnai and Fumihiko Maki.
¥4,100

0002 Kitchen for Communication:
Introduces kitchen spaces designed by architects and kitchen furniture by manufacturers and explores the potential of kitchen spaces in Japan. Texts by Hideo Kuroda, Motoko Shimojima, etc. Discussion: Hideo Kuroda, Kiyoshi Kasai, and Rie Azuma.
¥2,000

SD
Space Design

現代の建築家、ハードカバー・シリーズ

鹿島出版会がホームページを開設いたしました。

SDをはじめ、当社で出版している書籍の検索が出来ます。是非ご覧下さい。

http://www.kajima-publishing.co.jp

アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円

高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、研ぎ澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。繊陣Ⅰ、Ⅲ、他。

3800円

槇事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館（TEPIA）というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。槇文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円

菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円

早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円

磯崎新❸ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円

白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐霄館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、尻別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敞一郎、白井昱磨。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円

ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円

磯崎新❹ 1985-1991 part 2

part 1 同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティームディズニー ビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディアム、［蝶々夫人］舞台美術、他。

4500円

象設計集団

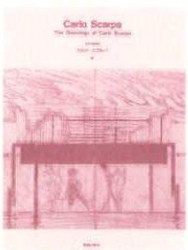
独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協町民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文＝荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円

続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図面集

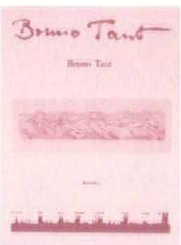
ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円

槇 文彦 ❷

槇文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスポラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円

安藤忠雄❸アンビルト・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトⅠⅡ、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円

伊東豊雄

風のように、光のように変様する建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円

ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザール―その歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂愁、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円

都市デザイン｜横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、槇 文彦×義原敬×小澤恵一、他。

5000円

SD

Space Design

Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2551

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107-8345, Japan
tel: 81-3-5561-2551

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card
Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:
☐ Please enter my SUBSCRIPTION to Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto
A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2
His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2
Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake
Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2
13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai
Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo
Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brough forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3
29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2
Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito
9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu
All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa
His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii
His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany
Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989
Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut
Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates
Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun
Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World
Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

0003

都市・建築・芸術の総合誌

スペースデザイン 第426号
2000年3月号

SD
Space Design

編集長：相川幸二
副編集長：高木伸哉
編集スタッフ：
飯塚りえ　松口 龍
川嶋 勝　田中晶子
制作協力：久世 健
株式会社シンクス
発行人：平田輪那
編集人：長谷川愛子
発行所：鹿島出版会
107-8345
東京都港区赤坂6丁目5番13号

電話：
03-5561-2551 営業
03-5561-2555 編集
FAX：
03-5561-2561 営業
03-5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
URL：
http://www.
kajima-publishing.co.jp

005
特集
リカルド・ボフィール 1995–2000

印刷・製本：凸版印刷株式会社
174-0056 東京都板橋区志村1丁目11番1号
電話：03-3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・大阪屋・太洋社・栗田出版販売・
誠光堂・鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円［本体1,905円］
年間直接購読料：26,000円
特別定価号＋送料込み

表紙：バリバ・マルシェ・サントノーレ（リカルド・ボフィール）
表紙写真提供：タリエール・デ・アルキテクトゥーラ
デザイン：山口デザイン事務所／山口信博＋齋藤亜季子

0003
Monthly Journal of
Art and Architecture

No. 426
March 2000

SD
Space Design

Chief Editor: Koji Aikawa
Editor: Shinya Takagi
Associate Editors: Rie Iizuka, Ryu Matsuguchi,
Masaru Kawashima, Akiko Tanaka
Production Cooperation: Takeshi Kuze, Digital Studio Thinks
Publisher: Kanna Hirata
Executive Director: Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.

6-5-13 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-8345, Japan
TEL: +81 3 5561 2551 [Management],
+81 3 5561 2555 [Editing]
FAX: +81 3 5561 2561 [Management],
+81 3 5561 2565 [Editing]
TELEX: 02422467 KAJIMA J
URL: http://www.kajima.co.jp/

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 2

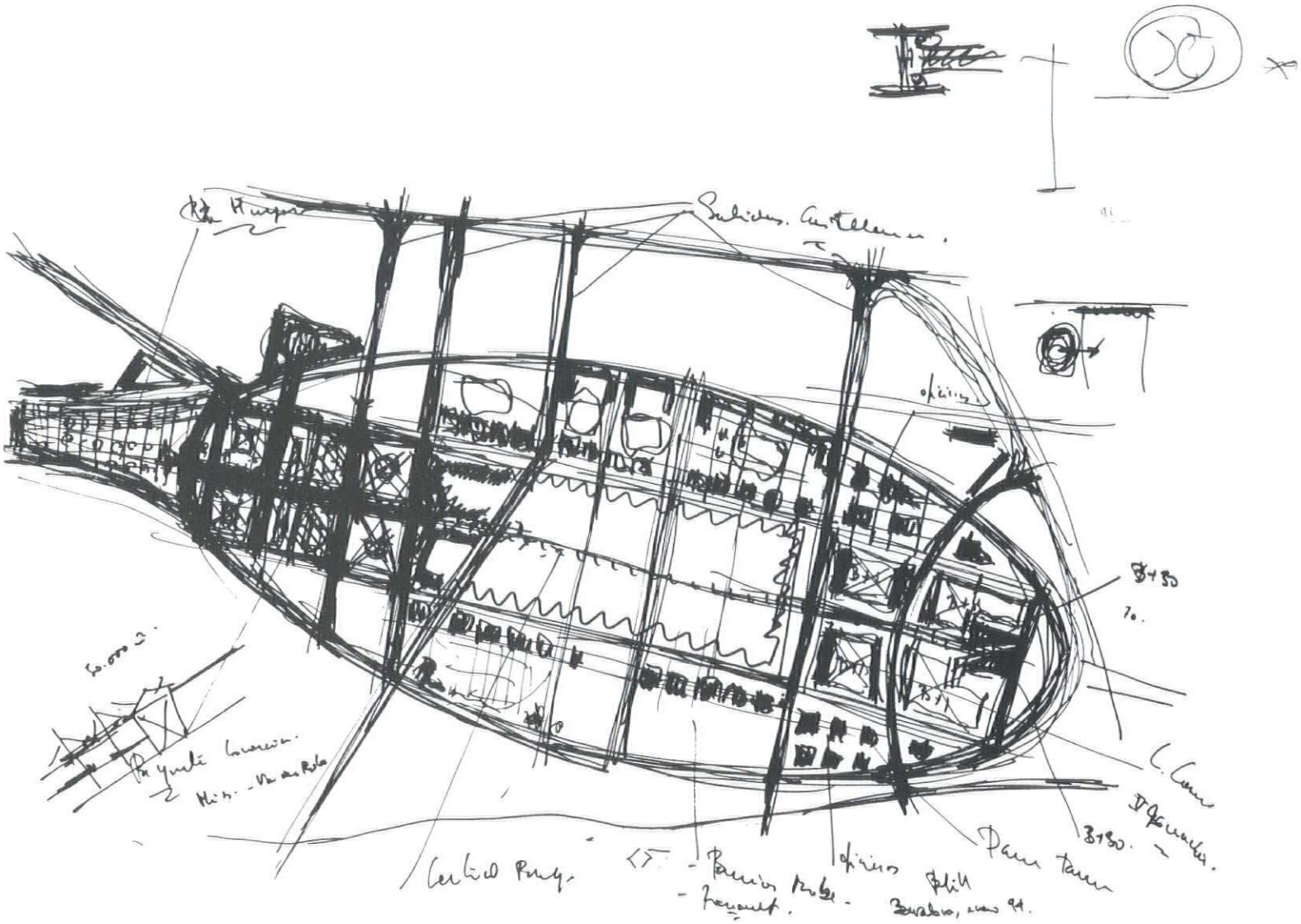
Cover: <Paribas Marchè Saint Honorè> Ricardo Bofill
Photo: Courtesy of Taller de Arquitectura
Design: Nobuhiro Yamaguchi / Yamaguchi Design Office

特集

リカルド・ボフィール 1995–2000

Special Feature

Ricardo Bofill / Taller de Arquitectura 1995–2000



Prolongation of Paseo de la Castellana Project: Bofill conceptual drawing

都市の意味を問い直す

リカルド・ボフィール
訳＝古谷和仁

ベルリンの壁の崩壊は新しい時代の幕開けを告げるものであった。東西陣営という枠組みの消えた世界では、ナショナリズムや政治的権力としての宗教が再び台頭してくる。今後は火種を抱えるあちこちの地域で紛争が頻発し、政治、経済、イデオロギーにおいても各方面の対立が激化するだろう。世界は混乱に陥り、「新秩序」を実現しうる支配的価値基準は、相当の時間を経なければ形成されないに違いない。

目先の利益だけを貪欲に追い求める新しい「中世」が到来する今日、「ルネッサンス」精神が根づいた少数の都市こそが知的かつ創造的な環境を保持し、科学や芸術を維持・発展させることができる。

このような将来の展望において、都市計画の果たす役割は依然として重要である。都市化に関するリオ・デ・ジャネイロ会議において、都市問題は環境問題と同様に、もはや超国家的な規模の問題であり決定的な打開策は存在しないことが明らかとなった。

しかし、現在は軍備に用いられている膨大な予算を都市と都市化の問題に振り替えて、フランスやドイツの大都市周辺部における地元民と流入する外国人との軋轢に取り組んだり、リオ・デ・ジャネイロのファヴェーラのようなスラム化を防止する方策を研究して行く必要がある。

都市は社会的な病、疎外の象徴である。景気の後退はあらゆるところに生々しい傷跡を残し、荒廃した空き地を生み出した。また、ここ数十年の人口流入によって郊外はベッドタウンばかりになったが、これはかつての社会階層の概念の名残を体現したものと言える。

われわれの都市の遺産を台無しにした原因はいくつか考えられる。急激に増大した住宅需要、土地投機、総合的な政策の不在、統一感ある街並みを作ってこなかった建築家。街路や広場の美観は住宅供給の名目のもとに顧みられることもなくなった。その結果、街並みは、コンクリートの街区の間に、いずれは駐車場か用途不明の空き地かになる運命の、緑地が挟まったものになり果ててしまった。商業の中心が肥大したショッピングセンターにいつしか移ってしまったために、こうした街区の1階部分は空き家となった。都市は人々の出会いの場所であることをやめ、いまや通過交通のための道路の集合体と化しているのだ。高速道路はもはや都市の入口では止まらず、都市を横断し、切り裂く。

当初都市は開発業者の手によって建設され、ニュータウン計画以後は都市計画家が取って代った。彼らは都市の諸機能（工業、居住、レジャー、商業）を研究し、都市をセクターに分割した。道路網の発達を念頭に置き、それまで分散していた各種の機能をまとめてしまったのだ。彼らとしては、生活の改善のためによかれと思い行ったことだった。しかしその結果、人々は街を散策しなくなった。コミュニティの生活がなくなってしまったのである。

今こそ我々はルネッサンス時代にはすでに確立されていた、ある原理に立ち返らなければならない。その原理とは、シティ・デザインである。コントロールされた、秩序立てられた、設計の行き届いたかたちで都市を成長させて行くのが良いと個

人的には考えている。ベイルートであろうとボルドーであろうと、私の都市への関わり方は一貫している。市民のための地区を作るということである。これはバルセロナのエンサンチェのすばらしい街路網を実現するのに主導的な立場にあったイルデフォンス・セルダから私たちが学んだことである。大都市が無限に拡大を続け、他の都市を飲み込んでいくようなことは避けなければならない。これは間違った方向の連続なのである。都市の周辺地域には町としてのまとまりを復活させる必要がある。それぞれの地区を分離、保存、再生し、中心のはっきりとした、特徴のある、そしてなによりも、大きさにリミットのある、コミュニティにして行く。北米の都市では機能や人種が入り交じることがないので、「中心」や「地区」の概念をことさら論じるのは不自然なのかもしれない。またヨーロッパの都市では、地域社会のまとまりが極めて強固である。しかし、歴史の浅い都市となるとそうは行かない。放置しておいたところ、アジア人が黒人居住区から急速に締め出され、社会的な緊張が高まってもいる。

人々が出会い、交歓するような生きた都市には中心が必要である。そこは人々の思い出が作られる場所となり、同時に、共通のアイデンティティの拠り所となる。都市への介入は、手遅れになってはならない。その都市のもっとも美しいファサード群が、再生の過程を経て再び街の一部となれるうちに、中心が浮浪者や悪者に占拠されないうちに、救助の手をさしのべる必要がある。そして中心の再生には、大規模な建築プロジェクトが要求されるのだ。

都市の中心や特定の地区における生活の再生にとって重要なのは、各種の機能を混在させダイナミックな活動を復活させることである。また、活性化によって、国内外の他の都市に較べて特徴のある、競争力のある地位を確立できるか否かの問題でもある。フランスは中央集権的な国家なのですべてが首都に一極集中してしまったため、地方都市にこうした動きを導入するのは難しい。しかしスペインはある程度の成功を収めているようだ。セビリアの万国博覧会や1992年のバルセロナ・オリンピックがその好例と言える。競争はすでに始まっているのである。首都といえども地方都市の挑戦を受けながら、自らのダイナミズムを投資家にアピールして行かなければならない。

大規模で強引な、しばしば突発的に行われる広告キャンペーンは、都市間の、ひいては国家間の競争を引き起こすであろう。

都市のさまざまな機能を混在させ、まとまったコミュニティを作り上げ、周辺部の拡張を監視し、中心部を再活性化させることの真の目的は、魅力的な都市を目指す競争を起こさせることにある。もし私たちの町を歴史が置き去りにしたゴミの集積場にしたくないのなら、もし私たちの居住地——私たちには制御できない経済という現象が具体的なかたちを取ったものにすぎないのが現状である——を工業社会によってもっとも深刻に、もっとも長期間にわたり汚染された地域にしたくないのなら、この競争に参加しないわけにはいかない。それを考えれば、これから建築家がどういう役割を果たすべきかは、自ずと見えてくるはずなのだ。

(Ricardo Bofill)

Rediscovering the Meaning of the City

Ricardo Bofill

The demolition of the Berlin Wall marked the beginning of a new historical era. In a world without systems of reference, archaic phenomena emerge such as nationalisms and religions that dominate the interplay of interests, which will lead in forthcoming years to a series of small-scale wars in the hot zones and an increase of conflict in the political, economic, and ideological spheres, converting the world into a random system in which the "new order", or set of governing values, will not emerge until after some time has elapsed.

A new "Middle Ages" has come into being characterised by the aggressive pursuit of immediate interests, in which only a few cities informed by a "renaissance" spirit will be able to maintain and develop science and art in an environment of intelligence and progressive creativity.

In this current panorama, urban planning continues to be the major pending issue.

The Rio conference on urbanism made it quite clear that urban issues, in relation to ecological ones, have become supranational, and that no basic doctrine exists for their solution.

Even so, large amounts of money now assigned to armament must be transferred to the city and urbanism, in order to tackle the problem of xenophobia in the peripheral districts of France and Germany, and to experiment with alternative urbanism in the favelas of Rio de Janeiro.

The city is the symbol of social disease, of phenomena of exclusion. Everywhere one looks, economic changes have left open wounds, created exasperating wastelands, while the demographic crises of recent decades have bequeathed us with dormitory towns, the embodiment of what remains of the notion of social class.

Several factors have contributed to the ruin of our urban heritage: the urgent problems of housing; speculation; the absence of an all-encompassing policy; and refusal on the part of architects to introduce urban continuity. Streets and plazas have been abandoned in favour of juxtaposed housing units, and the outcome of this is concrete blocks separated by green spaces destined to become car parks or undefined land. Since commercial activity has gradually become concentrated in hypertrophic shopping centres, the ground floors of these blocks are empty. The city has ceased to be a meeting place to become a simple layout of communication thoroughfares. Motorways no longer stop at the entrance to the city, they cross it and tear it apart.

At first the city remained in the hands of developers; and later, after the programme of new cities was launched, in the hands of urban planners. These studied the different functions of the city (industry, housing, leisure, commerce) and divided it into sectors. Bearing in mind the relief, and the infrastructures of roads and motorways, they shared out previously isolated functions. The outcome: people no longer stroll, they find no community life.

We must return to a discipline already developed during the Renaissance: city design. Personally, I advocate a policy of controlled, organised, designed city extension. Whether in Bor-

deaux or Beirut, my interventions have invariably been guided by the same principle, that of building a citizens' district, as we were taught to do by Ildefons Cerdà, the architect responsible for the superb gridiron plan of Barcelona's Ensanche. The ramifications of a metropolis cannot be extended to infinity and engulf other cities in a false solution of continuity. The form of the city must be reintroduced into outlying districts: that is, a certain number of districts must be isolated, conserved, refurbished and transformed into genuine communities with a centre, a facade and, above all, a limit.

While in the North American city there is no mixture either of functions or peoples, so that the notions of "centre" and "district" become spurious, in the European city the unity of society is never questioned. The same cannot be said of new cities, in which a process of natural distribution has quickly segregated Asian from Black districts, giving rise to considerable social tension.

A living city, in which encounters and exchanges take place, needs a centre, at one and the same time a place that preserves memory and a place that celebrates the common identity thus forged. We must intervene in time, in time to save part of the city, so long as the most beautiful facades may still become integrated in an operation of reconstruction, before the centre is converted into the exclusive refuge of outcasts and the classless. The refurbishment of centres in principle requires major architectural projects.

The task of restoring life in a centre, in a district, therefore involves recreating a dynamic by mixing its functions. It is also a question of initiating reconversion, of allowing the city to occupy a specific, competitive position in the national and international contest. While in France it is difficult to set this contest in motion due to the centralised structure of the country, dominated by the hypertrophy of its capital, within its limits Spain has achieved a certain balance: the Seville World Exhibition, Barcelona as host to the 1992 Olympics. The contest has begun, in which the capital must confront other cities, present a convincing image of dynamism to attract investors.

The movement of capital, and brutal, occasionally unpredictable, publicity campaigns set in motion a process of emulation, a race towards excellence first between cities and subsequently between states.

Mixing functions, organising genuine urban communities, administrating the extension of metropoli, and regenerating their centres mean recreating a true emulation between cities. These are some of the battles that must be fought if our cities are to cease resembling the rubbish bins of history, if our habitat, which has become the simple expression of economic phenomena over which we have no control, is to cease being the gravest and most lasting contamination of our industrial civilisation. This says much about the place architects will have to occupy in years to come.

Paribas Marchè Saint Honorè

Paris, France 1997

パリバ・マルシェ・サントノーレ

1
Main facade

2
Covered street entrance

1

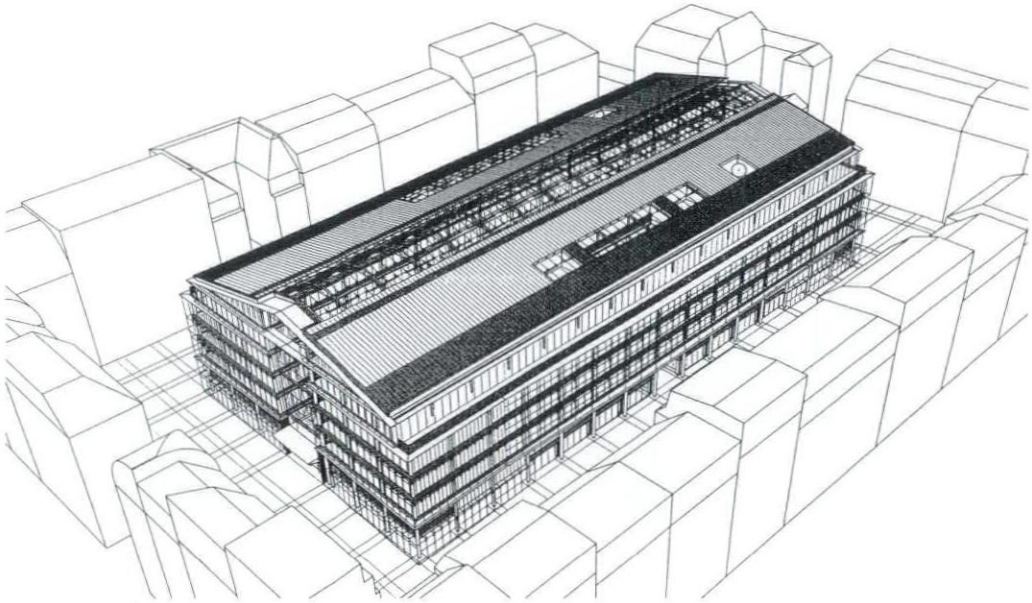
2

3
Aerial view perspective

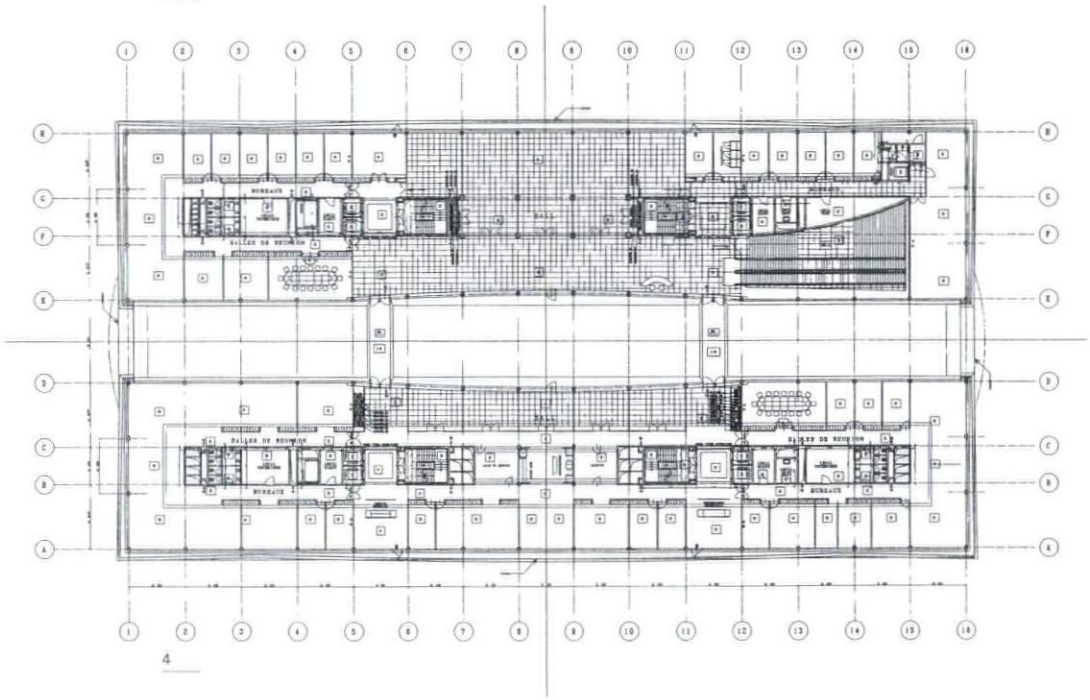
4
1st floor plan S=1: 800

5
Cross Section S=1: 800

6
Longitudinal Section S=1: 800



3



4

マルシェ・サントノーレ広場の再開発を行うこのプロジェクトに対して、都市計画上の要請は、リヴォリ通りとオペラ通りとの連絡を改善し、風通しをよくすることで商業地域の活性化を図るというものであった。そのために、既存の商業地域の補強を念頭に置き、将来のさらなる開発をも考慮に入れながら広場の再開発を行った。

建物は周囲の伝統的な街並みに埋め込まれる。都市的ボキャブラリーの典型を採用すること、また、広場の中心に建物を置き内部に路地を通すことにより、この建物は生粋のパリとも言える周辺の環境との対話を行う。建物内部の路地はパリの市場やショッピング・アーケードの伝統を引用している。アーケードの両端には大きなガラスのドアを設け、軸線が強調される。このドアはアクセスのための小路と同じプロポーションにしてある。

とりわけ意を注いだのが、広場全体の質を向上させ魅力的にするという点である。広場の空間を内部の路地の延長として捉え、オープンエアのサロンとなるように計画した。植栽、エレガントな石のスラブによるペーブメント、街灯、ベンチなどのストリート・ファニチャーにとくに大きな注意を払っている。

建築的に見ると、建物は古典主義様式とハイテック・スタイルの融合である。デザインは寺院、住宅、市場といった典型的な古典主義様式の建築からインスピレーションを得ている。一方で、採用した建設技術は20世紀末における最先端のものである。

建設には最高の素材、機材、建設システムが用いられた。透明感と浮揚感のある外観は、この建物の現代性を如実に示している。しかしこうした現代的な技術は、全体の古典主義的なプロポーションによって統合されているのである。

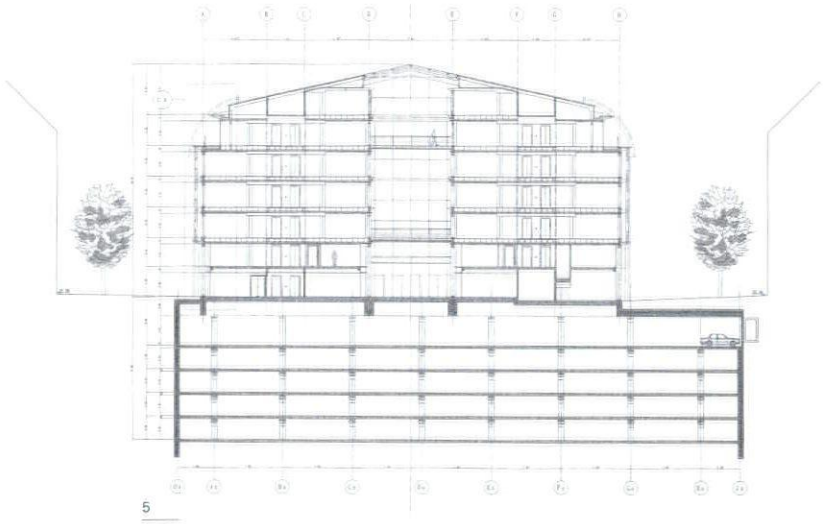
水平方向は鉄骨フレームにコンクリートスラブが乗った構造であり、それをスパン7.2m × 6mのコンクリートの柱で支えている。

建物はまず二重ガラスのカーテンウォールで囲われており、その外側をさらに軽量ステンレス構造に支えられた単層ガラスのカーテンウォールが覆っている。これは非常に透明感のある効果を生む。また、この外装システムは遮音性に優れ、大気汚染や塵埃に対しても強い。空調面でも省エネルギーに大きく貢献し、夏は涼しく、冬は暖かい環境を維持するのに役立つ。駐車場つきの店舗やオフィスのほかに、建物にはパブリック・スペースと公共駐車場が設置されている。

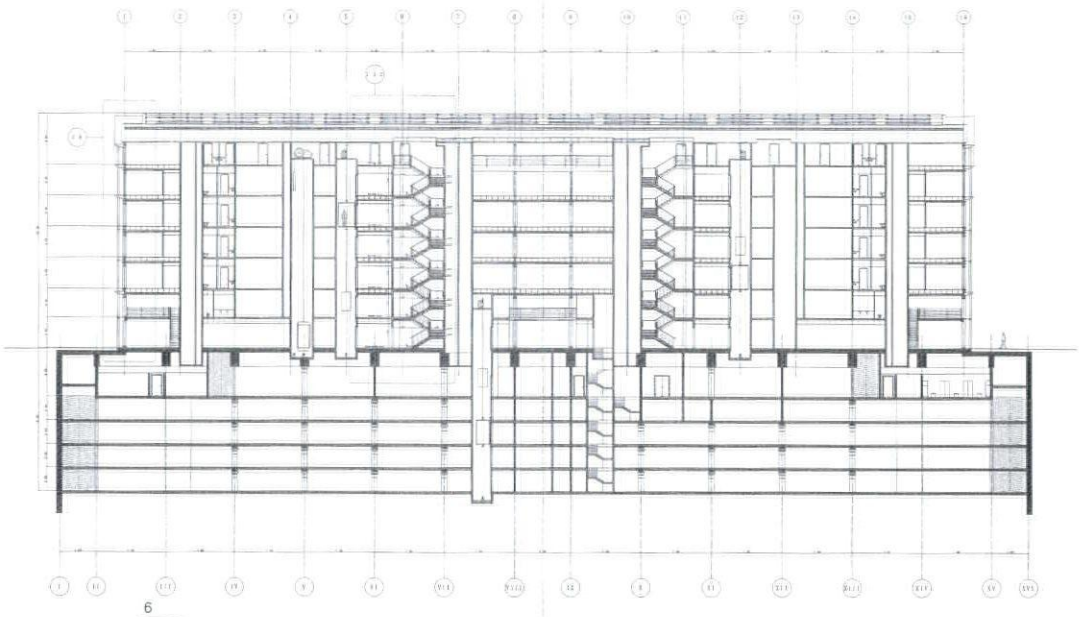
商業をさらに発展させ、広場を活性化するために、店舗は1階——内部の路地の両側と両切妻側、東側のファサード——に置かれている。

そしてオフィスは上部5層と中2階に設けられる。オフィス群へのエントランスは北西の切妻側にあり、東西のファサードにはサービス用のエントランスが計4ヵ所ある。

また、駐車場は地下の5層にわたり、公共用、店舗とオフィス用、警察とパリ市環境保護局用のスペースもある。



5



6

From the point of view of urban planning, the project had to re-establish the Rivoli-Opera connection, and to create a certain transparency that would serve to instill new life into this commercial axis. This was achieved through the careful treatment of the Place du Marché Saint Honoré, which will enhance the existing commercial environment while taking into account the needs of future development.

The projected building will be integrated into the traditional urban fabric around the site. The design establishes a dialogue with the typically Parisian environment through the use of archetypal urban forms, the implantation of the new building in the center of the square, and the use of a covered street running through it, making reference to the architecture of the city markets and the traditions of Parisian shopping gallery architecture. The shopping arcade, which is the covered part of the square, are closed at either end by two large glass doors, which symbolically mark the trajectory of the axis and are in harmony with the proportions of the access streets.

Particular attention was given to the treatment of the square in order to enhance its quality and consequently its attraction. The urban space is conceived of as an open-air salon on street level taking the form of a continuation of the covered street. Great care was taken with the tree plantings, the treatment of the ground surfaces in elegant stone slab, and the urban furniture (street lamps, benches, etc.)

Architecturally, the building is the product of a marriage between classical and high-tech architecture. The design takes its inspiration from the classical archetype par excellence -the temple, the house and the market- while using the most advanced technology available to the construction industry at the end of the twentieth century.

State-of-the-art materials, equipment, and construction systems were used to create a building with a highly contemporary appearance characterized by its transparency and lightness. The modern technological components are, however, integrated into an overall classical composition.

The structural system is composed of concrete slabs on a steel structure, with 7.2 m x 6 meters bays formed by columns constructed with architectural concrete in a minimalist design.

The building is enclosed by an interior double-glazed curtain wall, and a second outer facade made of transparent single glaze supported by a light stainless steel structure. This outer facade sheaths the whole building, creating an effect of extreme transparency. Apart from ensuring excellent acoustic insulation, this system provides an efficient barrier against pollution and dirt, as well as constituting a natural aid to the thermal system of the construction, contributing towards the maintenance of a cool interior in summer and preventing heat loss in winter. In addition to retail outlets and offices with parking, the building contains public spaces and a public parking lot.

In order to reinforce the commercial axis and give life to the square, the shops are located on the ground floor, occupying both sides of the interior covered street, the gable ends and the east facade.

Office space is located in the five floors of the superstructure and on the mezzanine floor. The principal entrance to the offices is located at ground floor level on the northwest gable end of the building, and there are four service entrances situated on the east and west facades.

Parking is accommodated in the five floors of the building situated below ground level. There is a public parking lot, parking for the offices and shops, and parking space for the use of the Police and the Environmental Protection Office of the City of Paris.

Architect: Ricardo Bofill Taller de Arquitectura
Program: 7 story office building with a mall and a 5 story underground car park. Floor area: 51,500 m²
Client: S.I.M.S.H (Groupe Paribas)

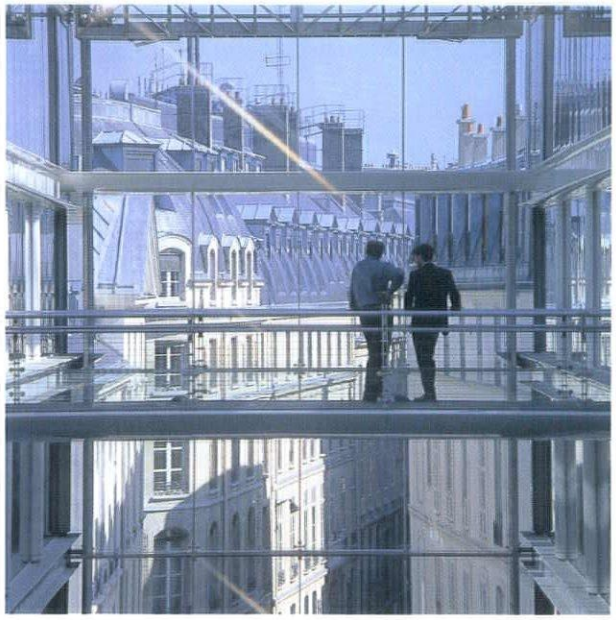

ACCES P
#2
NORTH
ST HONORE

7
Covered street bridge

8
Upper bridge

9
Covered street

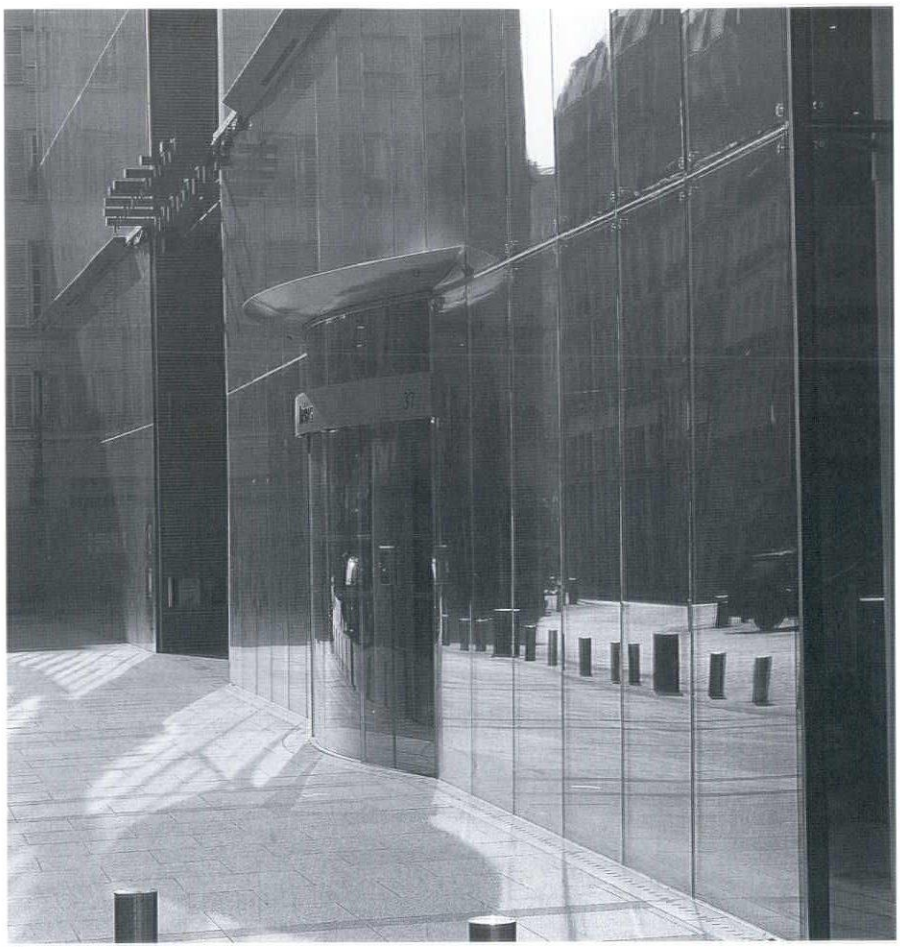
7



8

9

10



11

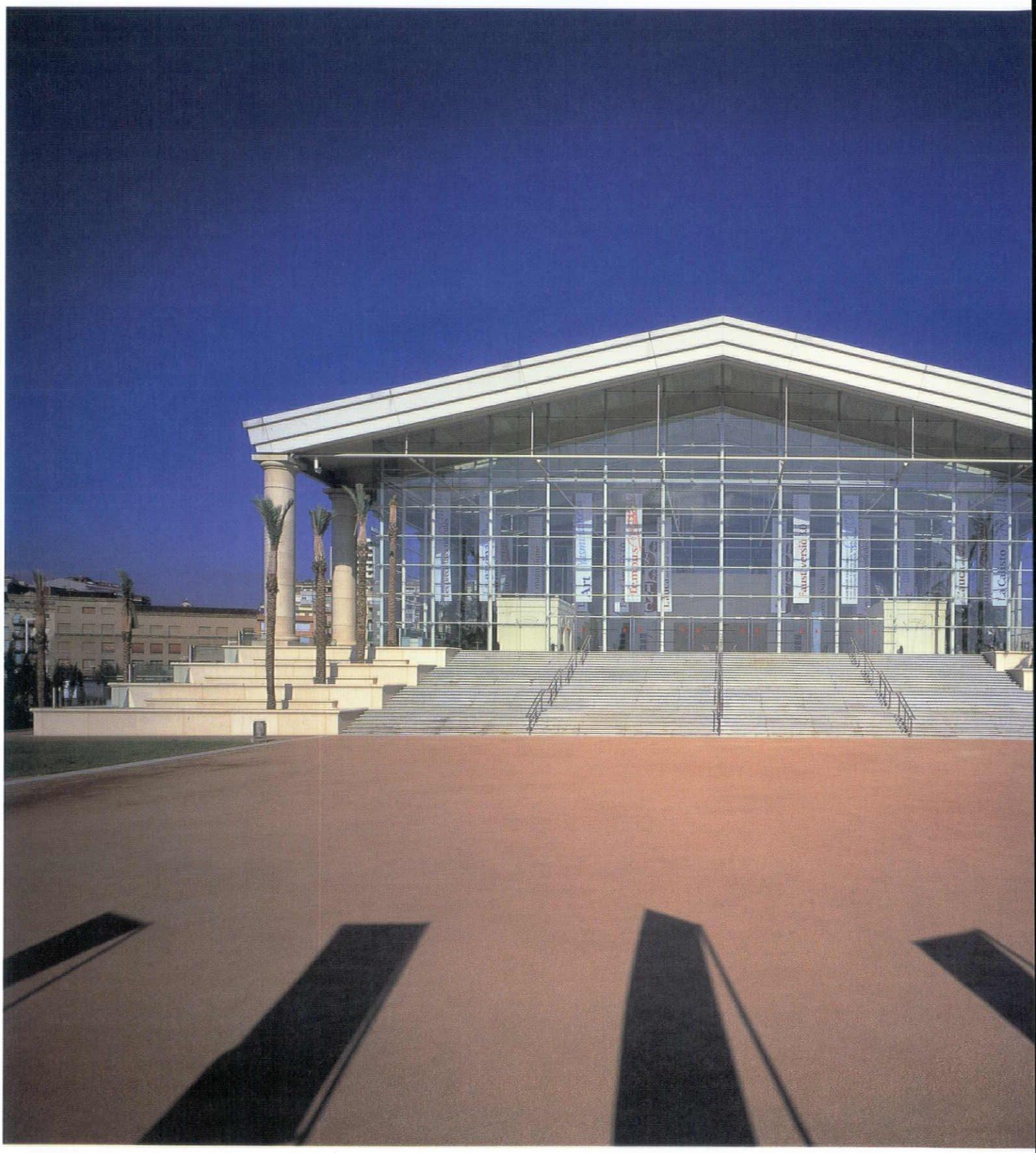
10
Grand stair

11
Entrance

National Theatre of Catalonia

Barcelona, Spain 1997

カタロニア国立劇場

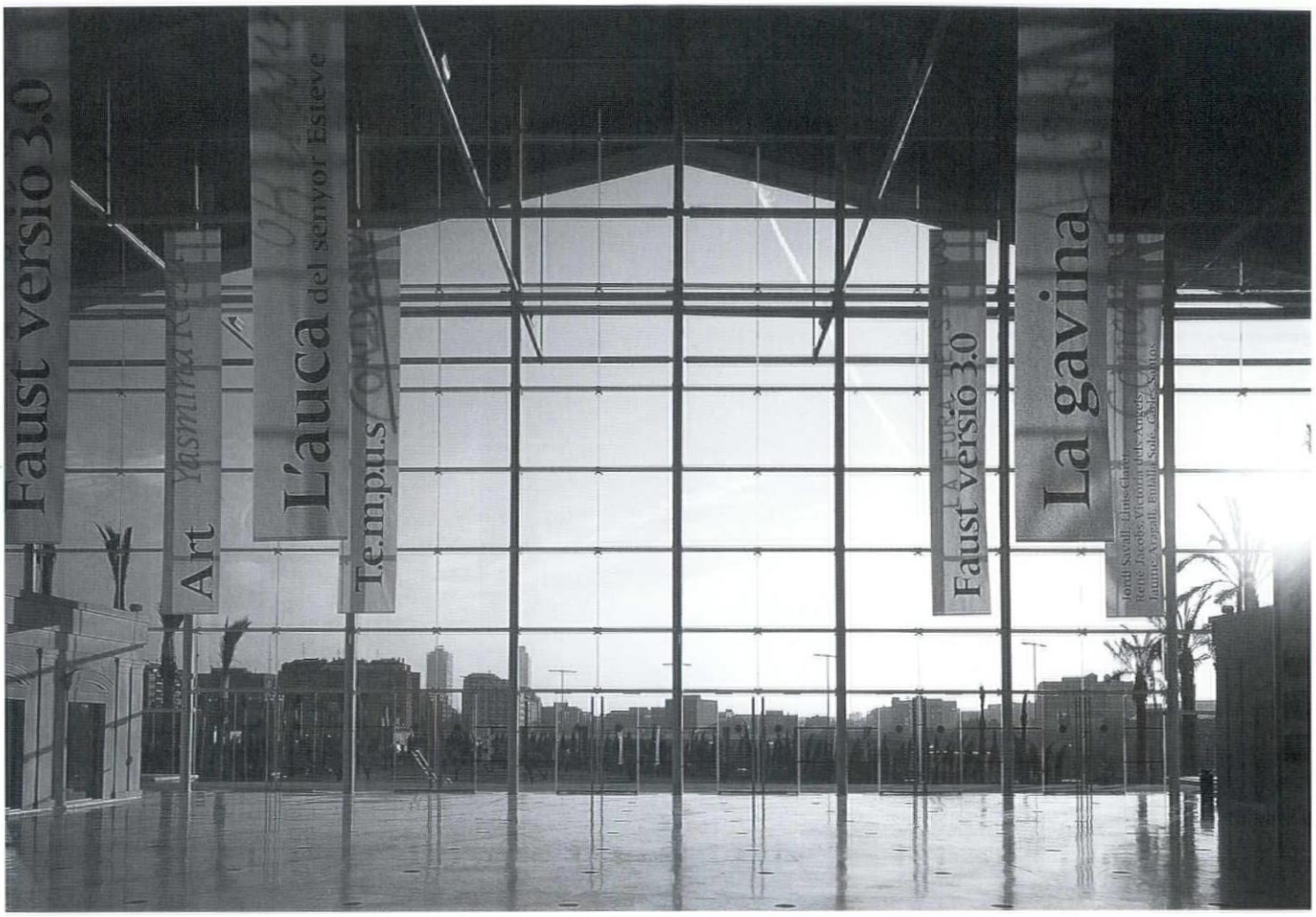


1
Main facade

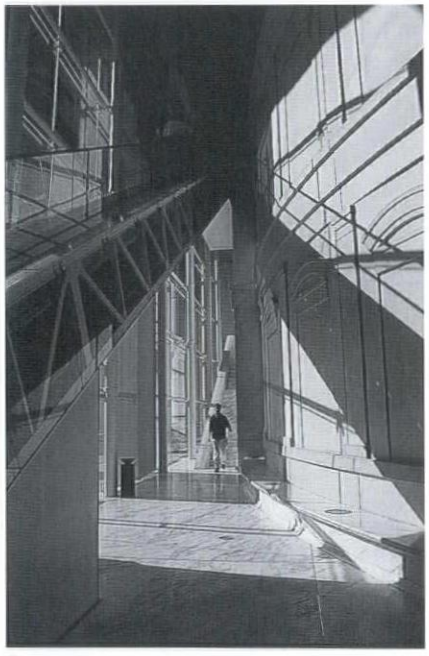
2
Lobby

2

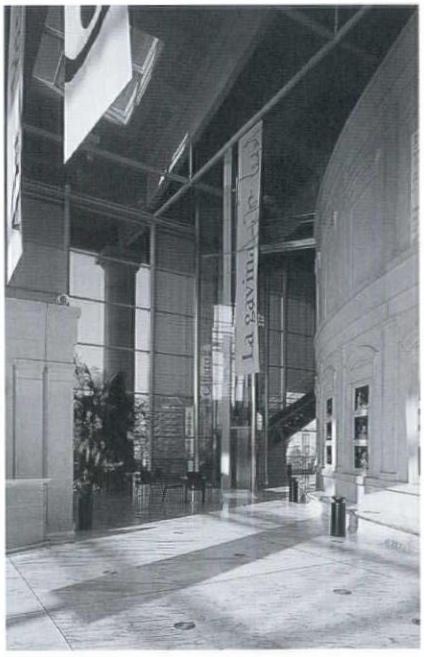
1


Faust versió 3.0
Art
Yasmina Reza
L'auca del senyor Esteve
Tempus
Faust versió 3.0
La gavina
Jordi Savall: Line Claudi
Rene Jacobs: Victoria dels Angels
Jaume Aiguall: Ferrull Solo-Cadir-Solitos

3



4


La gavina

5

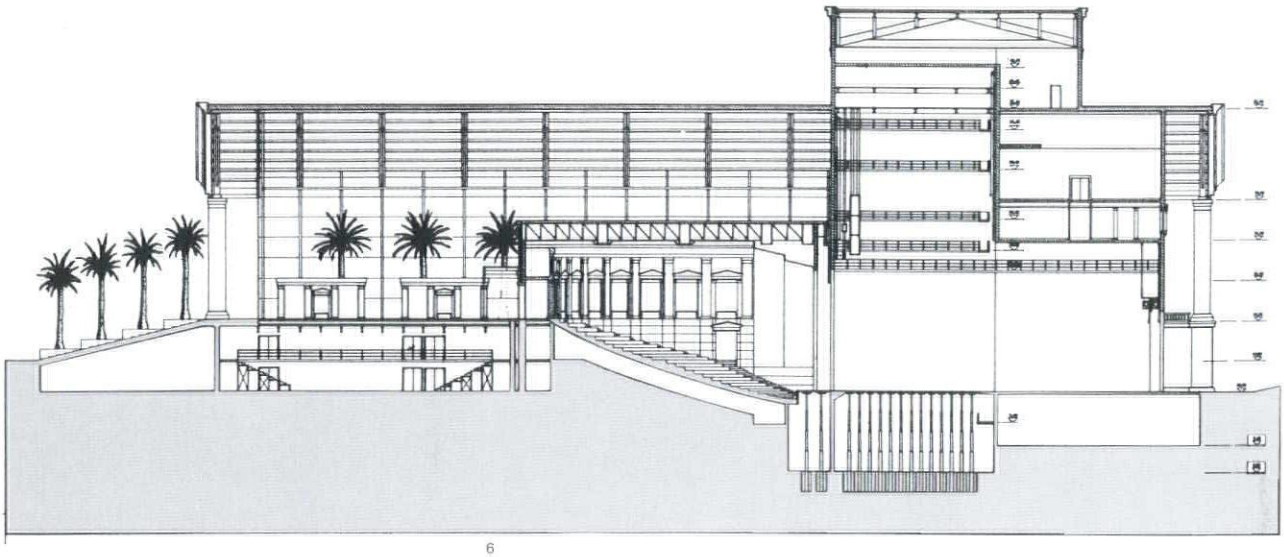
3
Facade detail, double skin

4
Staircase to the restaurant

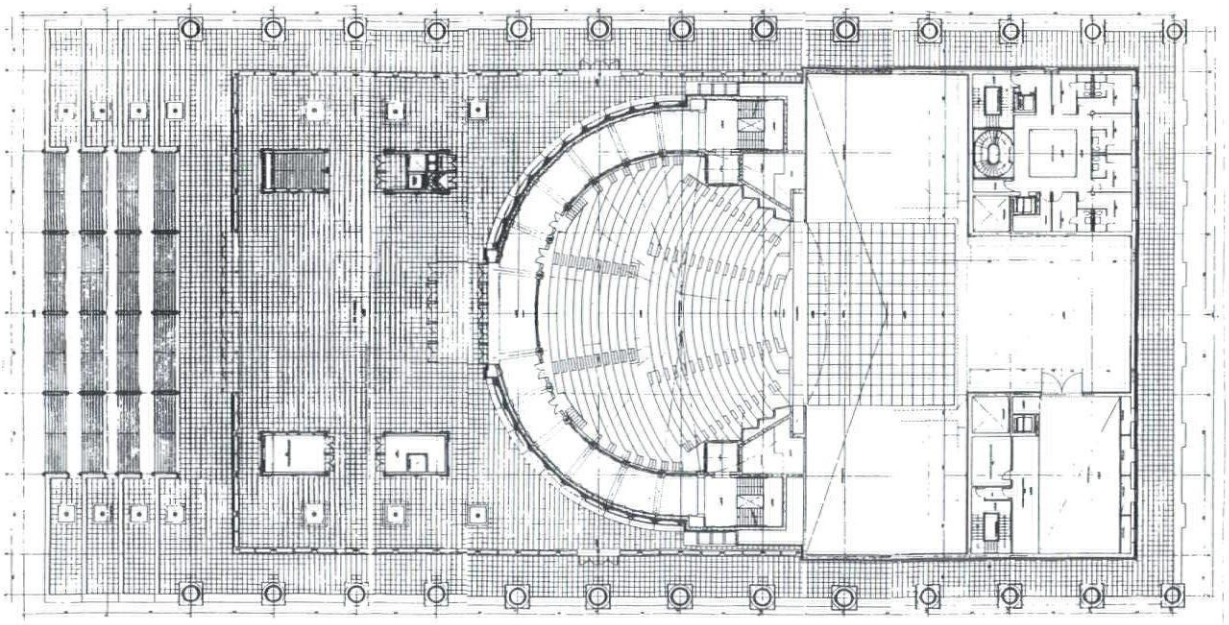
5
Lobby

6
Section S=1: 700

7
1st floor Plan S=1: 700



6



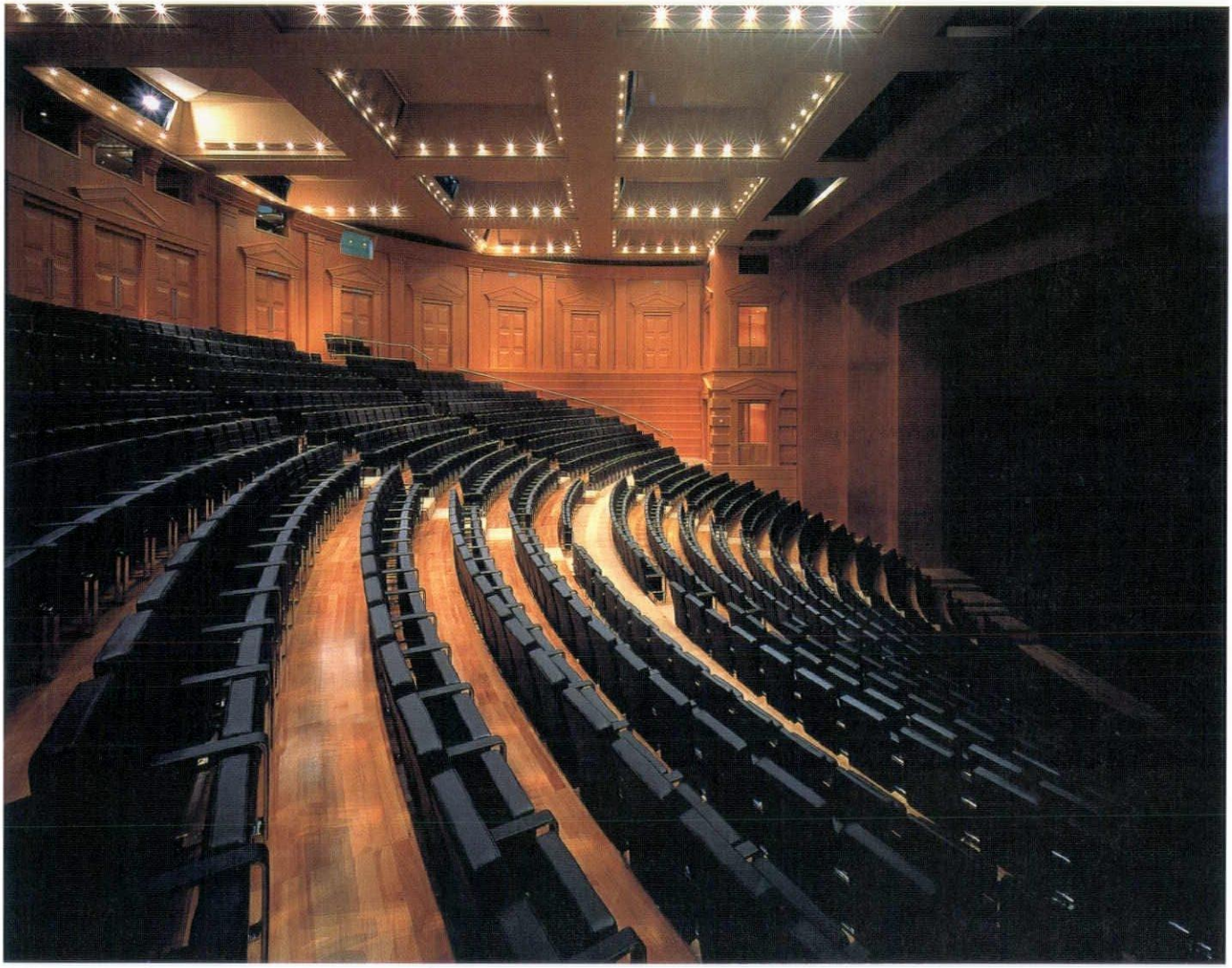
7

8
Concert hall

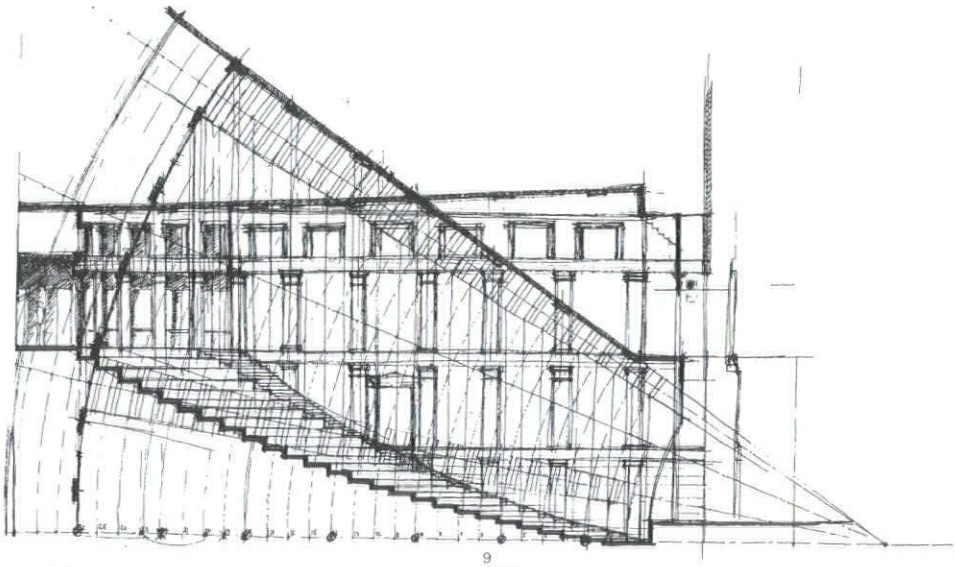
9
Sketch

10
Concert hall view from the backstage

11
Sketch

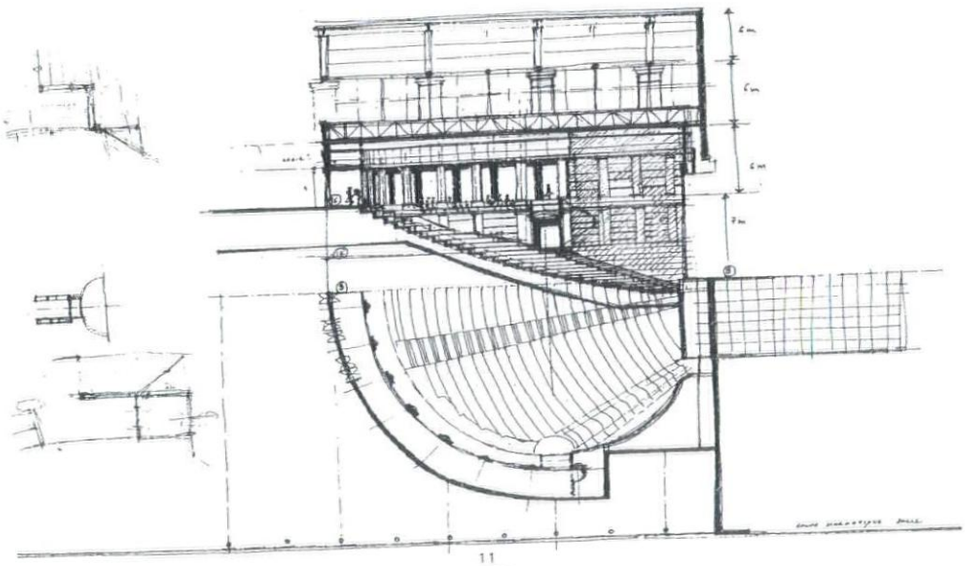


8



9

10



11

〈カタロニア国立劇場〉は独立した2棟のからなる複合劇場施設であり、隣接するラファエル・モネオ設計の劇場〈アウディトリ〉とともにバルセロナの文化的中心の一翼を担う。敷地はラス・グロリアス広場の近くであり、これまで市の中心部に集中していた大規模な文化施設を周縁部に移設することで、地域の活性化を図ろうという政策の一環として選定された。

大階段によってアクセスされるメインの建物には2層の外壁がある。外側はフラットなカーテンウォール、内側は古典主義様式を型取ったプレキャスト・コンクリートの壁である。広大なホワイエ、オーディトリアム「グランサラ」(収容人数900)、付帯設備を含めた舞台が金属の切妻屋根1枚の下に収まっている。そしてこの屋根は、巨大な3次元トラスを形成しており、古典主義様式の円柱によって支えられる。

ガラス張りのホワイエは温室のようにたくさんの植物が置かれており、待ち合わせ場所に最適である。チケット売場、バー、クロークがあり、階下のオーディトリアム「サラ・エクスペリメンタル」(収容人数400)へのアクセスもここから行う。また、ガラス張りのエレベーター1基とエスカレーター2基が上階の屋内テラスとレストランに続く。そしてすべてのホワイエと周囲の全景を眺めることができる。

建物の中心であるグラン・サラはイタリアの劇場のスタイルを取り入れた。バルコニーを省いた桟敷席は傾斜が急で、後ろの観客も舞台がよく見えるようになっている。半円形の回廊は両端の階段で結ばれ上下の行き来ができるが、この階段は空間の劇場性を強調する。半円形が終わる階段の向こうには、舞台を取り囲む巨大な長方形の空間がある。

ホワイエからは、階段を使わずにオーディトリアムの上部まで上がることができ、劇場の内部を見渡せる。十字形の舞台の上部は40mの高さがあるので、セットを水平ばかりでなく垂直に移動させることもできる。舞台両端のキューブには楽屋と機械室があり、舞台裏の空間上部には事務室と稽古場が乗っている。

ふたつのオーディトリアムはそれぞれまったく異なった性格を持っているが、これはクラシックとモダンの交錯を意味する。グラン・サラがギリシャ産大理石やシカモア材といった上質の材料で仕上げられているのに対し、サラ・エクスペリメンタルはほとんど剥き出しと言ってもいいほどで、仮設桟敷を思い出させる鋼管構造の座席によって、どのような舞台装置にでも対応できるようになっている。

別棟は倉庫および舞台装置のワークショップとして使われる。

The Teatre Nacional de Catalunya (National Theatre of Catalonia) is a theatre complex consisting of two independent buildings that, together with the Auditori designed by Rafael Moneo, constitute one of Barcelona's major cultural centres. It stands near Plaza de las Glorias, the restructuring of which responds to the need to displace large-scale cultural facilities from the city centre to the periphery, as part of the policy to endow the outlying districts with new life.

The main building, access to which is by means of a large staircase, has two skins: an exterior one consisting of a "Planar" curtain wall and an interior one of architectural precast concrete. The huge Vestíbulo (Foyer), the Gran Sala (Auditorium), with a seating capacity for 900, and the stage with its corresponding installations are contained beneath a single metal gable roof on large three-dimensional trusses and resting on architectural concrete columns.

The Foyer, the anteroom to the auditorium, transparent and plant-adorned like a greenhouse, is a meeting place par excellence. It accommodates the box office, bar, cloakroom, and the access to the Sala Experimental (seating capacity 400) on the floor below. A glass lift and two escalators, visible from top to bottom, climb up to a big interior terrace and adjoining restaurant. The view from here encompasses the entire foyer and the surrounding cityscape.

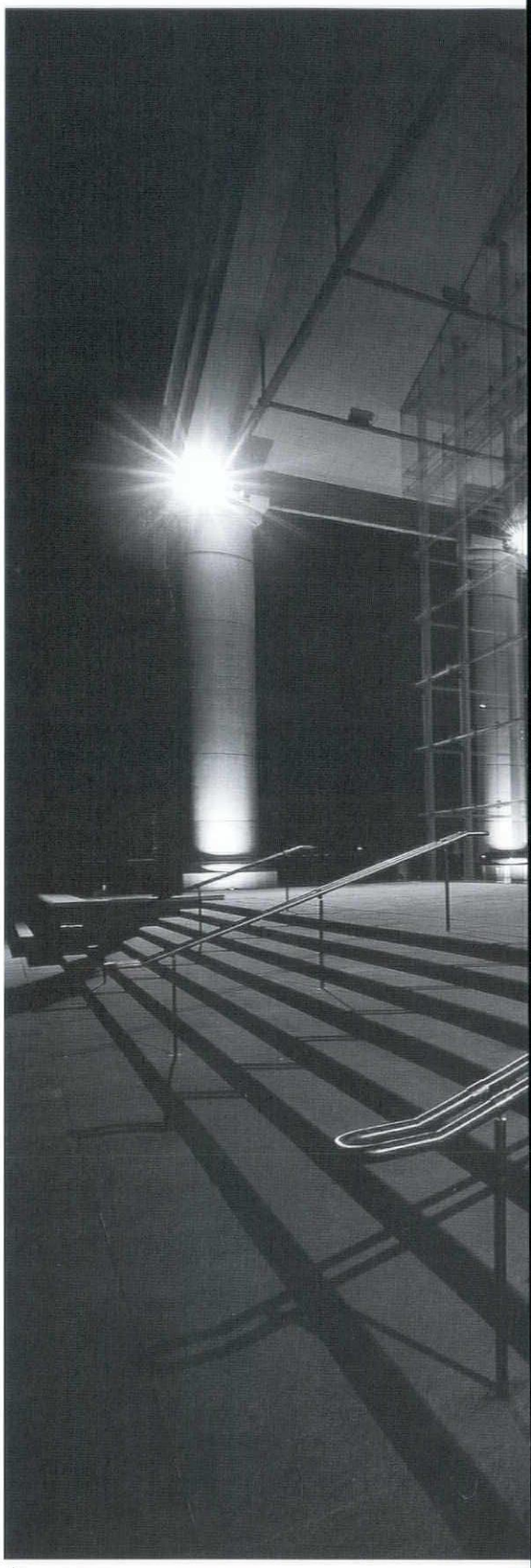
The Gran Sala, the core of the building, is Italian in style. The stalls, without balconies, are steeply sloped to provide each member of the audience with maximum visibility. A semicircular gallery gives access to the different levels by means of stairs at both ends, and adds a touch of theatricality to the space. This hemicycle meets a big rectangle of mouldings that frames the stage.

From the foyer it is possible to reach the very top of the auditorium without climbing the stairs, allowing visitors a view of the entire space.

The space above the cross-shaped stage is 40 metres high, which means that the sets may be moved both horizontally and vertically according to the needs of the mise-en-scène. Two cubic volumes, one on either side of the stage, house the dressing and machine rooms, while the administration offices and the rehearsal room are at the top of the volume behind the stage.

The difference in treatment between the two auditoriums marks an interplay between the classical and the modern. While the Gran Sala features fine materials such as Greek marble and sycamore wood, the finish of the Sala Experimental is almost rustic, allowing for any kind of set thanks to mobile tiers and tubular structures reminiscent of scaffolding.
The second building houses the storerooms and set workshops.
(Jean-Pierre Carniaux, architect, Project Director)

Architect: Ricardo Bofill Taller de Arquitectura
Program: A Repertory Theatre (900 seats), Experimental Theatre (400seats), Open air Theatre (400 seats), Facilities: theatre school,rehearsal rooms, television studio, bar, restaurant, retail spaces, building for a stage set construction and a garden.
Client: Generalitat de Catalunya (Catalan Government)
Floor area: 22,239 m²
Project director: J.ean-Pierre Carniaux
Consultants Structure: OVE ARUP, F. Rubio. Cotes Internacional
Installations: OFINCO. Acoustics: XU



12
Main entrance

13
Main facade

12

13

ふたつのアイデンティティ

飯島洋一

ボフィールの複雑さ

1998年の夏、パリを旅する機会があった。わずか2週間の滞在期間だったので、せわしなく市内のあちこちを歩いてまわり、新旧とりまぜていくつかの現代建築を見たのだが、その中に14区のモンパルナス墓地近くにある、リカルド・ボフィールの80年代の作品があった。

それは〈レ・ゼシェル・デュ・バロック〉と名づけられた集合住宅で、円形のカタローニュ広場に面して85年に完成したものである。ここでは既存のカタローニュ広場の他に、あらたにふたつの広場——円形の広場と楕円形の広場——が設けられていて、その3つの広場に対してどのような表情を見せ空間を演出するかが作品の見せどころとなっていた。

ボフィールはそれらのデザインをおおむね古典主義的な様相の壁面によって示した。しかもその古典主義は、さまざまな歴史様式の記号的な折衷である。私が見たこの〈レ・ゼシェル・デュ・バロック〉に限らず、80年代のボフィールの作品は、ほとんどがこうした歴史様式の記号的折衷に終始していたようである。パリ郊外のマルヌ・ラ・ヴァレにつくられた〈パレ・アブラクサス〉(1983年)もそうだったし、同じパリ郊外、セルジ・ポントワーズでの〈レ・コロンヌ・ド・サン・クリストフ〉(1986年)もそうだったからである。

この記号的な様式の折衷を、今日、私たちはいわゆるポストモダニズムという名前で呼んでいる。歴史の参照がいかにこの時代のトレンドであったか、それはボフィール自身が70年代半ばのパリの〈レ・アール地区再開発計画〉について、早くも「歴史の再生」という言葉を口にして[*1]、ポストモダニズムの先駆けたろうとしている事実からも理解できるのだが、実のところ私は、彼の80年代の建築をそうしたポストモダニズムというカテゴリーに括られるものと一応のところは理解しながらも、それと矛盾するようではあるが、彼をその既成の範疇に括ってしまうことに、ある強い抵抗感を覚えずにはいられないのである。

それにしてもどうして私はそのような強い抵抗感を覚えるのか。それは現代建築の最前線に位置しながらも、彼のグロテスクなまでに毛深く、濃密かつ濃厚な建築には、他の多くの前衛的建築家たちとは一線を画す「複雑さ」があると考えるからにほかならない。

ではその「複雑さ」、しかも「難解な複雑さ」とは具体的にはどのようなものなのか。それに答えること自体が、すなわち「ボフィールの建築とは何か」という問いに答えることに等しいが、それらはおそらく彼自身の「アイデンティティ」に由来するものではないかと思われる。

リカルド・ボフィールは、1939年、第二次世界大戦がヨーロッパで勃発する年に、スペインのバルセロナで生まれた。そのことが何を示唆するかといえば、彼が「スペイン人」であり、同時に「カタロニア人」であるということである。このことの意味するところは想像以上に大きいと言わねばならない。というのもそれは、ボフィールが「スペイン」と「カタロニア」という、ふたつのネイション、ふたつのナショナリズム、すなわち「ふたつのアイデンティティ」に属している人間であることを示しているからである。

二重性

このふたつのネイションを持つという民族的特性とは、もっとわかりやすく言うと一体どのようなものなのだろうか。イギリスの社会学者アントニー・D.スミスはその著書『ネイションとエスニシティ』の中で、「カタロニア人たちは、自分たちが市民となっているスペイン国家への忠誠を表明すると同時に、カタロニア人仲間との血縁関係という感情的な紐帯や、カタロニアの文化と歴史への愛着を保持することが可能とされる」と述べながら、この社会的なもの(国家)と家族的なもの(血縁)というふたつのネイションに対するカタロニア人たちの意識を、「二重の愛着」や「二重の忠誠」という言葉で説明している[*2]。

近代の国民国家が形成される過程で、国家を優先するあまり、血縁的なものが淘汰されたり、またその逆に血縁的なものが沸騰し、国家的なものに対して対立したりする傾向が数多く見られた。もちろん、カタロニアにも強い地域主義は残っているが、それでも彼らは結果的にはふたつのネイションのバランスを保ってきたのであり、いま述べたような「二重の愛着」や「二重の忠誠」というような「二重性」の概念こそが、彼らの民族的特性となっている。そして私はこのふたつのネイションに同時に帰属できるというスペイン的な、あるいはカタロニア的な自在性こそが、先にも書いたようなグロテスクなまでの毛深いボフィールの建築の、「難解な複雑さ」の意味を解く鍵なのではないかと考えるのである。

ところでこうした「二重性」は、ボフィール自身の建築観はもとより、死生観などに明確に表れているようである。たとえば彼の所属するタリエールというグループは、建築家のみならず、エンジニア、数学者、社会学者、詩人など多くの分野の人々が参加する社会的な組織だが、同時にそこにはボフィールの父親や姉も中心的メンバーとして参加しているというように、きわめて血縁的な家族的集団としての要素、すなわち社会と家族という「二重性」を有している。

また先に触れたパリ郊外の〈パレ・アブラクサス〉について、この作品でボフィールは、「ロマンティスムの世界観とシュールレアリスムの世界観を連合し、この歴史の対立から新しい何かをひき出したかった」とあるインタビューの中で述べている。たしかにこの神殿のような建築は、どこか廃墟のような趣きを持ち、同時にまっすぐ下まで通るはずの柱が途中でなくなってしまうというような、超現実的なデザインというふたつの傾向

を見い出すことができる。アブラクサスとはもともと「悪と善をともにするメソポタミアのシンボル」であるが、そこからもボフィールの中の「二重性」を見い出すことはそれほど難しくはないはずだ。

一方、同じインタビューにおいて、ボフィールは自分の思想を展開する上で「死についての問題が大きな役割をはたし」たことを吐露している。すなわち彼にとって死は「つねに自分の脇に存在する『何者か』」であり、「それは負性のものでありながら、つねに現存する、自己の一部」なのであって、「絶えず生と死の二重性をかかえて生きつづけて」いる彼にとって、「この二者のあいだに断絶は」ないのである[*3]。

ボフィールにとって、生と死はまったく別のものでなく、彼は生の中に生き、そしてつねに傍らに寄り添う死の中にも生きるというような「二重性」を有しているのだ。彼の中にはこのように自らの所属にしても、死生観にしても、「二重性」という概念にこそ真実を見つけ出すという視点があり、その視点をもとにしながら独自の建築——あのグロテスクなまでの毛深く、幻想的な建築——もまたつくられているのではないかと思われる。

古代への回帰

こうした「二重性」は、90年代以降の彼の最近作にもかたちを変えて表われているようだ。たとえばパリのマルシェ・サントノーレ広場再開発〈パリバ・マルシェ・サントノーレ〉(1997年)は、パリの伝統的な街路をガラスのアーケードとしてモダンに再現しようとする比較的規模の大きな作品であり、全体としては古代神殿のような切妻屋根を持つガラスの建築である。ここでも「建物は古典主義様式とハイテック・スタイルの融合である」とボフィール自身も言うように、古典とハイテクのふたつが決して断絶することなく、「二重性」を抱えて存在している。

また、このパリのアーケードの考え方は、同じ97年にバルセロナにつくられた〈カタロニア国立劇場〉にも別様に展開している。ここでは全体は古代神殿のような切妻屋根を持ち、その外側は「フラットなカーテンウォール」で覆われ、その中に入ると「古典主義様式を型取ったプレキャスト・コンクリート」が現われるからである。ボフィールはこれを「2層の外壁」と呼んでいるが、これもまた、いままで述べてきたような意味での、彼特有の「二重性」の表現と見做すことが可能だろう。

さらにこうしたガラスによる軽快なハイテクと重厚な古典主義という対比——すなわち「二重性」——は、すでに92年の〈バルセロナ空港〉にも、ガラスの外皮と室内の巨大な柱の関係に見ることができたし、日本でも同じ92年につくられた〈ユナイテッドアローズ原宿本店〉の通り抜けのできるストリートにおいて、ガラスのハイテックなイメージと柱の古典的な対比のうちに見出すことができた。90年代の彼の作品の中にも、それまでと同じように「二重性」という概念が引き続き現れていることがこうして理解できるのである。

それとともに、〈カタロニア国立劇場〉でとりわけ明らかだったのが、最近の彼の作品には古代神殿のようなイメージがかなりはっきりと見られることである。「二重性」を基底にしながらも、近年のボフィールは、少しずつ彼の血の中に潜む「古代的なもの」に向かって「先祖返り」をしているふしがある。

このことに関していうと、ボフィールと同じスペイン人の哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセットは、30年に出版された著書『大衆の反逆』の中で、「カタルーニャにおいて、二つの対立的な力がどのように働いているかを示すのは興味あることだろう」としながら、これまで書いてきたようなスペイン人の「二重性」の概念について、たいへん興味深いことを言っている。彼によれば、「二つの力とは、ヨーロッパ的なナショナリズムとバルセロナの都市主義」なのだが、後者、つまりバルセロナの都市主義の中には、「あの古い地中海人の性向が生き続けている」というのである。

オルテガはまた、かつて「スペインの地中海沿岸地方の人びとを、イベリア半島における古代人homo antiquusの生き残りと呼んだことがある」とも言っているが[*4]、そうしたカタロニア人の中に眠る古代人、あるいは古代的なものが、——それはスペインというナショナリズムでも、またカタロニアの地域主義ナショナリズムなどでもない、より「深淵な記憶」への回帰である——ボフィールの内部にいま沸き上がりつつあるように思えるのだ。「二重性」の概念を越えて、彼の作品はこれから来世紀に向けて、深淵な「古代の記憶」へと遡行してゆくのではないかと私は密かに考えている。

(いいじま・よういち／建築評論家、多摩美術大学助教授)

＊1. フランソワ・エヴェールーステヴァンのインタヴューなどによる『リカルド・ボフィール——建築を語る』(石上申八郎訳、鹿島出版会)。
＊2. このあたりの引用はアントニー・D. スミス著『ネイションとエスニシティ』(巣山靖司、高城和義他訳、名古屋大学出版会)による。
＊3. このあたりの引用は＊1の本による。
＊4. このあたりの引用はホセ・オルテガ・イ・ガセット著『大衆の反逆』(桑名一博訳、白水社)。

The Saldanha Atrium

Lisbon, Portugal 1998

サルダナ・アトリウム

1

都市は変容する。都市は毎日少しずつ再構成されるが、その形態の変化をうまく自分のなかに溶け込ませて行く必要がある。このことは建物の用途を問い直し、活用の仕方を考える良い視点である。

20世紀において人間と都市は、スケールの面で断絶してしまった。今、ある都市を旧市街から新市街へと移動してみれば直ちに分かるが、スケールだけではなく、人間と都市との関係そのものが移動に伴って変化して行く。旧市街では親密に思えた周囲の環境が、いつの間にか、見慣れない、怖ろしげなものになっている。人間と都市とのこうした断絶を解決するには、都市を美学的な見地から総体として捉えなおす他にない。具体的には、都市空間のまとまりを維持するために、段階的なスケールを導入することが必要となる。そして、都市空間の創造に貢献しない、孤絶した、巨大な建物を作るのを止めなければならない。このスケールの段階的変化には、綿密で慎重な計画が必要となる。建築の介入によって、既存の都市の文脈を逆に失ってはならないからである。

〈サルダナ・アトリウム〉はこのような価値基準を念頭におき、周囲の都市空間にうまく溶け込むように設計されている。平面構成、都市の典型的なフォルム、建物と同名の広場に面している立地条件、の3つの要素の働きにより、リスボンの中心街である周辺の街並みと「対話」をしているのだ。

建築的な観点からいうと、この建物は、プロポーションやコンポジションに忠実な古典主義様式と、ハイテック・スタイルが調和を保ちながら溶け合っている。計画は古典主義の美学にインスピレーションを得ており、そこに20世紀末の最先端の建築システムが組み合わされる。さらに、現代的な軽さと透明さを実現するために、最新の建築素材が用いられている。

建物の構成は、地上3階までは店舗、残りの9層にはオフィス、地下の6層がパーキングとなっている。

それぞれのオフィスへのアクセスは、1階あるいはパーキングからのエレベーターが導く。建物には垂直方向のサーキュレーションを受け持つ4つの「核」が配されることで、その機能に柔軟性と可変性を与えられることになる。

12層にわたる店舗とオフィスは、貫通する中央のアトリウムにより植物と自然光で満ちており、地上3階までの店舗部分のアトリウムには展望エレベーターが設置され、リンクされる。

ファサードのほとんどは透明なガラス皮膜によって構成されており、大理石のソリッドな質感と調和することで建物の古典主義的プロポーションが強調される。二重ガラスで覆われたファサードは太陽光を受けて多くの熱を生むが、それをうまく活用する空調システムを採用し、省エネルギーに役立てている。またこのファサードは、遮音性にも非常に優れており、大気汚染から建物を守る効果も併せ持つ。

アトリウムに面する内部ファサードは空に向かって開く花のような倒立円錐形をしており、オフィス層では全面ガラス皮膜、店舗層では白大理石で仕上げている。

〈サルダナ・アトリウム〉はタリエール・デ・アルキテクトゥーラの仕事のなかでも新世代のものに属する。30年以上にわたり国際的に仕事をしてきたチームの経験と実績によって、リスボン市の再開発計画に多少でも貢献できたと思う。

1
Main facade

2
Main facade detail

2

3

Saldana plaza evation S=1 : 800

4

Fernao Lopes street elevation S=1 : 800

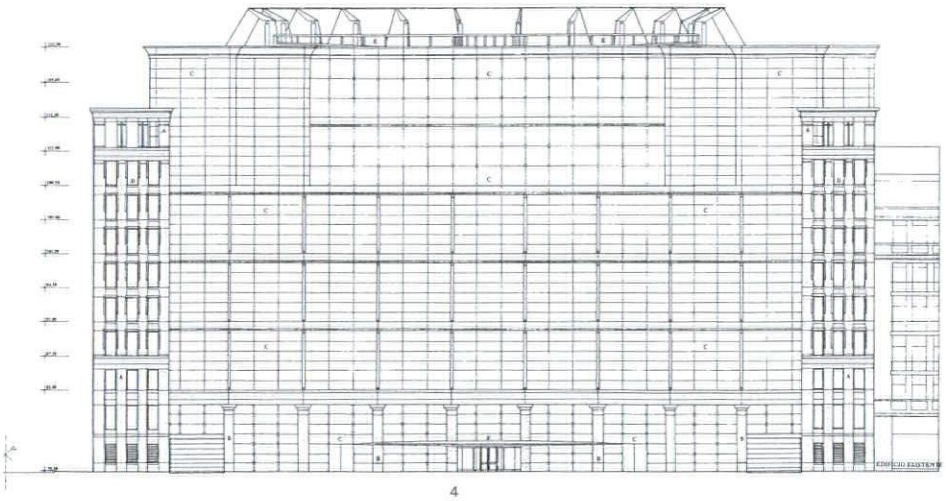
5

Section S=1 : 800

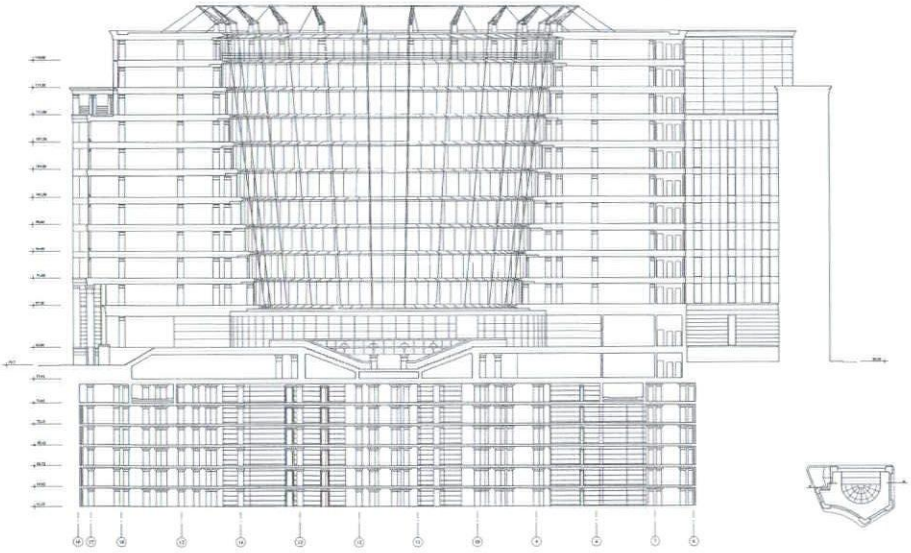
6

Commercial center staircase

3



4



5

6

Cities change; every day they must assimilate restructuring operations that alter their appearance. This is the moment to ask oneself what purpose buildings serve or, better still, how and under what conditions they may serve us.

In the XX century, the split between the human scale and the scale of the city has become radical. As we move from old districts to the new, not only the scale changes but also our relationship with the city: once familiar, she becomes strange, hostile. The only way to avoid being overwhelmed by this split is by making the effort to contemplate urban aesthetics as a whole. We must therefore introduce a scale of transition in order to preserve the unity of urban space, and cease to build isolated, oversized objects that make no contribution to creating a city. This transition must be carefully planned and gradual, so that architectural interventions become harmoniously integrated into the existing urban tissue instead of tearing it apart.

The Saldanha building, which melds perfectly with its surrounding urban tissue, was conceived precisely with this criterion in mind. By virtue of its ground plan, its form as an urban archetype, and its location in the plaza of the same name, it establishes a dialogue with its so genuinely Lisbon surroundings.

From the architectural viewpoint, the building is the outcome of a harmonious blend of classicism, with its laws of proportion and composition, and high-tech. Inspiration for the project was sought in traditional aesthetics, into which the most advanced constructional elements and systems of this end- of-century have been incorporated. Furthermore, latest generation materials were used for the building to endow it with the entirely contemporary qualities of lightness and transparency.

The building has been conceived to accommodate shops on the ground and first two floors, offices on the remaining nine floors above, and parking space on the six levels underground.

Independent access to the offices is gained by means of lifts, either from the car park or from level 0, with four nuclei of vertical circulation, one at each corner of the building, which allow great flexibility and fluidity in the way the building functions. The shops and offices are linked by a central plant-filled atrium, provided with natural light and equipped with a panoramic lift that serves the three floors.

Most of the exterior façade is of transparent glass, which by combining harmoniously with the solid presence of white, Estremoz-type Portuguese stone enhances the classical composition of the building. The double-glazed skin of this façade graduates the penetration of sunlight, and is equipped with an air-conditioning system that stores the heat so generated, thus saving energy.

Moreover, this system acts as an excellent soundproofing agent as well as providing protection from pollution.

The interior façade, in the form of an inverted cone that opens out to the light like a flower, is entirely of glass on the office floors, and finished in white marble on the shop floors.

The Saldanha Atrium belongs to the new generation of works by the Taller de Arquitectura. Over thirty years experience of an internationally recognised team has contributed to the city of Lisbon's urban renovation process.

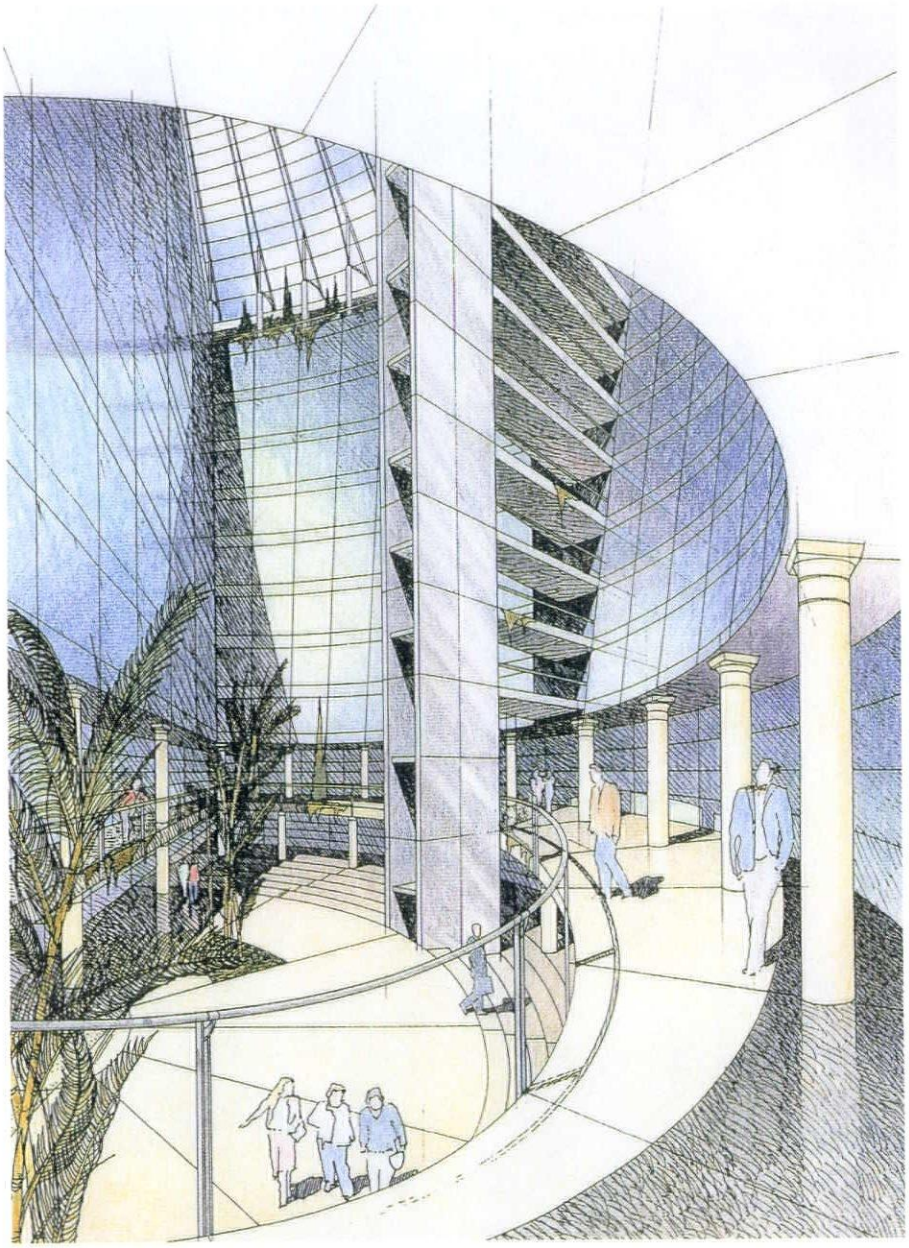
Program: Development of a mixed office and retail building in the city center.
Architect: Ricardo Bofill Taller de Arquitectura
Associated Architect: Joâo Paciência
Client: Imosal, SA
Floor area: 44,000 m²
Consultants: Structure &
Special Installations:
Luis Malheiro da Silva.


SD0003

7
Atrium

8
Atrium perspective

7



8

9

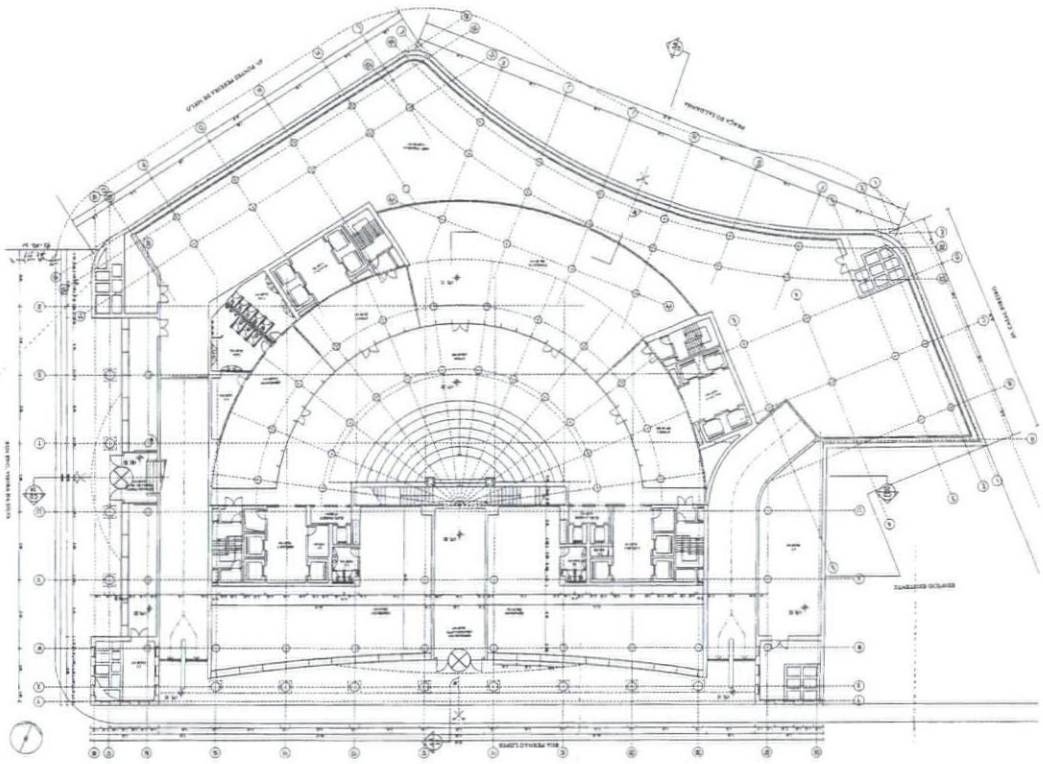
Ground floor plan S=1 : 800

10

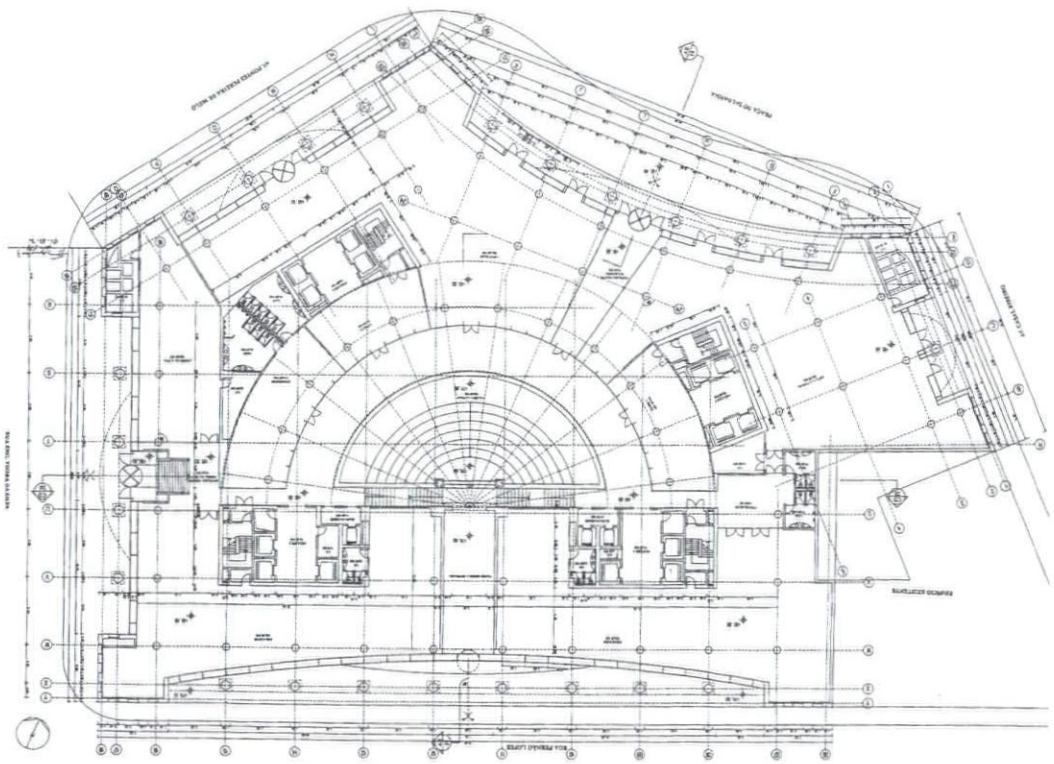
1st floor plan S=1 : 800

11

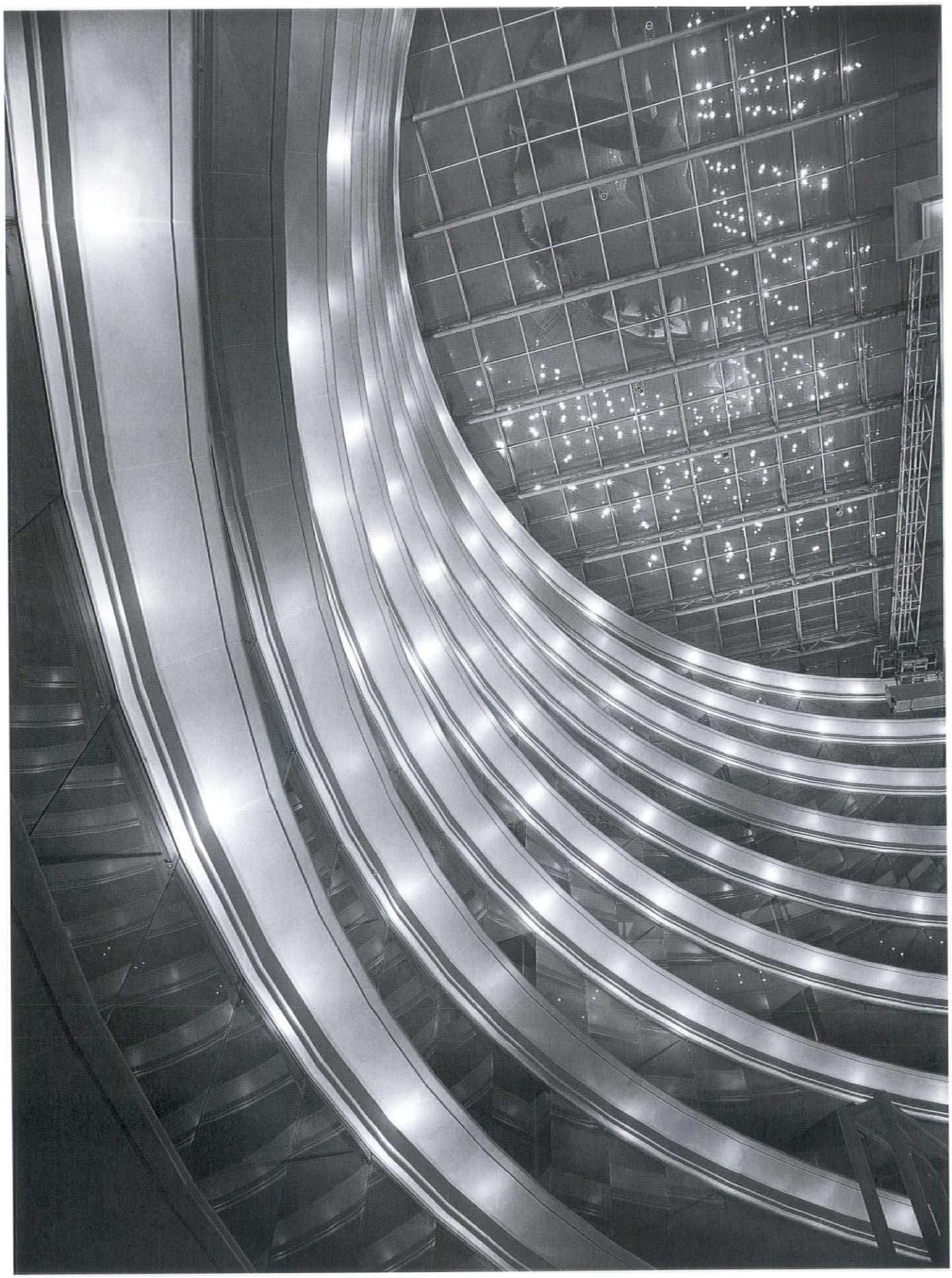
Commercial center staircase, upper view



9



10



11

Casablanca Twin Center

Casablanca, Morocco 1999

カサブランカ・ツイン・センター

1
View from the street

2
General view of twin towers

3
Facade

1

2

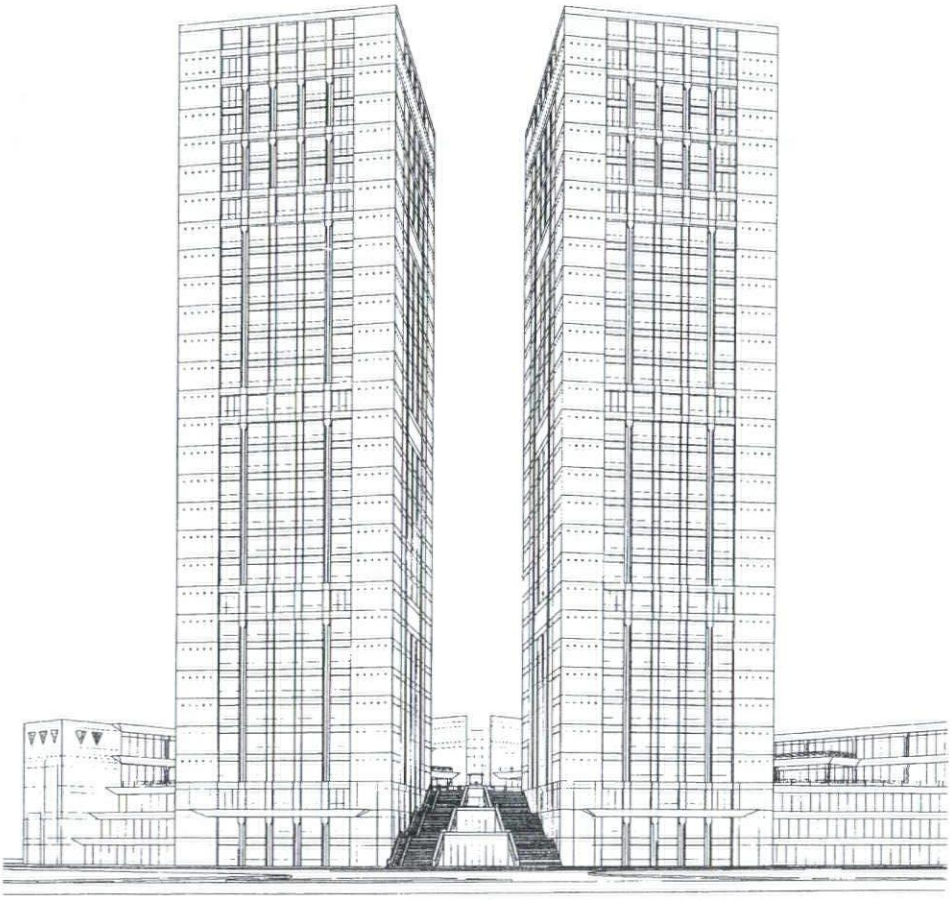
3

4
Perspective

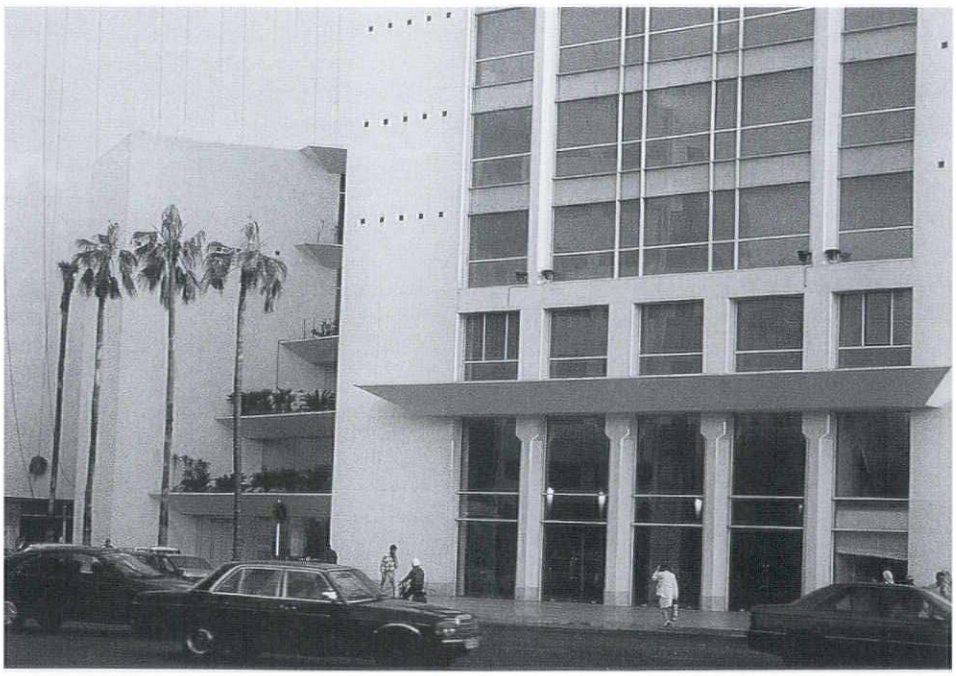
5
Entrance to the tower lobby

6
Section S=1: 1000

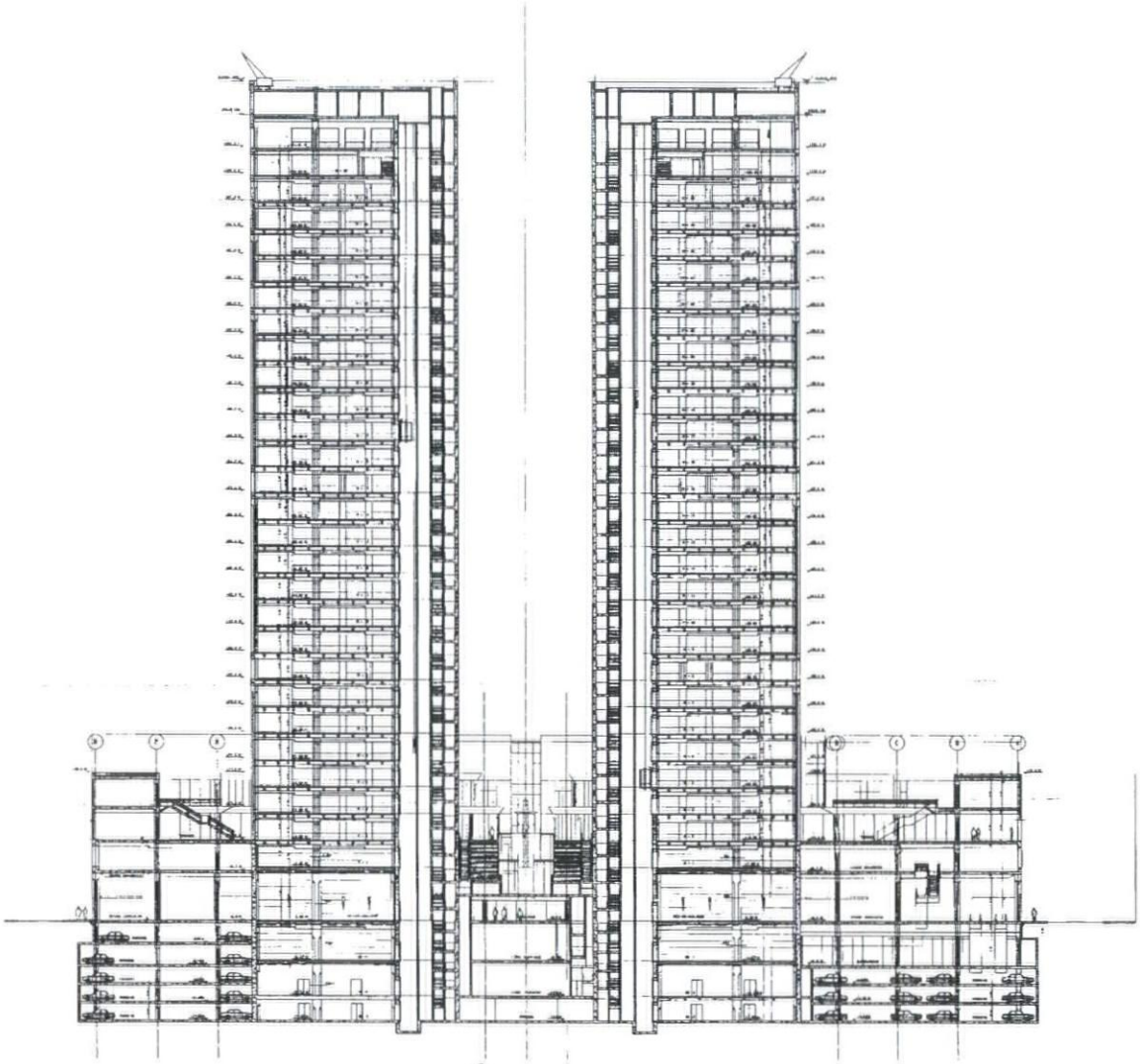
7
Lift access



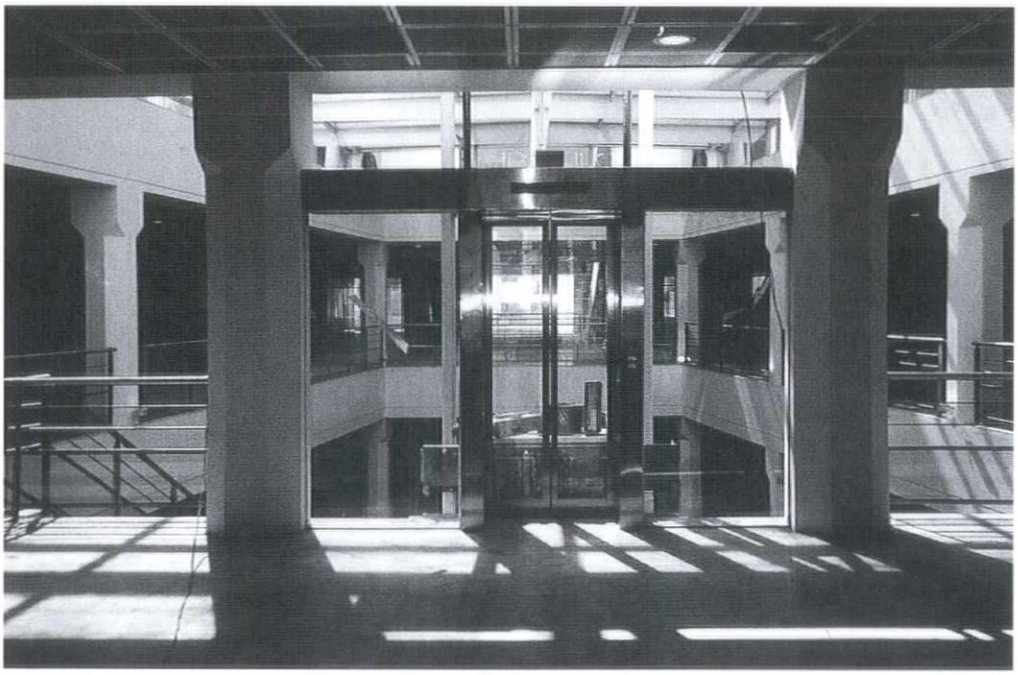
4



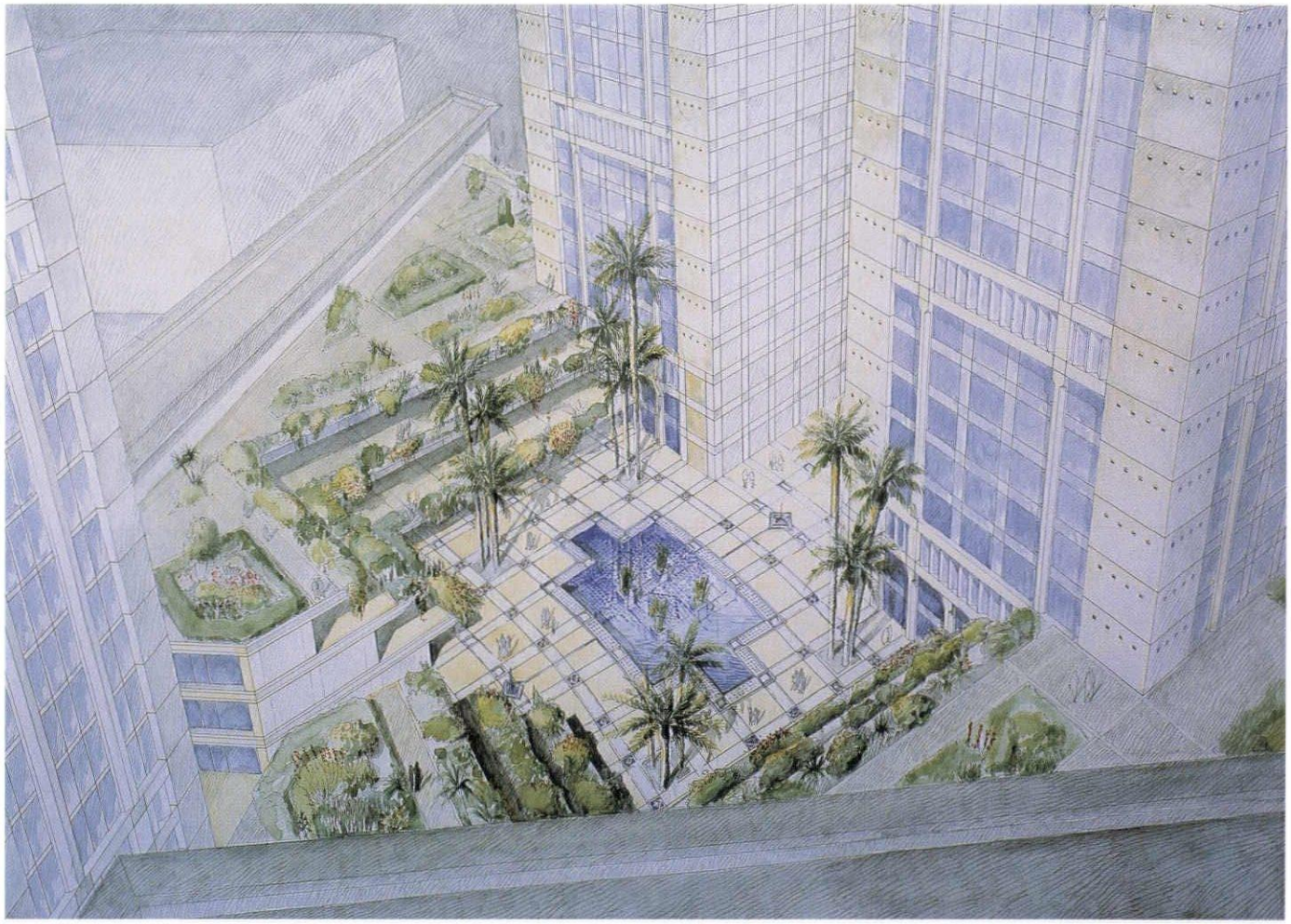
5



6



7

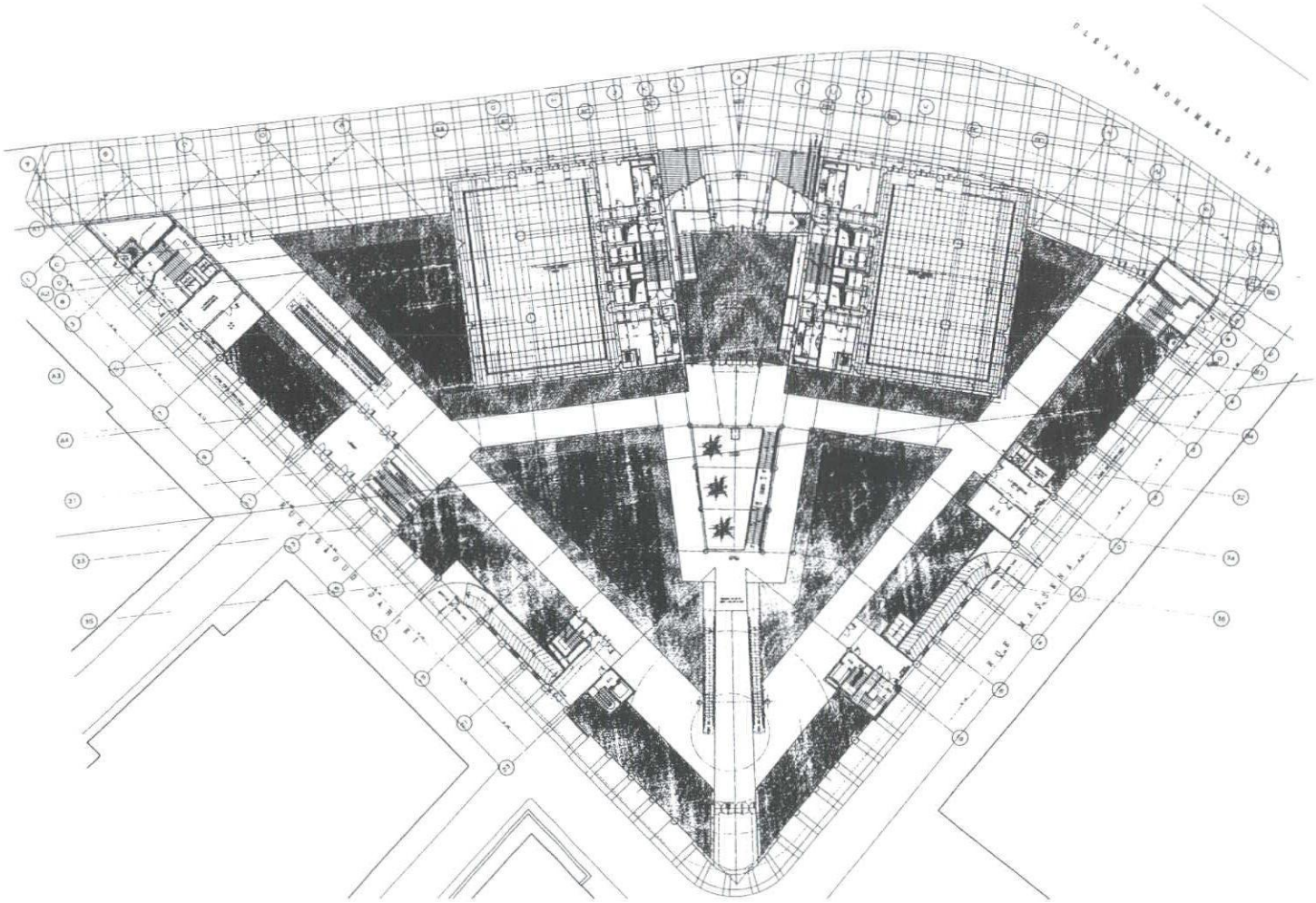


8

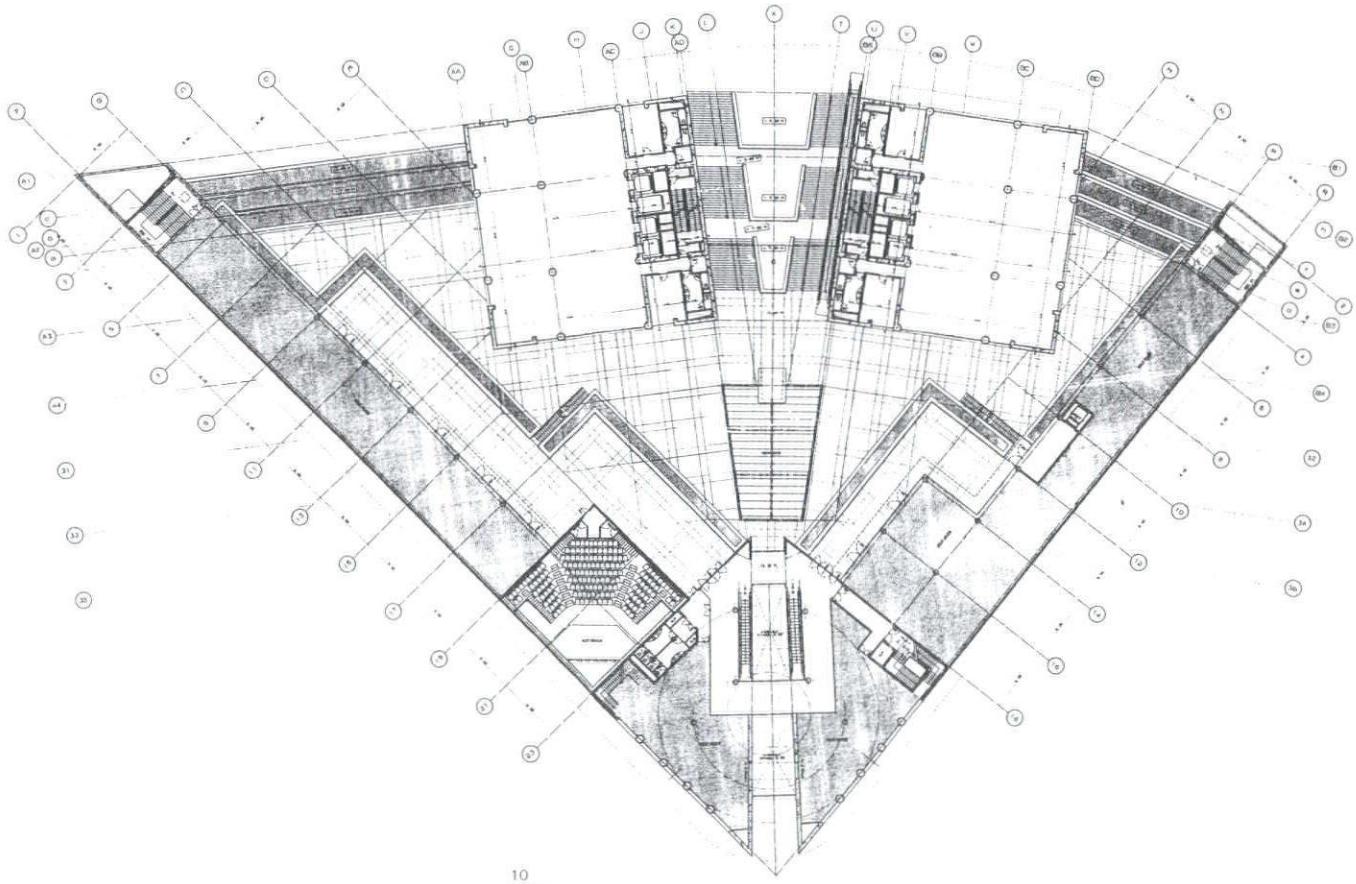
8
Court perspective

9
Ground floor plan S=1: 800

10
3rd floor plan S=1: 800



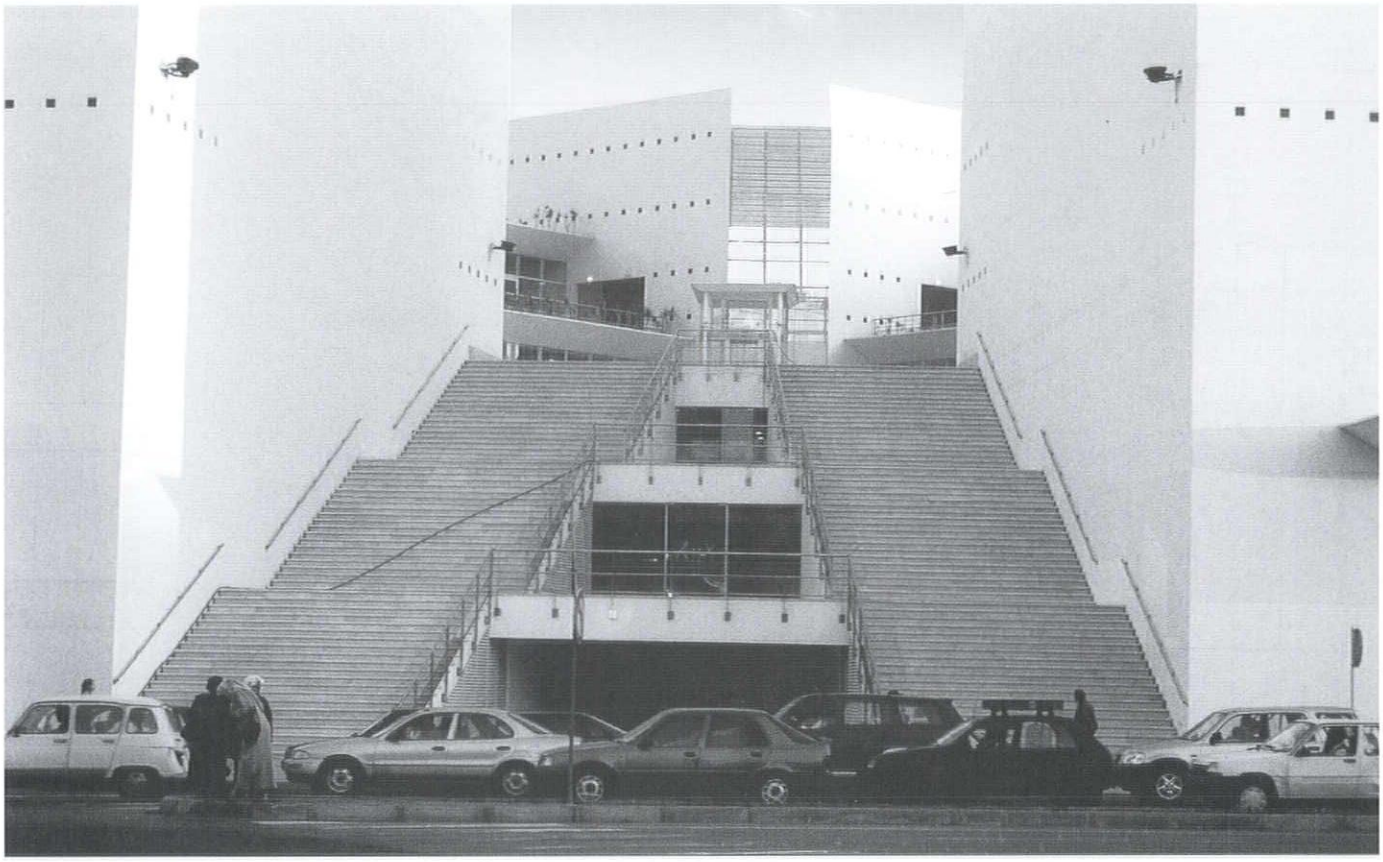
9



10

7
Approach to the main hall

8
Entrance to the main hall



7

〈カサブランカ・ツイン・センター〉はカサブランカの西部に位置しており、オフィスと店舗とからなる、モロッコの経済的、社会的な活況を体現するような開発計画である。モロッコのなかでもとりわけ発展が著しいカサブランカでは、オフィスと駐車場の不足が深刻化しており、商業と国際金融に用途の的を絞った新しい地区の創設が課題となっていた。この複合施設はカサブランカ西部の人口密集地域へのメイン・ゲイトウェイの役割も果たしているが、2本のタワーはその恰好の目印である。

タワーの建築はムーア様式の古い伝統からインスピレーションを得ており、プロポーションもそれに則っている。それぞれのタワーはオフィス30層、天井高7.2mの巨大なロビー、会議室群、地下5層のパーキングからなる。最上階に昇ればユニークな眺望が眼下に広がる。カサブランカ市街、大西洋、ハッサン2世モスクがツイン・タワーの軸線上に並ぶのである。オフィス棟は、自然採光面積600m²のアトリウムによってパーキングと商業エリアとに接続されている。

ショッピングセンターは5層にわたり、店舗、テラスのあるバー、カフェテリア、最上階のオーディトリアムで構成されている。そのほか、街路に面してさらに店舗が設けられ、中2階にはスーパーマーケットもある。

8

Casablanca Twin Center is an offices and retail development for the western part of Casablanca with a program which embodies Morocco's economic and social aspirations. The lack of office space and car parking facilities in one of the most progressive cities in Morocco prompted the creation of this new district, conceived specifically for commerce and involvement in the word of international finance. The complex serves as main gateway to very populated districts in the west of the city and it is signaled by two twin towers.

The tower architecture is inspired by the proportions and the aesthetic of the long Moresque tradition. Each tower contains 30 floors for office space, a monumental lobby of 7.20 meters high, meeting rooms and 5 sub-floors for parking. The top floor offers a unique panoramic view of Casablanca and the Atlantic and the Hassan II Mosque, on the axis of the twin towers. A naturally lit atrium, 600 m² large, connects offices with parking and commercial area.

The shopping center occupies 5 floors, including stores, terraces with bars, cafeterias, an auditorium on the last floor, more stores along the street and a supermarket in the first sub-floor.

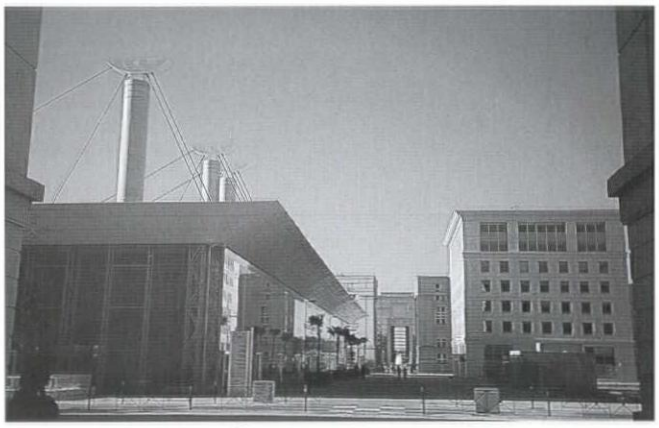
Architect: Ricardo Bofill Taller de Arquitectura
Associated Architect: Elie Mouyal
Client: ONA
Floor area: 93,000 m²
Engineer: Oger International

Olympic Swimming Pool of Montpellier

Montpellier, France 1996

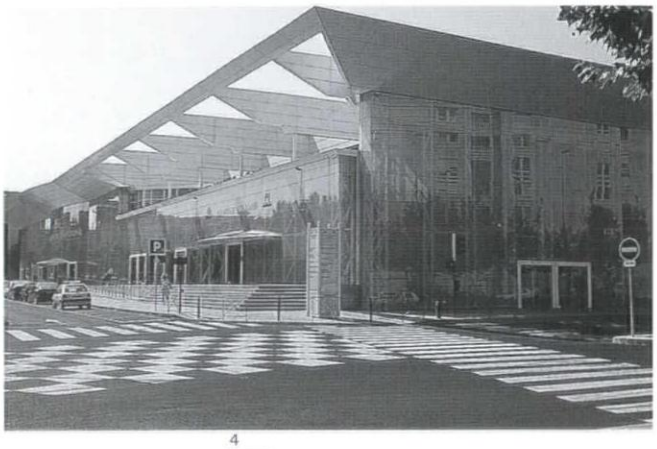
モンペリエのオリンピック・プール

1



2

3



4

この複合スポーツ施設のデザイン的な意図は、極度の透明性、周囲の街並みへの開放性、多彩な機能を持った空間の重合性の3つをもって、アンティゴーネ競技場の残りの施設と差別化された、現代的な一大空間を実現することにある。建物は無駄を一切排除し、形態も単純である。施設の内訳は、競技用プール、レジャープール、観客席、スポーツ・ホールであり、これらの空間が視覚的に繋がることによって建築的スペクタクルを生み出す。

ガラスと鉄からなるこの建築には、周囲の環境との総合的な関係においてデザインを捉えたいという建築家の意志がふたつの形で明快に表れている。その第一は、関係の対照性である。施設はアンティゴーネ競技場の基調である古典主義様式とは一線を画している。第二には、広場の連続性である。水辺のレクリエーションのための広場を大きな陸屋根で覆うというコンセプトで設計されたこの施設は、アンティゴーネ競技場を構成する数多くの広場のひとつとして位置づけられている。歩行者の経路に向かって開かれており、競技場全体の要でもある。

建物の地上レベルより上には軽量の屋根がふたつのプールに掛かっているだけである。エントランス・ロビーに入ると、ふたつのプールとスポーツ・ホールが直ちに視界に入る。観客席の最上部からアプローチすると、眼下に競技用プール、右手にレジャープールが広がる。観客席は競技用プールの両側に用意されている。それぞれに特徴あるふたつの広場として設計されてはいるが、レジャー用区域と競技用区域とは、視覚的、空間的、機能的にひとつに融合している。

ヴィーナス・オリンピック・プールは50m × 25mの大きさに10レーンが走り、水面下の覗き窓を備えている。国内および国際競技会を開催することを目的としているが、競泳、水球、シンクロナイズド・スイミングなど各種競技の練習にも使われる。可動の桁によりふたつの25mプールに仕切ることも可能である。

スポーツ用の空間はそのほか、25m × 12.5m、5レーンのアフロディーテ練習プール、マッサージ・バス付きのレジャープール、ウォーター・スライダー、ソラリウム・テラス、フィットネス機器を備えた体育館、850m²の多目的スポーツ・ホール（用途はハンドボール、バスケットボール、バレーボールなど）からなる。レジャープールの屋根は電動で開閉ができ、日光の入る快適な空間で遊べるようになっている。また、2,000人を収容する観客席の他に、レストラン、カフェテリア、3つの店舗、プレスセンター、スタッフ用事務室がある。

二重ガラスのカーテンウォールで覆われたファサードは、シルクスクリーン・プリントを用いて様々なトーンの白に着色されている。したがって建物の外にいる歩行者も、楽しさに溢れた内部空間を感じることができる。

アンティゴーネ・オリンピック・プールは透明でシンプルなデザインを特徴とする。スポーツとレジャー、水と身体、すべてを讃える施設である。

1
Rear entrance

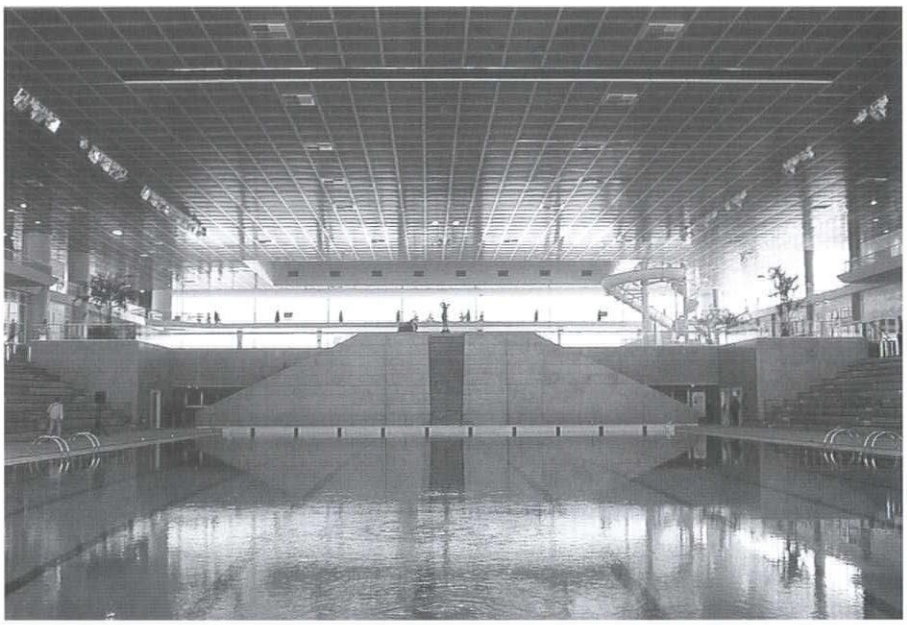
2
Rear facade on the Antigone axis

3
Main facade

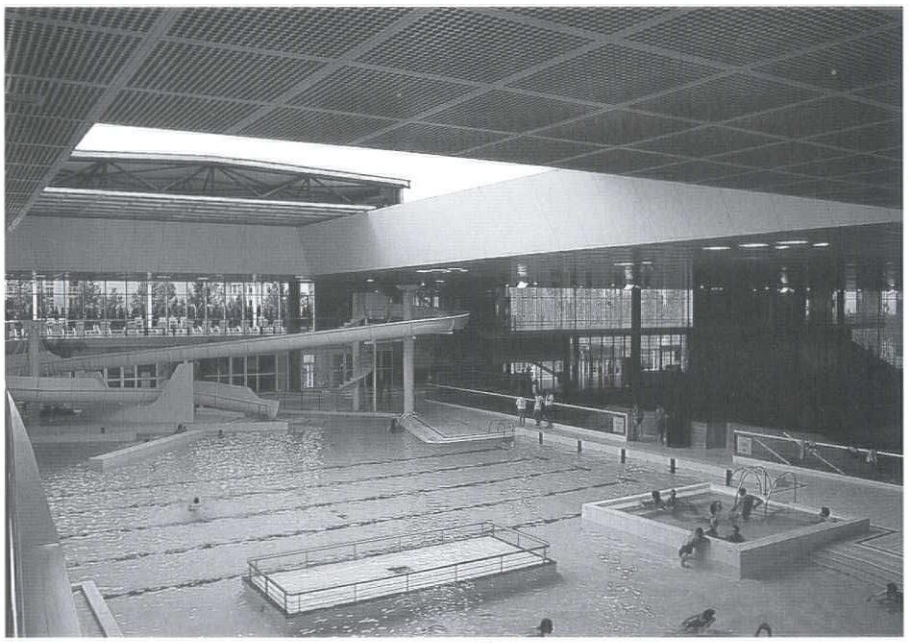
4
Health Club entrance

5
Sporting pool view

6
Leisure pool



5



6

The overall design solution implemented in this sporting complex is that of a new, modern and singular space, differentiated from the rest of Antigone in its extreme transparency, its openness to the surrounding townscape, and the overlapping layout of the various functional spaces: a construction stripped down to the essentials and simple in form. All the component parts are visible in this complex comprising a sporting pool, a leisure pool, seating for the public and a sports hall, and all form part of the architectural spectacle.

The design evidences the architect's desire to integrate this water sports complex into its surroundings, first by way of contrast, as the construction represents a departure from the classical architecture of Antigone, and then because it is conceived of as a large square, a square under a broad flat roof combining water and recreation, which takes its place within the succession of the squares that make up Antigone. This glass and steel construction opens generously onto the pedestrian axis, and is at the same time the center and the final piece of the neighborhood.

Above first floor level, the building is nothing more than a light roof suspended over the two pools. From the entrance lobby, the view of the two pools and the sports hall is immediate. Visitors, who enter at the highest level of the public seating, are met with a view of the sporting pool below with the leisure pool to its right. Spectators can watch competitions from either side of the sporting pool. Conceived of as two squares fused into one, although each with its own individual atmosphere, the leisure area and the sporting area are, nonetheless, fully integrated visually, spatially and functionally.

The Venus Olympic pool, 50 by 25 m with 10 lanes and underwater portholes, was designed as a venue for national and international competitions, and is adapted to the requirements of high level training: swimming, water-polo and synchronized swimming. A mobile boom facilitates the division of the pool into two 25-metre sections.

The installations also include the Aphrodite training pool, 25 x 12,5 m with 5 lanes, a leisure pool equipped with massage baths, slides and rapids, a solarium terrace, a gymnasium equipped for fitness training, and an 850 m², multifunctional sports hall (suitable for handball, basket ball, volley ball, etc.). A motorized mechanism that opens the section of the roof over the leisure pools adds to the comfort of an installation where the ambience will be enhanced by sun and daylight.

The public seating can accommodate 2,000 spectators (in tiered stands), and the complex also houses a restaurant, a cafeteria, three shops, a press center and offices for the staff.

The facade, a double skin of glass serigraphied with different tones of white, affords passers-by privileged views of the interior.

The Antigone Olympic Swimming pool, transparent and simple in its design and construction is a celebration of sport and leisure, water and the body.

Architect: Ricardo Bofill Taller de Arquitectura
Client: District of Montpellier
Program: Sport facility with olympic swimming pool (25 x 50 m), a leisure swimming pool (25 x 12,5 m), a gymnastic complex, health club, bar, restaurant and shops.
Floor area: 15,000 m²
Consultants: Structure A. Verdier, Y. Serra.
Fluids: M. Gros

1
4th floor plan S=1: 1,400

2
3rd floor plan S=1: 1,400

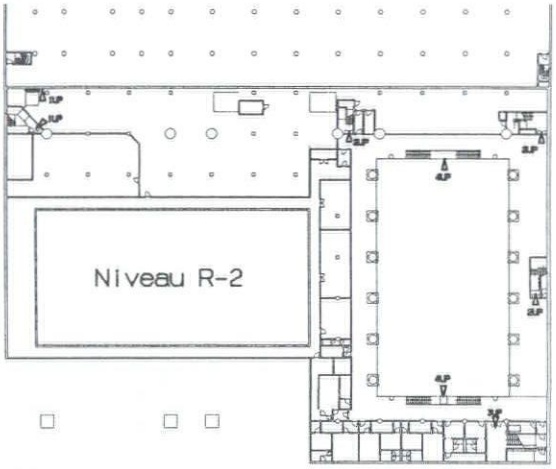
3
2nd floor plan S=1: 1,400

4
1st floor plan S=1: 1,400

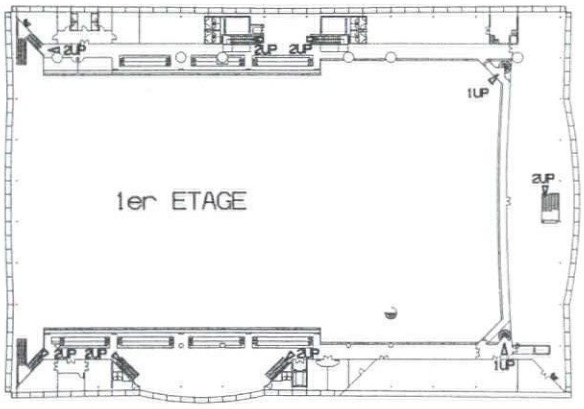
5
Longitudinal Section S=1: 800

6
Cross Section S=1: 800

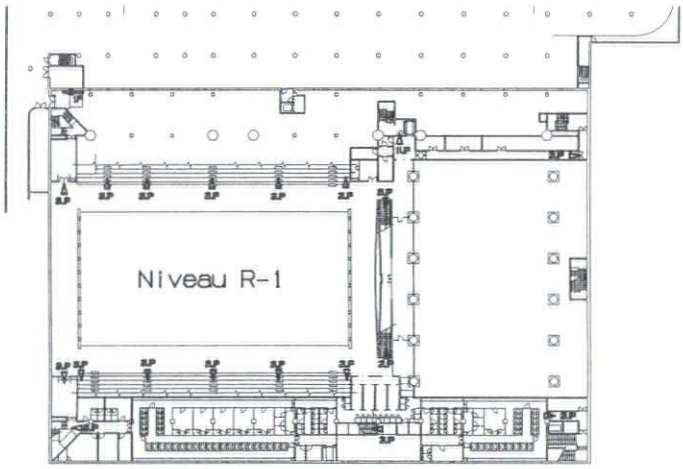
7
Site plan S=1: 3,000



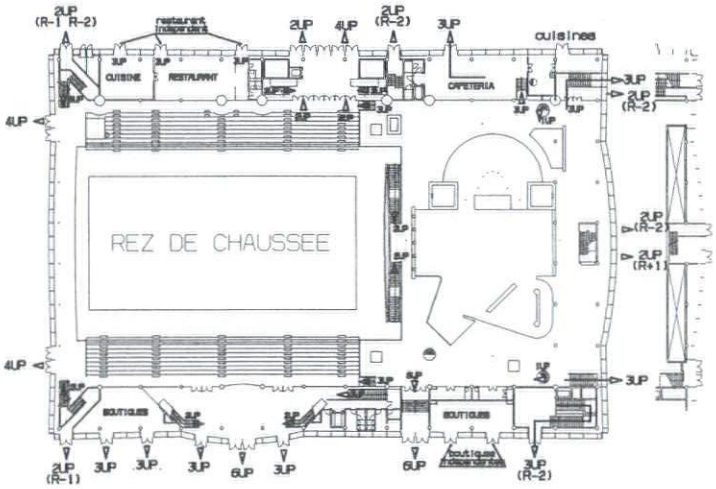
1



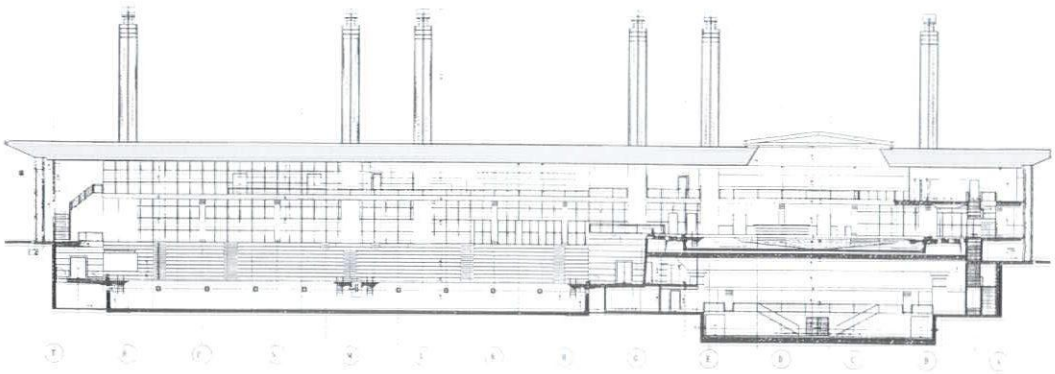
2



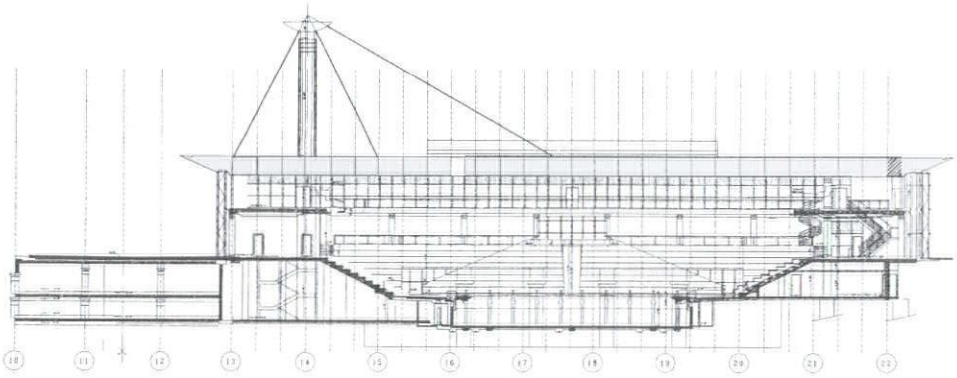
3



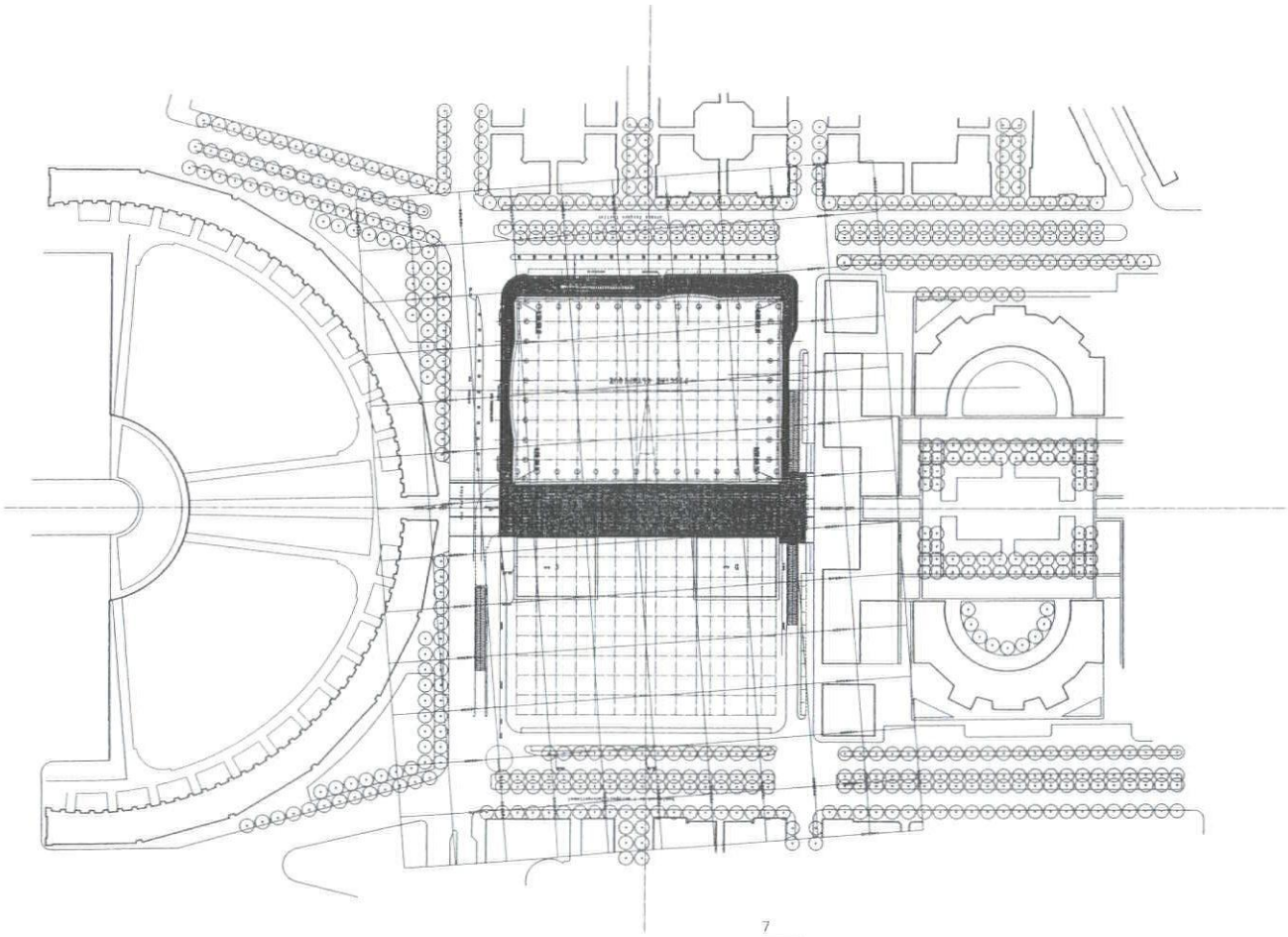
4



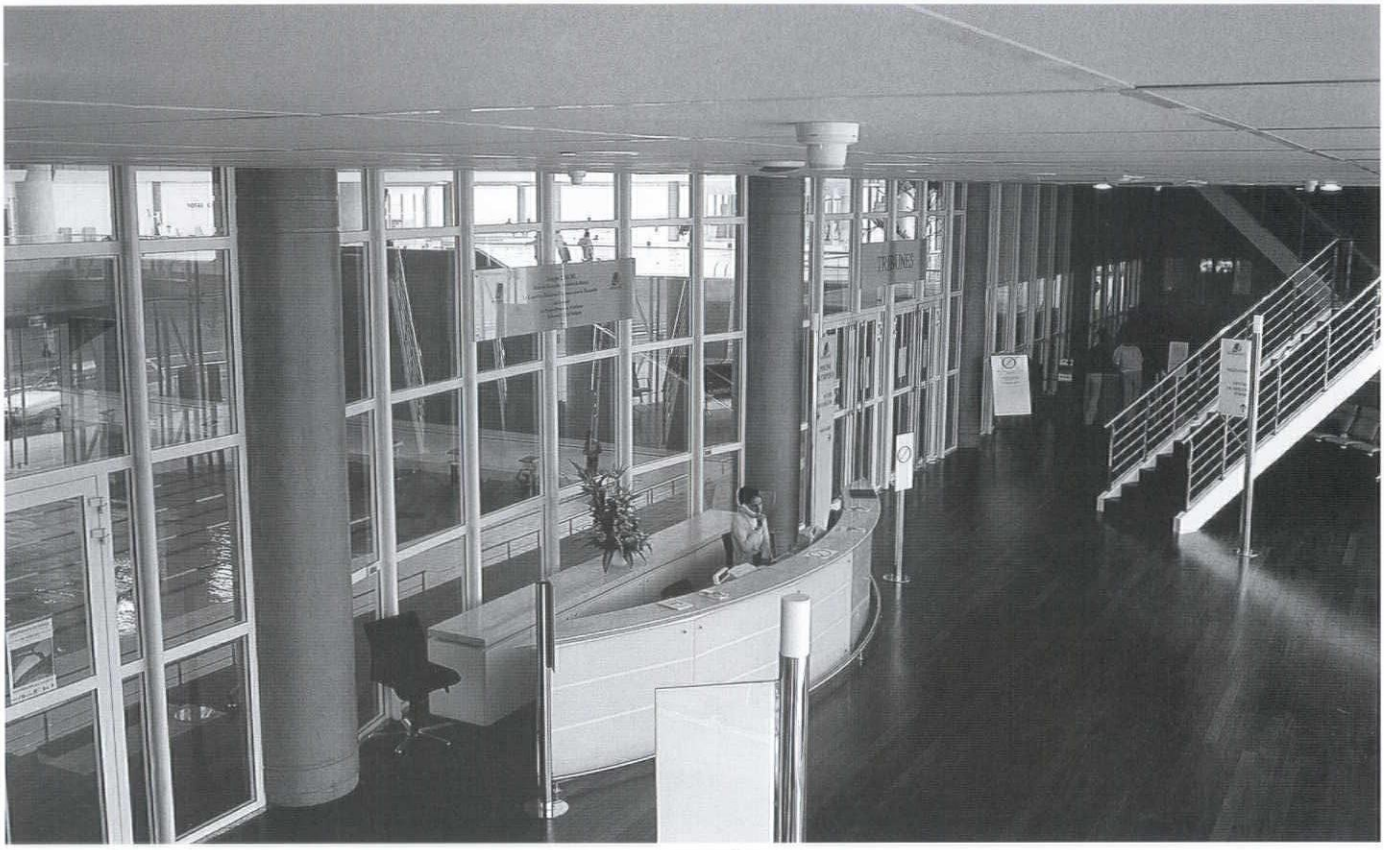
5



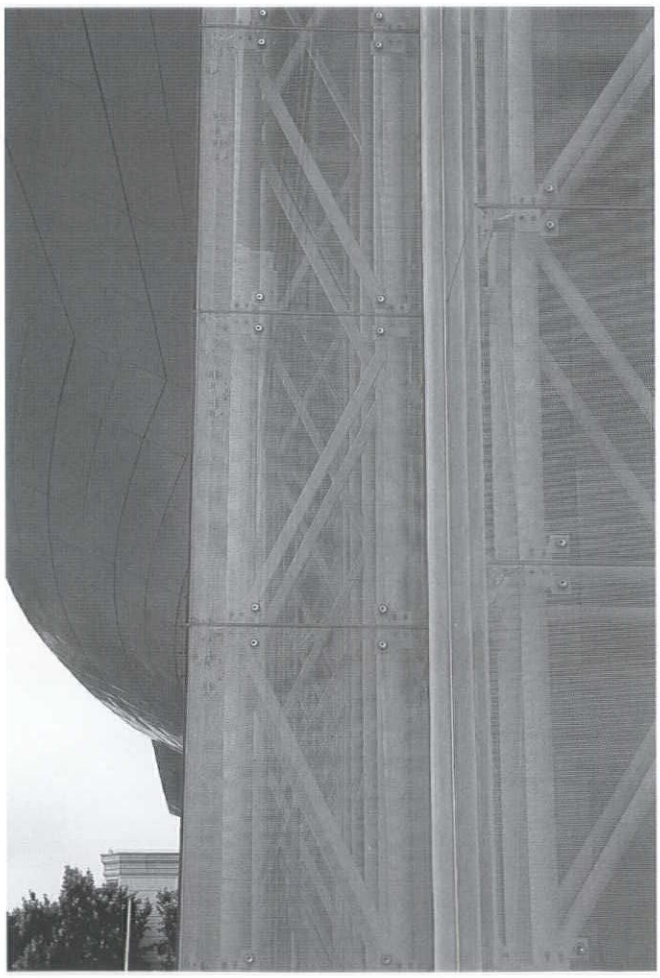
6



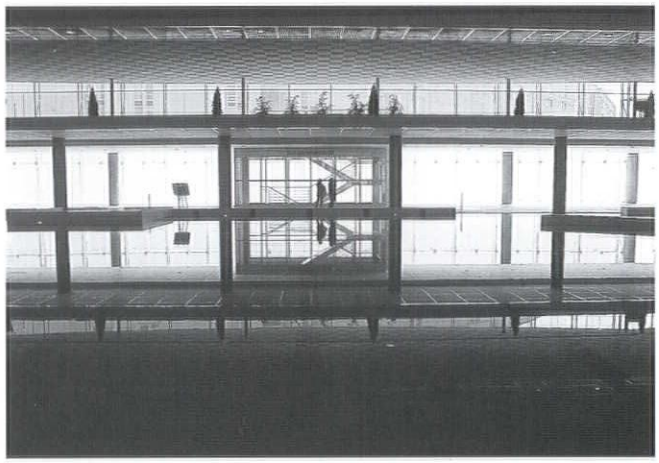
7



8



9



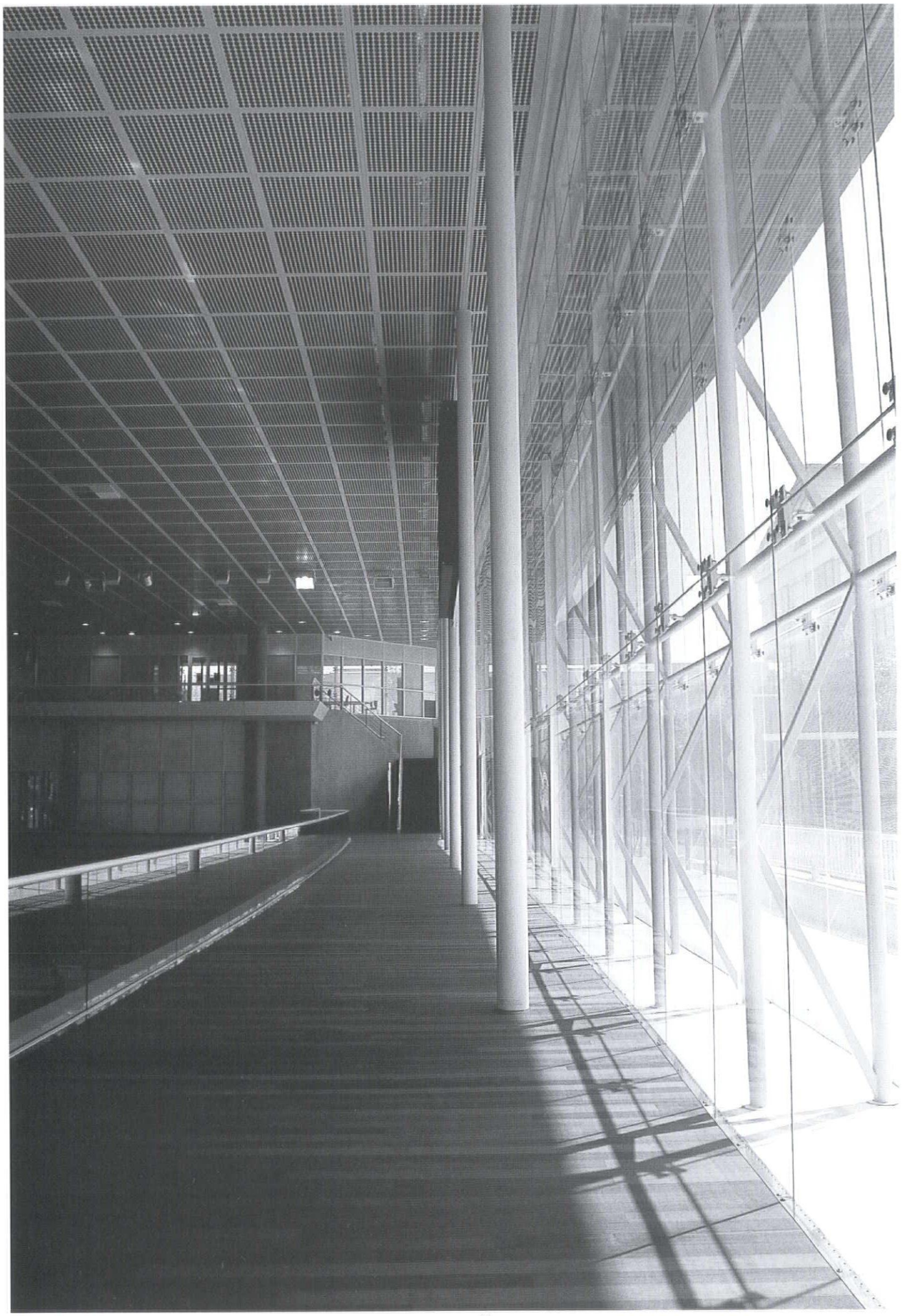
10

8
Reception

9
Double skin detail

10
Interior

11
Facade detail, double skin from inside

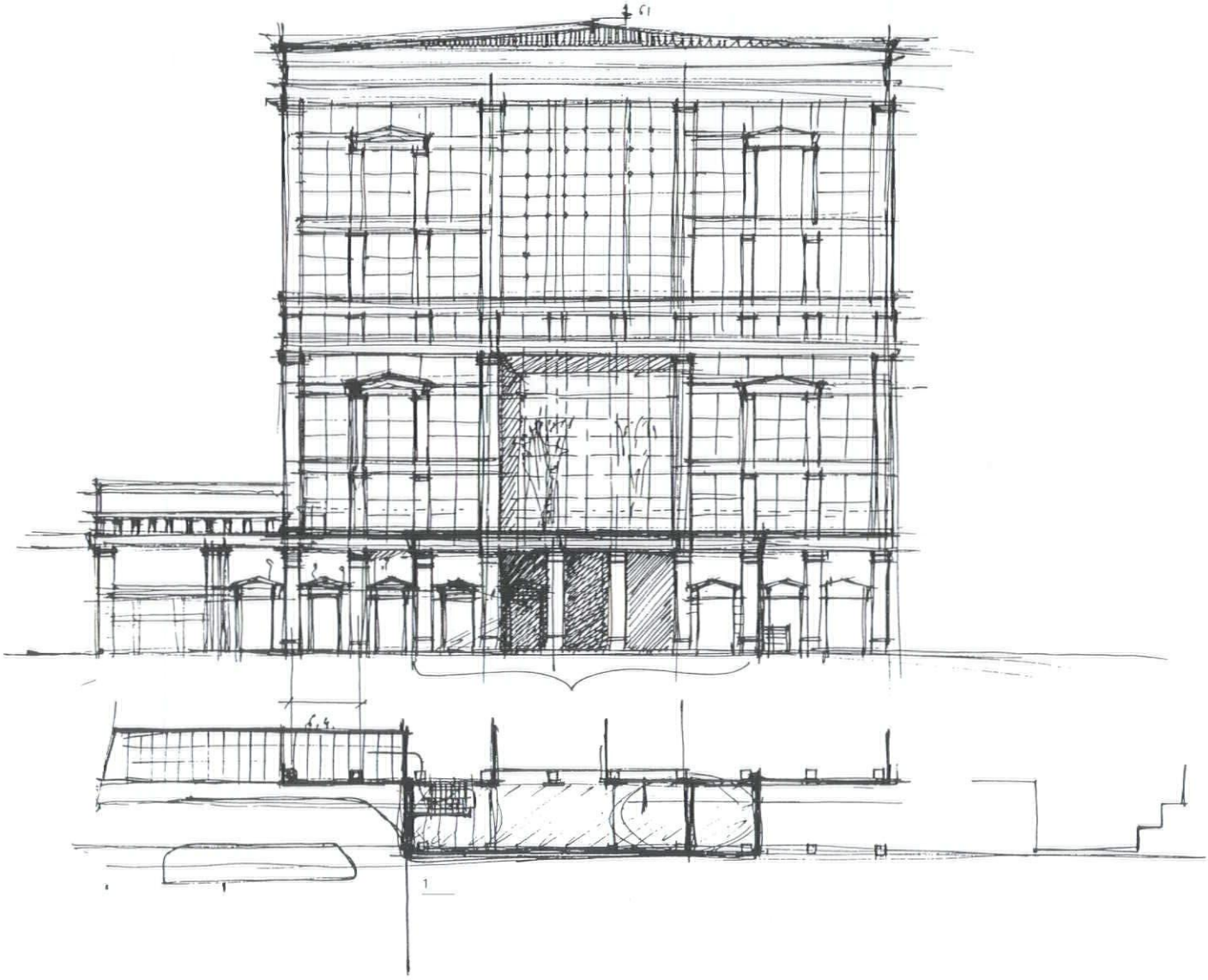


11

Meiji Seimei Aoyama Palacio

Tokyo, Japan 1999

明治生命青山パラシオ



1

〈青山パラシオ〉は、事務所、集合住宅、店舗、宴会場施設を高密度に集積させた複合建築である。施設が立地する青山・表参道は落ち着きと、ヒューマンでハイセンスな感覚を持った街であり、この街並みに相応しいデザインテイストとして、クラシカルでエレガントな佇まいを外装デザインに求めた。

設計監理共同体は、表参道につづくパサージュ、パティオという公開空地を介して施設のボリュームを組み立て、この骨格を基本にリカルド・ボフィールが外装基本デザインを提案した。

ボフィールは提案にあたり、施設全体を「大きな館（パラシオ）」に見立て、表参道側は「歩行者のスケール、街路のスケール、街並みのスケール」と関連づけて注意深くデザインしている。パティオ側は、事務所コアの大きな壁に対比させて「4面のファサードそれぞれが、親しみの持てるスケール感とする」ことに特段配慮している。

デザインエレメントの特徴は、古典建築にみられる装飾的要素を捨象し、軸対称、黄金分割という原則のもとに再構築した柱型、コーニス、ペディメントである。このエレメントを施設全体に展開させ、特に共通して各棟の四隅は柱型とし、また同一レベルでコーニスを回すことで、スケールが異なる施設の「外観の美的統一」を図っている。

（白川裕信／三菱地所・竹中・戸田設計監理共同体）

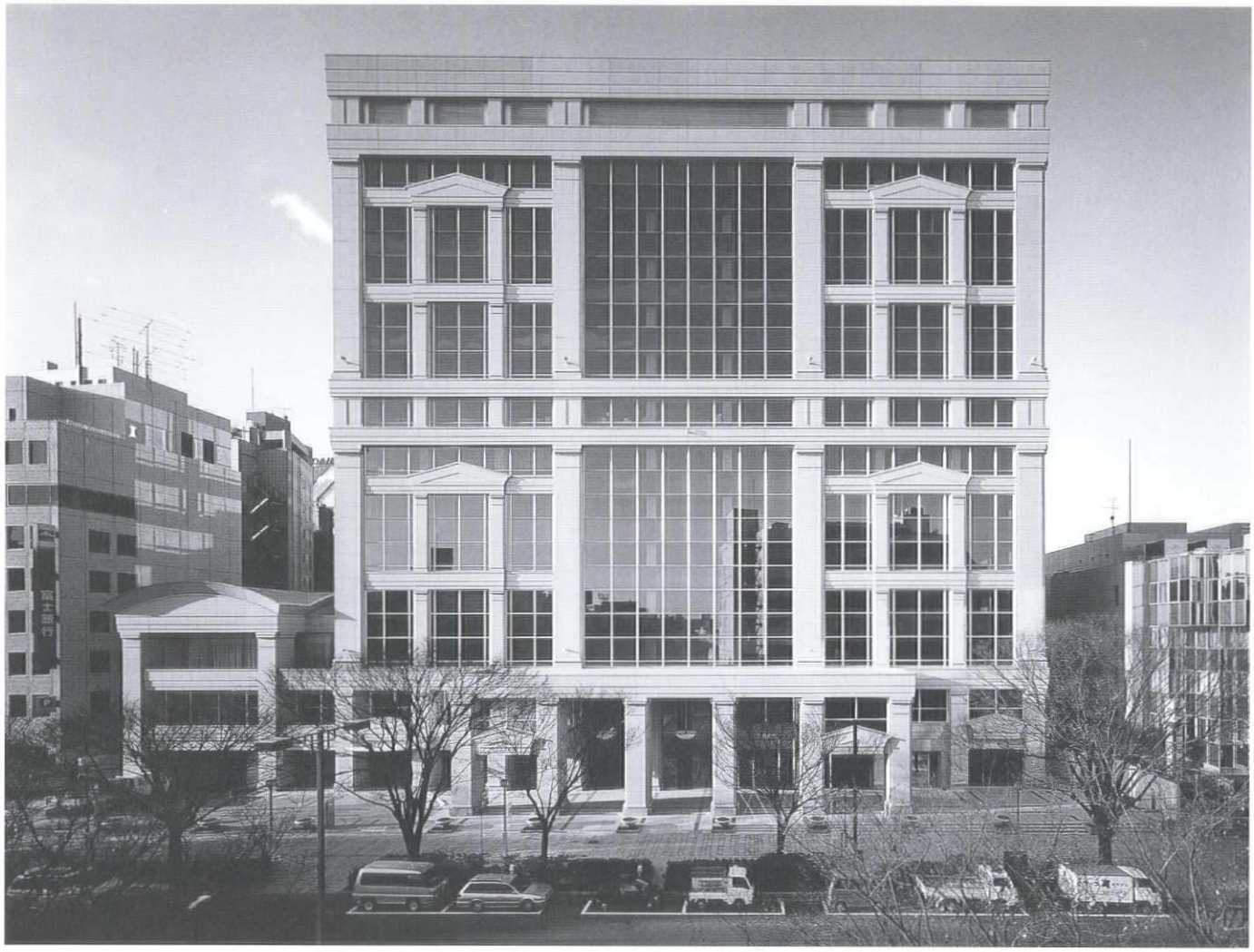
設計＝三菱地所・竹中工務店・戸田建設設計監理共同体

外観コンセプチュアルデザイン＝リカルド・ボフィール

Architects: Mitsubishi Estate Architectual & Engineering Office・Takenaka Corporation Tokyo Main Office Building Department・Toda Corporation
Facade Conceptual Design: Ricardo Bofill

1
Sketch

2
Main facade

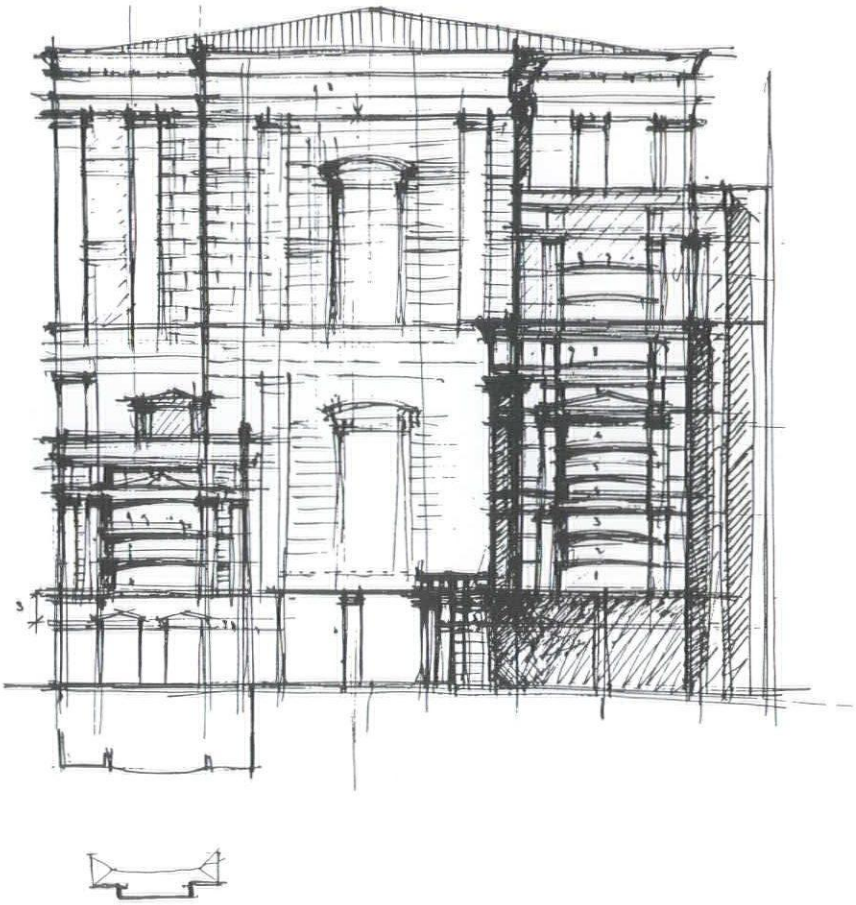


2

青山の表参道沿いに建つ複合ビルのプロジェクトである。エレガントな街にふさわしく、グッチがテナントとして入っている。
(リカルド・ボフィール)

Project for the restoration of a block of buildings used for different activities, located in the elegant district of Omotesando. The well-known italian firm Gucci has been settled in the commercial area.
(Ricardo Bofill)

Program: Offices, shopping centre, dwellings, wedding chapel and a wedding celebration room.
Client: Meiji Life Insurance Company
Floor area: 44,000m²



3

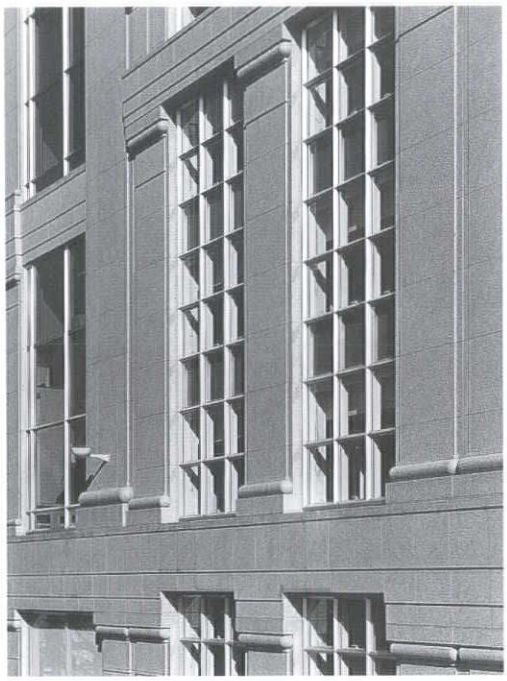
4

3
Sketch

4
Sketch

5
Detail

6
Porch



5

6

透明なモニュメンタリティ

櫻井義夫

ボフィールがパリを中心としてフランスで活躍するようになってから30年近くになろうとしている。この30年といえば時代が大きく転換し、表現の流れもそれぞれに転換期を迎えたはずだ。その間に彼は多くの問題作とも言うべき作品を発表している。

なかでもマルヌ・ラ・ヴァレの集合住宅〈アブラクサス〉、モンパルナスの集合住宅〈アンフィ・テアトル〉などは古典主義をストレートに、いわばポストモダニズムの流れの中に表現した初期の代表作であった。マルヌ・ラ・ヴァレは歴史様式の飾りをまとった装飾的なプレキャストコンクリートパネルを大胆に組み合わせた表現とともに、ダイナミックな空間構成によって住人の空間領域をうまく分節化した立体計画は独自の質を獲得していたし、モンパルナスは居住区としてまとまった開放空間のない地域にモニュメンタルな広場を用意した、そんな意味ではパリらしいコンセプトを持った意欲作であった。

本来彼のフランスにおける表現としての出発点は歴史様式を参照することによってポストモダニズムの流れの中にあったから、パリでは、そして特に郊外においては比較的容易にオスマン的な計画を展開できたといえるだろう。彼の作品の最も重要な部分であるモニュメンタリティは、これ以来ほとんど変わらずに今日に至っていると言ってよいのではないか。

モニュメンタル

80年代はじめころまでヨーロッパの建築家仲間でよく語られていたのは、今から考えると異様に思われるかも知れないが、政治の社会民主主義を背景に、商業主義的な計画はまともな建築家の関わるべき仕事ではないということであり、低所得者層のための集合住宅をふくむ純粋に公共の用に供する計画のあるべき姿などについて議論されたものであった。したがってディベロッパーの抱える計画に著名な建築家が携わり始めたのはこれ以降のことであり、90年代を迎えると資本の流動性は、一国あるいはヨーロッパに留まらず、そこに展開される経済活動の表層たる建築表現はディベロッパーの一手段に過ぎない程度に経済性・収益性と不可分の領域となった。しかし近年の大型プロジェクトにおいて、収益性の一要素としてデザインという価値を積極的に取り込み評価する動きは、国を超えて建築家の参加する条件が整ってきている原因である。

そんな中でボフィールは、このようなディベロッパーの関わる計画に積極的に取り組んできた建築家のひとりと言えよう。80年代後半以降、ヨーロッパでは大都市周辺のスプロールしてゆく住居地域にどう対処するかという各都市共通の大きな問題に取り組み、民間の力で再開発を進めようとする機運も経済の興隆とともに同時に起きた動きであった。これは内容とスケールにおいて公共性の高い新しい計画であり、表現においても混乱した環境に対応する挑戦的な内容を含む可能性があったのである。旧知の通りパリでは、郊外に留まらず市内の改造計画は公共、民間を問わず数多く推進され、その成果はすでに紹介されているとおりだ。今回紹介されているパリでのいくつかの計画はこのような流れの中で成立した計画と考えてよいだろう。

ボフィールの計画にはほとんど常に必然的に公共性を志向するべき条件があって、それを意識するときに彼の建築イメージは人々の拠り所となる古典的な形式の追求にむかうのであろう。それが具体的には寺院・神殿でありアゴラであるのだとすれば、その公共意識の形態的な表現こそがモニュメンタリティの由来なのである。もちろんパリのような都市はモニュメントにあふれているし、公共の建物は基本的にモニュメントなのだが、モニュメンタルであるということ、それはボフィールにとってかけがえのない基本的な表現のありようなのではないか。

古典的な様式を交えたデザインという方向性は、ポストモダニズムの衰退とともにほとんどまともに取り組む者はいなくなったが、歴史的環境に則した選択肢として、あえて変わらずデザインの基本をここにおくという強い意思にはある種の感銘を受ける。それを直裁に表現するとなれば、当然そこでは形態のもたらすシンボリズムが問題になる。モニュメンタリティは一種の権威の象徴であり、その権威の所在と表現との辻褄はどこに存在するのか。その権威の象徴は実は市民であるという説明と計画が与える効果は、ギリシャまで遡らねば必ずしも明快に合致することは期待できそうもない。むしろ技術的な解決によって得られた透明性という表現がその補足的な効果を主張しているようである。

透明性のめざすもの

透明ガラスを特殊構造によって皮膜として表現し、ガラスで建築全体を覆う計画はすでにパリ市内にも数多く見られる。モダニズムの復権とか、その現代的な解答としてのミニマリズムの広範なる台頭とか、いろいろな表現は可能であるにしても、工法が確立し透明な表現が一種の流行として広がっているのも事実である。これまでになかった美しい表現として成立はしていても、あくまでも石の街並みに対する対比の美しさであって、透明な建物ばかりが並んだときにその表現がどれほどの強度を持つかは疑わしい。

ボフィールもモンパルナスでは歴史様式とミラーガラスであったが、モンペリエからは古典様式の表現のままに透明ガラスを組み合わせることによって、石で表現された古典的要素を際立たせる試みを積極的に取り入れ始めている。ゆるやかに古典様式を単純化してゆきながらも、同様にポルトガルの〈サルダナ・アトリウム〉は石で表現した古典的なイメージと透明ガラスの組み合わせであり、〈パリバ・マルシェ・サントノーレ〉あるいは〈カタロニア国立劇場〉は、周囲が硬い石の建築群に囲まれた中でフォルムに

モニュメンタリティを持たせ、透明ガラスで完全に包み込んだ作品である。〈EDF本社ビル計画〉や最も新しい実現作品である〈アクサ・オフィスビル〉は完全な透明ガラスの作品だが、ここではモニュメンタリティというべき要素はほとんど見られず、まったく逆に大企業の本社ビル、あるいは保険会社本社ビルがこれまで持っていた硬くモニュメンタルなイメージから脱却することには成功しているようである。このような作品群から彼が透明な表現に期待していることは、モニュメンタリティとの対極にありながらもそこに調和をもたらすものであると言えるのだろう。もはや誰にでも使うことのできる技術によって実現された、中が見透かせて秘密がなさそうに見える空間、それによってモニュメンタルでありながら公共性が保証されているメタファーを表現しているとすること、どうやらそのように彼の透明性を説明するのが結局合理的なのかもしれない。

本来透明であるということは、外観として透明であるという主張、すなわち隣接する建物とは異なる純粋で均質な存在感の薄い存在感、透明で希薄でありながらあるときには太陽光を強烈に反射させて存在を露にする変幻性など、対外的な効果が大きく、むしろ内部空間としては、そこに何らの影も光の強弱も生まない均質でのっぺらぼうの空間を生み出すはずである。その空間自体を演出するのではなく、透明であるその中に何があるのか、その先に何があるのかが表現の決め手となろう。ボフィールの透明空間は何もないということ、露出しているということ、そのことがモニュメンタリティを押し出しながらも、その形態の主張、境界線を希薄にみせ、権威主義的表現を避けるということを意図しているのであろう。ここに彼は、これまで捨てることのなかった歴史的古典的表現と技術的解決による現代的な表現との調和という武器を獲得することに成功したのである。

都市計画へ

都市へコミットすること、マスタープランを作成するということは大変に微妙なことがらである。極めて政治色の濃いこうした事業は、勢い視点の位置を上におかねばならない。そのときに果たして市民のアメニティなるものを論じることができるのか。ボフィールが都市計画にも大きな意欲を持っていることは、都市の中心を設定すること、都市を活性化させること、周辺地域にまとまりを持たせること、自らの魅力を投資家にアピールすること、などの提案を本誌論文で提示していることによって知ることができるが、その具体的な姿は〈カステラーナ通り延長計画〉にあるとみてよいだろう。ここに描かれているのは、はっきりとしたエッジを持つ街区と中心となることを想定した建築的な広場、もうひとつの中心である緑地としてのオープンスペースなどであり、古典的な正面性を持つ街区によって構成されている。ここにはヨーロッパで伝統的に存在する、街区単位で建築を連続させる都市風景への信頼と、そこにある価値観への信頼が存在する。あるいはそうした信頼を了解する人々と価値の共有を図ろうという意志が見える。一種のフォルマリズムでまとめられた街区境界線の曲線は、これまで単体で実現した透明な表現を持つ建築と旧街区との対比を都市においても表現する境界線であり、ここにこそ、あるいはここにのみ新しい試みが秘められているように思える。透明な建築をこの街区全体に展開しようという意図は単体のそれと同じであるにしても、群としての建築を一様に透明な表現ですすめることがどのような効果を生むのか大変に興味深い。

ボフィールのように古典的な表現と素直に向き合う姿勢から生まれる都市計画には、やはりこれまでの正統的な、ある意味ではオスマン的な方向性を読み取らざるをえない。そのような視点から計画が立案されるとするならば、それが市民本位であるかどうかはあまり意味のないことかもしれない。モビリティの解決は当然最も大きな問題としてその表現に影響を与えるし、そこに生まれる都市の顔という言い方も至極当然なのであろう。

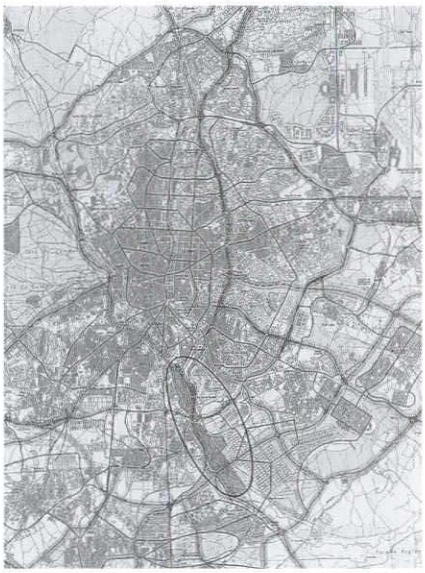
こうしたある意味で正統派の都市計画も、彼の手によれば抑制の効いたモニュメンタリティを実現することによって、現代において納得されやすい一般解としての説得力を充分持つにいたることは想像に難くない。ここには避けがたい魅力が存在することも事実なのである。今回紹介された作品は、建築・都市を問わず、ヨーロッパでは誰にでも好まれるある種の定型表現を彼が熟知し、代弁することができるからこそ、オールラウンダーの地位を獲得しているという証言でもあろう。そして当分は透明なモニュメンタリティが強力な武器として我々に説得力をもった作品をみせてくれるに違いないのである。

（さくらい・よしお／建築家）

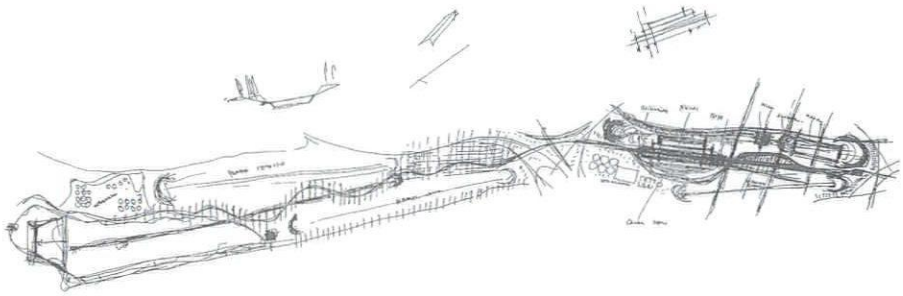
The Linear Park on the River Manzanares

Madrid, Spain 1998

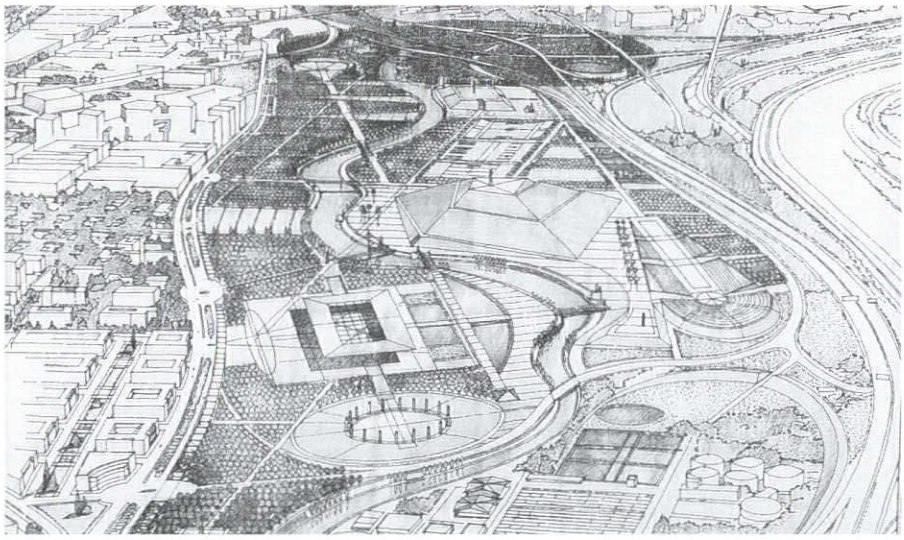
マンザナレス川のリニア・パーク



1



2



3

マドリードは現在、南方のメセタに向かって拡大を続けているが、今になって、拡大した市街地のどこかに公園を設け、市民が自然に触れられるようにする必要が生じた。この敷地はそのために最適な場所として選ばれた。

敷地には下水処理場と電力供給施設がすでにあるが、それらを残しつつ、一帯を散歩のできる公園に変える計画である。周辺地域住民のスポーツやレクリエーションの需要を満たす、大規模な公園を建設する。そのために最重点の課題として浮上してくるのが、マンザナレス川の扱いである。これはマドリードの公衆衛生計画の一環としてすでに検討が始まっているプロジェクトであるが、私たちの提案は、川をいくつかのセクションに分割し、さまざまな形で親水性を持たせるというものである。

まず、以下の3つの要素が公園全体の構造を決定する。

・マンザナレス川自体の流れ。両岸はなだらかな緑で覆われ、樹木が植えられた遊歩道——サイクリングにも開放される——が設けられる。

・中央の軸線。公園を一直線に横切る。川はこの軸線を縫うように流れるので、左右の岸を結ぶ役割も果たす。

・直交する遊歩道群。囲まれる各区画には樹木が規則正しく植えられ、また、区画ごとに用途を変えることができる。

公園は自然を旨としており、高層の建築物は計画されていない。スポーツ（ジョギング、サイクリング、モトクロスなど）、水遊び（「マドリードのビーチ」、ボートレース）、さまざまなイベント（屋外コンサート、野外劇など）の開催を主眼に置く。

公園の利用者は歩くにつれていろいろな施設を眼にすることになる。北からアクセスした場合、最初のセクションには高い樹木で囲まれた円形劇場がある。北側の背後はマドリード南のインターチェンジであり、公園の中央を貫く軸の一端に当たる。また、上記の屋外イベントの舞台として使われる。軸線はこの第一のセクションで川を2回渡り、スポーツとレクリエーションのためのパビリオンへと至る。パビリオンの周囲は広い池を主体とした、構成主義的な庭園である。メインの軸に平行するもう1本の軸は、屋外コンサート空間に通じている。この空間は約15,000人を収容でき、古代ローマのフォーラムにほぼ等しい広さである。

2本の軸の間にはふたつの展望ピラミッドが位置する。ひとつは三角錐であり、一方はテーブル形である。傾斜が緩やかなので誰にでも登ることができ、頂上からは公園の全体とマドリード市街が見渡せる。高さ20mのふたつのピラミッドはランドスケープのアクセントであるとともに、公園のアイデンティティを形成する。

樹木が植えられる正方形の区画群はマウンド状になっており、廃棄物によって埋め立てられる。地盤の安定に注意しさえすればランドスケープ・デザインのひとつとして有効な手法である。それぞれの区画には種類の違う樹木（オリーブ、トキワガシ、イトスギ、オレンジなど）が植えられ、芝や土の遊歩道が内部を通ったり、スポーツ施設が置かれたりする。

こうしたマウンドを作る意図は、敷地北端にある下水処理施設や発電所を隔離できるからである。十分な高さの土地造成を行えば施設が視界に入らないばかりでなく、臭気が発生した場合の対策の面でも有効である。これはまた同時に、公園の北と中央に位置するインターチェンジ周辺のランド

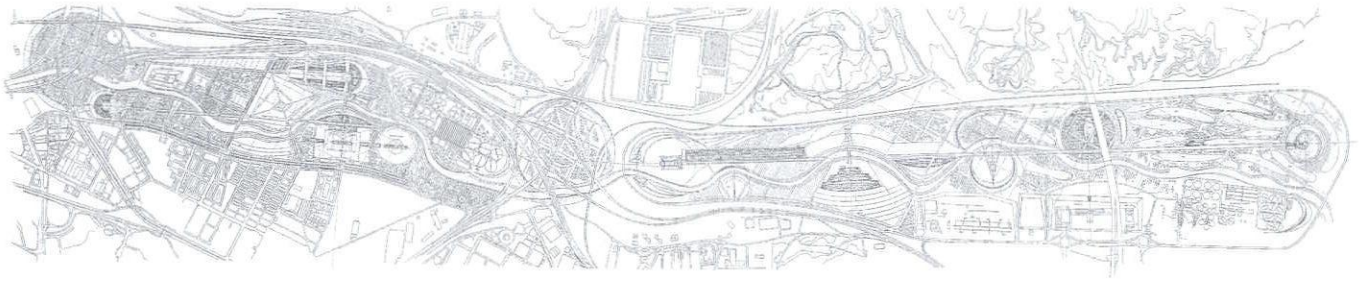
1
Site plan

2
Conceptual drawing

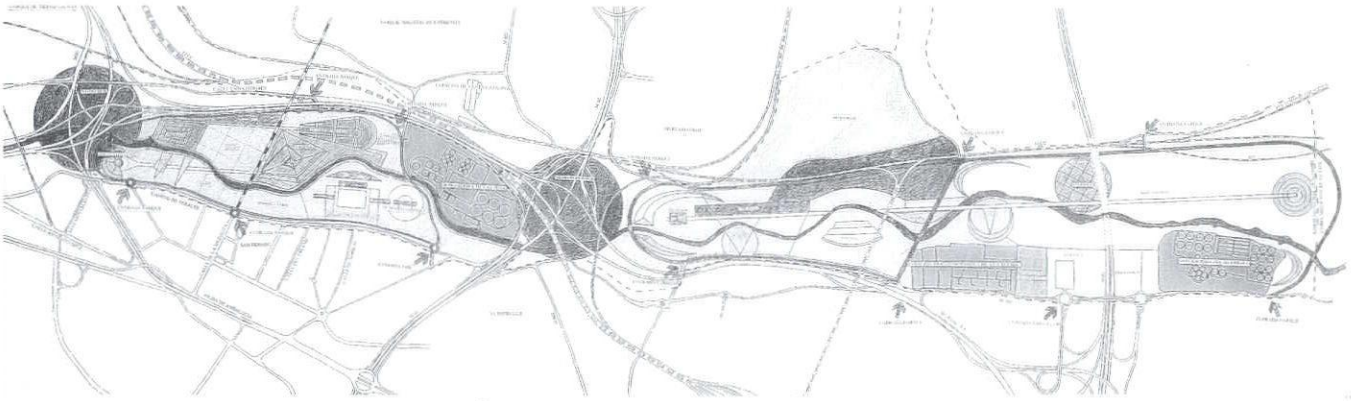
3
General perspective

4
Master plan

5
Accessibility and uses plan



4



5

スケープに手を加える機会でもある。こちらはインターチェンジを中心とした地盤を大きく円形に嵩上げすることを計画している。最も高い道路のレベルまで地盤が持ち上げられるので、各車線の溝が穿たれた、巨大な緑の円盤が出現することになる。ドライバーは自分が大きな公園を通過していることを知り、風景の変化に目を楽しませる。

中央のインターチェンジより南側のセクションにも北側と同じ方法論が用いられる。こちらはより自然に近い、野性味のある性格づけを行う。メインの歩行者軸はインターチェンジの遮音のために設けられた巨大な砂丘の下から始まる。西側のカミノ・デ・ペラレス通り沿いにはレストラン、バー、公衆浴場などが入るパーゴラつきのコロナードが作られる。

メインの軸は南北を貫く公園の背骨である。それに沿って南側に入るとまず最初にオリンピック規格のボートレース場が現れる。その向こうにはプール、池、ビーチなどからなる水遊びの一大エリアが川の両側に展開する。パーゴラつきの様々なビーチ、ウォーター・カーテン、脱衣場、広大な池、屋内プールなどが集まり、水のテーマパークを構成する。

その先は高圧線が空中を横切り、公園の雰囲気は一変する。砂漠を彷彿する、思索に適した抽象的な空間である。やや高い敷地に建つ発電所の周囲では、直線や曲線を描くスロープによって環境の変化が強調される。

公園の東側には約20haの育苗場があり、各種植物の苗木が植えられる。

高速鉄道の線路より東の区域はモトクロスの練習場とするよう提案した。

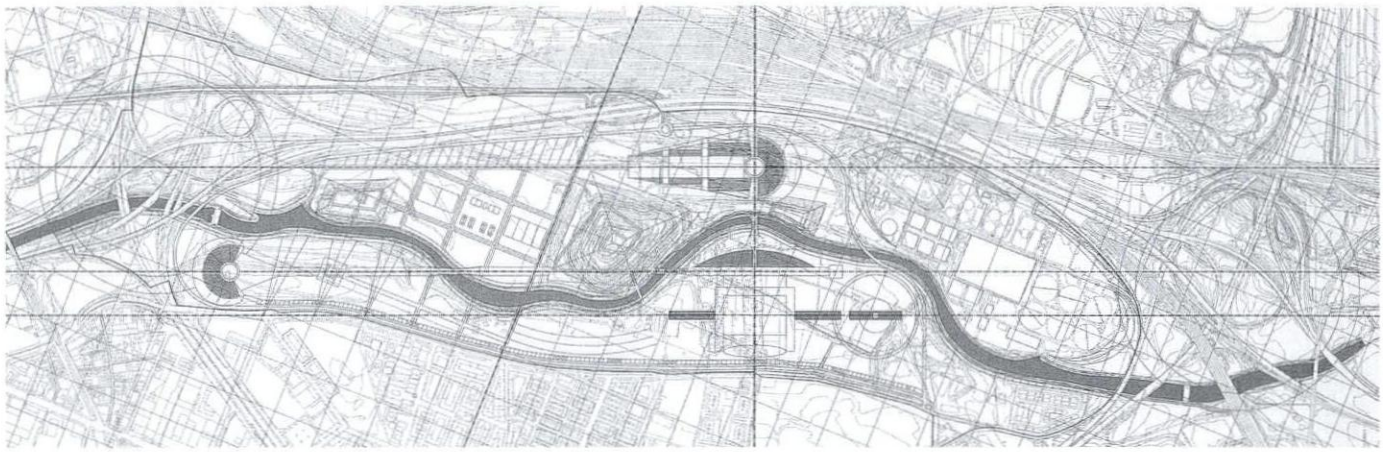
公園の南端には18ホールのゴルフ場を設ける。クラブハウスはプラットホーム上にあり、下部には将来のM-45高速道路に面する予定の駐車場が入る。このプラットホームに接して乗馬クラブが作られる。

ゴルフ場の上空をM-45高速道路が越えるが、これと同じレベルまで持ち上げて円形の巨大な池を作り、ドライバーに視覚的なインパクトを与える。中央の軸線の末端にはスパイラル状の小山を置く。これは見晴台で、ラ・マンチャ地方を見渡せる。

川岸の遊歩道は公園の北から南まで途切れることなく連続している。

公園の敷地は現在のところ周囲から孤立しているので、アクセスの確保は重要である。私たちの提案ではマドリード中心部から直接南下してくるカレ・エンバハドレス通りとM-602号線を公園の東側で交差させ、これらをメインのアクセス道路にする。そのためには2本の道路を作り直す必要がある。西側に関してはカミノ・デ・ペラレス通りとM-40高速道路及びマドリード南インターチェンジとの接続を改善することが重要である。マドリード全体を対象とする公園の性格を考えると、M-45高速道路からのアクセスも将来的な検討を要する。

本計画の意義は自然に満ちた広大な空間の創出のみならず、「マドリードの」川であるマンザナレス川を再生することにもある。都市型の公園が担う社会的役割が、自然と川というふたつのキーワードを通して具象化され、身体のケアに関してはスポーツと水遊び、心のリフレッシュに関しては演劇と音楽のための空間が提供されるのだ。



6
Geometry of the first phase

The geographical location of the park, south of Madrid, is crucial to the city, which is spreading progressively towards the Meseta and needs open ground to break the urban tissue and to provide citizens with contact with nature.

The aim of the project is to transform an area containing the capital's sanitation and electricity supply infrastructures into a place to stroll, a major park that will also meet the recreational and sporting needs of the surrounding districts. To achieve this, what is needed above all is to study the treatment of the river, a project already begun as part of Madrid's sanitation plan to which we propose the addition of a number of elements to improve different sections of the river and bring the water closer to walkers.

Three structural elements form the backbone of the park as a whole and its two sections:

The course of the river itself, transformed into a romantic promenade thanks to the creation of green, gently sloping banks on both side or tree-dotted paths for pedestrians and cyclists.

A major pedestrian axis that crosses the park in a straight line as an alternative to the river, joining its two banks by running first along one side, then the other.

The third element is an orthogonal layout of paths allowing for the regular plantation of trees and the use of the ground for the new activities proposed.

The park is a natural, building-free setting for sports (such as jogging, cycling, and motocross) and activities related to the water (beaches for Madrid and a large rowing canal), which also fosters activities linked to culture (music, theatre, and performances of a" kinds m the open air).

On their itinerary through the park, visitors encounter different facilities. In the first section, running from north to south, there is a green amphitheatre. Standing with its back to the southern interchange, and future support for the cultural activities mentioned above, this amphitheatre opens in perspective over the central axis, flanked by tall trees. In this first section, the pedestrian axis of trodden earth crosses the river at two points and links the green amphitheatre with the site of a sports/recreation pavilion surrounded by a formal garden whose essential compositional element is a large stretch of water in front of the river. Another axis, perpendicular to the main one, leads the public to an open-air concert space with capacity for an audience of approximately 15,000. By virtue of its dimensions, this space is reminiscent of the Roman forum.

The entire western perimeter of the park, running along the Camino de Perales which consists of a partially covered pergola in the form of an architectural pre-cast concrete colonnade, defines the limit of the park' points out the entrances, and accommodates restaurants, bars, toilets and baths. Two sculptural mountains mark the spot: two pyramid-belvederes, one in the form of a table and the other triangular, both sloping gently and allowing visitors to contemplate the park and enjoy views of the city from the top. These 20 metre-high earth sculptures mark the landscape and endow the park with identity.

Recycling mounds of refuse to configure the landscape is a highly valid policy, so long as suitable precautions are taken to stabilize the ground.

In general the layout follows the pattern mentioned above, which marks the paths. Inside each block, different species of trees will be planted (olives, holm oaks, cypresses, orange trees, etc.) and be provided with esplanades of grass or earth and sports facilities.

The intention is to cover the sewer exits at the northern end of the park, and isolate the water purifiers and electricity plant by surrounding them with major earth works forming dunes high enough to hide the installations from view and mask possible smells emanating from them. We also consider it opportune to landscape the southern and upper interchanges. This will involve major earthworks on a large circular surface to raise the overall level to that of the highest road, thereby obtaining a surface of greenery furrowed by me different traffic lanes. In this way, motorists will get the impression of crossing a large park and enjoy better visibility

The same design logic of the northern section is also applicable to the southern section of the Nudo Super-Sur interchange, where the park will have a more natural, wilder personality. The major pedestrian axis begins again behind the great dune that dampens the noise from die interchange. A wide strip in the form of a pergola-colonnade, accommodating restaurants, bars, and baths, will be built along the Camino de Perales

The major pedestrian axis, unlike the path along the riverside, continues to be the project's backbone, bordering an Olympic-size rowing canal. Next comes an area of swimming pools, ponds, and beaches, on either side of the river, configuring a great complex devoted to the water. A landscape of beaches, with pergolas, areas of shade showers and changing areas, ponds the size of lakes and indoor swimming pools together constitute the beginnings of a veritable theme park.

Further on, due to the presence of aerial electricity cables, the park becomes more desert-like, more abstract, suitable for contemplation. Around the electricity plant, which is higher, vertical and curved slopes will define the different environments.

On the eastern strip of the park, an area of approximately 20 hectares will be devoted to nurseries for the cultivation of different species of trees, shrubs, and plants.

We propose that the zone east of the high-speed train line be given over to the practice of motocross. At the end of the park there is am 18-hole golf course. The clubhouse is on a platform accommodating a car park and dependencies alongside the future M 45. A horse-riding club with its corresponding installations is connected to the complex.

At the level of the M-45, which will pass over the golf course, we propose to create a great pond that will break the visual impact of the motorway and, at the end of the axis, an artificial mound in the form of a spiral will constitute a belvedere from which to contemplate La Mancha.

The riverbank paths follow the whole length of its course.

Accesses are essential to the life of me park Since at present it is somewhat isolated, we propose that Calle Embajadores, which comes directly from the centre of Madrid, and the M 602, the continuation of the M-40 will converge at the eastern end of the park as the two major means of access, which will involve improvements to the layout of both thoroughfares. Regarding the western zone, the essential operation will be to facilitate access to the Camino de Perales from the M-40 and the southern interchange. Access from the M-45 will also be important for the metropolitan future of the park.

The Manzanares Park Project means not only the creation of a great space devoted to nature but also the recuperation of a river, the river of Madrid. Both elements, nature and river, are the ideal components with which to produce synergy between the site and its vocation as a metropolitan park a park that will meet such present-day needs of society as caring for the body (sports, water) and cultivating the mind theatre music.

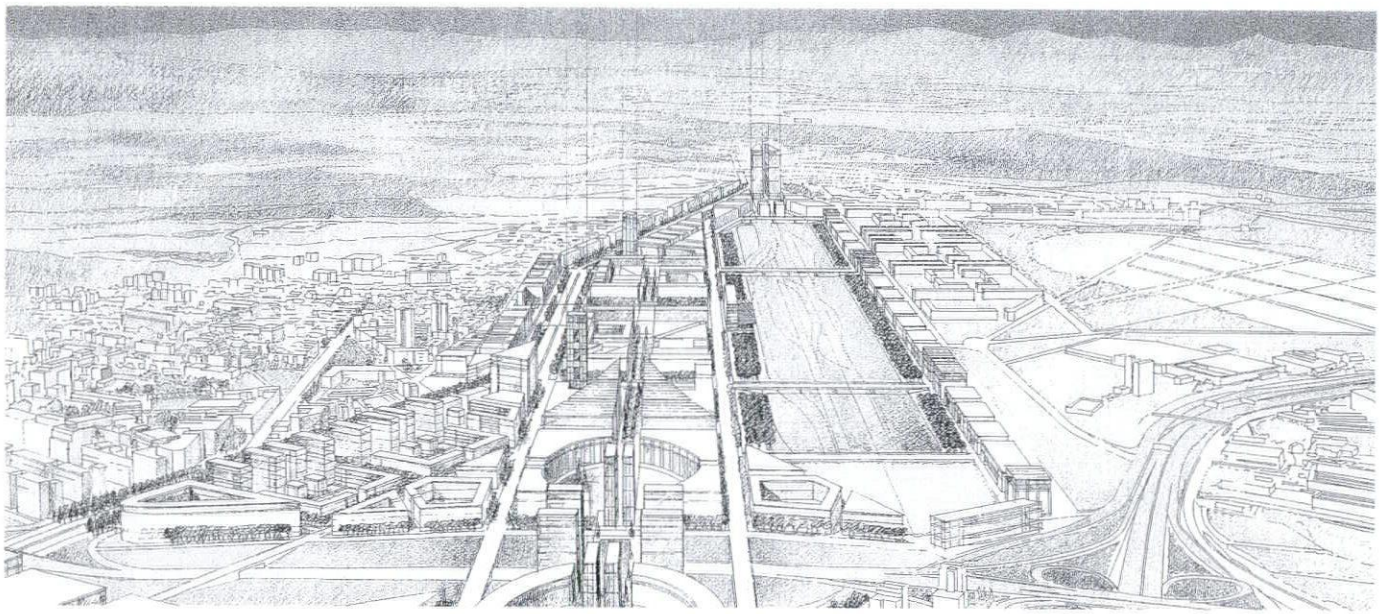
Prolongation of Paseo de la Castellana

Madrid, Spain 1995–2004

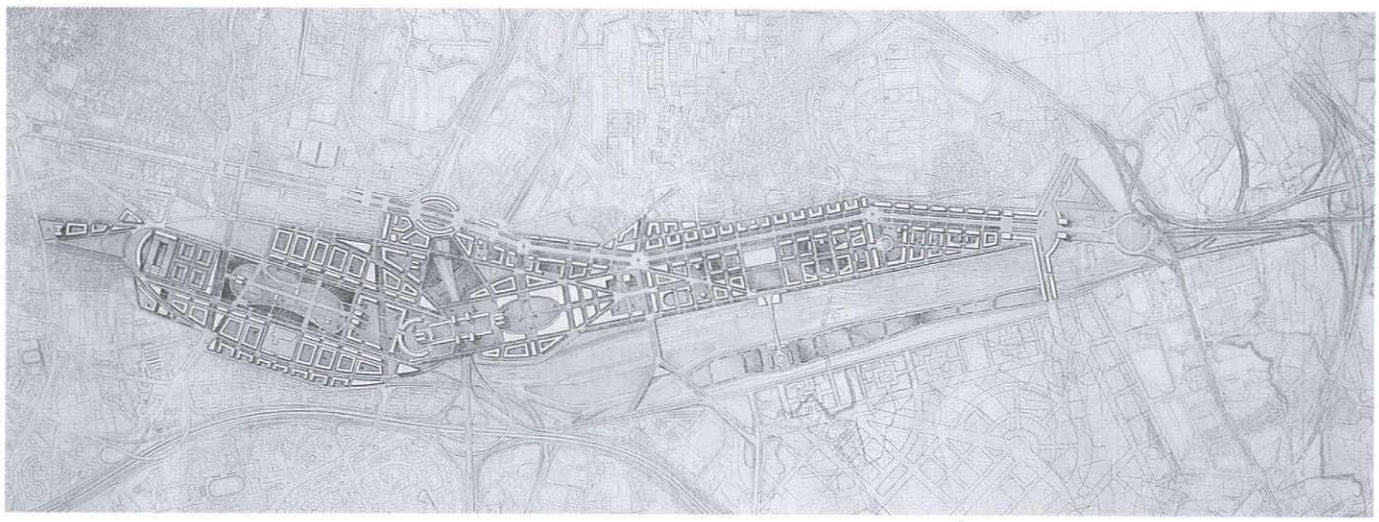
カステラーナ通り延長計画

1
General perspective

2
Urban development plan



1



2

マドリード北部の再開発を目的とする計画で、市街地の北端と幹線道路M-40とに挟まれた地区が対象である。敷地は大部分を鉄道のチャマルタン線とフエンカラル線の施設が占めており、この計画の実施によりマドリード東西の連絡の改善も期待できる。

計画の主要な目標は以下の通りである。

・鉄道によって分断された市街地を修復する。カスティリャ広場からM-40北部インターチェンジの範囲である。

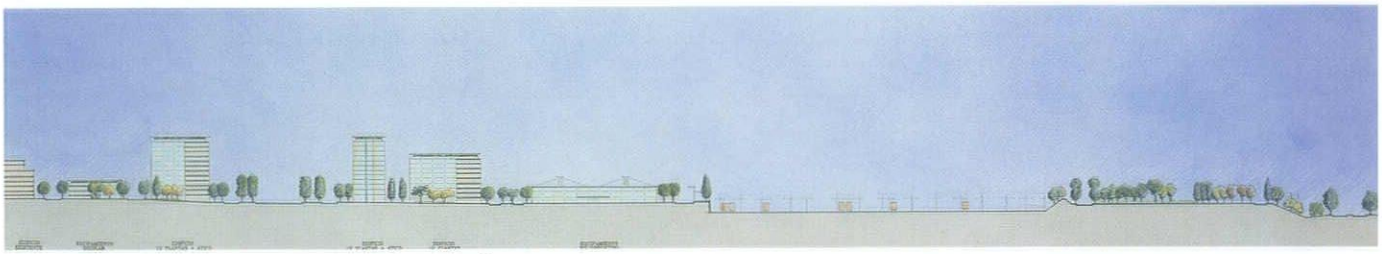
・既存の鉄道施設をできる限り新しい市街地に取り込み、公共の空間や施設を配し、また将来的な開発に際して既存の市街地との連続性を維持するため、発展の核となるべき「センター」を予備的に作り出す。

・カステラーナ通りを北側のインターチェンジ（ヌド・スペル・ノルテ）近辺にまで延長し、北マドリードの新しいファサードと中心地を作る。これは新しいコミュニケーション軸であり、新市街と都心、あるいは新市街の街区間を移動する際のハブとなる。

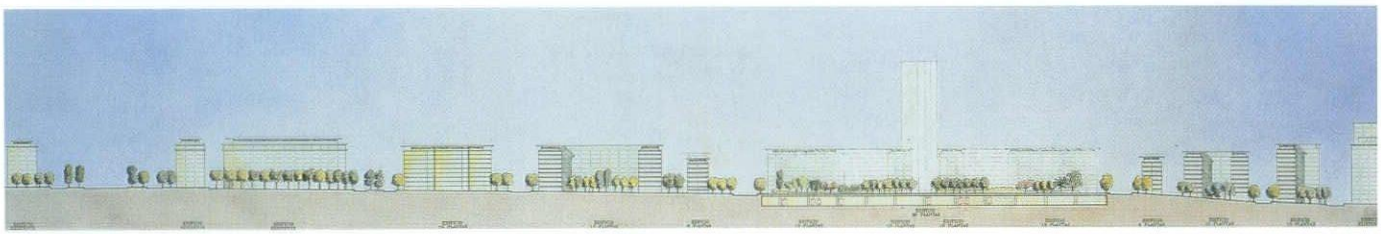
・チャマルタン駅を改装して近代化し、周囲の環境とのよりよい調和を図る。都市内、都市圏、都市間というスケールの異なる交通のインターチェンジとなりうる潜在的可能性を開花させる。

・大規模な公園と多数の緑地を作り出す。

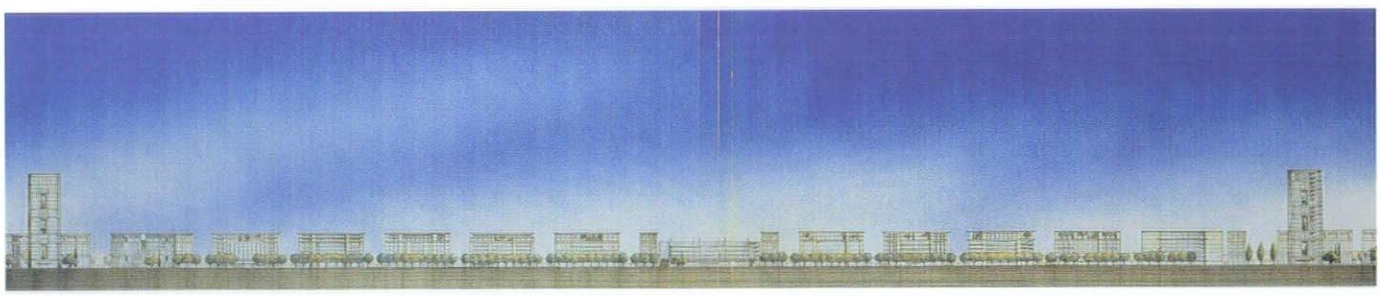
この計画は、古い市街地を再生すると同時に新しい市街地を建設することを目指している。さまざまな施設、インフラストラクチュア、オープンスペースを新旧の両者にバランスよく配置し、新しい街を作るのである。このように、再生と創造を同時に行うことにより、きめの細かい開発が可能となり、マドリード周辺地域の生活環境の改善に役立つ。



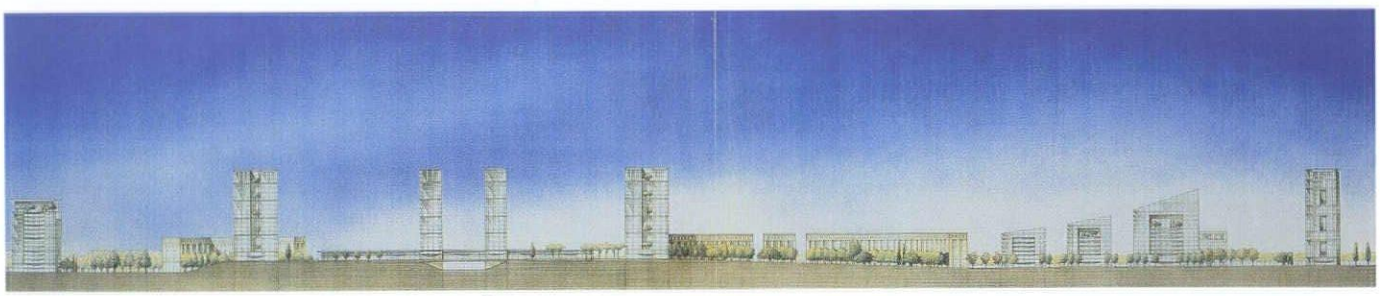
3



4



5



6

This project consists of the urban redevelopment of the northern area of Madrid between the city itself and the M-40, an area occupied mostly by the Chamartín and Fuencarral railway systems. This redevelopment will also foster horizontal links between the zones east and west of Madrid.

The main aims of the project are the following:

To heal the scar created by these railway systems, which stretches from Plaza de Castilla to the northern interchange of the M-40.

To integrate as many as possible of the existing railway installations into the new urban tissue, creating public spaces, facilities, and new centres that will establish a solution of continuity between the present-day and new developments.

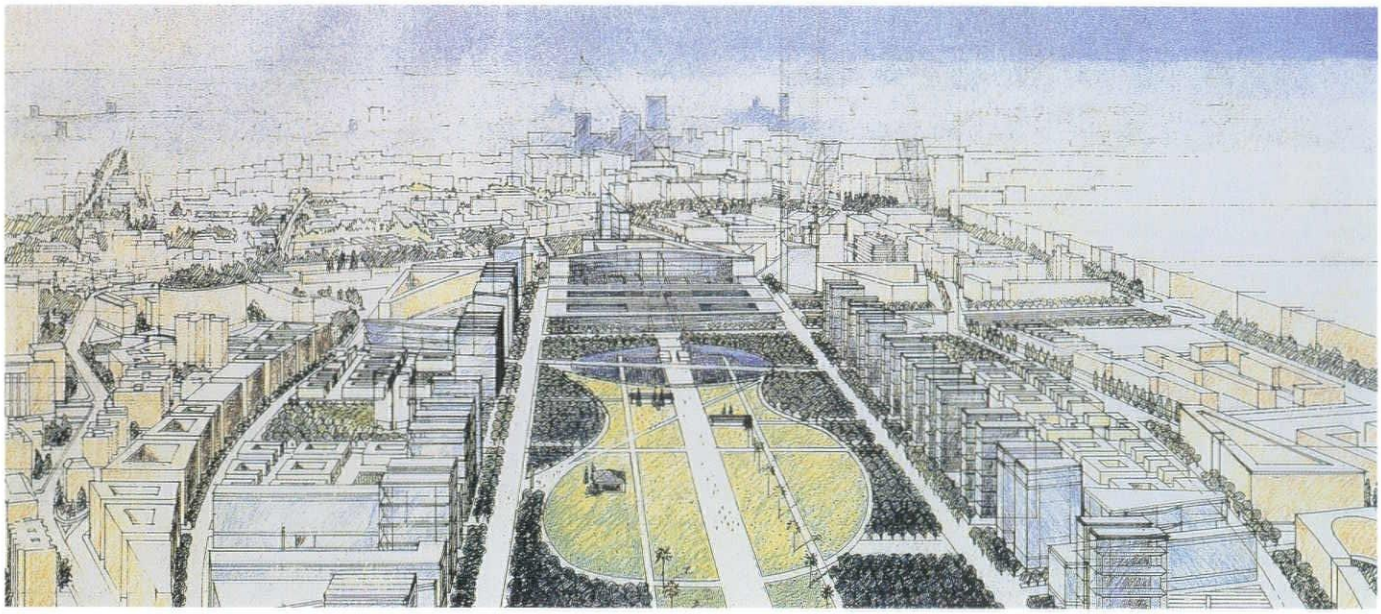
To extend Paseo de la Castellana towards the vicinity of the northern interchange (Nudo Super-Norte), thus creating an access façade to the city and a new northern centre, a communication axis and rotula between the new districts and the city centre and between the districts themselves.

To transform and modernise Chamartín Station, merge it better with its urban surroundings, and foster its potential as a communication interchange between different forms of transport: urban, metropolitan and long-distance.

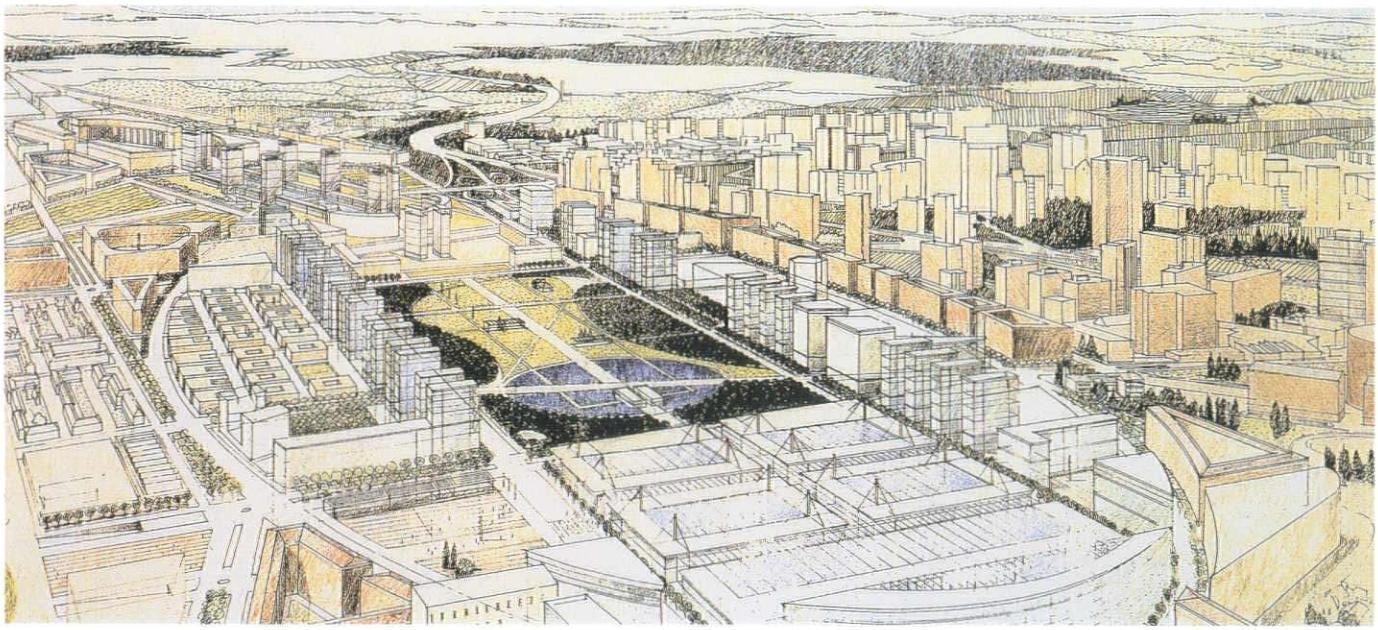
To create a large-scale urban park and numerous green zones.

The project sets out both to recuperate old areas and create new ones, developing them in a balanced way to accommodate facilities, infrastructures and open spaces with the aim of creating city. The mixture of activities will favour controlled development and better quality of life in Madrid's peripheral zones.

Programme: The urban redevelopment of a surface area of 1,300,000 m².
Client: Argentaria



7



8

3
Fuencarral section

4
Chamartin section

5
Castellana facade

6
Central promenade facade

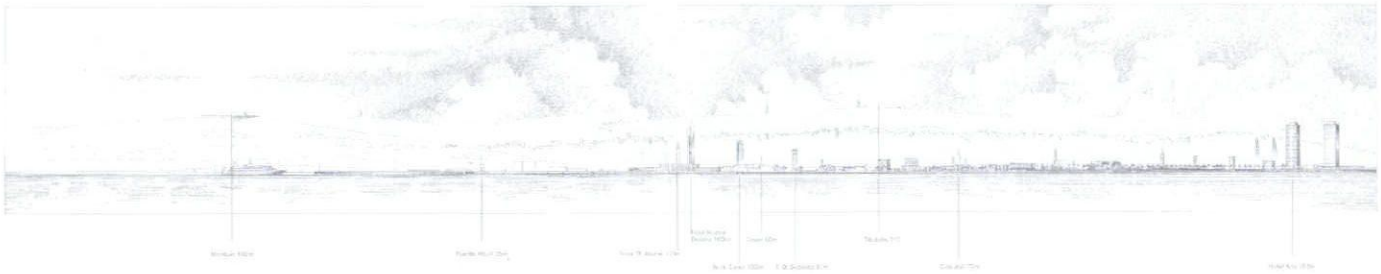
7
New park perspective

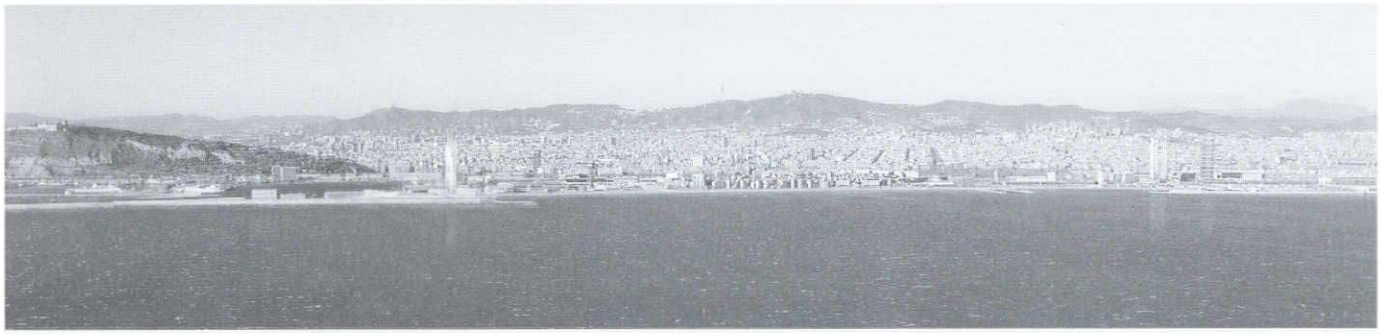
8
Chamartin area perspective

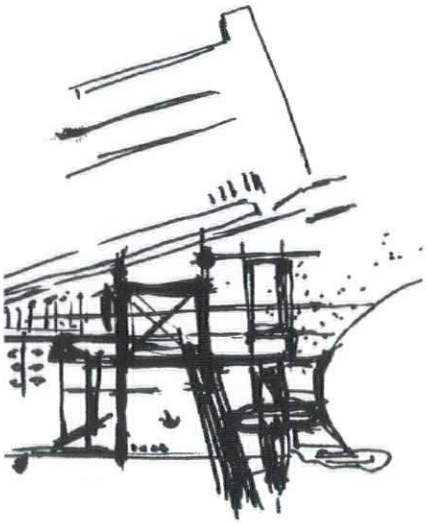
The New Port Mouth of Barcelona (Nova Bocana)

Barcelona, Spain 1999

バルセロナ新港「ノヴァ・ボカナ（新しい口）」

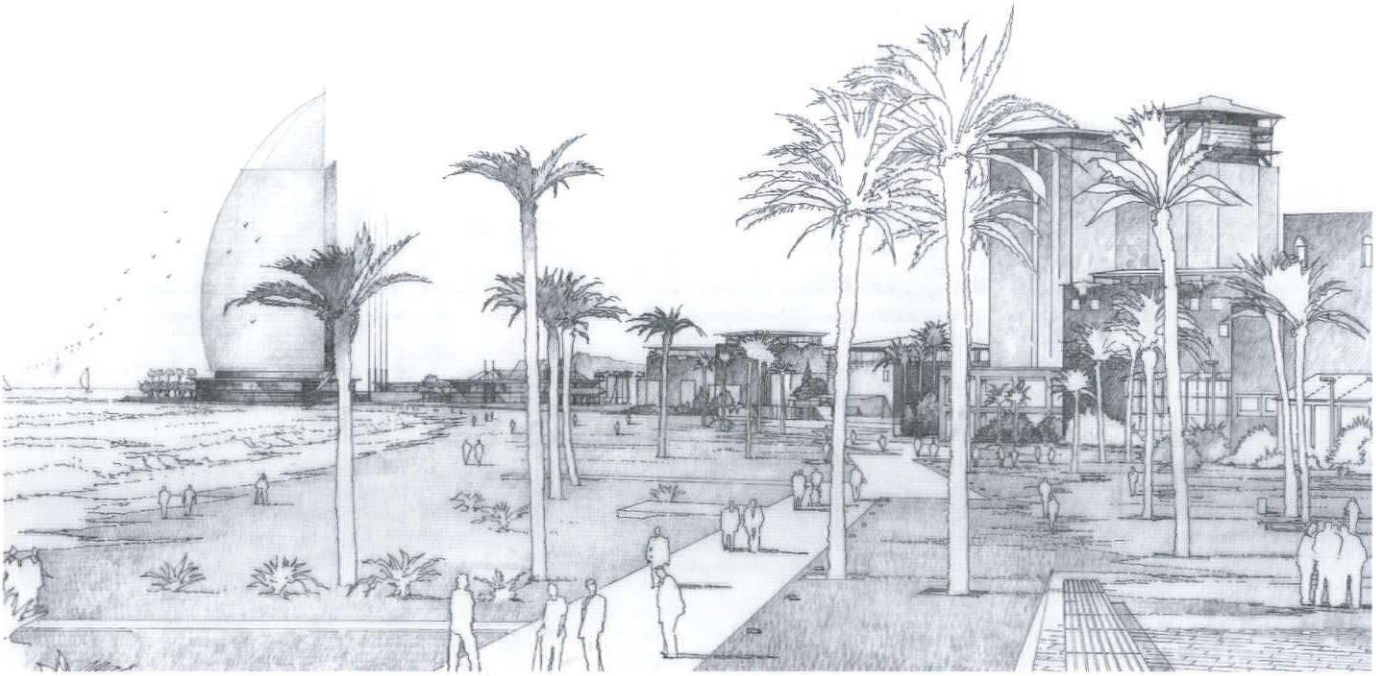






1
Harbour view

2
View from the seaway



2

21世紀を迎えるにあたりバルセロナ港に大幅な改造を加え、海に向かって大きく開かれていることを象徴する施設の計画である。「新しい口」を意味するノヴァ・ボカナの建設によりバルセロナは、カタロニアの首都、西地中海の首都、南地中海の交通の要衝という3つの役割を完璧にこなせるようになる。商業の面でも観光の面でも、新しい港口を通じて地中海のほかの地域と一層に交流が盛んになるであろう。

港の改造計画はまったく性格の異なるふたつの部分からなる。商業と運輸のための港湾部と、市民のレクリエーションのための内湾部である。

ノヴァ・ボカナの建設に際しては、15haの海が埋め立てられ、漁船、レジャーボート、クルーザーのための新しい港口が設けられる。

また市民用の港は、レクリエーション施設や商業施設、ビル、大きな親水性広場に囲まれた内湾に生まれ変わる。

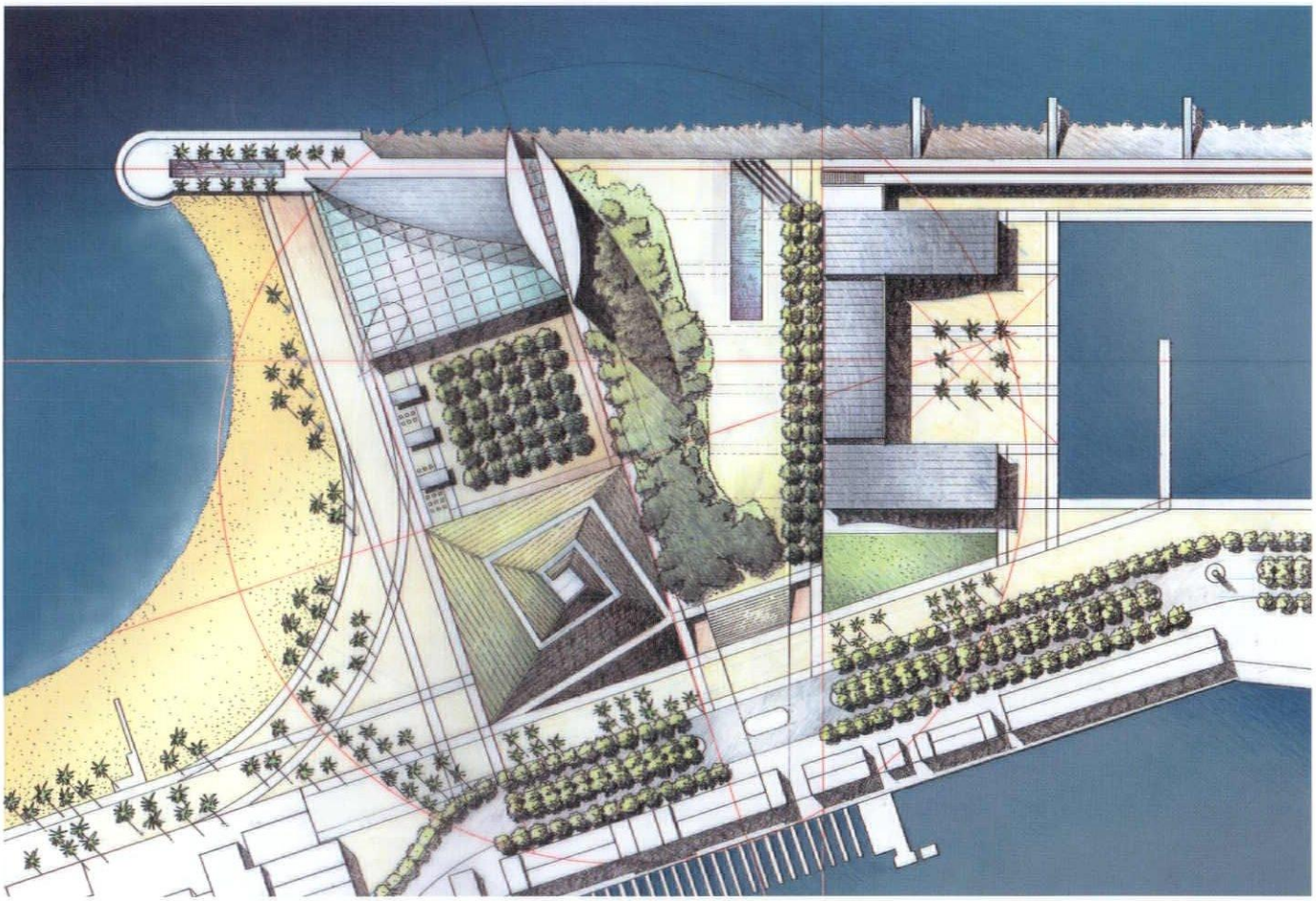
この地区の再開発は90年代後半から始まり、水平線とバルセロナ市街が一望できる海沿いの散策路の完成をもってその頂点を極める。

新しい港は海へ向かって突き出した船の舳先としてイメージされている。既存の施設群を補い、以下に示す3つの要素を設ける。

・漁港を新しい位置に移し、オープンスペースの周囲に、屋根の掛かった、漁師のための場所。
・ランドマークとして、風にひらめく帆をイメージして建てられるシーサイドホテル。
・多目的空間と、インタラクティブなレクリエーション空間へのエントランスとからなるマルチメディア・センター。

海水浴場、漁港、バルセロナ市街、地中海をそれぞれ臨むパブリック・スペースの連続が、すなわちこの施設なのである。逆にこうした空間を分節するのが光であり、バルセロナが臨海都市として果たすべき役割をテクノロジーやシンボルで表現した建築なのだ。

3



4

On the threshold of the XXI century, the port of Barcelona is becoming transformed into a major facility that symbolises the definitive opening of the city to the sea. With the construction of the Nueva Bocana (New Mouth), Barcelona will fulfil her threefold vocation as capital of Catalonia, capital of the Western Mediterranean, and intermodal city of the south Mediterranean. Through the port, Barcelona will acquire greater commercial and tourist exchange potential with the Mediterranean.

The port strategy consists of establishing two clearly differentiated units: the commercial and logistic port, and an inner harbour for citizens' recreation.

With the construction of the Nueva Bocana, 15 hectares will be reclaimed from the sea, and new channels will be opened for fishing boats, recreational vessels, and several types of cruisers.

The civic port will be transformed into an inner lagoon surrounded by recreational and commercial facilities and buildings, an empty space in the form of a large water plaza.

This urban transformation, begun in the nineties, will culminate with the construction of an esplanade with views of the horizon and Barcelona, at the point where the Paseo Marítimo and the breakwater meet.

The harbour is conceived as the prow of a ship jutting into the sea, for which three activities complementary to the existing ones are planned:

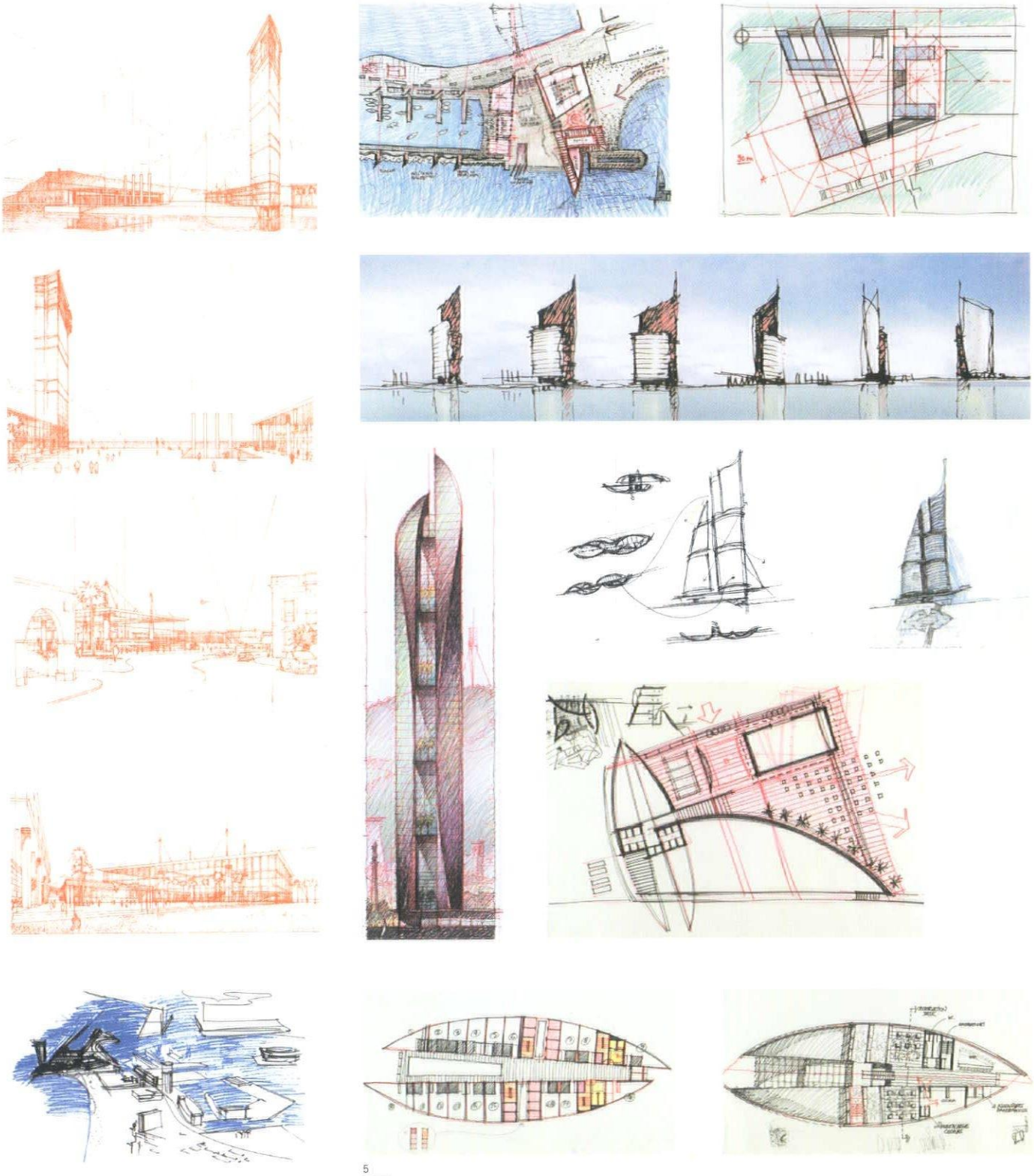
* The fishing port as the new location for fishermen and light covered naves around an open square.
* The seaside hotel, conceived as a signal, a sail unfurled in the wind.
* The multimedia centre, a multi-functional space and entrance rotula for interactive recreational activities.

The whole complex is defined as a series of public spaces looking towards the beach, the fishing port, the city, and the Mediterranean, articulated by light, symbolic technological buildings that express the maritime vocation of the city and the port.

3
Master plan

4
Master plan detail

5
Sketches

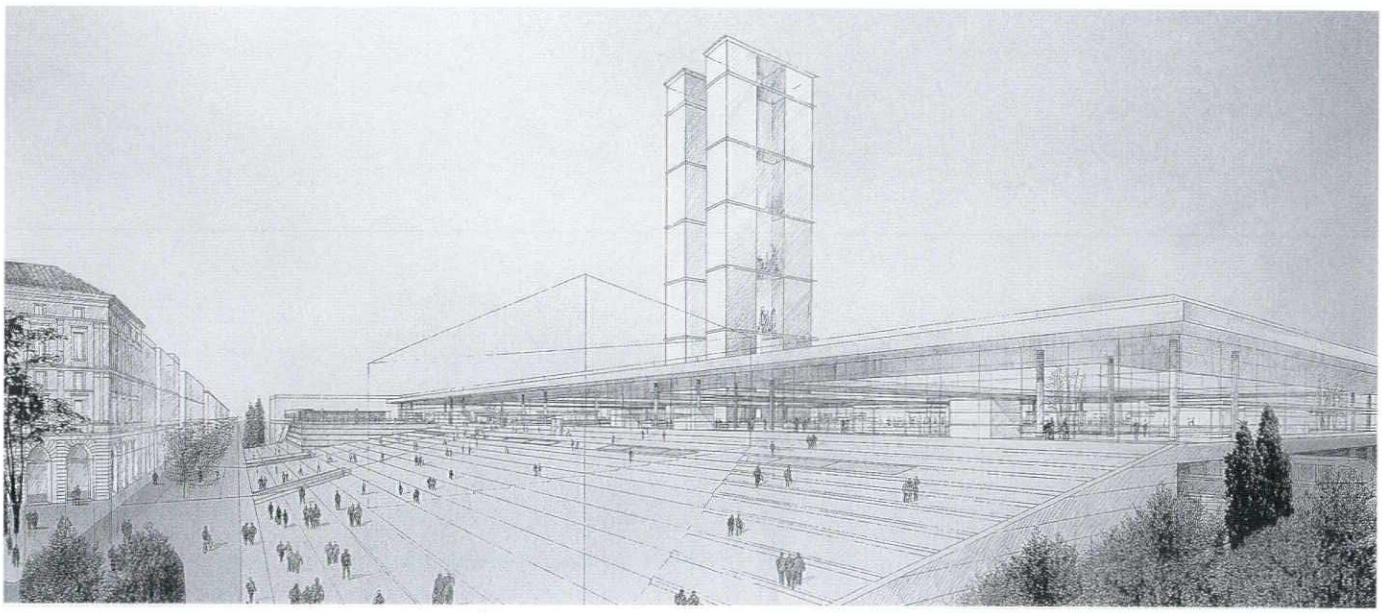


5

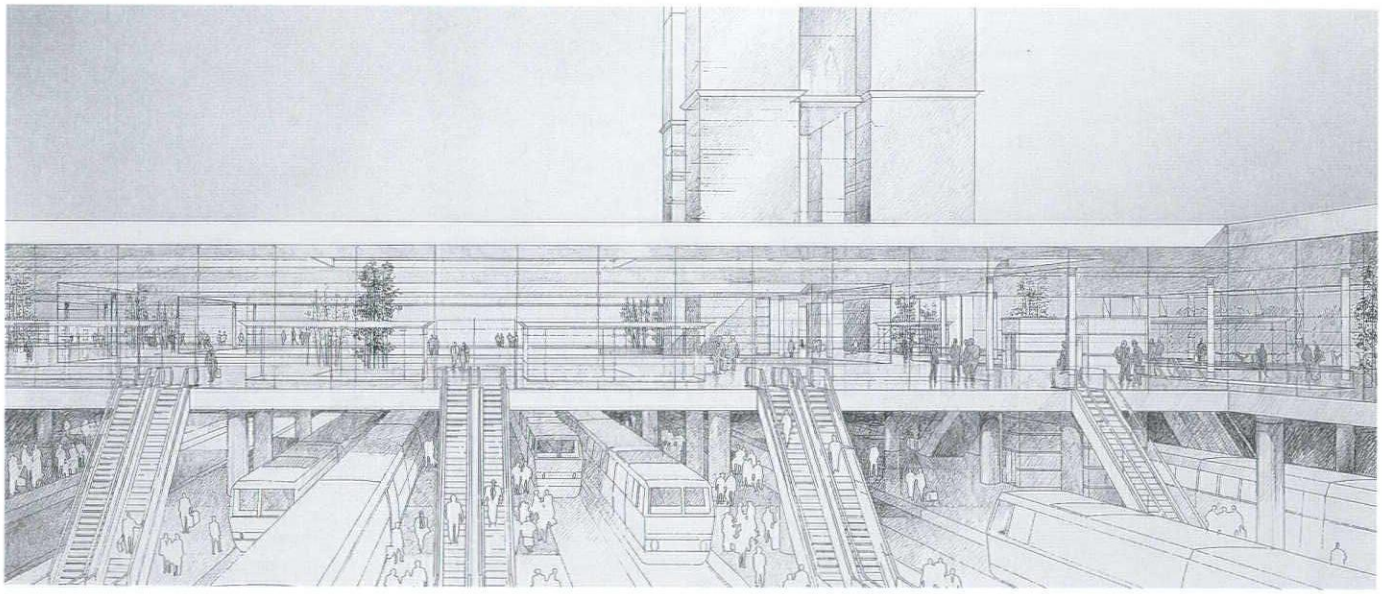
Bologna Central Station

Bologna, Italy 1995–2002

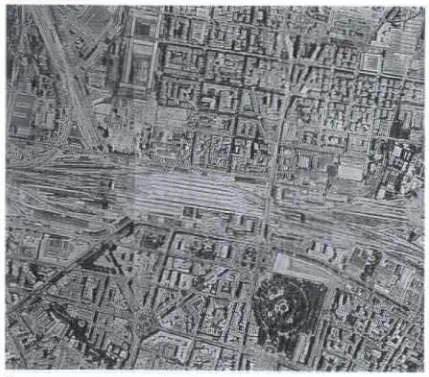
ボローニャ中央駅



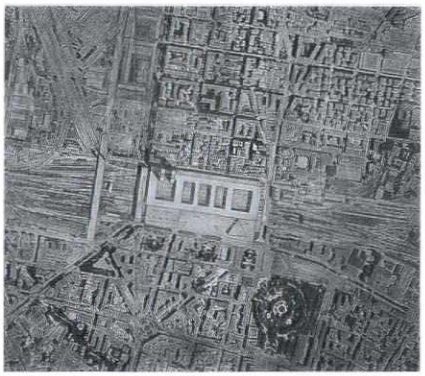
1



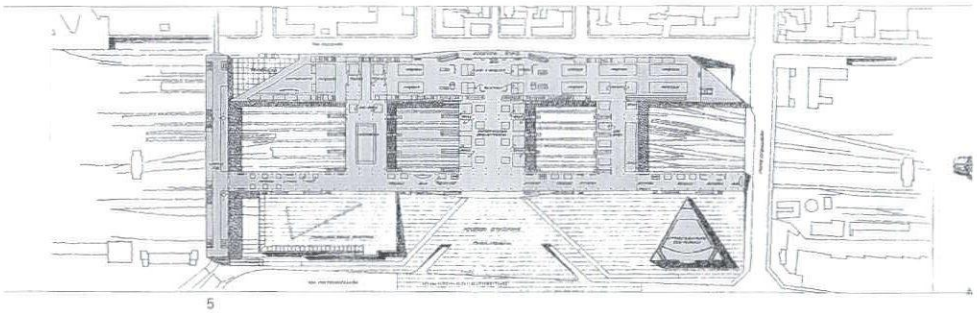
2



3



4



5

1
Plaza perspective

2
Perspective

3
Aerial view, today

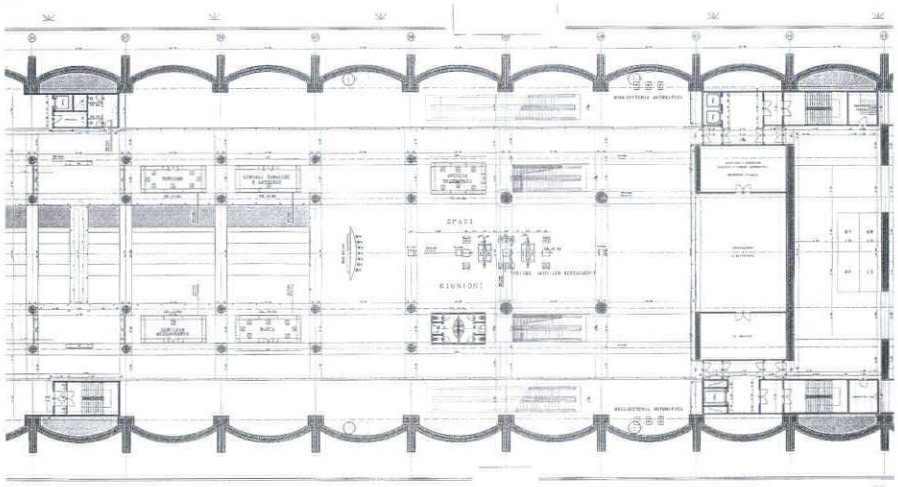
4
Aerial view, proposal

5
Ground floor

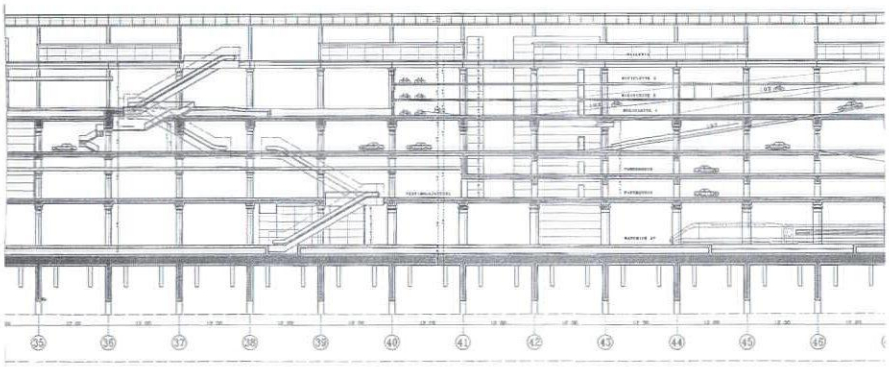
6
High speed station underground floor (retails)

7
High speed station longitudinal section

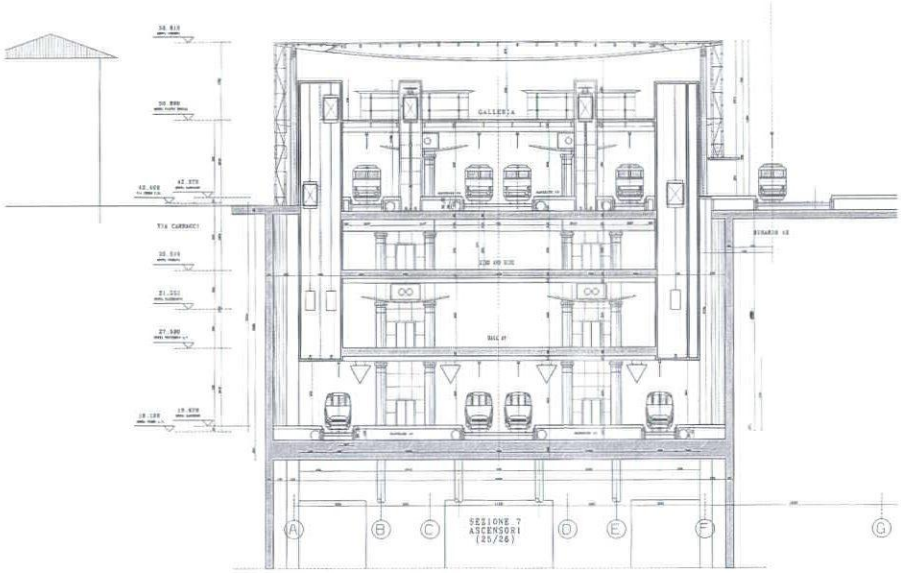
8
High speed station cross section



6



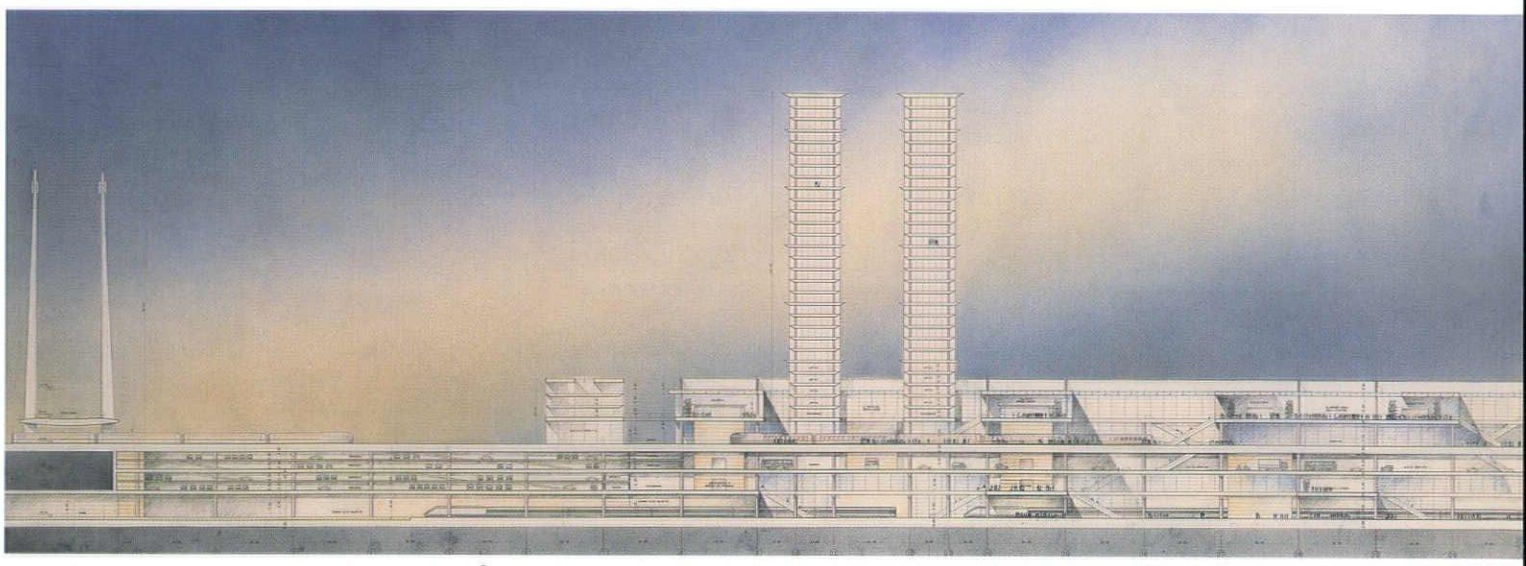
7



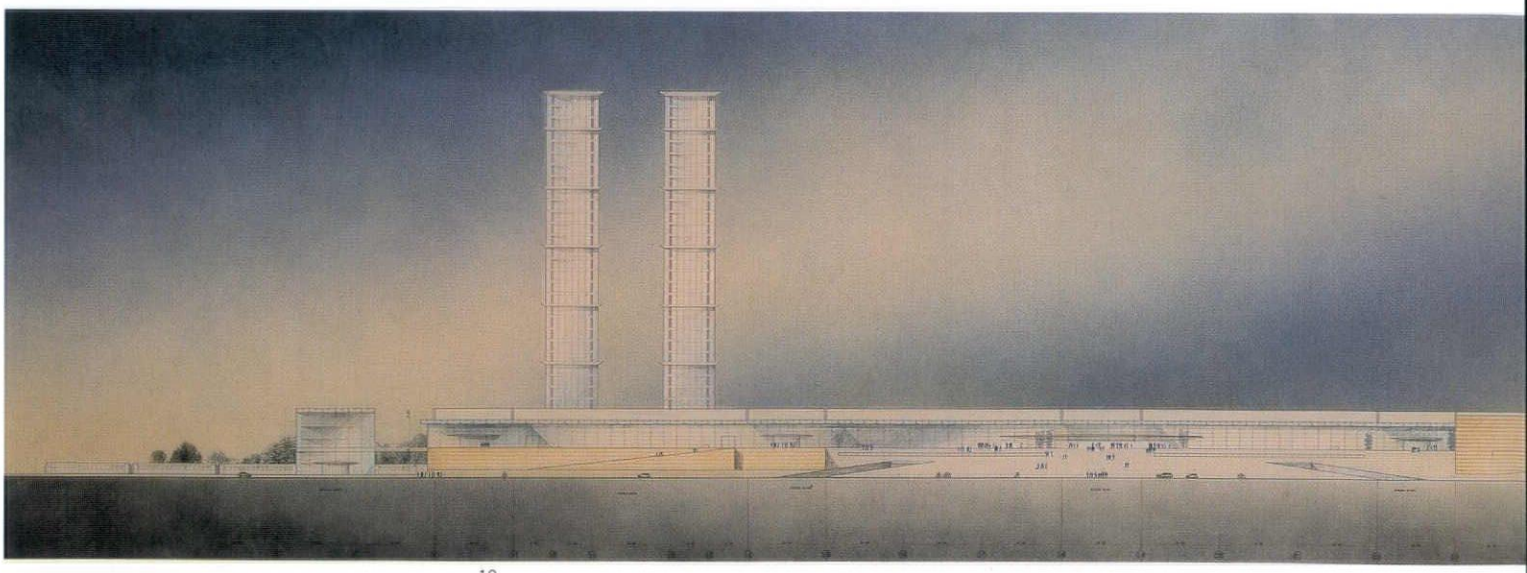
8

9
Longitudinal section

10
South elevation



9



10

都市と郊外が交通や通信の面で適切に接続されているかどうかは、人々の生活にとって大変に重要な問題である。この点を改善すれば、市民にとっては暮らしやすく、また空間的にもまとまりのある都市になる。

20世紀に入り、ヨーロッパの多くの都市では古くからの中心部がつぶされた。大通りや線路を通すために、あるいは単なる「衛生上の理由」によって、歴史的な街並みが破壊されたのである。

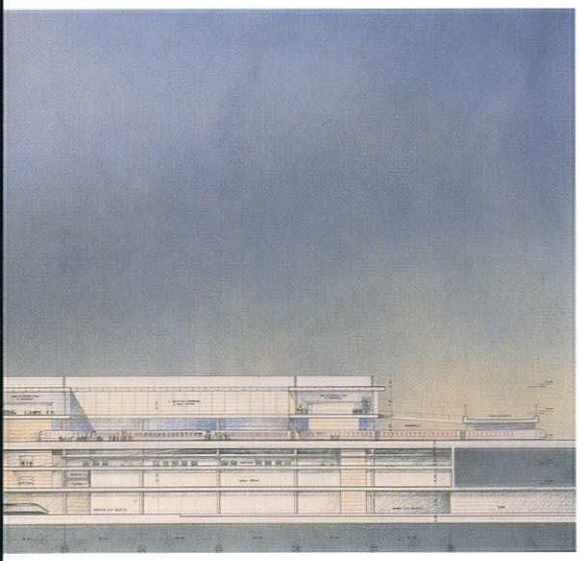
幸いなことにボローニャは1970年代に賢明な選択を行い、群を抜いて古いその街並みを保存する決定を下していた。自動車よりも歩行者を尊重し、むやみな市街地の拡張をくい止める政策をとったのである。

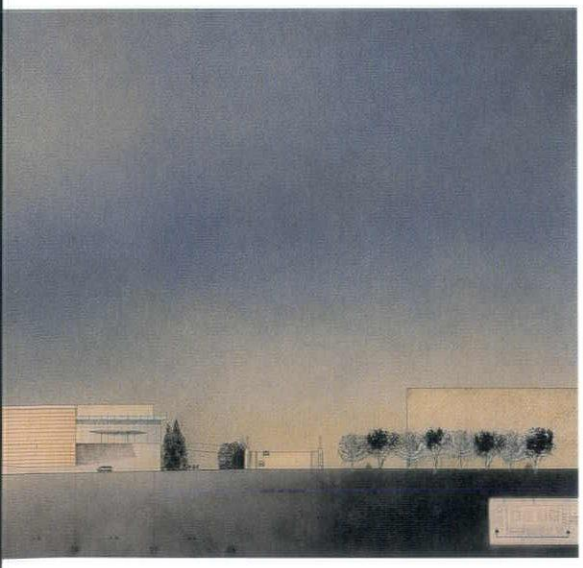
しかし一方で、現代の生活においては移動や交通手段の充実が不可欠である。その上すべてにおいて高速性が求められる。

ボローニャ市議会、イタリア国鉄、市の開発業者グループなどが行った共同事業は、調和のとれた都市開発の好例といえる。必要であれば市街地の拡大も認め、負の遺産ともいえる不適切な開発のなされた地域を「縫い繕う」ことで、ヨーロッパの古都のなかでもとりわけ美しいボローニャの伝統的地区の保存を可能にしたのである。

〈ボローニャ中央駅〉計画はイタリアでもっとも複雑なコミュニケーション・インターチェンジを扱うプロジェクトである。歩行者、自転車、自動車、バスと並んで、近距離、遠距離、高速の各鉄道が一点で出会う。この要求を満たすためには駅の根本的な再開発が必要となり、本質的にスタティックな都市空間とダイナミックな交通機関とを、未曾有の形で統合する計画となった。

タリエール・デ・アルキテクトゥーラは直截かつ単純なコンセプトに基づく力強い建築によって、この矛盾を解決することを目指す。垂直成分（ボローニャの塔）と水平成分との交差は都市の特徴であるが、合理性、調和、バランス、プロポーションのすべてを考慮に入れつつ、現代性の表現として、その交点にこそ唯一の解が存在することを示したい。対話の場、出会いの場、コミュニティ間の交流の場、さまざまな都市的機能や施設がひとつに融合した、ハイテクノロジー地区を作り出す建築である。現代性を極限まで追求することからインスピレーションを得ているが、同時にクラシカルな側面も持っており、その第一の目的はボローニャの美点を世間に広くアピールすることにある。第二の目的は、隣接する土地に優れた建築家が同様のプロジェクトを展開して行けるよう、道を切り開くことである。イタリアの歴史は常にこうした優れた建築とともにあった。歴史と未来、古典とアヴァンギャルド、交通と都市空間、都市とテクノロジー。タリエールがこの計画を通じて答えを導きたかった諸問題である。





The harmonious, intelligent encounter between the city, its hinterland, and its transport and communications system is essential to improving quality of life and the sense of space; that is, to modernising the life of the citizen with new contents.

During this century, most European cities have seen their old centres torn apart by major urban thoroughfares, railway lines, or simply by supposedly "hygienic" operations carried out on their historical tissue.

Fortunately, in the seventies the city of Bologna managed in a cultured and civilised manner to preserve its exceptional historical value by giving precedence to the pedestrian over the car, and by applying an exemplary urban policy, thereby preventing the city's uncontrolled growth.

Today the imperious need exists for a system of mobility and transport, of which High Speed is an essential component, which will respond to the demands of our times.

The collaboration between the Bologna City Hall, the State Railways, groups of private developers in the city, and a number of institutions is a fine example of harmonious urban planning, of city design that permits both its extension and the "darning" of unhealthy, mistreated tissue from the past, while at the same time preserving the traditional areas of one of the most beautiful and cultured historical cities.

The construction of Italy's most complex communication interchange, where pedestrians, bicycles, cars, buses, and local, long-distance, and high-speed trains meet, has made an integral urban project possible which contemplates the hitherto unimaginable union between urban space, of a fundamentally static nature, and transport, which is dynamic by definition.

The Taller de Arquitectura proposes to resolve this paradox with a strong architectural project based on a pure, substantially simple, linear concept: rational, harmonious, balanced, and proportioned architecture whose single value is the urban encounter between the vertical (the high-rise towers of Bologna) and the horizontal, the expression of modernity. An architecture capable of creating an agora; a meeting place; an interchange between communities; a new, modern, technological district in which different urban functions and facilities merge into a single one. An architecture whose source of inspiration is maximum modernity, though containing a classical substratum, the main objective of which is to highlight the magnificent profile and content of the city of Bologna.

The second objective of this strong, simple urban gesture is to open doors to the best architects to allow them to create districts adjacent to the station of the same architectural quality that has characterised Italy throughout the country's history. History and future, memory and avant-garde, transport and urban space, city and technology: these are issues that the Taller sets out to solve with this project.

Client: Ferrovie dello Stato / Commune di Bologna / Bologna 2000 srl Metropolis S.P.A.
Surface area: 70,000 m².

Project 2000

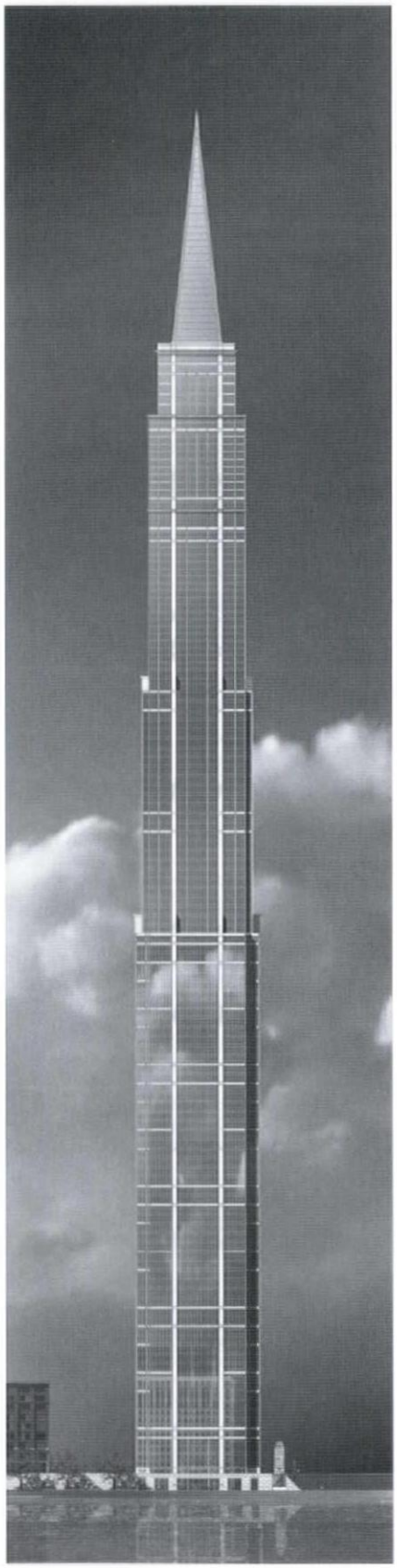
Chicago, U.S.A 1999

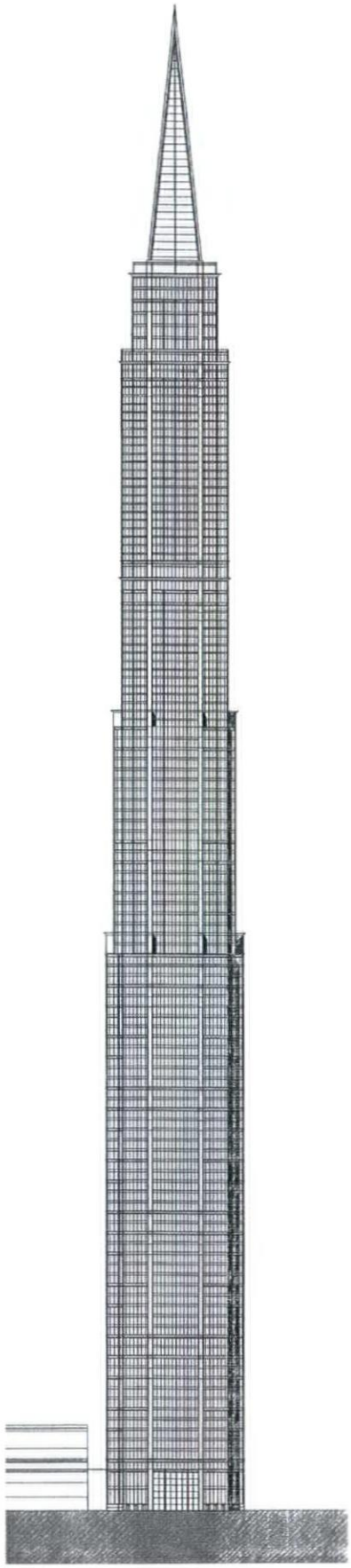
プロジェクト2000

1
Scheme 1

2
Scheme 2

3
Site plan





1

プロジェクト2000はシカゴに世界一の超高層ビルを建てる計画である。建築計画、構造計画、システム、施工、資本、あらゆる面で複雑を極める野心的なビルだ。

118階建てのタワーは大規模なショッピングゾーン、6つのオフィスゾーン、ホテル、15層のコンドミニアム、3層のスカイデッキからなる。屋上にはデジタル放送用のアンテナを設置する契約を複数のテレビ局と結んでいる。本計画の総費用は5億ドルである。

タワーの高さは500mあり、目下の「世界一」であるクアラルンプールの〈ペトロナス・タワー〉452m、「全米一」である〈シアーズ・タワー〉442mをしのぐ。

当初はシカゴ川沿いの、街の中心部からやや離れた敷地に計画されていたが、その後都心の一等地であるデイリー・プラザ近くの一街区を占めるよう変更された。新しい敷地は複雑なプログラムをすべて組み込むのに充分な広さがあり、アクセスの面でも改善された。

280,000m²という延床面積は、シカゴのスカイラインにそびえる3つの巨大なビル、〈シアーズ・タワー〉、〈アモコ・ビル〉、〈ジョン・ハンコック・センター〉よりも小さい。

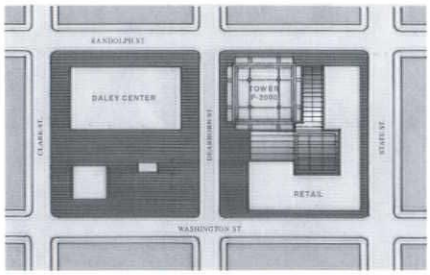
上部の2本のアンテナも加えると高さ610mになるが、アンテナの分は公称値に含めていない。高画質デジタルテレビの電波送信施設が火急に求められていたが、このアンテナによって解決される。

コンクリート、アルミニウム、ガラスからなる細身のタワーの下半分には2,000,000m²のオフィスが収まり、その下には19,000m²の店舗と1,000台分の駐車場が設けられる。駐車場はホテルとビルのテナント用である。

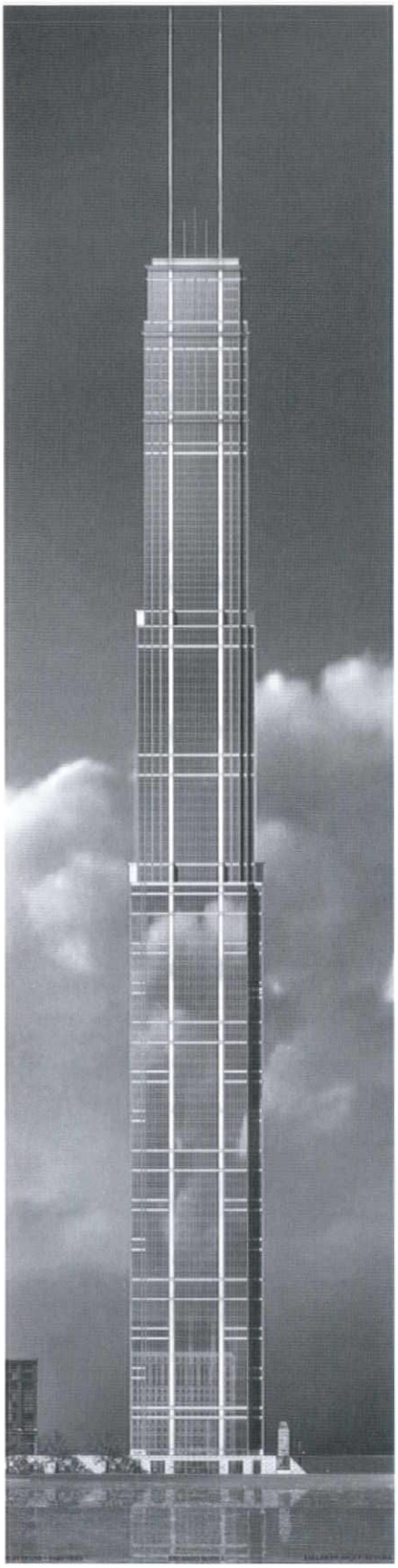
オフィスの上には250室のホテルが入り、100階のスカイロビーからアクセスする。スカイロビーは100戸ほどのコンドミニアムへのアクセスも提供する。最上部の数層は放送関係の設備が占めている。

コンドミニアムの100階という位置は、高所の住居としての記録を塗り替えることになる。そのため、揺れの制御が構造上の大きな課題となったが、高強度コンクリート、ビル外側のスーパーコラムと数層にわたる巨大なアウトリガーの組み合わせによって、要求される安定性を実現した。通常は振り子などを用いた制振装置が使われるが、スーパーコラムとアウトリガーとの組み合わせが優れた性能を発揮したので、ここでは採用していない。

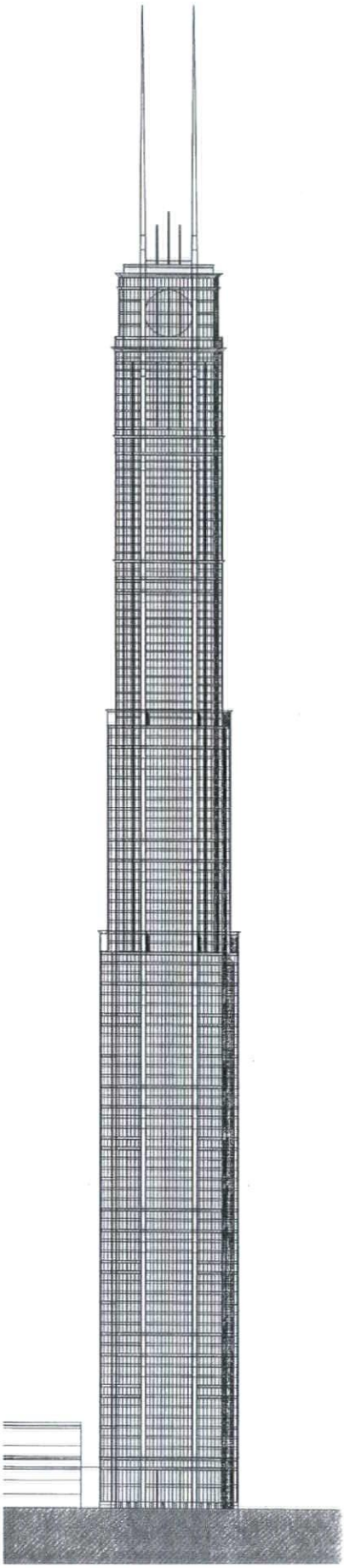
施工期間は36ヵ月の予定だが、先細りになる形態にうまく対応せねばならず、また最上部の5層には高強度コンクリートを打つので、スケジュールの余裕はあまりない。



3



2



Project 2000, a new world's tallest building for Chicago, it is a very ambitious building proposal, extremely complicated in terms of its architecture, structure and systems, and obviously in its development and financing.

The $500 million project, is a mixed-use tower of 118- story, including a large retail area, six zones of offices, a hotel, 15 condominium floors, sky deck three transmission floors. At roof level, a group of television stations want to lease antenna space to broadcast digital signals.

The building's 1,642-foot ascension would make it higher than the current "world's tallest" title-holder, the 1,483-foot Petronas Towers in Kuala Lumpur, Malaysia. The Sears Tower, the current U.S. tallest building, is 1,450 feet.

Original off the Loop site by the Chicago River was change to a prominent whole city block in the heart of the Loop near Daley Plaza. The new site is large enough to accommodate a multi-use program of the size being considered as well as to provide proper transport infrastructure.

With a total of about 2.8 million square feet, the building will actually be smaller in volume than the super big towers her supertall three giants of the skyline, the Sears Tower, the Amoco Building and the John Hancock Center.

The structure is 2,000 feet high with the addition of its two 358-foot antennas, but they aren't figured in the official calculations for the world's tallest building. The antennas could solve a pressing need for facilities for broadcasting high-definition television signals.

The lower half of the slender spire of concrete, aluminum and glass will contain some 2,1200,000 square feet of office space on top of 200,000 square feet of retail space and an 1000-stall parking garage for the use of hotel and building tenants.

Above that will be a 250-room hotel with access from sky lobby at level 100. This sky lobby will provide access to about 100 condominiums, with the topmost floors used for support facilities for the broadcasting towers.

The condos will rise higher than any residential units ever built.

The need to control swing acceleration at these floors has become the more restrictive structural condition.

The building has been designed to be especially stiff because there would be residents on the upper floors. High resistance concrete and a combination of outboard super-columns and several levels of huge outriggers will provide the adequate structure rigidity. Complex damper systems involving pendulums or other devices usually employed to slow down the sway were disregarded due to the excellent performance of the super-columns and outrigger system.

Construction will take up to 36 months, being critical to the schedule the sliding forms handling and high strength concrete pouring of the top fifth of the building.

(Rogelio Jiménez / Taller de Arquitectura)

Program: offices, deluxe condominiums, telecommunications antennas.
Client: Prime Group Realty Trust
Total floor area: 322,400 m²

Shiseido New Ginza Building

Tokyo, Japan 2001

資生堂新銀座ビル

〈旧資生堂パーラー本社店ビル〉(東京都中央区銀座8丁目) の跡地に建てられる、レストラン、ギャラリーを中核とした多機能ビルである。1999年4月に着工し、2001年初頭の完成を予定している。

資生堂は明治5年 (1872年)、日本初の西洋風調剤薬局として銀座に創業したが、建設の背景には同社と銀座との深いつながりがある。今までの銀座における資生堂の歩みをベースに、パーラーとギャラリーを核として、資生堂の21世紀に向かっての新しい価値と美意識をシンボリックなかたちで表現しながら、銀座の街並みの美的景観にも寄与することを目的としている。

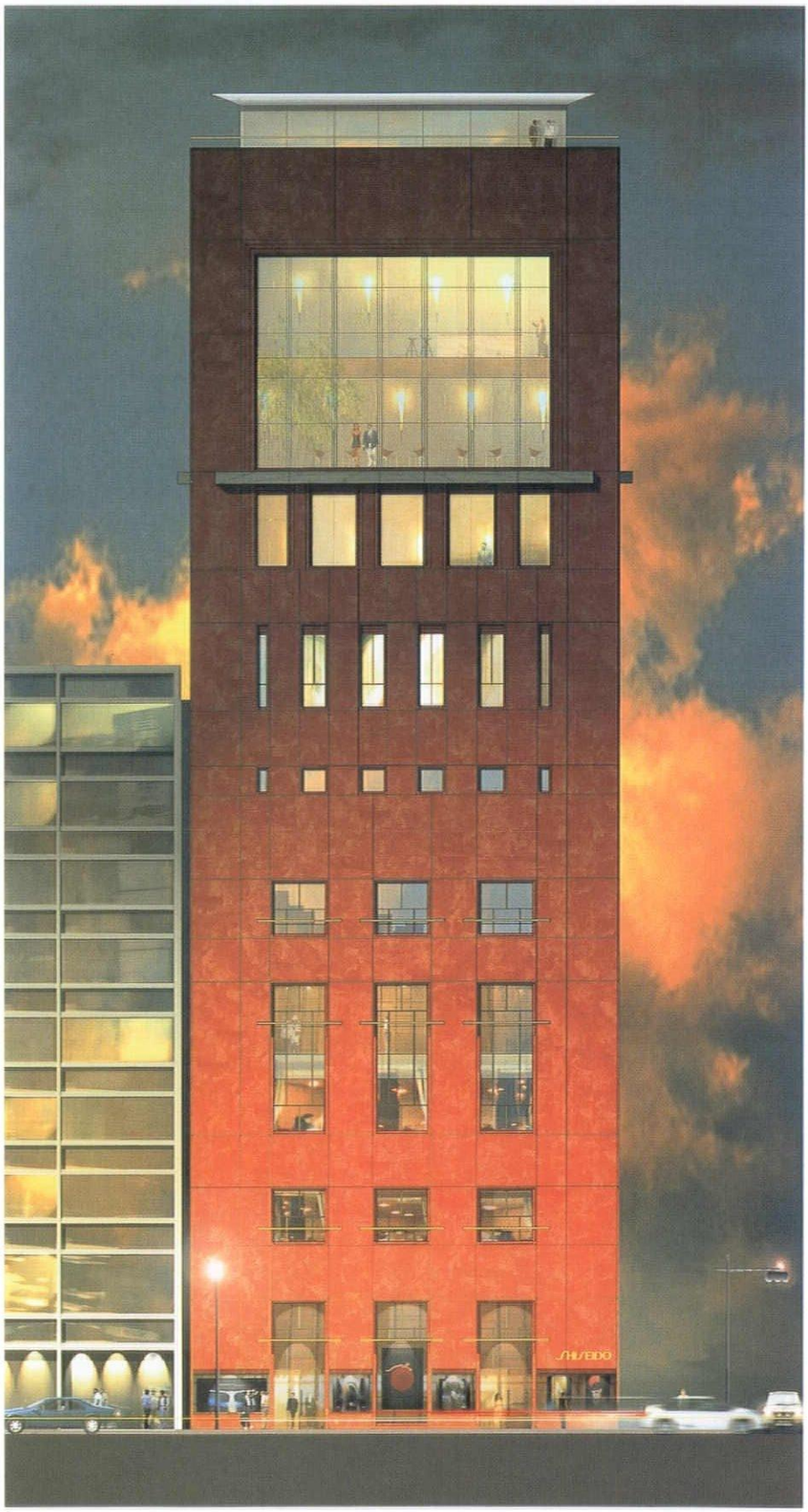
地上11階、地下2階の建物は、ギャラリー・ゾーン、プラザ・ゾーン、資生堂パーラー・ゾーン、サロン・ゾーン、ニューレストラン・ゾーンの5つのゾーンで構成される。各ゾーンには明確なコンセプトを設定し、それぞれが総体として有機的につながるような空間づくりを行っている。また、昭和初期、すなわちモボ・モガの時代の資生堂パーラーのように、吹き抜けを効果的に活用し、開放感がありながらも、モダンでエレガントな雰囲気を醸しだすことを目指した。

外壁は赤みを帯びたスタッコで彩る。9階から11階にかけては、銀座では唯一の四方への眺望を有するフロアとなることから、いわば「銀座の灯台」のようなイメージや効果を演出する。

建設には最新のテクノロジーを駆使する一方で、銀座と資生堂が育んだ歴史の香りを漂わせることによって、「これからの銀座、21世紀の資生堂」を予感させる表現装置として、21世紀の銀座の街づくりをリードしていくことを目指している。

なお、〈資生堂新銀座ビル (仮称)〉は東京都と中央区が建物の容積率を緩和して建て替えを促進する「機能更新型高度利用地区」を全国で初めて導入したことにより、〈旧資生堂パーラー本店ビル〉を越える高さの建築物となる。「機能更新型高度利用地区」は、国が商業地区の活性化などを目的に97年に打ち出した制度で、この〈資生堂新銀座ビル〉が全国で第1号の適用となる予定である。

(資料提供＝資生堂)

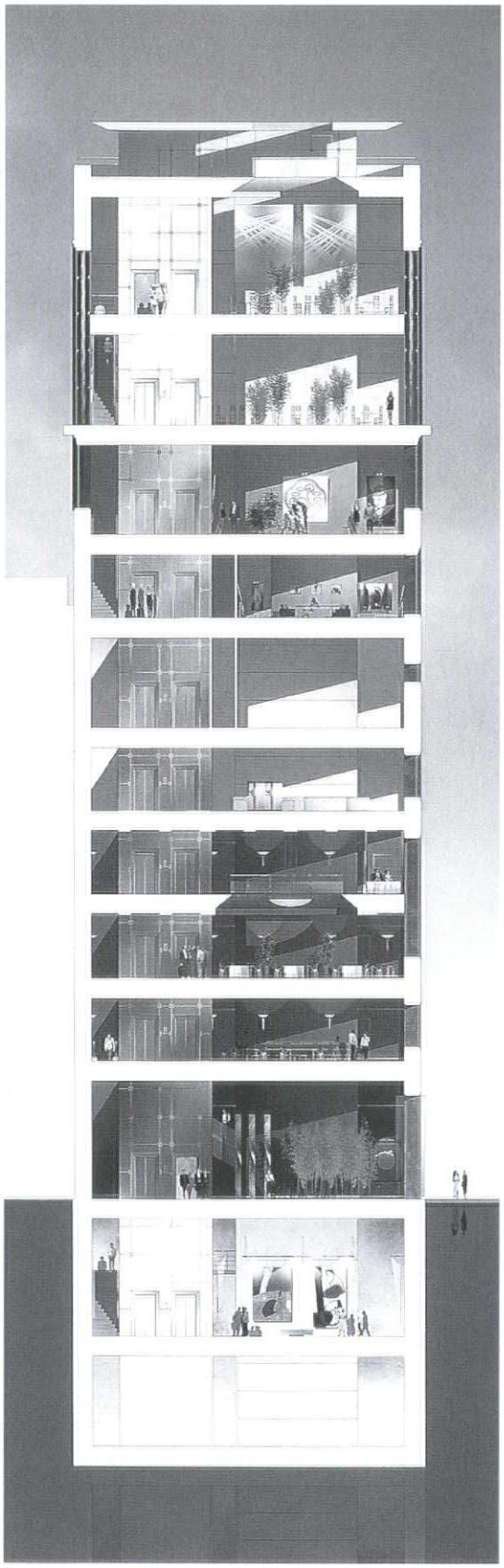


1

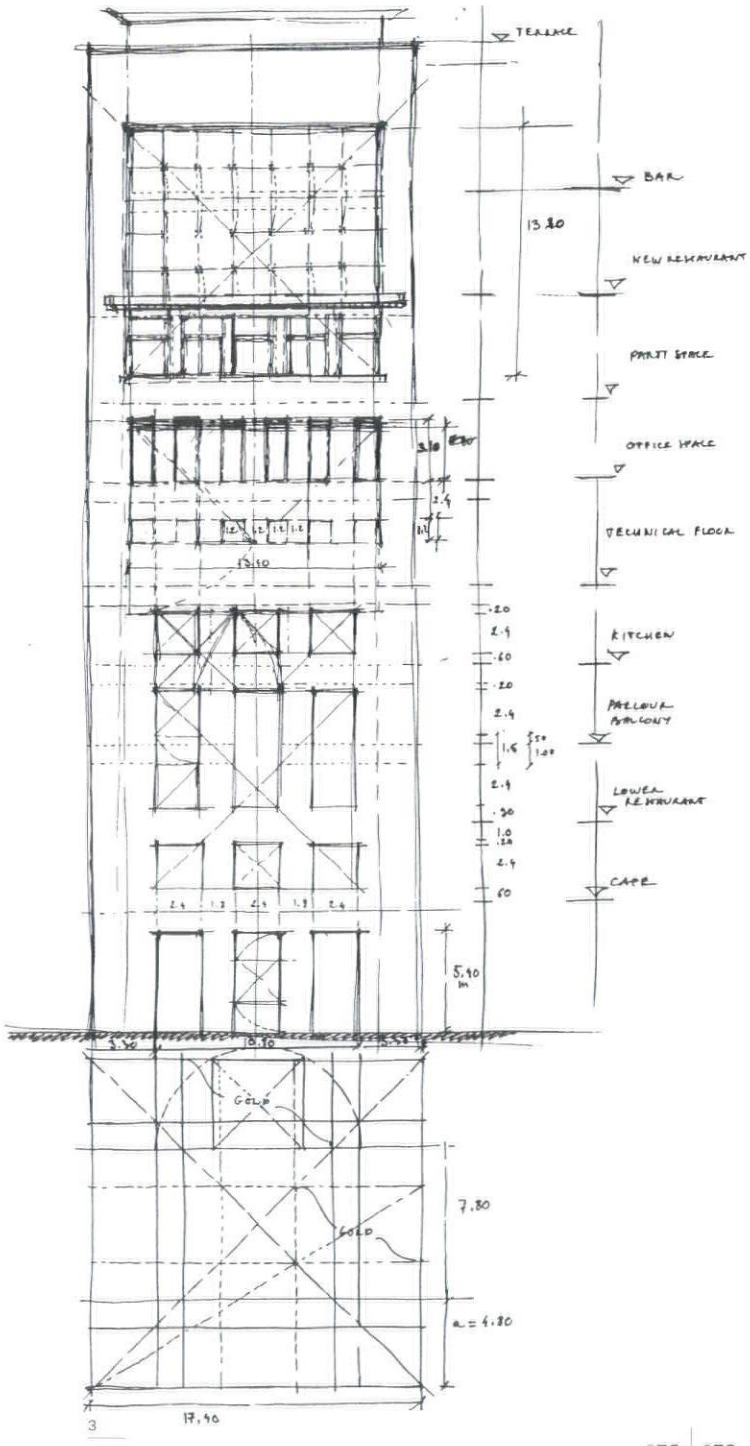
1
Main facade at night

2
Main section

3
Main facade sketch



2



3

4

1st floor plan S=1: 300

5

2nd floor plan S=1: 300

6

5th floor plan S=1: 300

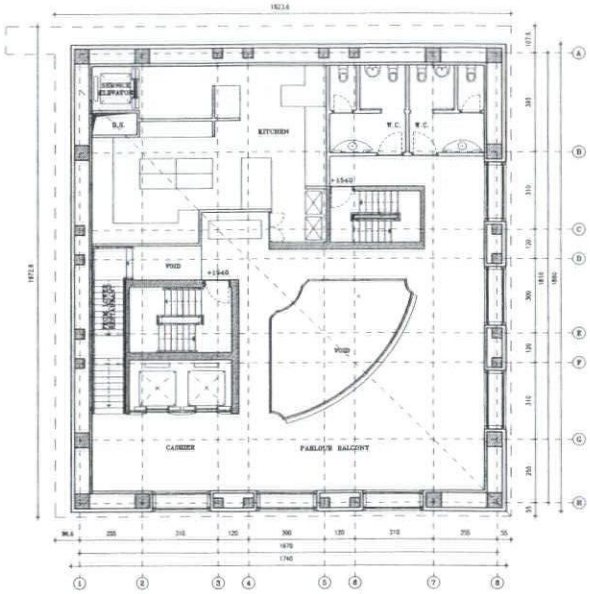
7

11th floor plan S=1: 300

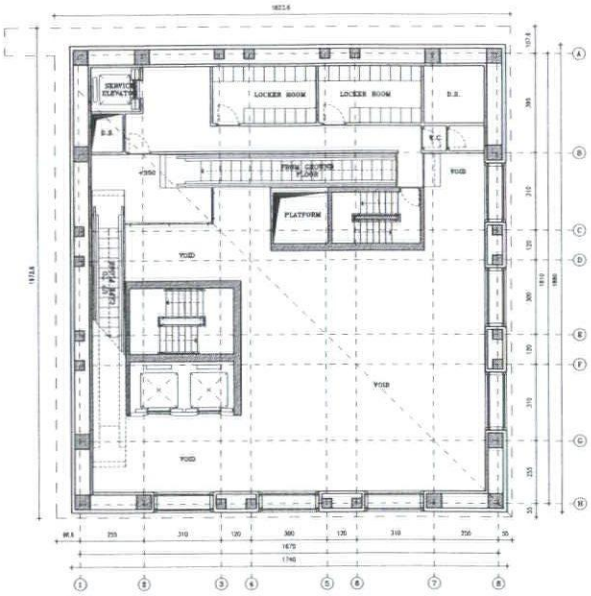
8

General perspective

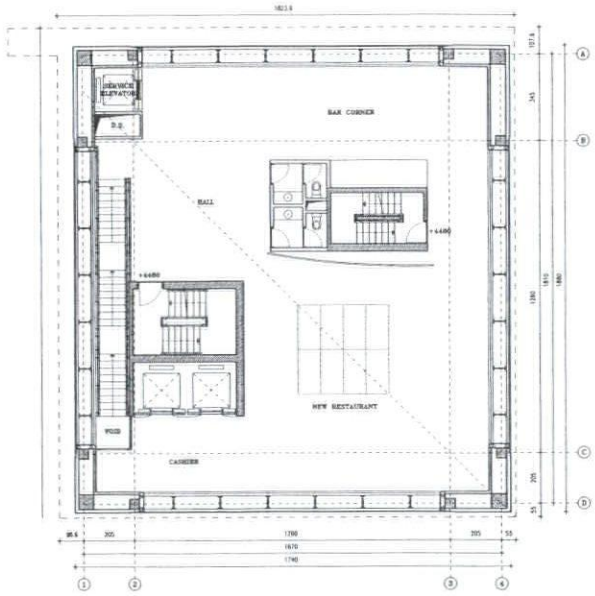
4



6



5



7

Shiseido will construct a multi-functional building, provisionally named the "Shiseido New Ginza Building," on the site of the former Shiseido Parlour Building. The new building will feature restaurants and galleries. Construction is scheduled to start in April 1999 and be completed in early 2001.

The close relationship between Shiseido and Tokyo's Ginza district goes back a long way. In 1872, Shiseido was founded in Ginza as Japan's first Western-style pharmacy.

The building incorporates the parlour and gallery, which are the witnesses of Shiseido's history in Ginza. It expresses the company's aesthetic values at the onset of a new century and intends to contribute to Ginza's visual amenity.

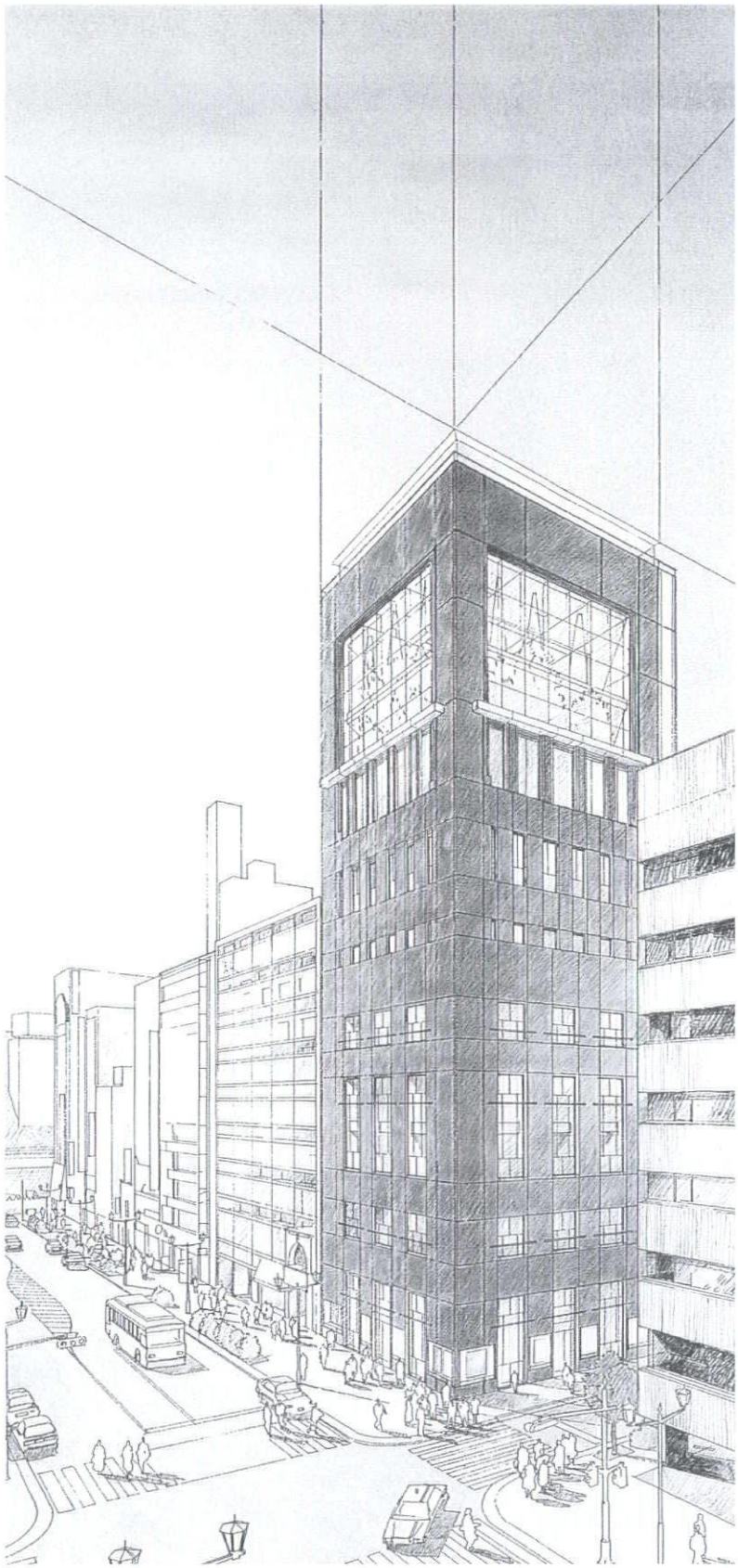
The Shiseido New Ginza Building has eleven stories above ground and two stories below. It consists of five zones - the Gallery Zone, Plaza Zone, Shiseido Parlour Zone, Beauty Salon Zone and a new Restaurants Zone. Each zone is based on a distinctive concept, but they are planned in such a way that they create a coherent "whole." As in the old Shiseido Parlour Building in the early 1930s, a stairwell will be used to create an open, modern and elegant atmosphere.

The exterior wall is clad with a Western-style reddish stucco. Floors nine to eleven provides a 360-degree view of Ginza and the surrounding area. The floors will be like a "lighthouse in Ginza".

The new building will be higher than the old Shiseido Parlour Building. This is possible due to a relaxation in the urban regulations. The Japanese government modified the regulations in 1997, in order to promote the redevelopment of commercial areas, and the Shiseido New Ginza Building is the first anywhere to take advantage of this reform.

While the building conveys the essence of the histories of Ginza and of Shiseido, it also embodies the latest construction technologies. Through its design and use of technology the building will be an architectural trendsetter in Ginza. It will exemplify "the future of Shiseido and Ginza in the 21st Century."
(Original text provided by the courtesy of Shiseido)

Land area: 360.88m²
Buiding area: 5,000 m²
Height: 56m (The Shiseido Parlour Building was 31m)
Structure: Steel-frame
Stories: 11 stories above ground, 2 stories below
Use: Commercial facilities (restaurant, gallery, etc.)
Construction begins: April 1999
Scheduled completion: Early 2001
Architect: Ricardo Bofill
Builder: Shimizu Corporation
Total cost: Approximately 5 billion yen



8

「THE CLASH OF CIVILIZATIONS／文明の衝突」のすすめ
ボフィール氏との共同設計の体験から

志村直昱

1993年の夏、『文明の衝突』と題する論文がハーバード大学教授サミュエル・P.ハンチントン氏から発表された[*1]。前年のソヴィエト連邦の崩壊後、文明圏の相異が国際紛争の火種となり、世界政治における文化・文明的なアプローチが有用となることを主張する論文である。この中で世界は大きく8つの文明に区分され、日本の文明は複数の国に属さないユニークな存在として紹介されている。

しかし日本も、情報産業の発達によって文化・文明の衝突が始まっているのだ。われわれ建築界にも、文化・文明の衝突はすでに始まっているのであり、1992年にリカルド・ボフィール氏と共同設計した〈ユナイテッドアローズ原宿本店〉を私に思い起こさせるのである。

リカルド・ボフィール氏との出会い

日本ファッション業界の旗手ワールドが、国内初のセレクトショップ〈ユナイテッドアローズ原宿本店〉の建築家としてボフィール氏を起用したのは業界で有名である。「ヨーロッパの石造建築の伝統的要素を基本にしつつ、現代性を加味した持ち味が、企画のイメージである進化する老舗と一致していた」と企画担当者はいう。ファッションだけでなく、雑貨、生活用品、カフェなどの衣食住すべてに新風を送り込む目的での起用である。

私とボフィール氏との出会いは、スタディが開始されてから18ヵ月を経た1990年6月の初来日のときであった。クラシックモダンの旗手が日本で初めて手掛ける作品だったため、日本の建築状況を把握し敷地の状況を調査するために、私は東京都内を案内している。氏の温かく情熱的な顔と、冷静に文明を捉えて鋭く分析する眼差しを持った顔との二重性を感じ、さらに強く印象づけられたのはそのカリスマ性であった。

ボフィール氏によれば、東京は観念的には理解しやすい街だが、視覚的には非常に秩序の読み取りにくい街だという。また、「日本人はグレーのコンクリートとステンレスの冷たいコントラストが好きなのか」とも質問された。レディミックスのグレーのコンクリートが一般的である日本では、ボフィール氏の素材のモチーフである、アーキテクチュラルコンクリート（肌色のコンクリート）は存在しない。確かに素材の持つ物質感はデザインを決める重要な要素である。しかし日本人は利便性と経済性から、安易に生コンクリートを使用しているように思える。さらに「日本文化の特徴である建築の木肌の温かさはどこに行ったのか」との質問もあった。ボフィール氏はこの後に、京都、奈良に足を運び、桂離宮などに満足して帰国したと伺っている。

日本は本来、時間をかけてさまざまな文明を吸収し消化してきたが、日常の業務に忙殺される今日の私たちにとっては、「その材料でしか創り得ないような構造形態」である建築空間の原点に立ち戻る必要性を指摘されたような気がした[*2]。

文明の衝突による設計チーム

ボフィール氏の事務所はバルセロナやパリなどを中心に世界各地に点在し、スタッフも多国籍群である。〈ユナイテッドアローズ原宿本店〉の設計スタッフは本拠地のバルセロナ事務所を中心に構成された。ボフィール氏はスペイン出身、マネージャーのベルトランド・ラファリエール氏はフランス人、パートナーのパトリック・ジェナー氏はベルギー人、デザイナーはイギリス人のサイモン・パレット氏と日本人の小針修一氏といったスタッフである。フランスやスペインで作品を見学したが、すべてが一貫したデザインの方針で統一されており、とても多国籍群とは思えない。

一方、日本での共同設計を行なう私たちのチームは、ボフィール氏のデザインや思想を理解し活かしながら、商業施設としての適法性や機能性を確保するために、商業建築を専業とするチームで構成された。私は赤坂の〈PAN JAPAN BUILDING〉（1989年）で、ガラスの透明性と金メッキのマリオンで構成されたローマ様式のポストモダンな建物を経験しており、ヨーロッパでの調査や検査などの経験も買われたこともあって、全体のまとめ役を務めることになった。

西欧の建築と日本の風土の調和

ここでのボフィール氏のデザインと材質の主題は、つぎのようなクラシックとモダンの二面性の対立からなる。

1. 石造建築のプロポーション
2. アーキテクチュラルコンクリート
3. D.P.G工法の強化ガラススクリーン
4. 独特なアイアンワーク
5. ウッディな家具による店舗構成

建築上の構成の中心となったのは、彫りの深いライムストーンなどの淡い暖色系コンクリート打放しの円柱とD.P.G工法による強化ガラスのスクリーンである。降雨量の多い日本で実現するために、ディテールを改良することにした。

円柱に関しては、欧米ではPCだが、地震国日本では接合部が法的に難しく、また、材料がライムストーン（フランス産）の砕石と黄色の砂（ベルギー産）とホワイトセメントによる天然発色の素材であるため、オルセー美術館のコンクリート調合士、ジャン・ピエール・オーリ氏の登場となった。同氏の経験では100m/m以下のPCでは均一に打設できないとの判断だった。しかし、日本やオーストラリアで開発されたヒューム成形の技術により、円柱用のP·C·Fを35m/mの厚さで450φを実現させて高品質な形態となり、オーリ氏の認める素材として、ボフィール氏に報告された。

D.P.G工法は、すでに日本でも紹介されていたが耐震上の問題が多く、一般の建築物に利用されていなかった。このため鹿島建設で2度の耐力試験を独自に行い、さらにスライド方式によるファスナーの振動実験を行わせ、本建築物にも採用できることに確信を得たのだった。

ボフィール氏の西欧風のクラシックモダンな作品を日本で実現させるべく、技

術面での努力を積み重ねた結晶がこの〈ユナイテッドアローズ原宿本店〉である。まさに、ハンチントン教授がいう「文明の衝突」にほかならない。

この秩序ある空間は、乱雑な東京にあって「小さな宝石箱」とボフィール氏自身がたとえるほどだ。整然としたオーダーの円柱は、外部の回廊と階段を中心に展開し、混沌とした東京に消えて行く。階段を上がったカフェからは、円柱の秩序の崩壊と東京の風景が重なりながら展開する。日本文明の首都に西欧文明が打ち込まれ、衝突する文明がそこに見られるのである。

ボフィール氏は西欧文明の旗手であり、設計スタッフは全世界から集められた人々により構成されているが、文明を衝突させ、普遍性をもつ美しい形態を産み出すからこそ、全世界の国々で受け入れられているといえよう。

商業建築での主題

日本でも商業建築の地位は建築界の中で決して高くないが、ボフィール氏の「小さな宝石箱」は、まるで美術館のように、純粋建築の空間として主張している。従来は、商品の展示、販売が第一義とされたために自然光を嫌い、人工照明を用いるのが主流であったが、ここでは自然光を積極的に取り入れた居心地の良さが主題となった。西欧の商業建築に見られるような、客にやさしく店員も働きやすい空間であり、合理的な提案である。

そして円柱のプロポーションは、西欧文明における建築の根本をなしている。ボフィール氏の構造設計パートナーであるオヴ・アラップ・アンド・パートナーズのジョン・ソート氏に、地震と台風の多い日本の建築基準を説明することに苦労したが、その結果採用されたダブルコラムの提案は、円柱の細さが強調され、予想以上に空間構成の秩序を強めることになった。モダンなD.P.G工法による支柱も同様である。形態の選定はボフィール氏の決定がすべてであり、ジェナード氏らパートナーの提案がサポートするかたちで進められたことを小針氏から報告されている。

私たち日本の設計スタッフの仕事は、商業空間としてのサポートだけでなく、技術者として、良き理解者として協働し、ボフィール氏特有の西欧風な空間を活かすことである。日本の条件のなかで世界をリードする空間を追求したことから、多くの衝突もあったが、竣工式の後でボフィール氏より握手を求められ、「パーフェクトなイメージの完成」に感謝された、あの温かい手のぬくもりは今でも忘れられない思い出となっている。

文化・文明の衝突への挑戦

〈ユナイテッドアローズ原宿本店〉の共同設計を通じて感じた西欧文明との衝突は、エルメス、ダンヒル、ベネトンなどが近年、直営店舗を東京に出店し、パリ、ニューヨークを起点としながら最新ファッションを世界同時に発表する状況となって表れている。さらに、各メーカーは著名な建築家を専属で抱えており、店舗そのものが商品のパッケージとしての形態表現を求められているのだ。

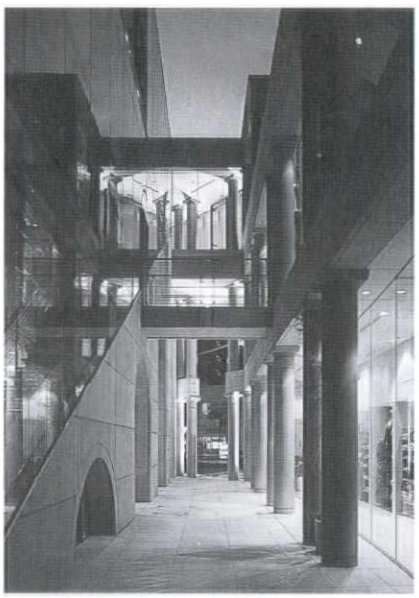
「他の国に属さない文化・文明を持つ日本」とハンチントン教授はいうが、果たしてこの国の若い建築家にその自覚があるのかが気になる。安易に素材を選び、プロポーションに関しても、倫理や思想による形態から生まれるモデュールを設定していないのではないか。

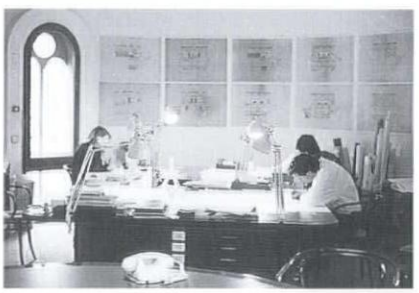
世界の情報伝達のスピードは一層に加速し、文化・文明の衝突はあらゆる場面で起こるに違いない。ボフィール氏と日本の出会いはその序曲であり、私にとっても大変貴重な経験となった。西欧文明に根ざす石造建築のプロポーションと、新しい素材で構成される「インターナショナル」な建築は、日本文明に一石を投じたのである。

若手の建築家は実際の仕事で臆することなく、世界中のさまざまな文化・文明に属する人々と触れ合い、衝突することが求められている。伝統的にも日本は、普遍的な建築の価値を独自に見抜く素質があるのだから、今こそ他の文明にも勇気を持って挑戦すべきであろう。

（しむら・なおあき／建築家、KAJIMA DESIGN）

＊1. サミュエル・P. ハンチントン著、鈴木主税訳、『文明の衝突』、集英社
＊2. 山本学治著『素材と造形の歴史』、鹿島出版会

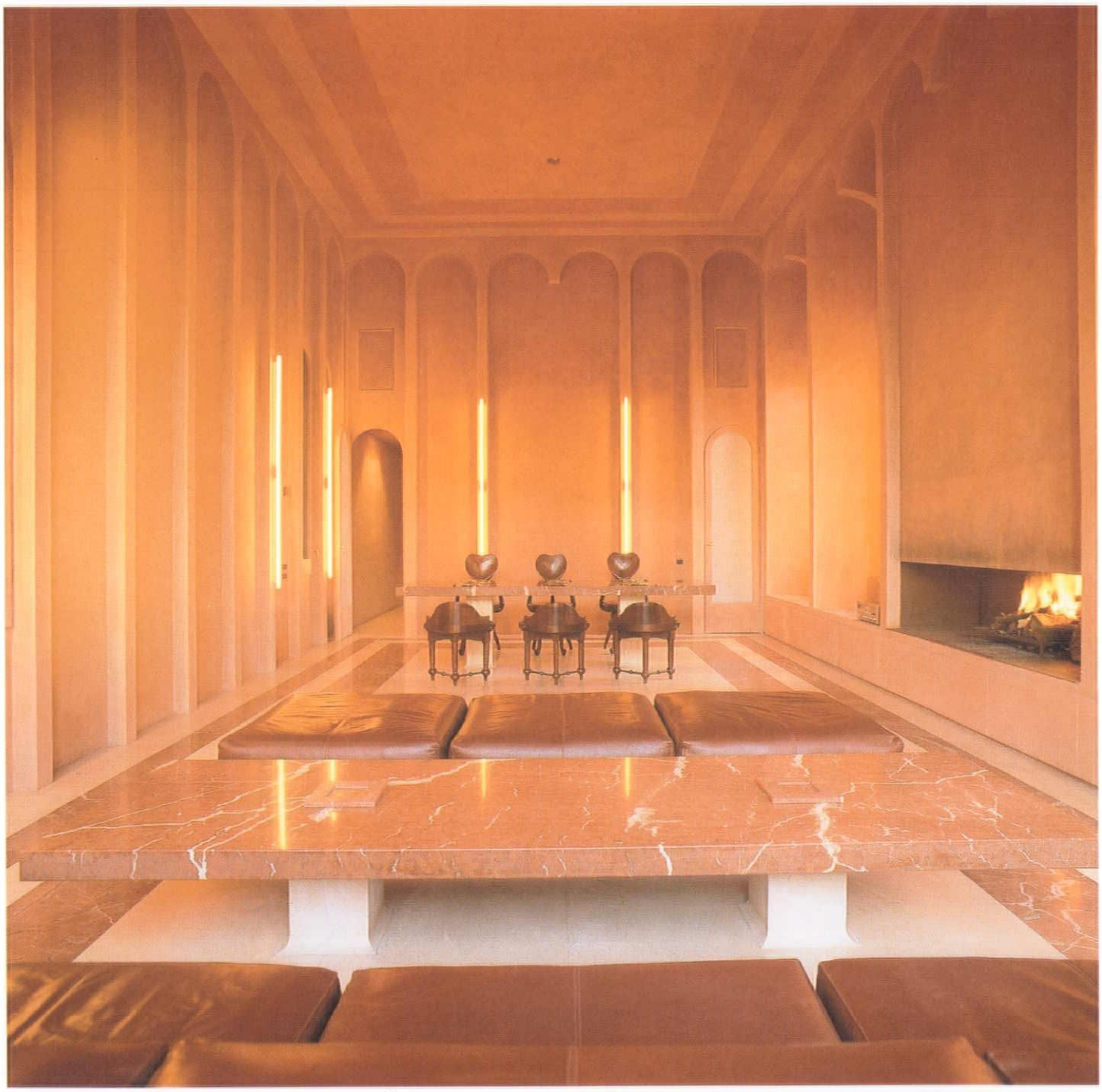

1. Harajuku United Arrows main shop


2. Taller de Arquitectura de Barcelona

Ricardo Bofill's House

Barcelona, Spain 1975–1999

リカルド・ボフィール自邸



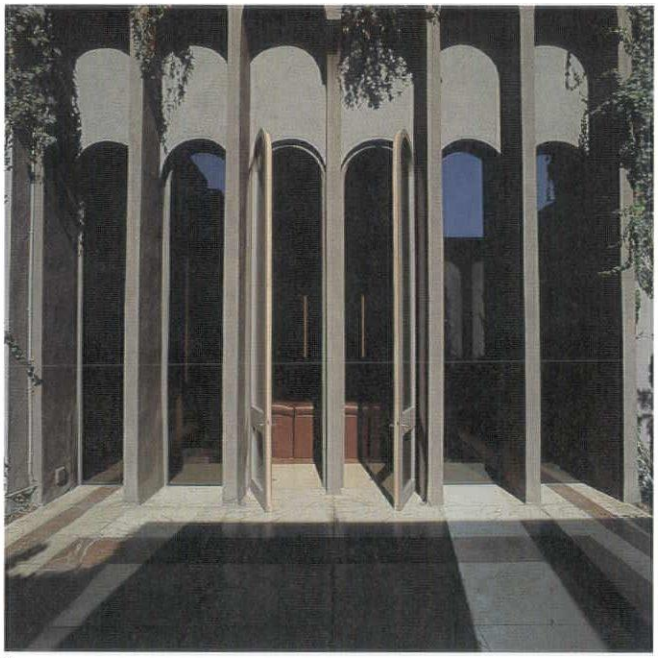
1

1
Pink marble living room, general view

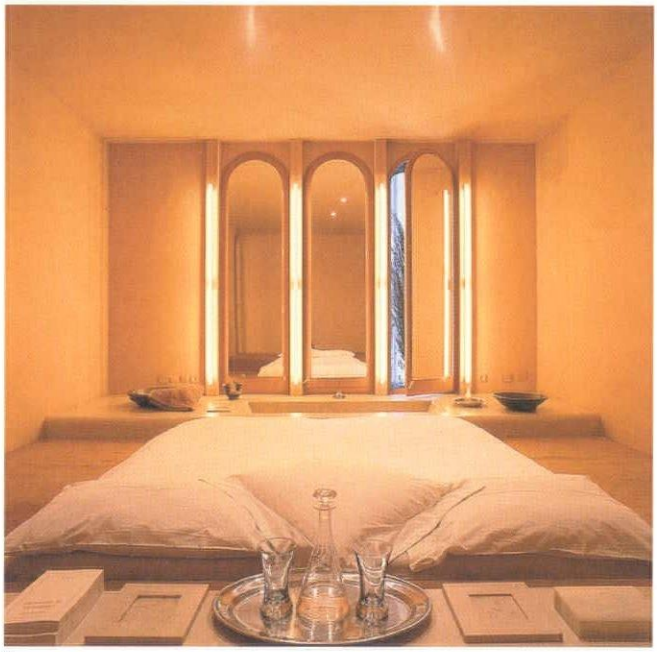
2
Pink marble living room, window detail

3
Bedroom, view from the head

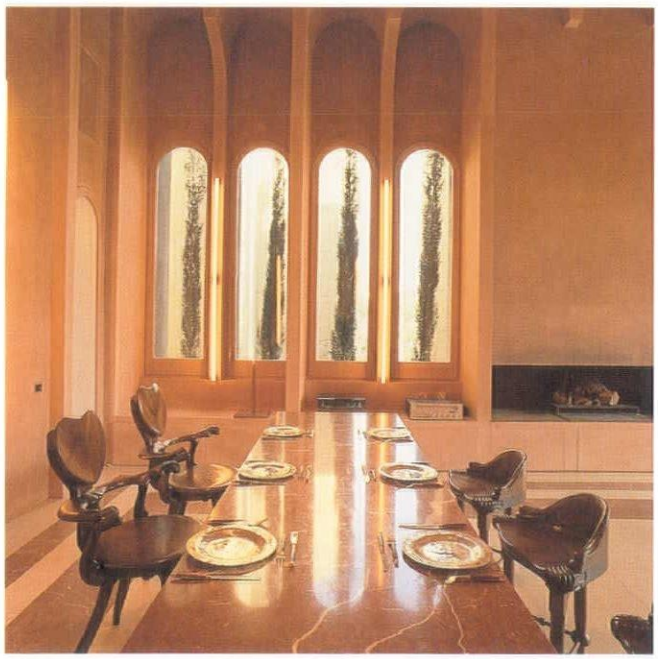
4
Pink marble living room, table detail



2



3



4

5

世界を活躍の場とするボフィールも、仕事が終われば帰宅する。工場を改造した家である。30年間絶えず手を加えつづけ、拡張を繰り返してきた。どの空間も、ボフィールの自伝の1ページと言える。「(自邸でありタリエールのオフィスでもある)〈セメント・ファクトリー〉の空間の奇妙さは、感覚の鋭い者にしか分からない。いわば魔法の場所だ。普段あちこちと落ち着かないせいか、ここでは規則正しい生活が送りたくなる。日課表などがあるといい」と彼は語る。

聖堂のプロポーションをもつリビングルーム

〈セメント・ファクトリー〉上部には40名のチームが働くサイロがあるが、ボフィールはこの層の巨大なセメント塊をリビングルームへと変貌させた。デ・キリコの抽象的透視図を思わせる一連のアーチ窓から採光する、直方体の空間である。薄いカーテンを透かした光がこの世とは思えないほどの荘厳な雰囲気を醸し出している。

「土着的、雄大、ブルータリズム的、コンセプチュアル」とボフィールはこの空間を形容する。14m × 14mの平面、8mの天井高をもつ。リビングルームのほか、音楽室、読書室としても使用される。

ボフィールは大きなスケールのみならず、小さなスケールの扱いにも長けている。それは〈ファクトリー〉の各所に配された、居心地の良い空間の仕上げからも明白に見て取れる。

大小のスケール的対比はワークショップ全体に及び、すべてが個人とコミュニティという二重の視点から考えられている。「集団は個人の進歩を助ける」とボフィールは語る。集団の一員としての生活、個人としての生活を、都市計画プロジェクトであれ個人的プロジェクトであれ、同じ気安さで仲間と共有してきたのである。

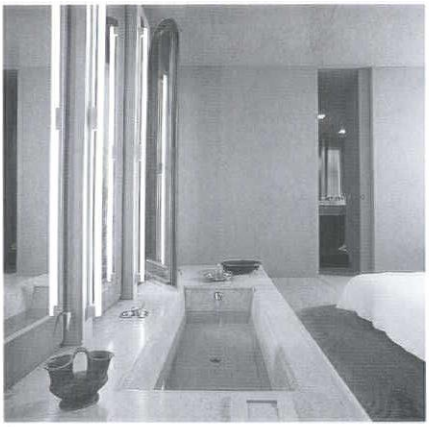
1階のメイン・ダイニングルーム

1階に設けられたダイニングルームは家族や仲間との交流の場である。自ら設計した白大理石のテーブルが鋳鉄の脚に支えられ、部屋の中央に置かれている。編み枝細工の座面を持つ椅子はトーネット・チェアのレプリカである。どっしりした樫材の肘掛け椅子はガウディのデザインを復元した。また2本の煙突は、建築家オスカー・トゥスケによって設計された。

ピンク大理石のリビングルーム

2階のリビングルームの名は、マラケシュの職人技が遺憾なく発揮された、ピンク色のスタッコ仕上げの壁による。ボフィールがデザインした長方形のテーブルは、天板がアリカント産の赤大理石、支柱が象牙色の大理石である。椅子とスツールはガウディのデザインを復元した。

(F. バレッツ + F. ボードット)



6

7

5
Upper living room, general view

6
Bed room, bathtub detail

7
Main dining room, general view

Cosmopolitan by definition, Ricardo Bofill returns always to the factory, that old industrial building that he never ceases to renew since the last thirty years, enlarging and embellishing its spaces as writing the history of a life, volumes that constitute by themselves a biography in constant evolution.

"The factory is a magic place which strange atmosphere is difficult to be perceived by a profane eye. I like the life to be perfectly programmed here, ritualised, in total contrast with my turbulent nomad life"

A living room with the proportions of a cathedral (Upper living room).

In the upper part of the factory, in which silos works a 40 people team, Ricardo Bofill transformed a huge volume of brute cement into the main chamber of his dwelling. It is a cubic living room enlightened by a sequence of windows terminated with an arc, which rhythm evokes the metaphysic perspectives of De Chirico. The white and light curtains held by a thin steel wire filter the light emphasising the non-temporal purity of the atmosphere.

"Domestic, monumental, brutalist and conceptual", that's how Ricardo Bofill defines this chamber of enormous dimensions (14 x 14m and 8m high), that is at the same time a music and reading room.

In the spaces he builds, Bofill works not only with big scale but also with small one, as it can be appreciated in the following instance: The amplitude of a brutalist building in which interior he rearranges, in different parts, intimate spaces with fine and careful finishing.

That same contrast is seen all over the workshop where everything responds to a double-scale vision to the individual and to the community. "Group helps the individual to improve", the architect says. He shares his group and private life with the same easiness that he passes from his urban design projects to his own personal projects.

Dining room in the ground floor. (Main dining room)

The dining room located in the ground floor of the building is the meeting point of the family and colleagues. A white marble rectangular table, designed by the architect is supported on ironworks and is placed in the middle of the room. The chairs of varnished wood and wickerwork seat are Thonet replicas. The solid oak armchair is a re-edition of Antonio Gaudí, and the two chimneys are designed by the architect Oscar Tusquets.

The pink living room (Pink marble living room)

This living room located on the middle floor of the house owes its name to the colour of its walls painted in stucco following the artisan technique typical of Marrakech. The rectangular table, design of the architect, is a part of red marble of Alicante. It is leaned on marble columns of ivory colour. The chairs and stools are re-editions of Antonio Gaudí. (F. Barets / F. Baudot)

Floor area: 1000 m² (+ garden)

8
Exterior dining room

PRINCIPAL PROJECTS AND BUILT WORKS

Built works appear in bold letters.

SPAIN

SEA FRONT BLOCK. Project 1998. Barcelona
Housing complex (250 apartments) with retail area on the sea front.

MANZANARES PARK. Project 1998. Madrid
Rehabilitation of a section of the Manzanares river, which includes a recreation park, sport facilities, an auditorium.

PAU'S. Project 1998. Madrid
Urban restructuring consisting of housing and various facilities.

EL GORNAL HOUSING. Project 1994-Construction 1997. El Hospitalet, Barcelona
Housing complex with 176 apartments composed by two 13th floor towers and one 6th floor lineal building.

FNAC. Project 1995-Construction 1996
Barcelona
Shop specialised on audiovisuals and books, situated in the mall 'La Illa', in the city centre.

CHAMARTIN TRAIN STATION AND RAILWAYS RECONVERSION. Project 1993-1994. Madrid
Urban project for the reconversion of a 130 Ha. railways land into a residential district of 8,300 apartments and facilities, as well as the rehabilitation and the extension of the existing station.

G.A.N. OFFICES Project 1989-Construction 1993-1994. Barcelona
Remodelling design of an ancient building in the centre of Barcelona.

MADRID CONGRESS PALACE. Project 1990-Construction 1991-1993. Madrid
Project and realisation of a congress palace and convention centre with two auditorium for 2,000 and 900 people plus lecture halls, exhibition space, bars, restaurants, retail, offices and general ancillary areas.

OFFICE BUILDING. Project 1989-Construction 1991-1993. Ausias March Street, Barcelona
Project for an office building of 8,000 m² with commercial area, in central Barcelona.

HUBBER OFFICE BUILDING. Project 1990-Construction 1991-1993. Berlin Street, Barcelona
Project for an office building of 19,000 m² with commercial area, in central Barcelona.

NIBBLA TOWER. Project 1989-Construction 1991-1993. Madrid
Design of a fifteen-storey office building, with a health club and various facilities.

MARIA DE MOLINA OFFICES. Project 1991Construction 1996. Madrid
Renovation of an existing building into an offices complex (10,000 m²).

DIAGONAL MAR. Project 1991. Barcelona
Urban project of 450,000 m² in the seafront, with offices, a huge commercial centre, a housing complex, the Catalan Institute of the Mediterranean and a park.

MEDITERRANEAN CULTURAL CENTER. Project 1991. Barcelona
Project for a museum and cultural centre (45,000 m²) in a new quarter, near the Barcelona harbour.

NATIONAL THEATRE OF CATALONIA. Project 1985-Construction 1991-1997. Barcelona
Project for the national theatre of Catalonia: repertory theatre (1,000 seats), experimental theatre (400 seats) open air theatre (400 seats) with various facilities: theatre school, rehearsal rooms, television studio, bars, restaurants, retail spaces, stage set workshop and thematic garden.

VIGO PARK AND PLAZA. Project 1989-Construction 1990-1992. Vigo
Project of restructuring an existing park with athletic facilities and an open air theatre and a plaza with shops, bars and a restaurant.

BARCELONA AIRPORT. Project 1988-Construction 1990-1992
Design and execution of new terminal for the Barcelona International Airport as well as the expansion of existing terminals.

OLYMPIC VILLAGE HOUSING. Project 1989-Construction 1990-1992. Barcelona
Building of 113 dwellings situated in the Olympic Village & planned to house 800 athletes during the Olympic Games.

MALAGA AIRPORT. Project 1986 Construction 1989-1991
Project and realisation of a new international check in terminal.

NATIONAL INSTITUTE OF PHYSICAL EDUCATION Project 1987-Construction 1989-1991. Barcelona
Design and execution of a sport institute, which will be a Press Centre during the Olympic Games.

TELECOMMUNICATIONS TOWER. Project 1988(Competition). Barcelona
Competition for the Telecommunications Tower of Barcelona (250 m. high, approx.750 foot high).

TURIA GARDENS. Project 1981-Construction 1986-1988. Valencia
Preliminary project for the design of garden in the dry riverbed of the Turia River (approx. 8 km x 200 m.) in the centre of the city of Valencia. The Taller de Arquitectura realised project resolves the garden landscape design for zones 10 and 11 of the riverbed.

AIGUERA PARK. Project 1984-Construction 1985-1987. Benidorm, Alicante
Project and realisation of a park in the centre of the city, including public facilities, parking facilities and a system of traffic connections with the city. Construction began in 1986.

LA CORUÑA. Project 1985. La Coruña
Urban and landscape design for a 12 km. coastal development.

OLYMPIC RING COMPLEX. Project 1984 (Competition). Barcelona
Proposal for the Olympic complex, including renovation of a stadium and design of a sport palace and sport institutes (INEFC). Designation as architects for construction drawings of the sport institute.

BARCELONA CLASSICAL GARDENS. Project 1981 (Competition). Barcelona
Competition for an urban park in an area previously occupied by the old slaughterhouse of Barcelona (four city blocks).

GASTEIZBERRI. Project 1976 (Competition)
Vitoria
Competition for a civic and commercial centre with residential areas in Lacua, Vitoria's district.

CASTRO NOVO. Project 1976
Castro Urdiales, Santander
Urban plan for 7,000 apartment units, private and public facilities, as an extension of the existing urban centre.

THE SANCTUARY OF MERITXELL. Project 1974-Construction 1975-1977. Andorra.
Linear structure crossing a valley, including a government, civic and religious centre, a commercial area and public spaces. The first phase, the civic and religious centre has been built, with a sanctuary, meeting rooms, museum, a concert hall and apartments for clergy.

MARCA HISPANICA PARK. Project 1973-Construction 1974-1976
Le Perthus, Spanish-French borders.
The Pyramid is a monumental sculpture, which involves and interacts with its environmental setting. It was commissioned and built in homage to the region of Catalonia.

COUNTRY HOUSE. Project 1971-Construction 1973-1975. Montràs, Girona
Familiar residence with garden and swimming pool.

TALLER DE ARQUITECTURA. Project 1972-Construction 1973-1975
Sant Just Desvern, Barcelona
Renovation of an old cement factory (30 silos) is including the Taller offices and other spaces for social and cultural facilities. This project was awarded the Prize Ciudad of Barcelona, September 1980.

WALDEN 7. Project 1971-Construction 1973-1974. Sant Just Desvern, Barcelona
A residential complex of 400 apartment units, offices, parking facilities and shopping area.

LA CIUDAD EN EL ESPACIO. Project 1970
Madrid
Project for a residential complex of 1,500 apartments, cultural centre, parking lot, schools, parks and amusement area.

BARRIO GAUDI. Project 1966-Construction 1968-1970. Reus, Tarragona
600 apartment public housing complex, with public facilities such as schools, shopping areas, etc.

KAFKA'S CASTLE. Project 1965-Construction 1966-1968. Sitges, Barcelona
Vacation apartments.

CHEMICAL FACTORY. Project 1965-Construction 1966-1967. Granollers, Barcelona
Project and realisation of a chemical factory.

CLUB MAS PEY. Project 196 -Construction 1965-1966. Sant Feliu de Guixols, Girona
Sport Club with facilities situated within a designed landscape near the sea.

LA MANZANERA. Projects 1964-1980-Construction 1964-1982. Calpe, Alicante
Residential resort complex including a group of apartment units in three buildings: Xanadu, La Muralla Roja and El Anfiteatro, with sport facilities (tennis courts, swimming pools, sauna) and other facilities such as restaurant, bar and parking.

APARTMENT BUILDING. Project 1962-Construction 1963-1965
Calle Nicaragua, 99 Barcelona

TWO APARTMENT BUILDINGS. Project 1962 -Construction 1963-1965
Calle compositor Bach, 4, Barcelona

APARTMENT BUILDING. Project 1961-Construction 1962-1963
Calle Compositor Bach, 28, Barcelona, Spain.

FRANCE

CARTIER HEADQUARTERS. Project 1998
Paris
Cartier main offices will occupy a city block in Saint Honoré district. The buildings form an interior court which will provide new spaces for parisian fashion.

EDF HEADQUARTERS. Project 1998 – Construction 2001-2004. Paris
Project for the new headquarters of the French Electricity Company. The different buildings that compose the project occupies a whole block, crossed by a pedestrian street at ground level and patio, axe that connects the new building with the existing ones.

AXA HAEDQUARTERS. Project 1996-Construction 1998-1999
25, Avenue Matignon, Paris
Renovation of a XVIII century building into an office building and an extension of 6,550 m².

AXA-RABELAIS OFFICES. Project 1994-Construction 1996-1998. 6, rue Rabelais, Paris
Renovation of the facade of an office building (9,000 m²)

PARIBAS MARCHE SAINT HONORE. Project 1986-Construction 1994-1997. Paris
Project of an office complex crossed by a commercial passage in the centre of Paris.

OLYMPIC SWIMMING POOL OF MONTPELLIER. Project 1993-Construction 1993-1996. Antigone Quarter, Montpellier
Sport facilities complex, which includes an Olympic pool, a leisure pool, a fitness club, a solarium, two restaurants and several shops.

PUBLIC LIBRARY OF MONTPELLIER. Project 1996. (Competition)
Project of the municipal library composed by a 5th floor building (14,000 m²)

EUROPE TOWER. Project 1993-Construction 1994-1995. Antigone Quarter, Montpellier
8th floor office building opposite the public swimming pool.

LE CAPITOLE. Project 1991-Construction 1993-1995. Antigone Quarter, Montpellier
Development of a group of apartments equipped with a restaurant and shops, on the ground floor, situated on the banks of the river Lez, adjacent to the building housing the seat of the Regional Government.

LE PARNASSE. Project 1991-Construction 1992-1994. Antigone Quarter, Montpellier
Development of a group of 100 apartments, offices and some shops on the ground floor, situated on the banks of the river Lez, adjacent to the building housing the seat of the Regional Government.

LE GRAND STADE Project 1994 (Competition)
Paris
Project of a stadium for the 1998 World Cup, with seating capacity of 80,000 spectators (football match) and 65,000 (athletics events).

EUROPEAN CENTER OF VOLCANISM, Project 1994 (Competition). Clermont-Ferrand
Project for a Museum of the history of Volcanoes in Auvergne, the region of the oldest Europeans volcanoes.

KLEBER PALACE HOTEL. Project 1990-Construction 1991-1993. Paris
Development of a luxury hotel equipped with 85 bedrooms and 7 storeys of underground parking.

MERCURE HOTEL. Project 1989-Construction 1991-1992. Antigone Quarter, Montpellier
A project situated at the entrance of the Antigone neighbourhood that concentrates a 100-room hotel and an office building in the same block.

G.A.N. OFFICES. Project 1989-Construction 1990-1992. Paris
Design for an office building of 6,000 m² for the insurance company GAN (Groupe d'Assurances Nationales).

CHRISTIAN DIOR HEADQUARTERS. Project 1989-Construction 1990-1992. Paris
The restructuring of Dior Headquarters with plans for a new façade.

TALLER DE ARQUITECTURA OFFICES. Project 1989-Construction 1990-1991. Paris
Renovation of the printing offices of Le Petiti Parisien, originaly the Teatre de l"Escalier d'Or, and conversion of this into a prestigious space which now houses the offices of Ricardo Bofill Taller de Arquitectura in Paris.

L'AIRE DES VOLCANS. Project 1987-Construction 1987-1991. Clermont Ferrand
Project for the reconditioning of a parking area of the French Highway A71, on a 30 ha. site. The program includes a service station, a restaurant, a hotel, an exhibition centre displaying regional products and a museum-garden.

DECAUX OFFICES. Project 1987-Construction 1989-1991. Paris
Project for a .5,000 m². office building for Decaux Society.

NATIONAL LIBRARY OF FRANCE. Project 1989 (Competition). Paris
Project presented in a limited competition for the future National Library of France, with a floor area of 200,000 m². Situated next to the river Seine it consists of a contemporary pavilion, audio-visual, a study pavilion, a catalogue room, an administration building, a research library, parking and shops.

INDUSTRIAL DESIGN. Project 1986-Construction 1987-1990. Paris
Office Furnishing: Froscher (RFA)
Specialised Furnishing: Cassina (Italy)
Specialised Furnishing: Habitat
Airport Furnishing: Tecno (Italy)
Auditorium seats: Quinette, France
Sofas: Durlet (Belgium)
Floor tiles: Gabbianelli (Italy)
Wall Paper: Essef (France)
Rugs/Carpets: De Poortere (Belgium)
Interior Lighting: Light (Belgium)

PORT JUVENAL. Project 1986-Construction 1987-1989. Antigone Quarter, Montpellier, France
Project for housing and a hotel building in the Antigone site.

THE ARSENAL. Project 1985-Construction 1987-1989. Metz
Project and construction of music centre, including the auditorium for the Lorraine Philharmonic Orchestra.

HOTEL DE LA REGION LANGUEDOC-ROUSSILLON. Project 1986 -Construction 1986-1988. Antigone Quarter, Montpellier
First prize in a limited competition for the project of a regional government administrative centre. Construction was begun in 1986.

LES RIVES DU LEZ. Project 1985-Construction 1986-1988. Antigone Quarter, Montpellier, France
Urban plan and general scheme of the East part of the city along the river Lez.

ROCHAS HEADQUARTERS. Project 1986-Construction 1986-1987. Paris
Design and execution of the new façade of the headquarters building of La Societé de Parfums Rochas, near the Champs Elysées.

BORDEAUX LA BASTIDE. Project 1986
Bordeaux
Project for the restructuring and development of the right side of the Garonne River, facing the classic XVIII century façade of the historic centre of Bordeaux.

PORT MARIANNE. Project 1986. Montpellier
A major urban project developed around a river port. The residential zone, situated to the East of

Antigone, along the river Lez includes a Marina and various lagoons forming part of a prestigious urban centre in which housing, offices, sports and commercial centres will be built.

LES ECHELLES DE LA VILLE. Project 1984-Construction 1985-1987
Antigone Quarter, Antigone, Montpellier
Project and construction of an office building, in the master plan Antigone, to achieve a connection between the old city centre and the new district under construction.

FURNITURE DESIGN. Project 1984-Construction 1985-1986. Paris
Design and realisation of various objects for interior decoration, which include a table for the "Salon des Artistes Décorateurs", a fur bedspread by Revillon, and a desk lamp by Phillips.

DOMAINE CHATEAU LAFITE-ROTHSCHILD. Project 1984-Construction 1985-1986. Pauillac, Bordeaux
Project for the construction of wine cellars (2 years vintage wine), near Bordeaux.

INDUSTRIAL DESIGN. Project 1983-Construction 1984-1988. Paris
Studies of industrial designs for interior finishes used in public housing. Creation of a range of products for Desvres (ceramic tiles), Gerflex (plastic revetment), Champenoise des Papiers Peints (painted wall-paper), etc.

LES TEMPLES DU LAC. Project 1981-Construction 1984-1986. New Town of St. Quentin en Yvelines, near Versailles, Paris
Project and construction of 200 apartment units and gardens related to the built projects Les Arcades du Lac and Le Viaduc.

LES COLONNES, L'AMPHITHEATRE. Project 1980-Construction 1983-1985 . Paris
Complex of 272 apartments and shops. The two buildings are set around three plazas, one circular, one elliptical and the other in the form of an amphitheatre.

LES COLONNES DE SAINT CHRISTOPHE. Project 1981-Construction 1983-1985
New Town of Cergy-Pontoise, Paris
380 apartments complex with shops and a public garden around three plazas.

CHRISTIAN DIOR PERFUME BOTTLE DESIGN. Project 1983 (Competition). Paris
Design of a perfume bottle for Christian Dior.

LA PLACE DU NOMBRE D'OR. Project 1978-Construction 1982-1984
Antigone Quarter, Montpellier, France.
Design and construction of a complex of 288 apartments and shops around a public plaza, that marks the beginning of the new urban axis of the Antigone new quarter.

LE VIADUC. Project 1976-Construction 1981-1982. New Town of St. Quentin en Yvelines, near Versailles
A housing complex with 74 apartment units in the form of an aqueduct. This building is sited within an artificial lake, which extends from the Arcades du Lac to Les Temples du Lac.

LES ESPACES D'ABRAXAS. Project 1978-Construction 1981-1982
New Town of Marne-la-Vallée, near Paris
Monumental complex of 591 low cost apartments and shops consisting of three buildings: Le Palacio, Le Théatre and L'Arc set in a public garden space.
-LE PALACIO, -A "U" shaped building of 441 apartments.
-LE THEATRE, Building of 130 apartments in the form of an amphitheatre.
-L'ARC, Building of 20 apartments, in the form of a triumphal arch.

URBAN FURNITURE. Project 1980-1990-Construction 1981-1991
Design of elements for public use such as benches, fountains, planters, street lamps, etc. These items have been pre-fabricated and introduced into various recent works of the Taller.

LES ARCADES DU LAC. Project 1976-Construction 1979-1981. New Town of St. Quentin en Yvelines, near Versailles
A public housing complex with 600 apartment units, public and private facilities.

ANTIGONE QUARTER. Project 1978
Montpellier
Urban development plan on a plot of 36 hectares, adjacent to the historic centre of the city. The project on an axis of 2 km. constitutes the harmonic and ordered expansion of the city towards the river Lez. The team is responsible for the ensemble of this new area of apartments, shops, public and private utilities and green spaces.

LES HALLES GARDEN. Project 1975. Paris
Project for an urban space in the centre of Paris (old Baltard market Les Halles), with creation of garden, private housing units and public facilities. The first phase (housing) began in 1978, then was stopped by J. Chirac, Mayor of Paris, and finally demolished in '79. First prize in two competitions.

ITALY

STEFANEL. Project 1992 – Construction 1993 – 1994. Italy
Project of six fashion boutiques for the chain Stefanel, in Rome, Milan, Turin, Bologna and Rimini.

BOLOGNA TRAIN STATION AND RAILWAYS RECONVERSION. Project 1993-1998. Bologna
Project for the urban design of a district of 1,500 apartments, an urban park, a business centre, offices and facilities, on the railway land of 130 Ha. This project implies the rehabilitation of the existing station, to accommodate for the high-speed train station.

SP FIUMICINO, Project 1995-1998. Rome
Urban development plan on a plot of 800,000 m², near Rome's airport which includes an housing complex, a business park, a tourist centre, a commercial centre, hotels, sport facilities, cinemas and night clubs.

PORTUGAL

SALDANHA. Project 1994-Construction 1995-1998. Lisboa
Complex composed by an office building and commercial facilities in the city centre (44,000 m²)

MONTECARLO

HOTEL DU LARVOTTO. Project 1994
Project for a 5 stars hotel (350 rooms) situated in Montecarlo bay.

BELGIUM

SWIFT HEADQUARTERS. Project 1985-Construction 1986-1989. La Hulpe
First prize in a limited competition for the realisation of the new headquarters building of the international banking Transfer Company S.W.I.F.T.

HOLLAND

MONCHYPLEIN. Project 1986-Construction 1996-1997. The Hague
Project for the urban restructuring of a neighbourhood in the city centre, with housing and green public spaces

LUXEMBOURG

RESIDENTIAL HOUSING. Project 1995-Construction 1998-1999
Project for luxury residential housing (8,000 m²) in the city centre.

PLATEAU KIRCHBERG. Project 1996-1998
Project for the urban restructuring of the central area of the city.

LA PLACE DE L'EUROPE. Project 1995-1998
Project of a plaza in the Plateau Kirchberg, with a housing complex, an auditorium and a Book Centre.

SWEDEN

PÅ SODER CRESCENT. Project 1989-Construction 1990-1992. Stockholm, Sweden.
First prize on a limited competition for a 400 unit housing complex and public facilities in the centre of the city. Construction commenced in 1988.

BULGARIA

HILTON HOTEL. Project 1995. Sofia
Project for a four stars hotel of 250 rooms, conference hall, a business centre, two restaurants and a discotheque.

POLAND

PORT PRASKI. Project 1998. Varsovia
Urban restructuring of an industrial area in Varsovia harbour.

CZECH REPUBLIC

KARLIN PALACE. Project 1998-Construction 1999. Prague

Renovation of an industrial building into an office building.

NOVA KARLIN. Project 1998. Prague
Urban edvelopment which includes housing, offices and shopping centre.

RUSSIA

SMOLENSKAYA BUSINESS CENTER. Project 1989. Moscow
Project for a business centre equipped with offices, a commercial centre, and a hotel in the historical centre of Moscow.

MOROCCO

CASABLANCA TWIN CENTER. Project 1990-Construction 1995-1998. Casablanca
Development of 77,000 m². consisting of a World Trade Centre with a Business School, commercial areas of differing acquisitive levels, from a large Commercial Centre to several luxury boutiques, blocks of luxury apartments and ample space for underground parking

ALGERIA

AGRICULTURAL VILLAGE. Houari Boumedienne. Project 1978-Construction 1978-1980
Project and construction of the agricultural village Houari Boumedienne. (350 apartment units).

ISRAEL

ABRAHAM PLAZA. Project 1991. Jerusalem
Project for a 215,280-sq. ft. triangle shaped esplanade, opposite the old Jerusalem city walls. It comprises three main architectural items: a view-tower, 36 columns-sculptures and an awning linear structure. There shall be trees in the esplanade and its pavement shall be covered by water, at certain times of the day.

SCULPTURE GARDEN. Project 1988. Jerusalem
Project for a sculpture garden. The parti is composed of stepping terraces overlooking the city, upon which will be exhibited twelve sculptures donated by the members of the European Economic Community.

PUERTO RICO

DE LA PAZ PARK. Project 1998
San uan de Puerto Rico
Urban restructuring consisting of a plaza, a recreation park, sport facilities, and an open-air theatre.

COLOMBIA

ENGATIVA & CASABLANCA URBAN PLANNING Project 1997-2000. Bogotá
Engativa Urban Planning and hosing project (9,000 apartments).
Casablanca Urban Planning and hosing project.

U.S.A.

180 NORTH LASALLE. Project 1998
Chicago, IL
Renovation of the ground floor facade and the lobby of an existing building.

300 NORTH LASALLE. Project 1998
Chicago, IL
70 floor building mix use tower with annexed parking building for The Prime Group Realty Trust.

CONTINENTAL TOWERS. Project 1998
Chicago, IL
Twin towers with 11 office floors and two parking buildings with 10 floor each. (35,897)

PROJECT 2000. Project 1998. Chicago
The world tallest building, 600 meters tall, with 120 floors, a big technological challenge, will be a point of reference in the Chicago skyline.

DEARBORN CENTRE. Project 1998. Chicago
Two glass office building, 35 and 11 floors, with shops and parking.

77 WEST WACKER DRIVE. Project 1989-Construction 1990-1992. Chicago, Illinois
Design for a 50-storey office tower. 1,000,000 sq. ft. of high-end-market commercial space on the last site on Wacker Drive, facing the Chicago river. Program includes 25,000-sq. ft. of retail space, parking and a plaza over Garvey Court.

HOUSTON LIGHT AND POWER. Project 1990
Houston, Texas
Project for a 60-storey office tower.

SHEPHERD SCHOOL OF MUSIC. Project 1988-Construction 1988-1991. Houston, Texas
Music Instruction and Performance Building for Rice University, to be used by the 300 staff and students including a concert hall for 1,200 people, rehearsal halls, classrooms, practice rooms and offices.

BOSTON CENTRAL ARTERY. Project 1988
Boston, Massachusetts
Design of the Master Plan for the land freed by the below grade submersion of the Central Artery expressway in Central Boston from the North station to the South station. Residential, offices, commercial and institutional space.

CENTRAL PARK NORTH. Project 1987
Harlem, N.Y. City
Urban project for the renovation of Harlem district and North Central Park façade. Project for three high-rise buildings (housing) at Frawley Circle and Lenox Avenue. Project for the renovation of the north portion of Central Park.

JEFFERSON TOWER. Project 1985
New York City
Project for a high-rise condominium tower, exhibited at New York Museum of Modern Art.

PORT IMPERIAL. Project 1985. New Jersey
Urban project for 2,000 housing units, retail, private facilities, etc. on a 3 mile site on the New Jersey side of the Hudson river, facing Midtown Manhattan. The first phase consists of 800 luxury of condominiums organised around four plazas opening onto the river.

CANADA

VIEUX PORT DE MONTREAL. Project 1989 (Competition). Montréal
Competition project for the remodelling of the old port in Montreal, including parks, cultural activities buildings, several museums, hotels.

JAPAN

SHISEIDO. Project 1998-Construction 2001
Tokyo
Design of Shiseido Company representative building, situated in the Ginza district, includes a shop, show room, bar, restaurant, offices, art gallery and meeting rooms.

AOYAMA PALACIO. Project 1996-Construction 1997-1998. Tokyo
Design of a complex composed by a residential building (44,000 m²) with offices and commercial facilities in Omotesando quarter.

HARAJUKU UNITED ARROWS MAIN SHOP. Project 1989-Construction 1990-1992
Tokyo
Design for a 1,300-m² shopping centre.

MITSUBISHI RESEARCH INSTITUTE INC. Project 1991. Kobe
Project of 1,000,000 sq. meters for a town design, located at the city port. The program comprises a marina for sport activities, a park with museum and auditorium for conferences, housings, a school centre, a shopping centre, offices buildings, a scientific research centre, a World Trade Centre and an O.M.S. headquarter.

KANSAI AIRPORT. Project 1988. Osaka
Competition for the City of Osaka's Airport to be built on an artificial island.

CHINA

NAN SHA NEW CITY. Project 1993-1994
Gouangzhou region
Project for a Newton of 700,000 people on a 700 Ha. land, situated in the Nan-Sha peninsula, on the Pearl river, in the centre of the triangle of Gouangzhou, Macao and Hong Kong. The program includes the design of a port, an office and residential district, a business centre, sports and cultural facilities.

VIETNAM

HOTEL NOVOTEL. Project 1994. Haiphong
Project for a four stars hotel of 180 rooms, banquet room, restaurant and nightclub.

リカルド・ボフィール／タリエール・デ・アルキテクトゥーラ略歴

リカルド・ボフィールは1939年バルセロナに生まれ、ジュネーブの建築学校で学んだ。1963年、建築家、エンジニア、社会学者、哲学者からなるグループを設立、これが今日の「タリエール・デ・アルキテクトゥーラ（スペイン語で建築ワークショップ）」の下地となった。

タリエール・デ・アルキテクトゥーラはプロジェクトを総合的に指揮する集団であり、各地の建設会社と協力してプロジェクトの遂行に当たる。バルセロナとパリを拠点としながら、世界中場所を選ばず優れた建築を建てられるようシステム化された企業体である。そのためにタリエールはあらゆる先端技術や人材を活用し、優れた個人や専門家集団と提携してきた。多面的で国際性に富んだチームである。業務は多岐にわたり、都市計画、アメニティ計画、交通施設、住宅、オフィスなどの設計、またそれに伴い、家具、彫刻、内装のデザインも行っている。

これまでの仕事は、ボルドー、ルクセンブルク、ボローニャ、ヴァルソヴィア、マドリードのヨーロッパ各都市、ボストン、神戸に及ぶ。モンペリエの〈アンティゴーネ地区〉はタリエールが扱った大規模プロジェクトの一例で、1980年代を通して設計と建設に携わり、現在も進行中である。

巨大なインフラストラクチャーの例としては〈バルセロナ空港〉が挙げられる。オリンピック後のバルセロナのシンボル的な意義に加えて、機能の面でも優れた建築の域に達している。マドリード・コングレス・パレスも同様に高度なテクノロジーを用いた建築である。フランスの大手銀行本店とショッピングギャラリーが同居する〈マルシェ・サントノーレ広場再開発計画〉は、1997年に着工した。

集合住宅も力を入れている分野である。特にパリ近郊のヴィル・ヌヴェルでは大きなプロジェクトをいくつも担当した。マルヌ・ラ・ヴァレの〈レゼスパス・ダブラクサス〉、ヴェルサイユ近郊の〈レザルカード・デュ・ラク〉、セルジー・ポントワーズの〈レ・コロンヌ・ド・サン・クリストフ〉、パリ中心部の〈レ・ゼシェル・デュ・バロック〉など枚挙に暇がない。ストックホルムやハーグの集合住宅もタリエールの名をヨーロッパに広めるのに一役買っている。

ヨーロッパの重要なコンペでたびたび勝利を収め、タリエールは上記の分野以外の建築についても自信を深めつつある。そうした中で、文化施設としてはフランスの〈メッツ・オーディトリアム〉が挙げられる。ある著名な指揮者から音響性能を賞賛されたホールである。バルセロナでは、カタロニア州政府より〈カタロニア国立劇場〉のプロジェクトを受注した。文化的に非常に価値のある仕事である。米国のヒューストンにおいては、ライス大学音楽学部の校舎〈シェパード音楽院〉を完成させた。

タリエール・デ・アルキテクトゥーラはオフィスビルに関する経験も豊富である。ブリュッセル近郊の〈スウィフト本社ビル〉は建築的にも技術的にも洗練されており、この分野におけるタリエールの実績を示す好例である。同様の例として、パリの〈クリスチャン・ディオール本社〉と〈デコー本社〉のビルも数えられる。

最近のプロジェクトでは、リカルド・ボフィールの手掛ける初めてのスカイスクレーパー、花崗岩とガラスに覆われた55階建ての〈ドナリー・ビル〉が特筆に値する。この他にも、シカゴにおいてオフィスビルのプロジェクトがいくつか進行中だ。

RICARDO BOFILL / TALLER DE ARQUITECTURA

Ricardo Bofill was born in Barcelona in 1939 and studied at the School of Architecture in Geneva, Switzerland. In 1963 he founded a group made up of architects, engineers, sociologists and philosophers, creating the basis for what today is the Taller de Arquitectura (Architectural Workshop).

The Taller de Arquitectura, with offices in Barcelona and Paris, accomplishes a collective and elaborate system for project design, establishing a technical collaboration in all countries where it undertakes projects. It is an enterprise composed of a structure, which endeavours for the highest quality, capable of conceiving and carrying out projects anywhere in the world. To this end the 'Taller' uses all resources available: modern techniques, human resources, the professional expertise of each individual and the intelligent organisation of its structure. This multifaceted, international team takes on projects of city planning, amenities, transport, housing and offices. In their conception, these projects include the design components: furniture, sculpture and interior design.

City design, as applied in the European cities of Bordeaux, Louxembourg, Bologna, Varsovia and Madrid, as well as in Boston and in the japanese city of Kobe, is a constant challenge for the Taller de Arquitectura. The 'Antigone' neighbourhood in Montpellier is a tangible example of a project on a grand scale, a part of the city which has been designed and constructed by this team during the 80's and is still under development.

In the field of great infrastructures, the new Barcelona Airport stands out at an architectural level, in functionality and for its characteristics as a symbol of the post-Olympic city. 'The Congress Palace' is another project on high technological level, which is been built in Madrid, the cultural capital of 1992. The project of remodelling the 'Place Marché Saint Honoré', with the headquarter of a famous french bank and a shopping gallery, has been inaugurated in 1997.

Housing or apartment buildings is another area intensely studied by The Taller de Arquitectura, specially the great projects carried out in the 'Villes Nouvelles' near Paris: 'Les Espaces d'Abraxas' in Marne-la-Vallée, 'Les Arcades du Lac' near Versailles, 'Les Colonnes de St. Christophe' in Cergy-Pontoise, 'Les Echelles du Baroque' in the centre of Paris. The construction of a group of apartment buildings in Stockholm and in the Hague reinforces the team's presence on the European housing scene.

Having won a series of important competitions in Europe, the 'Taller' asserts itself more and more in its capacity for diversification. In the field of cultural installations our team has designed the 'Metz Auditorium' in France, where the most famous maestro perform, who have incidentally congratulated Ricardo Bofill for the exceptional acoustics. In Barcelona, the Catalan Government has commissioned the 'Taller' the project for the 'National Theatre of Catalonia', a building of great cultural prestige. In the United States the team has realised the 'Shepherd School of Music' for Rice University in Houston.

The Taller de Arquitectura has had the opportunity to demonstrate its know-how in carrying out several office building projects, the most relevant examples of which are the new headquarter for the 'Swift' banking company, near Brussels, a very sophisticated building on an architectural and technological level, as well the prestigious 'Christian Dior' and 'Decaux' companies offices in Paris.

Outstanding among the most recent projects are 'Donnaly Building', the first skyscraper signed by Ricardo Bofill, a 55 story, granite and glass building, and some recent projects of office building in Chicago.

Taller de Arquitectura

BARCELONA TEAM

Partners Architects
Jean Pierre Carniaux＋Ramón Collado
Peter Hodgkinson＋Rogelio Jiménez

Senior Architects
Cristina Pallés＋Lidia Ripoll＋José María Rocías
Gabor Somssich＋Eduardo Wachs＋Rafael Vilamajor

Site Director Architect／Hilario Pareja

Junior Architects
Ricardo Bofill Jr.＋Francesca Caruso＋Mª Teresa Cuadrado
Giorgio Cui＋Antonio González＋Roberto González
Francisco Muñoz＋Hilario Pareja, Jr.＋Nieves Sánchez
Gian Piero Tuozzo＋Thomas Unterluggaer

Engineering／Francisco Gómez

Furniture Design／Marta de Villalonga

Model Makers／Carlos Martínez＋Josep Cruelles

Publications Responsible／Serena Vergano

Archives Responsible／José Luis Amella

Informatic Responsible／Lorenzo Cortina

Web Publication／Juan Luis Alvarez

Presentation Back up／José María Petit

Executive Manager／Javier Romeu

Administration Managers／Mª Rosa Sánchez

Executive Secretaries／Natalia Chiner

Team Secretaries
Sandra Costa＋Mª Jesús Oyaga＋Alicia Stiglitz

PARIS TEAM

Projects Director／Thierry Recevski

Team Architects
Patrice Lynch＋Roland Malamuceanu
Gabriel Tataru＋Brian Wait

Site Director／François Flores

Engineering／Zaki Mardini

Executive Manager／Philippe Chiambaretta

Administration Managers／Marie-Laure Saulnier

Executive Secretary／Françoise Casanova

Archives Responsible／Reda Boukli

写真クレジット
Photo credits

LA BOTTEGA DEL FOTOGRAFO snc
Di Buzzoni Marco e Davoli Mauro
pp.010–011, pp.015–016

Serena Vergano
p.020 (4, 5), pp.044-049

Kawasumi Architectural Photograph Office
pp.050–053

Seiichi Motoki
p.077 (1)

Naoaki Shimura
p.077 (2)

Hisao Suzuki
p.082

Taller de Arquitectura
上記を除くすべての写真
All photographs except abovementioned

翻訳
Translation

古谷和仁
Kazuhito Furuya

著者略歴
Profile

飯島洋一／Yohichi Iijima
1959年　東京都生まれ
1985年　早稲田大学大学院修士課程修了
建築評論家、多摩美術大学助教授
主な著書に『光のドラマトゥルギー』、『建築のアポカリプス』、『王の身体都市』（以上、青土社）、『終末的建築症候群』（パルコ出版）、『〈ミシマ〉から〈オウム〉へ』（平凡社）など。

櫻井義夫／Yoshio Sakurai
1957年　埼玉県生まれ
東京大学工学部建築学科、ヴェネツィア建築大学に学び、
1987年　東京大学大学院修士課程修了
丹下健三都市建築研究所、マリオ・ボッタ事務所、クリスチャン・ド・ポルザンパルク事務所を経て、
1993年　櫻井義夫＋I／MEDIA設立
主な作品に〈チェリードーム〉、〈Villa KNT〉など。
主な著書に「日本建築における光と影」（翻訳、a+u、1995年6月号）などがある。

志村直豊／Naoaki Shimura
1946年　東京都生まれ
芝浦工業大学工学部建築学科に学び、同大学助手を経て、
1972年　東京芸術大学大学院修士課程修了
　　KAJIMA DESIGN入社
現在、同社LCEグループ部長
主な作品に、〈CATS THEATER（第1回新宿公演）〉、〈高槻松坂屋（高槻駅前再開発）〉、〈伊勢丹松戸店ANNEX〉など。
主な著書に、「LCCを生かした設計・施工の確立」（BELCA、2000年1月号）などがある。

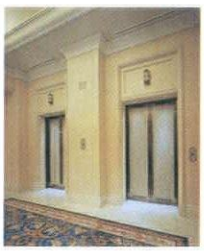
HITACHI

超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。

「すべての世代のために」
さまざまな生活空間を
やさしく、速やかに結びます。

地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。あらゆる空間で、より多くの人が快適に行動、生活できるように、日立はエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。例えば、"ビル設計の自由度を高め、スペースの有効利用を実現する"機械室レスエレベーター"や、本格化する高齢社会のなかでより多くの活躍が期待される"車いす用ステップ付きエスカレーター"、"ホームエレベーター"など。設置環境に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。

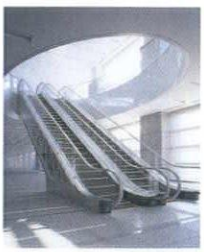
日立エレベーター・エスカレーター



Hotel & Residence

Public Space

Office Building



Shopping Center

株式会社 日立製作所
お問い合わせは＝昇降機グループ営業本部／電機システム統括営業本部 〒101-8010 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地
電話／(03)3258-1111〈代表〉または最寄の支社へ 北海道(011)261-3131・東北(022)223-0121・横浜(045)451-5000
北陸(076)433-8511・中部(052)243-3111・関西(06)6616-1111・中国(082)223-4111・四国(087)831-2111・九州(092)852-1111

「場」の力が生む都市と美術の新しい関係

代官山インスタレーション'99

展覧会会期：1999.11.20→1999.12.12
会場：代官山ヒルサイドテラス内、及びその周辺

同時開催
「代官山インスタレーション'99」ドローイング展
会場：ヒルサイドウエスト

主催・問い合わせ：代官山インスタレーション実行委員会
150-0033 東京都渋谷区猿楽町 29-18 ヒルサイドテラス A 棟アートフロントギャラリー内
Tel.03-3476-4868 ／ Fax.03-3476-4874

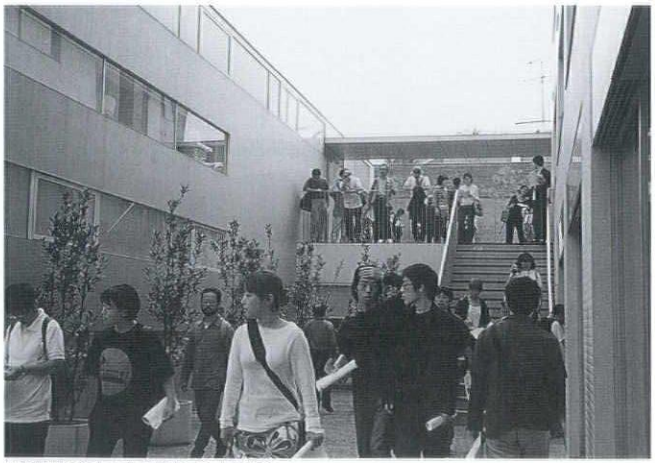
公募期間
1999年
9月1日→10月7日
作品設置ポイント説明会
9月18日（115人が参加）

→

第1次審査
10月8日
作品の実現を前提としたプランドローイング 216 点から、3 人の審査員：槇文彦氏、中原佑介氏、川俣正氏により制作作品 7 点を選出。その他の作品の中から 27 作品がドローイング展出品作品として選ばれた。

→

作品設置
11月18日→19日
作品制作費 30 万円をもとに各作家が作品を設置。


公募期間に行われた設置ポイント説明会


一次審査会の様子

DAIKANYAMA

SD0003

都市空間とアートの新しい共存のかたちを探る公募展覧会が東京、代官山で開かれた。ヒルサイドテラスを中心とした旧山手通り沿いにインスタレーションを設置した「代官山インスタレーション'99」である。

第一次審査では、ドローイングによる作品プラン216点の中から、審査員槇文彦、中原佑介、川俣正の3氏によって実際に制作、展示される7作品が選ばれた。設置場所の特性を生かし、そこでしか成り立ち得ないような作品の提案が評価されたが、「既存の建物が持っている主張を考慮しつつ、いかに自分のコンセプトを打ち出すかに苦労した」（出品作家談）自由形式のドローイングでは、屏風あり、レリーフありで、この街に寄せる人々の関心の高さやエネルギーを窺わせた。また一方では作家従来の手法や素材をそのままあてはめようとする安易なものもあった。結果として、該当作品は7点にとどまり、当初の候補地のうち、代官山の第二の顔ともいうべき大使館前や猿楽塚周辺等に作品が展示されなかったのは寂しい。

完成作品の最終審査が会期はじめに行われ、「ヒルサイドに欠けていたユーモアのセンス」（審査員講評より）あふれる『地下鉄ヒルサイドテラス駅』が最優秀賞に輝いた。建物の外階段下の空間を木材で囲い、内部の壁面に鏡を張るというシンプルな手法で地下鉄昇降口を演出したこの作品は、確かにユーモラスでわかりやすく、道行く人を、街の表皮から一歩奥へと引きこむ力を持っていた。地下鉄のネオンサインを前に「何線ですか？」と真顔で尋ねる人、だまし絵だと知って苦笑しながら記念撮影する人。作品を介して、街と往来する人との距離がぐっと縮まった。

ヒルサイドカフェ前の広場には、周辺地域で採集した形象の断片をオブジェ化しペットボトルに入れ、それらをアクリル板にはめ込んだ『CITY・MASK・PASSAGE』が出現した。この作品は、広場の持つ空間の重層性をさらに増幅させ、夜は下からのライトアップで幻想的な世界を作り出し、特別賞・ヒルサイドテラス賞を受賞した。石積みの台座は人々の語らいの場所となり、コントラバスとダンスを組み合わせたパフォーマンスやクリスマス・キャロリングの舞台ともなった。ヨーロッパの街角に見られるような、人々が何気なく集う広場のシンボルとして機能した点は高く評価される。

地元住民の間で好評だったのは、都立第一商業高校のフェンスに取り付けられたカラーボード群である。虹色の木製の短冊500枚が約70mにわたって吊るされ、風にはためき、代官山の散歩道を陽気に飾った。同じく水平方向の視線を強調したものに、既存の手すりの下に設置された赤いチューブ状の作品がある。ウェットスーツと同じ素材で作られたこの管には、空気と水が詰められていて、触るとフニャッとした手触りが意表を突いていて面白かった。その触感を含んだ赤い線のイメージは、この街を覆う銀色のキャンヴァスの上に鮮烈な印象を残した。水平に対する垂直線はといえば、東京バプテスト教会脇の細長い空間に作られた『記憶の道』がある。教会で使われていた廃材や鏡、緑色のコケ等を交互に配した道が十字架へと至る作品で、奥へ上へと導かれる視線と宗教的昇華の意味合いが巧みに重ね合わされていた。

今回の企画は日頃から文化意識の高い地元サイドから持ちあがり、候補地の選定、作品制作、展示期間中の交流といったプロセスを通じて徐々にその意図が地域に浸透し、四半世紀以上をかけてヒューマンスケールで成熟してきたこの街の独自性を浮き彫りにしたのではないだろうか。今後は、風景にとけ込みつつもその風景のクリティークであるような力強い作品の発掘や、エリアの拡充などを課題として、さらなる展開が期待される。（坪井みどり・代官山インスタレーション実行委員会スタッフ）

展覧会会期
11月20日→12月12日

展覧会は初日より非常に高い関心を集め、展覧会チラシを手に作品探しをする多くの来場者の姿がみられた。

表彰式
11月24日

完成した作品を対象に3人の審査員により最終審査が行なわれ、最優秀賞、特別賞・ヒルサイドテラス賞が選ばれた。
これらの賞は、約40名のプレス・美術関係者出席のもと開催された表彰式にて発表。

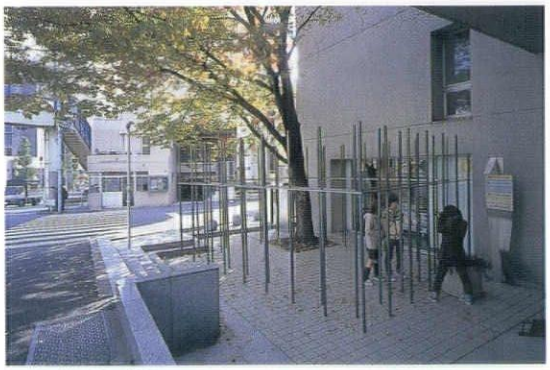
記録集の作成
本展覧会記録カタログ（写真：安斎重男）を作成。お問い合わせは実行委員会まで。

受賞者による展覧会（日程未定）
最優秀賞受賞者にはヒルサイドテラス内での展覧会開催権利が与えられた。


同時開催のドローイング展風景


二次審査当日はあいにくの雨

INSTALLATION '99



1 鉄の檻

富谷智

鉄　278×536×404cm

通り抜けられる鉄の檻。中に入る行為を通して見ること、そして見られることを反転的に解釈できる装置。

2 『／』 Whether...or...

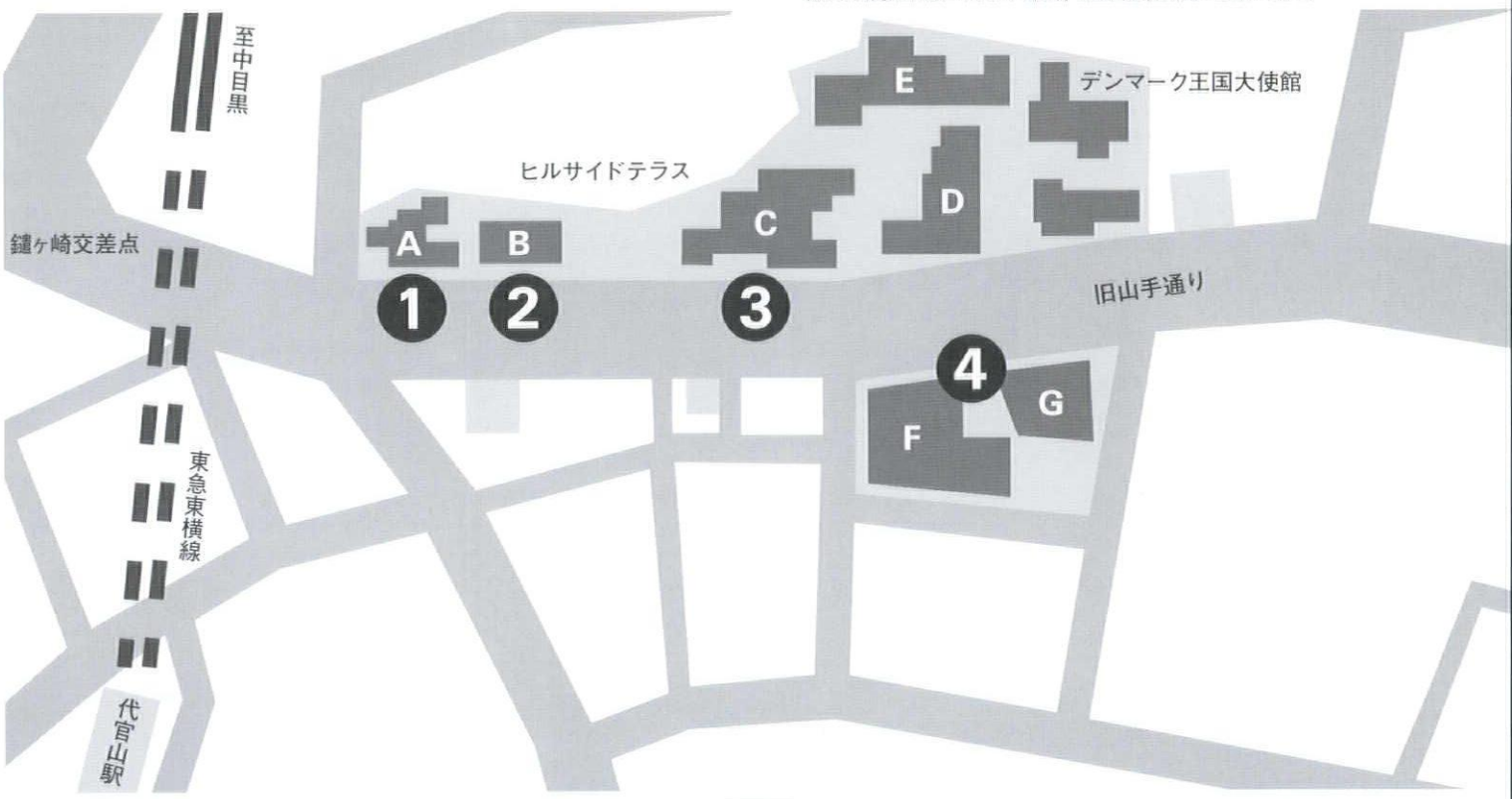
西村紀一

気体のチューブ：ウエットスーツ地、ビニール、ステンレス、空気

φ7.63cm×11.2m

液体のチューブ：ウエットスーツ地、ステンレス、水　φ7.63cm×12.9m

支えはしないこのTube≠手摺は、隔たり(=都市化)によって緊張した手を緩ませ、私たちと環境との関わりをよりTactile(=触知可能)な物事へと解いてゆく。



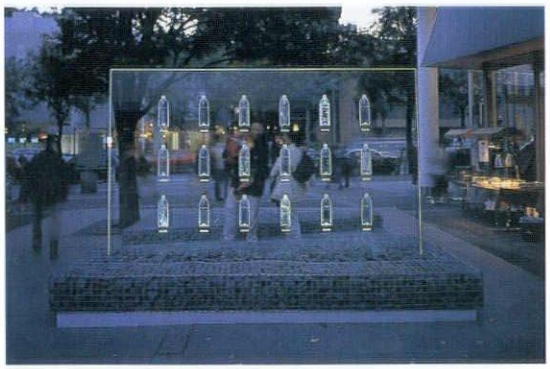
4 ○特別賞・ヒルサイドテラス賞

CITY・MASK・PASSAGE

萩原剛＋酒向昇＋中川博之(竹中工務店)

ペットボトル、アクリル、鉄のかご、砕石　230×360×360cm

代官山の事物や出来事に隠された図像をサンプリング、未視的形象（=CITY・MASK）へと変換。それらをパッケージ化し、等価に集積（=コンビニ）して構成された「パサージュ（CITY・MASK・PASSAGE）」が、場・人・アート・建築との新たなコミュニケーションを揺動する。



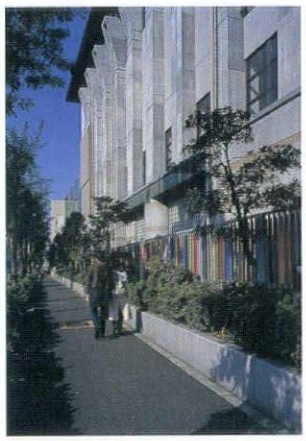
5 EST: Environmental Sensor for Tokyo Metropolitan First Commercial High School

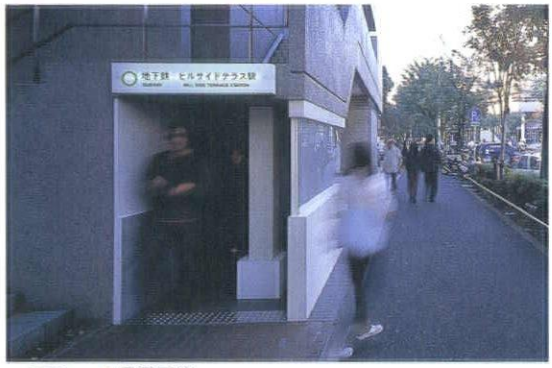
石松丈佳

米ツガ材に着色　100×7×0.6cm/各　500枚

フェンス上全長約70mに設置

境界を形成する「柵」に色を配置して境界の様々な特質を表出させます。





写真：安斎重男

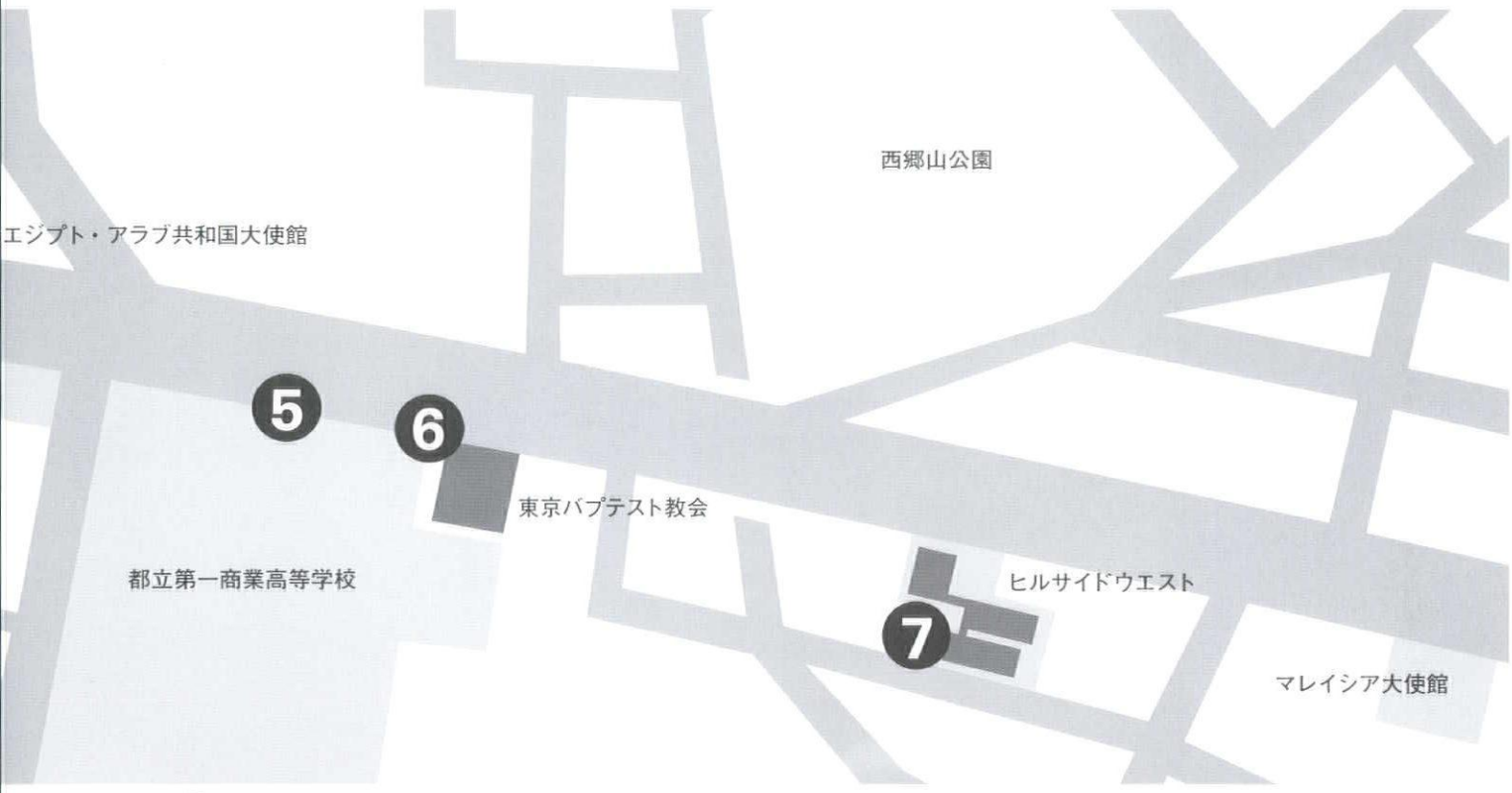
3

◎最優秀賞

地下鉄ヒルサイドテラス駅

平山俊、渋谷真弘

迷路のようなヒルサイドテラス。輝く駅のサインが掲げられたこの場所は、さらなる奥へと拡がる代官山空間の入口です。



6

記憶の道 Memory of the Lord

西田武人

廃材、Green Moss、ポリカーボネイドミラー　10×0.9×20m

40年間教会で使われてきた廃材の記憶と、緑の生命力が作る1本の道が、代官山に新たなPublic Spaceをつくりだします。

7

As Homogenized Scene, So It's Homogenized

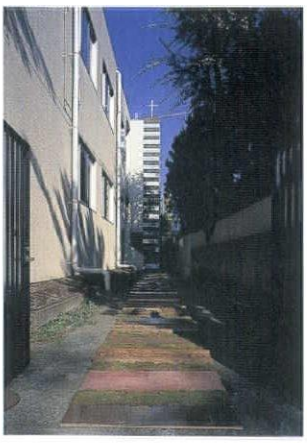
(均質化された風景として、だから均質化される)

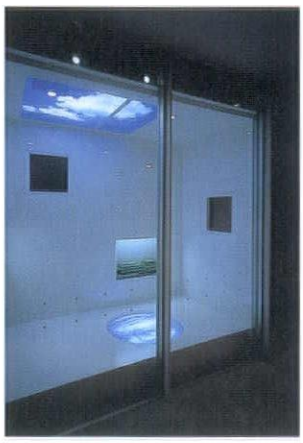
渡邊英弘

フィルムにコンピュータ出力、アクリル、木、蛍光灯、塗料

290×240×120cm

均質化された形態に変化しつつある都市の「進化した自然」を、現代建築と自然が共存するヒルサイドウエストに創出します。





審査員講評　表彰式講評より

槇文彦

今回審査の視点のひとつとして、ヒルサイドテラスに欠けていたものは何であったかというとユーモアではなかったかと思います。その中でユーモラスなものを仕掛けて下さった作品が多かったことを感謝したいと思います。

グランプリに輝いた「地下鉄ヒルサイドテラス駅」は僕自身建築家として1階の階段の下の残りの部分にいつも困っている。逆にこの点に注目したのはやはりさすが建築家だったと思う訳です。そして少し福田繁雄ばりに騙し絵的に演出している。中に入ると鏡を使ってちょうどプラットフォームの柱列の感じを演出しているという風に最小の手立てで子供も喜ぶ新しい場所を作り上げたことが大変に面白かった。

同じように何かユーモアを感じた作品に、教会の側道の演出、あるいはヒルサイドテラスの一期の赤い手摺があったと思います。

また、今回ヒルサイドテラス賞を受けた「City・Mask・Passage」は7つの作品の中では一番本格的なインスタレーションでした。あの場所にああいう形でインスタレーションをした事は私が建築家なのですごくよく解るというか、解りすぎてしまうところもあったと思います。ペットボトルを使ってアクリル板に重ねて新しい透明な膜を作ることによってあのプラザの特性をさらに増幅したのが成功していると思いました。夜も非常にきれいですね。

この企画について、本展事務局代表の北川フラムさんから聞いたときは少し半信半疑でしたが僕自身充分に楽しませてもらったことを喜んでいます。（まき・ふみひこ／建築家）

中原佑介

審査を行った当日はあいにくの雨となりました。このような状況の中では、例えば鏡面を使用した作品では反射がほとんど見えなかったり、色を使った作品は完璧にきれいに見えたかどうかとも思います。また、夜間の照明のある作品は夜の違った表情があったり、総合的にみて最悪の状況下で審査を行うことになり多少不公平が生まれたのではないかと危惧を感じておりました。しかし、今回最優秀賞に選ばれました作品「地下鉄ヒルサイドテラス駅」は雨が降ろうと晴れようと関係がありません。このことは最優秀賞受賞の直接の理由ではありませんが、この作品は一種の騙し絵風な要素を持っており、その発想が大変ユニークであると感じました。実際多くの人が騙されてこの地下鉄の入り口に入っているそうです。

東京バプテスト教会に設置をした作品「記憶の道　Memory of the Lord」やヒルサイドテラスB棟前の手で触る作品「「／」Whether...or...」など非常にユニークな発想が多くみられ、このような屋外の作品としてはやはり注目すべきものがありました。また、非常に風格がある出来あがりとなった作品としては今回特別賞のヒルサイドテラス賞となった「City・Mask・Passage」が挙げられます。

普段作品設置場所として考えないような普通の街並みを舞台とした今回の企画は大変難しいものであったと思います。しかしそのような状況を上手く捉えた面白い発想が寄せられたと思います。次回また新しい作品にお目にかかりたいと思います。（なかはら・ゆうすけ／美術評論家）

川俣 正

代官山のヒルサイドテラスは、私にとって、1984年の「工事中」というアートプロジェクトを行って、作家としての出発点を持ち得たところでもあります。そのため、今でも特別な感慨を持っています。この場所をアートの場として考え、作品を設置する事は、ここを訪れる多くの若者のアンテナに触れるということ、そしてその結果、シビアな反応を自ら受けるということも意味しています。私は、あまり審査する側としていることに馴れていなかったのですが、一般から寄せられた約200ほどの作品プロポーサルを見て、改めてこの場所への関心の強さを感じました。

最近はCGを使った非常にきれいなプレゼンテーションが多くなり、プランは面白かったのですが、現実にできたものがもうひとつ力不足に感じられました。また、本当にこの場所でしか出来ない、成り立ち得ない作品案というのは、少なかったように思います。しかし現実の場所と材料の間にギャップのようなものがあって、それを埋めようと一所懸命奮闘しているところは、見ていて頼もしく思いました。

作品が成立するためのモチベーションは、ここではこの特異な場になると思います。なぜかというと、ここは美術館でもギャラリーでもなく、多くのブティック、商業店舗が集まっていて、若者が日々闊歩しているスポットだからです。このような立地条件を作品プランに加味していくことが、ここでは要求されます。

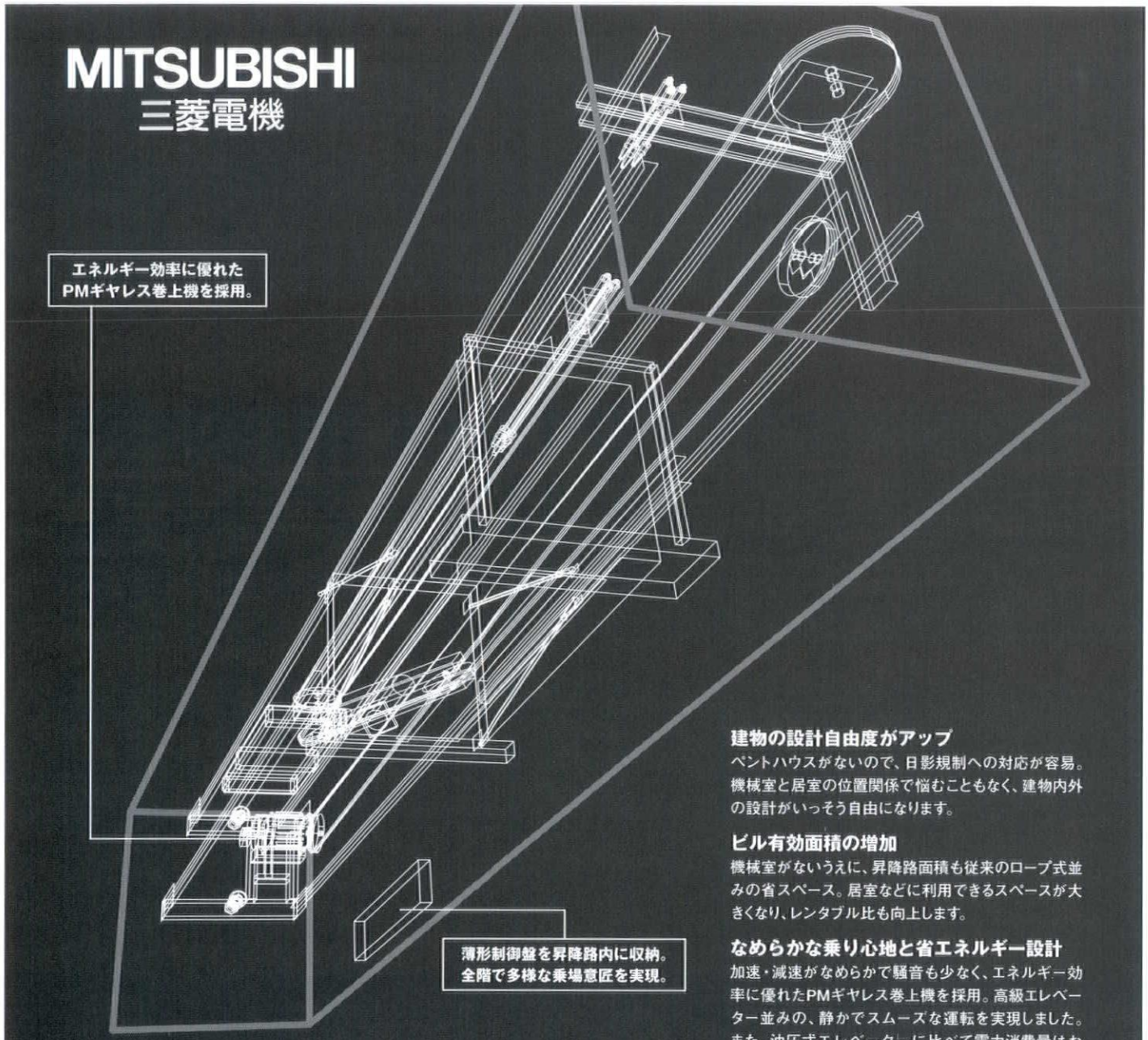
昨日たまたまここにきて作品を見ていた時に、圧倒的な人の中で作品がどのように活きるのかに興味を持ちました。そこで作品がどのように活きてくるのか。いわゆるサイトスペシフィックな（その場でしか成り立ち得ない）作品という事柄を一番表現出来た作品が「地下鉄ヒルサイドテラス駅」ではないかと思います。しかし私個人としては一押しというわけではありません。というのは、余りにもストレートで単純過ぎると思うからです。やっぱりもう少しひねりがあったら良かったのではと思います。

場所に根差して且つ場所の状況を取りあげるという意味合いにおいては「City・Mask・Passage」というものがあったり、私個人としては東京バプテスト教会の「記憶の道」という作品も非常に気に入ってますし、触覚的な作品としてはヒルサイドテラスB棟の手摺のようなフニャッとしたような作品もなかなか面白いと思います。

今回の「地下鉄ヒルサイドテラス駅」のグランプリ受賞によって「代官山インスタレーション」展の傾向が決まらないような形で続けていければ面白いのではないかと思います。とにかく今回は、初めての試みということもあってそれなりに面白かったです。

また引き続き見ていきたいと思います。グランプリ作家のこれからの作品の展開を期待しています。（かわまた・ただし／アーティスト）

MITSUBISHI
三菱電機



昇降路だけのエレベーター
三菱〈エレパック〉誕生。

新登場

ELEPAQ エレパック

三菱エレベーター
機械室レスタイプ／乗用・住宅用・寝台用

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

建物の設計自由度がアップ
ペントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加
機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レンタブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計
加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮
油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく（Efficient）
信頼性に優れ（Reliable）
快適な移動空間の創造（Comfortable）
エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……三菱電機株式会社　〒100-8310 東京都千代田区丸の内2-2-3（三菱電機ビル）
本社ビル事業部　TEL.（03）3218-4544

成長続ける黒澤組

浜野保樹

『雨あがる』

最近の『バグズ・ライフ』に至るまで、模倣しつくされた黒澤作品に『七人の侍』がある。アクション映画の手本のように言われているが、『七人の侍』の卓越さは、物語の構造にもある。助けても何の益にも名誉にもならない農民を、命を賭して侍たちが救う。この構造は『プライベート・ライアン』で、巧みに翻案されていた。

官僚機構、核戦争のパラノイア、汚職、環境問題など社会問題を真っ向から取り上げ、義憤に突き動かされ、人々はなぜ幸せになれないのかといつも問い続けた黒澤明が、最後の脚本『雨あがる』に、「見終って、晴々とした気持ちになる様な作品にすること」と記している。黒澤監督にその理由を問うたら、きっといつものようにこう答えるだろう。答は作品の中にあると。

下層の人々に温かい心を持つ侍が主人公であるため、やはり山本周五郎原作の『赤ひげ』(1965年)と物語の構造はまったく同じである。『赤ひげ』以前の黒澤作品は、強いが未熟な者が成熟し老練な人間と出会い、二人の緊張関係を経て、未熟な者が成長していくのが物語の骨格となっていた。それを志村喬と三船敏郎の関係として誰でも思い浮かべることができるだろう。しかし三船の年齢があがるにつれ、志村の役割までも三船が担わなければならなくなり、『赤ひげ』でついには志村と完全に入れ替わるにいたり、黒澤作品の構造は完全に崩れてしまった。三船は成熟と老練さとともに、これまでの三船が作ってきた男らしいイメージを兼ね備えなければならなかった。それまでの三船は殺されたり、阻害されたりだったが、『赤ひげ』ではそうもいかくなってしまった。

三船という不世出の俳優であるが故に起こった『赤ひげ』での破綻が、『雨あがる』では回避されている。強いが優しく、老練かと思えば未熟といった矛盾したものが調和した姿で存在しているし、体制に受け入れられることなく、主人公は自ら身をひく。これはいつも穏やかな小泉堯史監督の資質によるものではないかと思う。

『雨あがる』も三船の映画である。とは言っても三船敏郎でなく、彼の長男である三船史郎だ。彼がスクリーンに現れると、目が彼に吸い寄せられてしまう。父同様、演技がうまいへたの次元を超越し、華がある。日本映画で、再び「華がある」などという言葉を使える日がめぐり来ようとは思ってもいなかった。『酔いどれ天使』(1948年)で、黒澤作品初登場の三船敏郎が主役の志村喬を食ってしまったように、この映画は三船史郎の映画である。

若さだけに価値があると言下に言い続けているハリウッド映画とは全く別の世界がここにはある。加齢は否定すべきことではなく、成長し続けることでもあるのだ。この映画のスタッフ自身がそれを証明している。監督や衣装の黒澤和子氏を除くと、メインのスタッフの平均年齢は60歳代の半ばから後半であろう。黒澤組の最古参、美術監督の村木与四郎氏について書こうと思っていたが、字数が尽きてしまった。景観や建物の映像によるリアリティーとは何かということに興味ある読者には、『村木与四郎の映画美術』(フィルムアート社)を勧めたい。黒澤組のスタッフもただ者ではない。

はまの・やすき
1951(昭和26)年生まれ。1980年国際基督教大学大学院博士後期課程単位取得退学。新潟大学教育学部、メディア教育開発センターを経て、1999年4月から東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授。メディア論専攻。マルチメディアの研究開発に従事する。主な著書に、『極端に短いインターネットの歴史』(晶文社刊)『ハイパーメディア・ギャラクシー』『コンピューターの終焉』『イデオロギーとしてのメディア』『キューブリック・ミステリー』(共に福武書店刊)などがある。AMDアワード審査委員長、Interactive Media Festival審査委員(米)、MILIA Award審査委員(仏)、マルチメディア白書専門委員会委員長、メディア芸術祭審査委員などを務める。

監督：小泉堯史
脚本：黒澤明
出演：寺尾聰、宮崎美子、三船史朗、原田美枝子、仲代達矢

都市の共同体を生む舞踊

多木浩二

『アブソルート・ゼロ99年版』

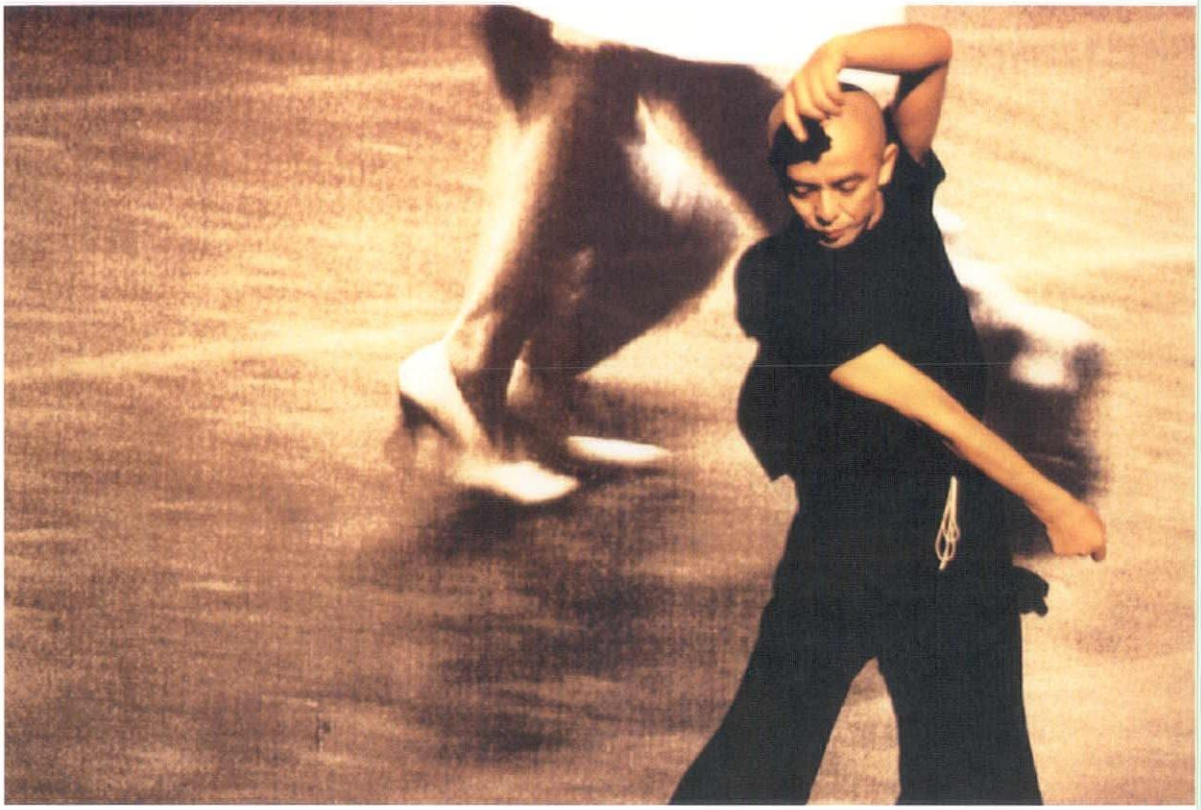
去年もさまざまなダンスを見てきたが、本当に熱中するだけの作品はなかった。それでもほどほどに楽しんできた。それらの中では、勅使川原三郎の『アブソルート・ゼロ』は、群を抜いていた。手足がばらばらになっているようでいて、見事な統一をもった身体が出現するのだから驚きである。その統一とは、身体を収斂させるなんらかの軸があるのか、それとも空気を掴んでいるからなのか、測りかねるが、そんなことはどうでもいいのだ。私は観るときは考えないことにしている。ダンス論を近く書く予定だが、そこではまったく違ったことを書く。ダンサーに顰蹙を買おうと、知ったことか。ダンス論とはいえ、ダンスは単なる素材で、具体的な時間と空間についての哲学を展開したいだけのことだ。

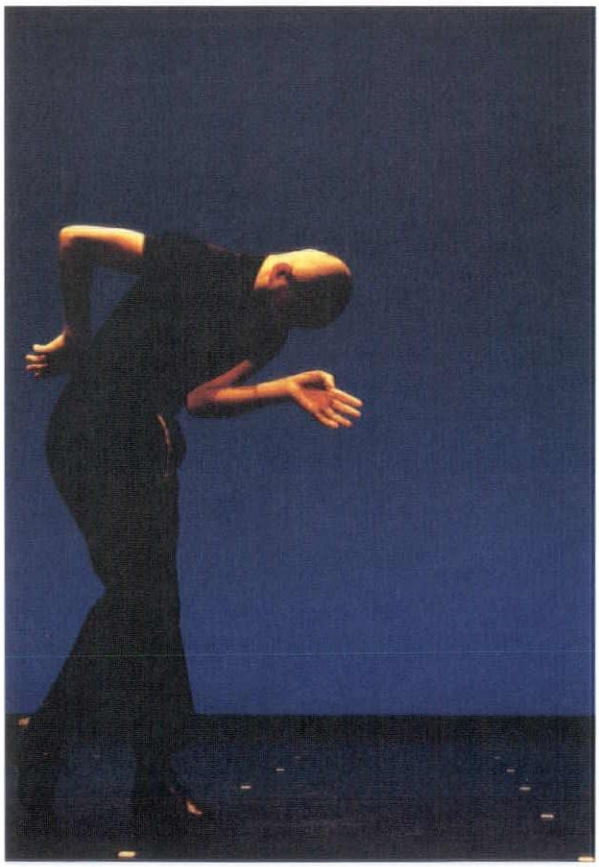
それだけではない。ダンス(あるいは演劇でもいいが)、それはその時限りのものなのだ。だから演技者と観客がひとつの空間で、しばしひとつになるのだ。こんなことは劇場でしかあり得ないことで、劇場のもっている不思議な魔力もそこからきている。建築をつくっている人は意外なほど、この魔力を知らない。絶対に消失してしまうひとときの文化的共同体がそこに生ずる。それが繰り返されているから劇場の空間には空っぽのときでも何かが宿るようになるのだ。これは建築家がつくったばかりの劇場にあるはずはない。

でも、本当にダンサーと客が一致することなどあるのか。安っぽく言うと、観客が熱中し、ダンサーがそれを感じて乗ってくれば、それはあるはずだ。しかし、大抵は覚めている私などが観ているとその熱中が本物かと疑わしくなることがしばしばある。それに大抵は観客とはいえ、古典バレエだと何となく愛好家独特の閉鎖性を感じてしまうのだ。それがモダンだと極めてスノッブの一団に見えてしまうのだ。それがいけないと言っているのではない。こっちも愛好家かスノッブかはともかく、その場に溶け込んでいないとだめなのだ。不思議なもので、長年見慣れてくると、余計な自意識などなくなっていくのだ。映画では決して味あわない束の間の共同体に同化しているのだ。

我々は現代の都市を論じるとき、あまりにも大きくなって、とても共同体を論ずることなどできないと常に思う。しかしパリとかロンドンとかという都市にしばらくいると、毎日、毎晩、こうした形成されては消失する共同体が、無数に明滅するのを感じとることができる。大劇場から10人も入らない若者の劇場まで、都市の夜を形づくっている。人間の生きている都市とはそんなもので、自治体が文化行政のために劇場をつくるのとは全く違ったものなのだ。確かにそのためにはダンスや演劇がもっと人のなかに根付かないとならないことは言うまでもないが……。

たき・こうじ
東京大学文学部美術史学科卒業。元千葉大学教授。主な著書は『生きられた家』『眼の隠喩』(共に青土社刊)『シジフォスの笑い』(岩波書店刊)など多数。





日時：1999年6月26～7月4日
会場：世田谷パブリックシアター
構成・美術・照明：勅使川原三郎

写真＝ラヴィ・ディーパース

四勝一敗一分、建築家の勝ち？

「大地の芸術祭」作品公募、最終公開審査

磯達雄

去る1月30日、東京・代官山のヒルサイドプラザで「大地の芸術祭／越後妻有アートトリエンナーレ2000」作品公募の最終公開審査が行われた。

「大地の芸術祭」は今年7月20日からの53日間、新潟県南部の妻有地域6市町村を舞台として開催されるアートの祭典。山間の過疎地を活性化する越後妻有アートネックレス事業の一環として実施されるもので、内外の有名、新進アーティスト138人が参加して、パブリックアートの設置やワークショップ、シンポジウムを行う。加えて公募による作品を制作することになっており、それを選ぶのが今回の審査会である。

6市町村それぞれに、実行委員会側が敷地を設定し、応募者はそこから好きなところを選んでアート作品を提案する。海外からの応募を含む171点の作品プランから、一次審査を通過したのは31案。最終審査ではこのなかから、各市町村に1案ずつ、計6案が選ばれ制作に移される。

審査には中原佑介(審査委員長、美術評論家)、ウルリッヒ・シュナイダー（アーヘン市立美術館館長)、川俣正（アーティスト)、原広司（建築家)、出原均(広島市現代美術館学芸員）の5氏と、妻有地域の6市町村首長があたった。

公開審査は市町村ごとに進められた。まずプレゼンテーションが行われ、応募者は与えられた3分間でスライドや模型を使って自分の案の説明する。簡単な質疑応答を挟んで、各案のプレゼンが終わると、その場で審査へ突入。審査員は応募者や一般来場者の目の前で、マイクを通して議論をしながら、20分そこそこの時間内に各地区一案ずつを選んでいかなくてはならない。これは審査員にとっても過酷な体験だったにちがいない。

実施プロジェクトに選ばれたのは次の6作品（カッコ内は作者名、設置市町村)。『小さな家—聞き忘れのないように—』[1]（伊藤嘉朗、十日町市)、『稜線計画 Repair Edge Project』[5]（ドゥ・アーシュ、川西町)、『Glove(森)』[2]（本間純、津南町)、『中里スケアクロウ（案山子）ガーデン』[3]（クリス・マシューズ、中里村)、『Scaping Objects』[6]（クローバー、松代町)、『峡谷の燈籠』[4]（クリップ、松之山町)。芸術祭の期間中、これらのうちから1点がグランプリに選ばれる。

作品は風景への寄与、地域固有性、インタラクティブ性、地域活動への貢献などを勘案して選考された。川の対岸に立つ一本の木を眺めるためだけの小さな部屋をつくる伊藤氏、妻有地域に普及する既製品のガレージを利用して展示空間とする本間氏、温泉街の駐車場に公衆電話、トイレ、サインなどの機能をもつ可動式の直方体群を提案したクリップなど、当選者の作品には建築的な提案が多く含まれる。

実施作品に選ばれた作者の内訳を見ても、学生のチームであるドゥ・アーシュ、クローバーを含めて建築系が4，美術系が1，ランドスケープ系が1。一次審査通過の段階では、建築系の応募者は美術系に比べて若干少ないぐらいだから、それを考えると建築系作家の当選率は非常に高い。建築を設計する際に身に付けざるをえないコミュニケーションの能力が、こういう審査では評価されたのかもしれない。

しかし、同じ建築系の人間として手放しで喜ぶわけにもいかないだろう。建築家がパブリックアートに向かうのは、もしかしたら建築家が建築設計から閉め出されることの裏返しかもしれないからだ。

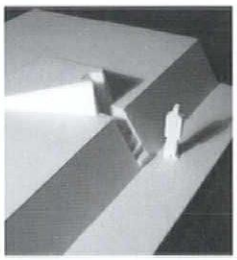
またコミュニケーションの能力は、美術家であっても優れた者なら当然備えているべき資質であり、単に建築と美術の境界が消えつつあるというだけのこととも言える。

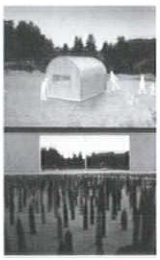
制作にあたっての条件はかなり厳しい。敷地によっては、設定されたエリアのほとんどが河川敷で土木事務所の占用許可が必要だったり、事業が完了しかかっている段階での土木工事への提案だったりと、アーティストに難題を突きつけたコンペだった。が、成功すればパブリックアートのフィールドが大きく広がることにもなるわけで、ここは既存事業になんとかアートを押し込んだ市町村側の努力に敬意を表するべきだろう。

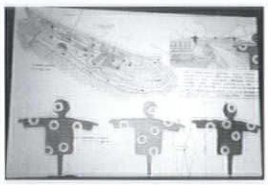
いずれの作品も、実現には地元の人々との協力関係が欠かせない。その意味で、審査の最中、土木事務所の担当官から、法律を楯にとって頭ごなしに作品を否定する発言が出たのは気にかかった。「本当はこんな面倒なことはしたくない」という下心が透けて見えたようで、審査員の川俣氏もはっきりと不快感を表明していた。

もっとも、そうした問題点があらわになったのも、プレゼンテーションから審査まで、すべてを公開したからこそである。実行委員会のオープンな姿勢はおおいに称えておきたい。

（いそ・たつお／建築ジャーナリスト）

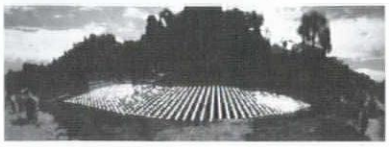

1


2


3


4


5


6

Exhibition Report

展覧会レポート

現代デザインの新風景
「デザインとマテリアル」展
会場：
ヨコハマポートサイドギャラリー
会期：
2000年1月12日〜30日

胸躍る時代

「デザインとマテリアル」展

太田浩史

現代素材は、我々に何かを予告している。さまざまな特性を与えられた彼らの、希望的で、知的で、ユーモラスで、興奮と洗練が混じり合った感覚世界。おそらくその先に、何か新しいデザインの対象が用意されている。こうした予感は、すでに1986年、エツィオ・マンツィーニの『The Material of Invention』において語られ、1995年、MOMAの「ミュータントマテリアル」展（翌年に日本に巡回）がそれに実感を添えた。確かに90年代、我々の生活を支える物質の何かが変化したのであって、我々はそれをiMacや、ナイキのスニーカーの特異な雰囲気に感じ始めている。

「現代デザインの新風景」と副題が付けられた本展覧会は、なによりもまずこの予感に焦点を当てて、2000年の我々の生活風景を、70点を超えるオブジェクト達によって描き出そうとする試みであった。そして会場に並べられたオブジェクトが示したのは、素材の拡張された機能性であり、加工技術の進化による深い統合性であり、高められた自由度のもとでのデザインのラディカリズムである。つまり会場で目撃されたのは、竹原あき子氏が展覧会の主旨で述べているように「…であるマテリアル」から「…するマテリアル」への移行、もしくは素材の多機能性を前提にしたデザインの変容である。例えば太陽光というインプットを取っても、デサント製のウォーキングスーツはミクロスケールでそれを熱へと変換し、オーディオテクニカ製のヘッドフォンは半透明のボディに紫やオレンジの色を浮かべる。感覚論では述べきれない複雑な物性発現が、より高解像度で、プロダクトのデザイン対象に設定されつつあるのだ。ロス・ラブグローブは展覧会のパネルの中で、現れつつあるこの新たな状況に対し、興奮を隠さずに次のような言葉を寄せている。

「プラスチックについての疑いは取り除かれ、この人工素材への全ての文明による全世界的な文化依存性を根拠として、より深い統合性が明らかにされるだろう。…本当に胸躍る時代だ。クリエイティブな世界の間の境界線が崩壊しつつあるのだから。私たちが突入しているこの新しい時代は、多元論者や風変わりだと見なされているデザイナー、工芸を基盤としたデザイナーやローテクと考えられているデザイナーが、素材と技術をどのようにすれば調和させることが出来るかにまったく自由な見方を持っているが為に、最終的にクリエイティブな世界を支配し始めていることからも、胸躍る時代なのである。純粋なスタイリングは、自惚れ強い人々や、シンプルな生活のみに関心を抱く人々に残されるだろう。」

20世紀のプラスチックの発明は、物質に多くのプロパティ（特性）を付与し、異素材の組み合わせによって実現されていた機能を単一素材のオブジェクトに統合するという傾向を産み出した。この傾向は今やセラミックや金属にも拡がり、見かけの単純さを裏切るような複雑な物性を持つ素材が我々を取り巻くようになったのだ。デザインに必要とされているのは、新たなプロパティ編成、技術の境界線を超えようとする意志なのだ。その意味では、出品されたものの中で分析対象として興味深かったのは、〈ゴム・発泡素材分野〉のプロダクトであったと思われる。成型法の進化とミクロレベルでの素材開発に支えられたこの分野は、おそらく新たなプロパティ編成に関してより戦略的であろうとし、今までにない機能を持ったプロダクトを発明しようとしている。スウェーデンのファゲダーラ社製の安眠枕、日清食品のカップ麺の断熱容器など、日用品のレベルで物の体系が書き換えられるのを目撃するのは、やはり興奮的である。森下仁丹のメディケア・スキン・プロテクションは、医療用品の代表として、人工と自然という境界を飛び越えようとする現代素材の深淵を示していた。医療分野における素材開発競争の成果は、実に豊饒であり、急進的である。ポリマー製品の自由さとバランスを取る意味でも、この分野のプロダクトはもう少し紹介されて良かったかもしれない。

ラブグローブが感じるような「胸躍る時代」の徴候は、より広く共有されたい。それゆえ「デザインとマテリアル」展は今後の展開に向けて、課題と成果の両方を残したと思われる。課題は展示物に触れられるなど、より直感的な理解がなされるようにすべきだったこと。成果はいかに言葉が重みを持つかを示したことが挙げられるだろう。色彩と個性に溢れたオブジェクトのなかで、パネル展示されたデザイナーの言葉は、生じている変化に対して実に意識的、分析的であった。予感される何か新しい感覚と概念が、確かに捉えられはじめたのだという印象を抱きながら、会場を後にした。

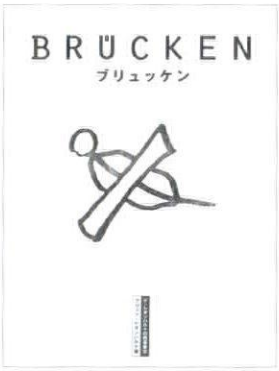
（おおた・ひろし／建築家、デザイン・ヌープ）

Book Review

書評

レオンハルトの遺した「橋」

評者＝佐々暁生



「ブリュッケン」
フリッツ・レオンハルト＝著
田村幸久＝監訳
A4変型　312頁
メイセイ出版（現プロトギャラクシー）　4700円

「旅」の本

『ブリュッケン』を開いて「旅」に出よう。美しい橋とは一体何か、それを求める思索の「旅」に出よう。

「近代斜張橋の父」「橋梁景観の父」として知られる著者のフリッツ・レオンハルト（Fritz Leonhardt）とともに世界中の橋を巡る。なぜそれが美しいのか、醜いのか、あるいはどんな工夫の余地があるのか。技術的可能性を見据えたスリルあふれる議論、豊かな施工経験に基づく細やかで具体的な提案。美を追い求めるそんな著者の信念に触れ、いったい幾度、目からウロコを落とすことだろう。「旅」と呼ぶにふさわしいリアリティと思索を深めるチャンスが、ここにはある。豊富な写真と図版に彩られた300ページの「旅」を終えるころには、橋の美について確かな感覚が芽生えるはずだ。

リアリティと説得力、これが類書と決定的に違うところだ。例えば高架橋の橋脚について述べた一節には、経験に富んだリアルな数字がいくつも飛びだす。

「八角形の断面あるいは強く面取りを行った正方形あるいは矩形の断面は、円柱よりも角の線および影によってスレンダーに見える。高さが幅の約6倍以上になると、1：40から1：70のテーパをつけて上を細くすると、良い感じになり安定感が増す」。

一方、古典的名著として名高い造園家・加藤誠平の『橋梁美学』や土木技術者・鷹部屋福平の『橋の美学』は、わずかな例から美の原理を抽出しようとする点で無理があるし、最近よく見られる「景観設計」や「デザインマニュアル」の類は、技術的可能性を忘れ、表面的テクニックに溺れる点でリアリティに欠ける。

そう、レオンハルトは技術開拓精神、高い美意識、豊富な架橋経験の三拍子を備えた稀有の人だった。類書の著者には、美学者や造園家を筆頭に技術の一線から離れた者が多かった。技術への深い理解抜きには、橋の美は語り尽くせないのだ。

土木技術者的美意識

『ブリュッケン』の原著『BRÜCKEN／BRIDGES』は1982年に出版されて以来、橋梁デザインのバイブルとして世界中で支持されてきた。控え目を第一とし、繁雑さや演出を極端に嫌うレオンハルトの美学は、土木技術者的美意識の正統、いわばモダニズムといっていい。

もちろん、モダニズムの美が、美のすべてではない。建築家的美意識に支えられ、豊かに演出されたS.カラトラバの橋梁美などがその例だ。しかし正統のモダニズムが橋梁美の基本中の基本であることは今も変わらない。

1909年、シュツットガルトで建築家の長男として生まれ、1931年、シュツットガルト工科大学の土木工学専攻を卒業、アメリカのパデュー大学大学院に交換留学生として赴く。1934年に帰国し、アウトバーン建設局に勤務。1937年、〈ローデンキルヘン橋〉の設計責任者兼工事監督をきっかけにレオンハルト・アンドレー事務所を設立。その後世界中の橋梁やタワーの設計を精力的に行いつつ、1958～74年にはシュツットガルト工科大学コンクリート構造講座の正教授、うち1967～69年は同大学学長をつとめる。

レオンハルトの経歴はこんな感じだ。

若い頃より旅に旅を重ね、橋や建築をひたすら見て歩いたことに加え、その美意識に決定的な影響を与えたものが経歴の中にふたつある。ひとつは建築家の父の存在だ。父はたびたび彼を美術館に連れて行き、なぜ美しいと感じるか、なぜ醜いと感じるか、幾度となく問いただしたという。本書の構成はまさにその体験を彷彿とさせる。そしてもうひとつは、アウトバーンの総監督者として景観設計を推し進めた建築家フリッツ・トットとの出会いだ。トットの招聘した建築家パウル・ボーナッツ、主任技師カール・シュヒテルらと協働し、世界に名だたるアウトバーンの景観創造に関わったことは、特筆すべき体験であった。高速道路をまたぐ橋について細心の心遣いを示す本書の一節からも、それはよく分かる。

「橋の下の法面は、草が生えないので舗装しなければならない。この舗装は、必ず黒みがかったものにしなければならない」「そうすれば、草の生えた法面から浮き上がって目障りにならなくてすむ」。

1999年12月30日、フリッツ・レオンハルトは静かに逝った。数々の実作と著作を通じ、美しい橋とは何かを問い続けた人生だった。その活動に共鳴した人ははかり知れず、本書の翻訳も彼の教え子が中心になって行われた。多くの人々を魅了し、橋梁美の世界へといざなってくれる『ブリュッケン』は、レオンハルトの架けた生涯最高の「橋」であった。

（さっさ・あきお／東京大学大学院博士課程、日本学術振興会特別研究員）

Books

新刊紹介

『サルバドリーとワイドリンガー・アソシエイツ』
望月 重＝著
A5判　144頁
建築技術　2600円
構造設計の巨匠マリオ・サルバドリー（1907～97年）の伝記。その生涯、弟子である著者との交流、パートナーのワイドリンガー・アソシエイツでの作品の展開をまとめながら、偉大な業績をヒューマニティあふれる鎮魂歌としてつづった。

『図書館／建築／開架／書架』
益子一彦＝著
B5判　130頁
丸善　2200円
〈下館市立図書館〉などの優れた図書館建築を手掛けてきた著者が、図書館関係者にデザインと建築をつくることの意義を熱く語る。開架書庫を中心に、豊かな空間づくりのプロセスを紹介し、「ライブラリー・アイデンティティ」を提言する。

『幕の内弁当の美学――日本的発想の原点』
榮久庵憲司＝著
A6判　320頁
朝日新聞社　780円
インダストリアルデザインの第一人者による古典的名著の文庫本化。「異質なものを貪欲にとりこんで、それぞれの特性を活かす」美学が秘められた幕の内弁当から、日本のモダンデザインの原点を論じ、組織論、産業論、伝統論へも展開させる。

Information

お知らせ

宮島達男展
MEGA DEATH: shout, shout, count

昨年のヴェネチア・ビエンナーレに出品した「MEGA DEATH」で世界中から絶賛された宮島。東京の美術館規模での彼の個展は初めてで、「MEGA DEATH」も凱旋出展される。
会期：3月3日(金)～5月14日(日)
会場：東京オペラシティアートギャラリー
東京都新宿区西新宿3-20-2
時間：12：00～20：00
金、土曜日は21：00まで　月曜日休館
入場料：一般　900円、大高生　700円、中小生500円　週末は中小生は無料
問い合わせ：東京オペラシティアートギャラリー（担当：吉田）
Tel: 03-5353-0447　Fax: 03-5353-0776

Monism / Dualism

同時開催される宮島達男のLED（発光ダイオード）の新作展。
会期：3月2日(木)～4月8日(土)
会場：SCAI THE BATHHOUSE
東京都台東区谷中6-1-23 柏湯跡
Tel: 03-3821-1144　Fax: 03-3821-3553
時間：12：00～19：00
日曜、月曜、祝日休館
入場料：無料
問い合わせ：白石コンテンポラリーアート
Tel: 03-3821-1144　Fax: 03-3821-3553

GA HOUSES PROJECT 2000
住宅プロジェクト2000

会期：3月11日(土)～4月9日(日)
会場：GAギャラリー
東京都渋谷区千駄ヶ谷3-12-14
時間：12：00～18：30　月曜日休館
入場料：500円（前売券、団体10名以上400円）
問い合わせ：GAギャラリー（担当：山口）
Tel: 03-3403-1581

第28回建築ミュージアムツアー参加者募集
メキシコとアメリカ西海岸に巨匠を訪ねて

旅行期間：4月30日(日)～5月7日(日)
視察先：バラガン自邸、ギラルディー邸、ソーク生物研究所、ゲッティ美術館、他多数。
費用：388,000円
企画：日本・建築ミュージアム
問い合わせ：トラベルプラン（担当：酒井）
Tel: 03-3403-8911　Fax: 03-3403-8395

文化遺産としてのモダニズム建築展

オランダに本部を置く、近代建築の保存と調査のための国際組織、DOCOMOMO（ドコモモ）が9月に開催する世界大会に向けて、各国に現存するモダニズム建築の代表例20件の選定を呼びかけた。これを受けて、日本建築学会が主導で選定した20件を広く社会に伝えるための展覧会。
会期：1月26日(水)～3月26日(日)
会場：神奈川県立近代美術館
神奈川県鎌倉市雪の下2-1-53
時間：9：30～17：00　月曜日、3／21(火)休館　3／20(月)は開館
入場料：一般　800円、学生　700円、65才以上・高校生以下　無料
問い合わせ：神奈川県立近代美術館
Tel: 0467-22-5000　Fax: 0467-23-2464

ル・コルビュジェ展
ペサックの住宅群：標準／反復／量産

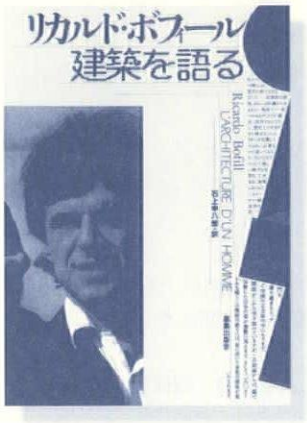
会期：3月13日(月)～6月2日(金)
土曜、日曜、祝日休館
会場：ギャルリータイセイ
東京都新宿区西新宿1-25-1 新宿センタービル内
Tel: 03-5381-5510
時間：10：00～17：00
入場料：無料
問い合わせ：ギャルリータイセイ（担当：林）
Tel: 03-5381-5510　Fax: 03-5381-5511

文化学院 土曜建築スタジオ
2000年度 受講者募集

対象：大学院生、社会人を対象としたデザインスタジオ
期間：5月～7月末の土曜日10回（春学期）
　　9月～11月末の土曜日10回（秋学期）
講師：［スタジオ担当］坂倉竹之助、團紀彦、宮崎豊　［講演会予定］黒川紀章、安藤忠雄、隈研吾、團紀彦　［建築科長］坂倉竹之助
応募締切：4月15日(土)　審査内容、提出物等の問い合わせは下記まで。
問い合わせ：MDS建築研究所（宮崎豊）
神奈川県川崎市宮前区鷺宮1-12-3-304
Tel/Fax: 044-877-4383
郵送の場合は、文化学院　土曜建築スタジオ事務局（東京都千代田区神田駿河台2-5）まで。

本誌特集関連図書の紹介

既刊書の中から、本誌特集関連の図書を紹介しております。
既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。
当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



リカルド・ボフィール 建築を語る

R.ボフィール、F.E.ステヴァン 共著　石上申八郎 訳
A5・244頁　本体3,600円+税

バルセロナ生まれの異色建築家が自身の作品を通して世界を語る。本書は数年前フランスで発行され大きな反響を呼んだ。色彩豊かな地中海建築から古典主義的建築へ変化していくが、常に反近代的姿勢を保っている。

主要目次 レ・アールの計画／社会の選択が建築を決定する／リカルド・ボフィールの経歴とタリェール・デ・アルキテクトゥーラ／プロジェクトの理論と実践／記号と建築／創造の源泉

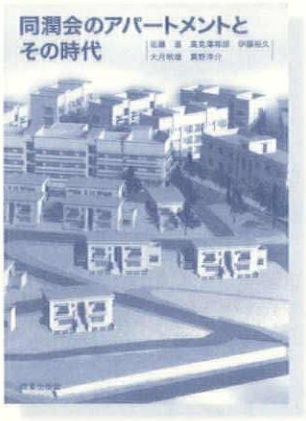
《SDライブラリー21》

空間を生きる

リカルド・ボフィール 著　太田泰人 訳
A5・192頁　本体2,900円+税

バルセロナの現代建築家R.ボフィールが語る建築論。全体は権力、創造、建設の三部構成となっておりバルセロナ、パリ、ニューヨーク、モスクワと駆け巡る建築家の活動スタイルとその過程での様々な条件についての思索を通して建築理念を語る。

主要目次 権力―抑制された狂気／ひとつの作品から次の作品へ／政治と経済の中で　創造―空間の建築／本質的価値／ある言語の豊かさ　建設―都市の感覚を再発見する／日常の建築家



同潤会のアパートメントとその時代

佐藤滋、高見澤邦郎、伊藤裕久、大月敏雄、真野洋介 著
B5・260頁　本体3,300円+税

日本の近代集合住宅の嚆矢を築いた同潤会は,主に東京に豊かな敷地空間をもったアパートメントを建設した。本書は,同潤会の誕生した時代背景、そして代官山アパートを中心にその建築や居住者の生活を記述する。

主要目次 同潤会アパートメントとその時代―同潤会への前史／1920年代という時代／同潤会の住宅建設事業／同潤会アパートメント・実践の軌跡／代官山アパートの計画とデザイン―代官山アパートメントの計画プロセスと全体構成の成立／検証・住戸計画／代官山アパートの住生活誌／代官山アパートの居住ストックの変容／新たなまちづくりに向けて

鹿島出版会
〒107-8345
東京都港区赤坂6-5-13
TEL. (03) 5561-2551
FAX. (03) 5561-2561
http://www.kajima-publishing.co.jp
E-mail:info@kajima-publishing.co.jp

*ご注文は最寄りの書店へ。お急ぎの方は宅配便（着払い）がご利用できます。

明日を築く知性と技術

鹿島出版会の建築図書案内

好評既刊書

建築図書の既刊書を中心に、話題の本を紹介しております。
既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。
当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。

建築環境エンジニアリング①
環境から見た建築計画
建築環境技術研究会 編著
A5判・188頁　本体3,400円+税

環境全般についての概説および建築が環境に及ぼす影響、人間が建築のもつ環境から受ける影響等について概説する。建築の環境設計では何が重要な課題なのか、幅広く記述する。

建築環境エンジニアリング②
建築にかかわる設備計画
建築環境技術研究会 編著
A5判・168頁　本体3,000円+税

建築計画・設備計画をどのように具体化すべきか、また、建築・構造・設備それぞれが相互に配慮すべき事項は何かなどについて、豊富なデータ、実例を取り入れながら記述する。

初学者のための 都市工学入門
高見沢実 著
四六判・212頁　本体2,300円+税

従来のアカデミックな蓄積をふまえた上で、人間が生活するための都市をどう制御しどうつくっていくかという視点から、都市工学・まちづくりへの入門書として、ゴミ問題やユニバーサルデザインなど、近年の話題にも触れつつやさしく語りかける。

エコミュージアムへの旅
大原一興 著
A5判・184頁　本体2,500円+税

地域全体を博物館と見立て、その文化・風土を研究・保全・学習し、地域社会の次代の担い手を育てる博物館活動をエコミュージアムと呼び、まちおこしにつながる活動として注目される。その概要と先進諸国の事例を紹介。

痴呆を癒す建築
ヨーロッパとオーストラリアの設計事例20選
S.ジャッド 他共著　井上裕・浩子 訳
A5判・248頁 本体3,500円+税

グループホーム、看護ホーム、ホステルなど、痴呆の人々がグループで生活する多様な介護環境。その設計の原則と指針を先進的な事例を通して解説し、理想の介護環境の姿を探る。

二子玉川アーバニズム
玉川高島屋SC界隈の創造と実験
彦坂裕 編著
B5判・128頁　本体3,100円+税

かつて遊覧の地であった二子玉川は、1969年の玉川高島屋ショッピングセンターの開業以降、商業を軸とする民間ベースの開発が急ピッチでなされ、緑陰濃く、歩行者に優しい独自の環境が創られてきた。その発展の全貌を追う。

住まいのリフォーム実例集
社団法人 日本建築家協会 編
A5判・176頁　本体 2,400円+税

家族構成の変化から、住宅設備を新しくするため、あるいは高齢化に対応するためや地震に備えての補強工事など、建築家による様々なタイプの住宅リフォームの実例を紹介する。リフォーム工事を考える人の格好の参考書。

アジアの水辺空間
くらし／集落／住居／文化
中村茂樹、畔柳昭雄、石田卓矢 著
四六判・268頁　本体2,800円+税

アジアの水辺空間は自然環境と一体化している。自然環境との共生思考によるアジアの水辺空間の魅力をその生活、住居、文化を通して紹介する。事例は、タイ、ミクロネシア、ベトナム、ホンコン 他

東京現代建築ガイドⅡ
2000's
松葉一清 著
四六判・256頁　本体2,800円+税

90年代に首都圏に建てられた名建築204点を紹介。11の特色のある地域別にコースを作成。首都圏の様々な地域とそこに分布する建物を見ることにより東京の90年代を様々に旅することができる。最新現代建築に興味を持つ読者に必携の建築ガイド。

風景の調律
景観体験の構築
小林亨 著
四六判・184頁　本体2,500円+税

『移ろいの風景論』『雨の景観』に続く新しい試み。風景の解釈力、創造力、構築力のおもしろさや伝統を、「食と風景」「辞世と風景」「景観デザイナーとしての画家」といった斬新かつ大胆な視点で読み解く。

鹿島出版会
〒107-8345
東京都港区赤坂6-5-13
TEL. (03) 5561-2551
FAX. (03) 5561-2561
http://www.kajima-publishing.co.jp
E-mail:info@kajima-publishing.co.jp

*ご注文は最寄りの書店へ。お急ぎの方は宅配便（着払い）がご利用できます。

明日を築く知性と技術

鹿島出版会の建築図書案内

建築ガイドブック

鹿島の建築ガイドブックは持ち歩きに便利な四六判サイズで
近代建築から最新の現代建築まで、代表的建築物を各コース別に紹介します。

東京現代建築ガイドII 2000's

松葉一清 著
四六判・256頁　本体2,800円+税

90年代に首都圏に建てられた名建築204選

11の特色のある地域別にコースを作成。
首都圏の様々な地域とそこに分布する建物を見ることにより
東京の90年代を様々に旅することができる。
最新の現代建築に興味を持つ読者に必携の建築ガイド。

主要目次 A地区―新宿、B地区―渋谷周辺、青山、恵比寿、C地区―皇居周辺、D地区―臨海副都心、E地区―品川、太田、目黒、F地区―隅田川両岸、G地区―豊島、足立、板橋、H地区―杉並、世田谷、I地区―多摩、西郊、J地区―横浜、K地区―幕張、建築家索引、建物索引

●関連図書

東京現代建築ガイド

松葉一清 著
四六・250頁　本体2,800円+税

東京を中心とした首都圏に1980年代以降建てられた現代建築の中から200点を選んで紹介する。地域別に分けられた13のコースの冒頭にはガイドマップがついており、戦後の名建築も要所要所で紹介。

ヨコハマ建築案内 1950-1994

吉田鋼市 著
四六・224頁　本体2,700円+税

横浜を中心に神奈川県に建てられた1950年以降の代表的建築を紹介する。神奈川県立近代美術館からランドマークタワーまで、気鋭の建築史家が語る詳細な解説と美しい写真で構成されたガイドブックで、巻末に地図も入る。

近代建築ガイドブック［関東編］

東京建築探偵団 著　村松貞次郎、山口廣 顧問
四六・276頁　本体2,300円+税

官庁街、オフィス街、看板建築群、別荘地、産業遺跡など特徴ある24コースに沿って作品を写真と共に紹介。建築様式、設計者の紹介も盛りこみ、首都圏の近代100年の変貌が建物を通して読みとれる。学生、一般向けガイド。

ヨコハマ建築慕情

吉田鋼市 著
四六・232頁　本体2,800円+税

横浜を中心に神奈川県に現存する約90棟の建築に光を当て、エキゾチック・ヨコハマ、公共建築、銀行、教会、ミッションスクール、別荘建築、工場、ホテルなどテーマ別に紹介するもの。巻末にガイドブックを収録。

近代建築ガイドブック［関西編］

石田潤一郎、沢田清、柴田正己、中川理、福田晴虔 他共著
四六・312頁　本体2,800円+税

好評の関東編に続く第2弾。大阪の商業の中心、船場の商業建築にはじまりミナミの歓楽街、橋めぐり、堺の工場群、港町神戸の洋館、兵庫県の産業遺跡、あめりか村、文化の都京都の大学施設等々、24コース600余りの作品。

西洋館漫歩 建築スケッチの旅

田中薫 著
四六・248頁　本体1,900円+税

筆者が数年に亘ってスケッチをして歩いた、北海道から台湾に至る西洋館を、印象記と共に紹介するもの。それぞれの土地に息づく建物が、長い年月を経てどのような形で生きつづけているかを生き生きとした文章で語る。

鹿島出版会
〒107-8345
東京都港区赤坂6-5-13
TEL. (03) 5561-2551
FAX. (03) 5561-2561
http://www.kajima-publishing.co.jp
E-mail:info@kajima-publishing.co.jp

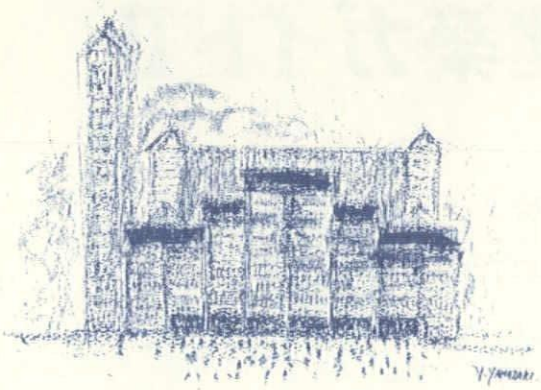
*ご注文は最寄りの書店へ。お急ぎの方は宅配便（着払い）がご利用できます。

明日を築く知性と技術

鹿島出版会の建築図書案内

劇場関連図書の紹介

既刊書の中から、劇場に関連する図書を紹介しております。
既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。
当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



劇場の計画と運営

やわらかい劇場建築へ

山崎泰孝 著
四六判・272頁　本体3,300円+税

21世紀の劇場のあり方を施設、運営の両面から探る

21世紀の劇場のあり方を施設、運営の両面から探るもの。現在、日本各地で行われている様々な劇場の活動を豊富な資料とともに紹介。実践的な劇場論である。自治体、劇場関係者、建築家など劇場の運営、計画に携わる人々にとって大いに示唆をあたえるものとなろう。

主要目次 1.昨今の劇場事情―多様化する劇場空間／2.企画運営の様々な試み／3.劇場づくりの思想と方法／4.「やわらかい劇場」の提案

ホールの計画と運営

伝統芸能劇場から新多目的ホールまで

山崎泰孝 著
四六・248頁　本体 2,900円+税

ルナホールの計画から運営まで手がけてきた著者が専門家の立場からこれからのホ-ルの計画と運用について述べる。前半では現在、様々な様相を見せる劇場の現状分析と問題点を指摘し、後半で新しいホールへの提案をする。

演劇のための空間

伊東正示、シアターワークショップ 共編
A4変・178頁　本体5,700円+税

近年の多くの実例の中から、高い評価を得ているものを中心に精選し、豊富な写真と図面に解説を添えて形態別に分類して紹介。仮設・野外／転用／スタジオ／可変／歴史／専用／最近の事例　対談=鈴木絢士+奥平与人

21世紀の地域劇場

パブリックシアターの理念・空間・組織・運営への提案

清水裕之 著
A5判・248頁　本体3,700円+税

21世紀に求められる新たな地域と劇場との関係をパブリックシアタ-と位置づけ,そのあり方を探る。市民の手で創造する新たな舞台芸術への提案を地域,劇場との関係をふまえて述べるもの。劇場関係者必読の書。

《SD選書195》

劇場の構図

清水裕之 著
四六・268頁　本体1,800円+税

古代ギリシャから現代に至る劇場空間の変遷を通して、演じる側と観客の位置や関係性がどのように変化してきたかを分析する。そして芸能と建築の創造的交流のための共通言語を見出すことを意図している。

劇場

舞台芸術のための建築計画と設計

ロデリック・ハム 著　劇場技術研究会 訳
B5・232頁　本体6,200円+税

英国舞台技術協会との協力のもとに書かれた劇場の計画と設計のための入門書。劇場の一般技術解説にとどまらず、規模設定、空間形式、施設運営、製作現場の諸設備に至るまで劇場に関わるすべての事象を明快に説く。

鹿島出版会
〒107-8345
東京都港区赤坂6-5-13
TEL. (03) 5561-2551
FAX. (03) 5561-2561
http://www.kajima-publishing.co.jp
E-mail:info@kajima-publishing.co.jp

*ご注文は最寄りの書店へ。お急ぎの方は宅配便(着払い)がご利用できます。

明日を築く知性と技術

鹿島出版会の建築図書案内

《現代の建築家》シリーズ

SD編集部編　A4変型判

《現代の建築家》シリーズは、常に建築界に大きな影響力を持ち、その時代の先端を走り続ける建築家たちの珠玉の作品集である。
各建築家にとって記念碑的作品の完成を機に、SD編集部独自の視点により継続的に編まれる、他に類をみない画期的総特集である。
豊富なカラー写真、図版、ドローイングと論文を盛り込み斬新なレイアウトによる美しい誌面で構成されている。
著名建築家たちの活動を時間軸で知る格好のシリーズといえる。(SD特集部分の上製・保存本)

アルヴァ・アアルト
216頁　本体4,000円+税
巨匠、A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。「A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー」=武藤章

金壽根
160頁　本体3,000円+税
韓国の巨匠・金壽根の作品集。馬山聖堂、韓国海外開発公社社屋、徳成女子大学家政館・薬学館 他

槇 文彦 [1]
180頁　本体3,800円+税
初期から'79年までの全作品集。岩崎美術館、代官山集合住居、立正大学熊谷校舎、大阪臨海スポーツセンター 他

槇 文彦 [2]
196頁　本体4,200円+税
豊富なカラー写真により槇文彦の'80年代の活動を知る第2作品集。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館 他

槇 文彦 [3] 1987-92
218頁　本体4,400円+税
'86年の特集に続く第3集。幕張メッセ、東京体育館などの公共建築、慶応大学湘南藤沢キャンパス 他

林 雅子
168頁　本体4,300円+税
女性建築家として初の建築学会賞を受賞した林雅子の全作品を収録。ルーフテラスをもつ家、傾斜地に建つ家 他

カルロ・スカルパ [1]
214頁　本体3,000円+税
イタリアのマエストロ、カルロ・スカルパの総特集。「スカルパ特集に寄せて」=白井晟一、作品・年表・参考文献

カルロ・スカルパ [2]
134頁　本体3,398円+税
最後の作品であるブリオン家墓地を始めとする、主要作品の大胆かつ緻密なドローイング約150点を収録。

白井晟一
160頁　本体4,000円+税
孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐霄館、ノアビル、聖キアラ館、昨雪軒、尻別山寮、虚白庵 他

安藤忠雄 [1]
178頁　本体3,500円+税
'80年代初期までの総特集。詩+ドローイング=安藤忠雄。ガラスブロックウォール、帝塚山の家、住吉の長屋 他

安藤忠雄 [2]
196頁　本体4,700円+税
'80年代の主要作品を、精緻でそして圧倒的な迫力で迫るドローイングと共に網羅した特集第2弾。

安藤忠雄 [3] アンビルト・プロジェクト
148頁　本体3,689円+税
実体として実を結ばない数々のプロジェクトの膨大な図面、模型、ドローイングから安藤の建築哲学に迫る。

石井和紘
170頁　本体4,175円+税
独自のキーワードを用い、話題作をつくり続ける石井和紘の初期から'80年代後半までの全主要54作品を収録。

岡田新一
178頁　本体3,000円+税
論文《抽象と細密》と、充実した作品年表、ドローイングにより、その輝かしい足跡を辿る。最高裁判所庁舎 他

堀口捨己
176頁　本体3,204円+税
庭の大家としてはもちろん、歌人として、達意の文章家としても知られ、その心はそのまま作品に生き続けている。

ジオ・ポンティ
88頁　本体2,300円+税
建築、家具、絵画、彫刻など、多岐にわたる作品を娘リサ・ポンティの解説で年代を追い紹介する、ポンティ追悼号。

丹下健三 [1]
108頁　本体4,500円+税
広島計画、東京都庁舎、東京計画'60年、代々木国立屋内総合競技場、赤坂プリンスホテル 他'80年までの全作品。

丹下健三 [2]
220頁　本体4,000円+税
赤坂プリンスホテル、広島厚生年金文化会館、サウジアラビア王国国王宮殿・国家宮殿 他'80年以後の作品を網羅。

丹下健三 [3]
212頁　本体4,466円+税
OUBセンター、ナンヤン工科大学、パリ・イタリア広場、横浜市美術館、東京都庁舎 他'80年代の作品を収録。

丹下健三 [4]
202頁　本体4,078円+税
新都庁舎を中心に、国内外の近作とプロジェクト、及びヨーロッパで展開している21世紀に向けての都市計画。

磯崎 新 [1]
194頁　本体4,000円+税
初期から'76年までの総作品集。「位置と動き」=ハンス・ホライン。秀巧社ビル、Y邸、群馬県立近代美術館 他

磯崎 新 [2]
196頁　本体4,800円+税
衝撃的作品つくばセンタービルを中心に、'76年以後の主要作品を網羅。福岡相互銀行本店増築、MOCA 他

磯崎 新 [3]
170頁　本体4,660円+税
'85年-'91年の作品集①。水戸芸術館、サンジョルディパレス、東京キリスト教学園チャペル、お茶の水スクエア 他

磯崎 新 [4]
138頁　本体4,369円+税
'85年-'91年の作品集②。ティームディズニービルディング、ロサンゼルス現代美術館、EXPO'90国際陳列館 他。

黒川紀章 [1]
180頁　本体3,000円+税
初期から'78年までの作品集。対談=山崎正和+黒川紀章、芦原義信+黒川紀章。国立民俗学博物館 他

象設計集団
180頁　本体3,884円+税
独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出しつづける象設計集団の初めての作品集。名護市庁舎 他

高松 伸
210頁　本体3,689円+税
'88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、全主要作品を一挙掲載。

早川邦彦
168頁　本体4,175円+税
プロジェクト・商業施設・都市型複合建築・集合住宅・住宅・コンペ案まで、初期の作品から'88年までの全主要作品。

斎藤 裕
190頁　本体4,078円+税
既成概念を白紙に戻し、自らの感性で捉え直した作品群、'75年以降の主要21作品。るるるる阿房、屋久島の家 他

原 広司
174頁　本体4,300円+税
「様相論」を軸として展開してきた建築を収録した作品集。地球外建築、空中都市計画、梅田スカイビル 他

山本理顕
156頁　本体4,200円+税
建築空間の変容を予見し、通念的な空間論に刺激を与え続ける山本理顕の'90-'95年の主要作品集。

長谷川逸子 [2] 1986-95
164頁　本体4,200円+税
自立する建築を追求していた時代から、建築の公共性を重視するという姿勢を打ち出した'86-'95年の主要作品集。

鹿島出版会
〒107-8345
東京都港区赤坂6-5-13
TEL. (03) 5561-2551
FAX. (03) 5561-2561
http://www.kajima-publishing.co.jp
E-mail:info@kajima-publishing.co.jp

*ご注文は最寄りの書店へ。お急ぎの方は宅配便(着払い)がご利用できます。

2000 ❷〜❸ ARCHITECTURAL MAGAZINES INFORMATION

3月号 2月25日発売 **SD** 本体1905円+税

特集：リカルド・ボフィール 1995−2000
本特集は，リカルド・ボフィールの'90年代半ばから現在までの主要作品・プロジェクトを紹介する。
紹介作品：カタルニア国立劇場，カサブランカ・ツイン・センター(モロッコ)，ボローニャ中央駅計画(イタリア)，明治生命青山パラシオ，他。
●文＝リカルド・ボフィール，飯島洋一，櫻井義夫、他

http://www.kajima-publishing.co.jp　鹿島出版会☎03-5561-2551

3月号 2月28日発売 **商店建築** 本体1943円+税

業種特集●バー・クラブ＆ビアレストラン
バー　リボルバー(下北沢)／松原正州　バー　イゾン(六本木)／アトリエ・斗々　バー　れん(大阪)／野井成正　バー　ループ(京都)／辻村久信　サロンバー　スイッチ(京都)／アトリエ・モト　ブラッセリー　マホガニー(高松)／グットデザインスタジオ　他１０店
特集●ショッピングセンターとパワーセンター
オーロラモール(東戸塚)／ミレニアム企画　他６店

http://www.sk-club.co.jp　商店建築社☎03-3363-5770

3月号 2月18日発売 **建築技術** 本体1762円+税

特集：鉄筋コンクリートの劣化と高耐久化　監修：友澤史紀(東京大学教授)　鉄筋コンクリートの劣化は，何が原因でどのようにして起こるのか。この特集では耐久性に優れた鉄筋コンクリート造の実現と，劣化診断・補修改修の技術を解説します。
鉄筋コンクリートの耐久性向上に向けた取組み／耐久性を阻害する要因と予防対策／劣化診断と補修・改修技術
連載：architectural design「テレビ東京天王洲スタジオ」／建物と電磁環境②ー建物と電磁波／建築技術のアクショム⑧

http://www.kenchiku-tosho.co.jp/gijutsu　建築技術☎03-3222-5951

商店建築 1月号増刊 好評発売中 **I'm home.** 本体1905円+税

インテリアコーディネーターやデコレーター，高感度な一般読者を想定した資料性の高いホームデザイン雑誌を2000年1月スタート!
(主な内容) デザイナーの考えるホームデザイン
デザインに対する考え方とそれを実践するデザイナーの自宅と暮らしを紹介する。
変幻自在のマンションインテリア６題
特別企画／企業や建築家集団が提案する自由設計の住宅に住むコーポラティブハウス　実例掲載

http://www.sk-club.co.jp　商店建築社☎03-3363-5770

隔月刊 No.132 3月1日発売 **庭** 本体2800円+税

〈特集〉：**波動1999〜2000**
●作庭家・福田義勝作品　●写真家・信原修作品
●作庭家・鈴木直衛作品
〈記事〉：**庭の源流を探る旅**　韓国・光州篇
作庭されない庭園／稲次敏郎
作庭界の2000年問題
〈連載〉：おりおりの庭園論

http://www.ksknet.co.jp　建築資料研究社☎03-3986-3239

隔月刊 No.26 3月16日発売 **造景** 本体2800円+税

〈特集１〉**歴史的街並みの新たなチャレンジ**
各地の歴史的な街並みの活用法を紹介し，あわせて街並み保存の問題点を浮き彫りにする。
〈特集２〉**濱陽のまちづくり**
〈特集３〉**工場跡地の再構築を考える**
〈連載〉**●土木と風景　●まちづくりに合意形成は可能か**
●回復する風景　●伝統の町並みを訪ねる

http://www.ksknet.co.jp　建築資料研究社☎03-3986-3239

隔月刊 No.41 3月4日発売 **confort** 本体1905円+税

〈特集〉：**「装飾」の原初**／人はなぜ装飾するのか／アフリカ民具の力／日本文様図鑑／伝統文様のインテリア入手ガイド／ラフな質感のタイルコレクション／ディオニュッソスの建築家・上里義輝の世界
〈連載〉：**●生き続けるモダニズム建築　●一脚の椅子・その背景　●働く建築再発見　●住宅巡礼　●不思議の国の建築家たち　●全国家具産地探訪　●姿勢とインテリア　●情報と空間の新しいデザイン**

http://www.ksknet.co.jp　建築資料研究社☎03-3986-3239

季刊 No.13 好評発売中 **MyGARDEN** 本体1048円+税

●特集：魅惑のアートガーデン
オランダのミステリアスな庭／建築家がつくる「コズミックガーデン」／彫刻家ピーター・ゴッホの庭／ミュージアムパーク・アルファビア／昆明園芸博覧会と雲南の山野草／養老天命反転地**●特別企画ーコンサバトリー・ライフ**／木漏れ日が心地よいコンサバトリー／完成までの実際／日本でオーダー可能なコンサバトリー／神田隆氏に聞く／**●連載**ー南アフリカのコロニアル風ガーデン／スチュアートとつくるガーデンアイデアブック

http://www1.neweb.ne.jp/wa/marumo-p/　マルモ出版☎03-3496-7046

3月号 3月1日発売 **住宅建築** 本体2857円+税

通巻300号記念特大号
これまでのこと、これからのこと／平良敬一
〈特集１〉**棟梁・田中文男の現在**ー開放的な空間を創るために
〈特集２〉**茶室空間のあり方を求めて**ー中村昌生・京都伝統建築研究所の仕事／吉行淳之介文学館，他
〈特集３〉**ならまち・いま確かな時をみる**ーなら・町家研究会
〈記事〉●木挽職・林以一，鋸鍛冶・伊東守の仕事
●登録文化財・矢橋家住宅母屋の改修

http://www.ksknet.co.jp　建築資料研究社☎03-3986-3239

季刊 No.19 2月16日発売 **LANDSCAPE DESIGN** 本体2505円+税

特集ー医療施設の癒し環境
アメリカ医療施設の庭ーデューク大学付属病院／他、**癒しをサポートするヒーリング・ガーデナー**ーサンディエゴ小児病院健康管理センター／他、**癒しのアートマネージメントを考える.**
ベルリンの癒しと再生の試みーユダヤ博物館／他、**Landscape Works**ーNTT武蔵野研究開発センタ本館／山梨県ほたる見橋　**特別報告**ー10年目のIBAエムシャーパーク／**現場の知恵袋**(テクニカルノート)ー阿嵯造園、竹丸造園センター／他

http://www1.neweb.ne.jp/wa/marumo-p/　マルモ出版☎03-3496-7046

■ご購入は最寄りの書店でお求め下さい。ここに掲載してある雑誌は、建築関連雑誌発行出版社の協力により最新号を告知しています。雑誌の一部は予定価格の表示がされているものも含まれていますので、詳しくは各出版社にお問い合せください。(BNF事務局)

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京――東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル（3572）3381
FAX（3572）3590

大阪――大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06（6362）6515
FAX06（6362）6052

●建報社

東京――東京都文京区湯島2-30-8
（3818）1961
FAX（3818）1968

大阪――大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル　06（6231）4548
FAX06（6227）0268

●新建社

神奈川県三浦郡葉山町堀内533
0468-77-1207
FAX0468-77-1208

●中外

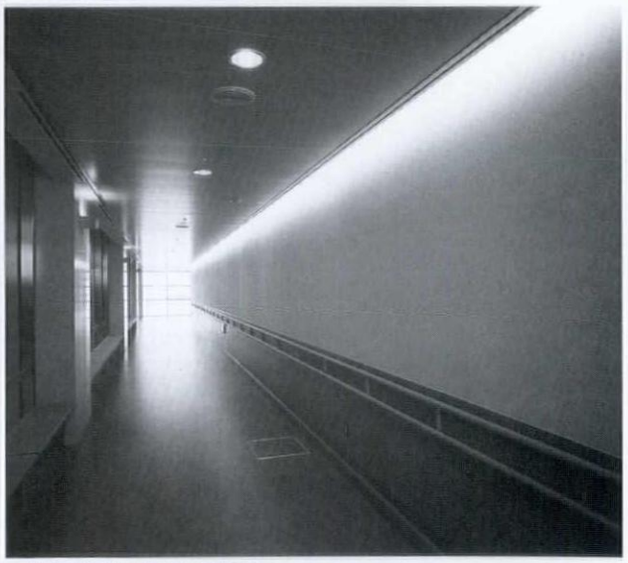
大阪――大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06（6379）1791

東京――東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル（3255）8411

名古屋―名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052（221）7641㈹

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



九州歯科大学 付属病院（福岡）
設計監理：株式会社 日本設計

yamada
山田照明株式会社

本　　社／ショールーム 〒101-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11 TEL.03-3253-5161
横浜支社／ショールーム 〒220-0005 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731

仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34 TEL.022-267-1630
札幌営業所 〒003-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL.011-811-2215
広島営業所 〒730-0805 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119
大阪支社 〒577-0006 東大阪市楠根 2-2-6 TEL.06-6745-6811
北関東営業所 〒370-0851 高崎市上中居町 51-1 TEL.0273-26-4111
鹿児島営業所 〒890-0055 鹿児島市上荒田町23-10 TEL.099-258-0031
福岡支社 〒812-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61 TEL.092-414-8531
名古屋営業所 〒461-0005 名古屋市東区東桜1-10-9 TEL.052-963-8411